
タイトル未定

ハンヴィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル未定

【Nコード】

N5601L

【作者名】

ハンヴィー

【あらすじ】

テンプレ丸出しなカンジで事故って、白狼天狗に転生した三十路リーチ男が、過保護な従姉のおねいさんとイチチャイチャネチヨネチヨする話^{たぶん}

*ブログにて連載しているものと同じ内容になります。

妖怪の山編OP

自分にも非があったってのは分かるよ。

いくら連日のデスマーチで死にかけていたとはいえ、青信号だからと油断して、左右の確認をせずに信号を渡ろうとしたんだからね。信号無視して猛スピードで交差点に進入してきた車に撥ねられても、そりゃあ仕方が無いわな。

吹っ飛ばされてアスファルトに叩きつけられる直前に見えた、啞え煙草と携帯片手に助手席の女とイチヤついているDQN運転手の間抜け面は中々笑えたが。器用だなお前。その器用さを、ちよつとだけ運転技術に振り分けて欲しかったもんだぜ。

そんなわけで、俺は多分死んだのだろう。

その証拠に、真っ暗で何も見えない。

自分の手足すら分らないほどの暗闇だ。

これがいわゆるあの世なのだろうかと思いましたが、その割には程よく暖かく、非常に居心地が良い。

言葉で表現するのが難しいが、とにかく気持ちが安らぎ、何時までもこうしていたい気分になるのだ。

どのぐらいの間、その心地良さに浸っていたのかは分からないが、何の前触れも無く終りが訪れた。

何かに頭を引っ張られるような強烈な不快感。

必死に抵抗するが、そんな儚い抵抗を嘲笑うかのような引力に、思わず俺は悲鳴を上げた。

そして訪れた、強烈な光の奔流。耳をつんざくようなけたたまし

い騒音。

それが、自分の泣き声である事に気付くまで暫くかかった。

「頑張ったわね、かえで楓。可愛い元気な男の子よ」

「ありがとう、ききよう桔梗……」

直ぐ傍から、女性の会話が聞こえてきた。

ずっと暗闇の中にいたせいなのか、目を開けられず、彼女らが誰なのか全く分からない。

混乱しているうちに、お湯のようなもので身体を洗われ、タオルのようなものを身体に巻きつけられ、どこか柔らかい所に横たえられた。

「赤ちゃん、私の赤ちゃん……」

そんな言葉と共に、俺の頭が優しく撫でられる。
とても、気持が良い。

「あの人を呼んできてくれる？」

「ええ。きっと外で大騒ぎしてるでしょうしね」

衣擦れの音と共に、誰かが立ち去る気配がした。

俺の頭を撫でているのは別の女性のものだろう。

やがて、暫くするとドタドタというけたたましい騒音と、やたらとテンションの高い男の声が聞こえてきた。

「かあーえーでえー!!」

あまりの大音量に、思わずビクリと身体が強張る。

「良くやった、楓!!」

「もう、楠くんくすのきったら……そんな大声出すから、赤ちゃんがびっくりしてるわよ」

「おっと、いかんいかん」

窘められた男は、バツが悪そうに言った。

「うんうん。楓に似て可愛いな」

「ふふ…楠くんに似て、とても元気な子よ」

それからしばらくの間、俺を挟んで二人の男女は語り合っていた。会話の内容から、この二人が夫婦である事が分かった。

そして、俺がその間に生まれた子供であるという事も。

すると、さっきまでの心地良い暗闇は、母親の胎内だったって事なのか。

もしかして、これはいわゆるアレなのか。

あまりの頭の悪さに否定しかけたが、今の状況がそれ以外に考えられない事も事実だ。

前世の記憶を持ったままとか、とんだチートだな。

まだ目が開かないので分からないが、会話の内容から察すると、俺の両親の夫婦仲はかなり良好なようだ。

声からすると、歳もそれほどいいとはいえないように思える。

旦那の事を「くん」付けて呼んだりと、夫婦と言うよりも、まるで恋人同士の会話を聞いているようだ。

「よし！早速名前を付けるか」

「何か良い案はあるのかしら？」

「まかしとけ。そんな時はこれの出番だ」

バサツという音が聞こえた。

父親の方が、何か本でも取り出したらしい。
途方も無く嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

「楠くん、その本は……?」

「前に香霖堂で手に入れた、外の世界の育児本だよ。た○ごクラブ
と言ったかな?」

うげ。

「これに命名辞典という中々便利なものがあってね。例えば……神
王^{うす}というのはどうか!」

「ぜ、ぜうす……?」

「うん! 壮大でカッコいいだろう? 何しろ、我が^{かみありす}上有住家の大
切な跡取だからな! 他にも、脚步^{きやふちやい}茶唯や振門^{ふるもんてい}体、光宙^{びかちゅう}なんてのも
あるぞ」

ふ、ふざけんなー!!

思わず抗議の声を上げそうになったが、今の俺は赤ん坊だ。
意思表示の手段と言ったら、大声で泣き喚くしかない。

「おっ、どうやら、光宙が気に入ったみたいだな? 手足を振りま
わして泣いて喜んでいるぞ」

曲解すんな、バカ親父!!

「ね、ねえ、楠くん。そ、その名前も素敵だと思うわ。でも、櫛^く
ていう名前はどうかしら?」

「くぬぎ?」

「うん。この子には、クヌギの木みたいに、スクスクと健やかに育
ってほしいと思うの」

ナイスだ、母さん。

俺も同意だとばかりに泣きやみ、精一杯笑って見せた。
上手くいつてるかどうか分からないが、キャツキャツという自分
の声が聞こえるので多分大丈夫だろう。

「……そうか。楓がそう言うなら仕方が無いな」

どことなくしよげたような親父の声。

小声で先ほどあげたDQN名を、名残惜しそうに呟いていやる。
いい加減、諦めてくれ。

「よーし、お前の名前は櫛だ！ 上有住 櫛！ うん！ 中々ゴロ
も良いじゃないか！」

俺の身体がふわりと浮かびあがる。

親父が抱きあげたらしい。

「ほくら、櫛く、高い高い」

ちよ、おま、あぶねえ！

生まれたばかりの赤ん坊に何しやがるんだ。

こっちは目が見えないうえに、満足に身体を動かさないんだぞ！？

「ははは。どうだ、楽しいか？」

楽しくない！ 楽しくないよ！ 怖いって！

「もう、楠くんったら……」

いや、止めてよ、ママン。

そんな朗らかに笑ってないでさ。

「おっと」

「ひぎっ」

ごす、とかいうヤバそうな音がして、目が開いていないにも関わらず、目の前に星が見えた気がした。

悲鳴のような母さんの声と、狼狽するバカ親父の声を聞きながら、俺の意識は闇に沈んでいった。

そんなこんなで、良く分からんうちに始まった第二の人生だが、始まった途端に終了になりそうな気がしないでもない。

妖怪の山編 1

赤ん坊の1日は単調だ。

することと言えば、基本的に食う・寝る・出す。

この3つだけ。

しかも、「寝る」以外は自分の意思で処理する事が出来ないので、欲求を満たしたくなったら、泣いて自己主張しなくてはならない。

「はいはい。おしめを取り換えましょうね」

前世で三十路リーチだった俺にとって、初めの頃は羞恥プレイ以外の何物でもなかったが、案外慣れてしまおうとどうってことは無かった。

むしろ、新たな自分に目覚めてしまった感じ？ 人間の適応能力って素晴らしいね。

凄まじい臭気を放つ俺のソレを、母さんは嫌な顔一つせず、笑みさえ浮かべながら処理する。

母親ってのは凄いなと今更ながらに実感してしまう。
そうそう、最近になって、ようやくはつきりと目が見えるようになってきた。

最初に認識した人物は、当然何時も一緒にいる母さんの顔だったのだが、かなりの美人さんでちょっと驚いてしまった。

声からしてそれほど年齢はいいっていないと思っていたが、どう見ても20をちょっと過ぎた程度にしか見えない。

親父も大体同じぐらいの見た目で、こっちもそこそこの美形ではあった。

性格と感性がちょっと：というか、相当アレだが。

しかし、見た目の若々しさよりも気になったのは、雪のように白い髪の色と、まるでわんこのものとしか思えない耳と尻尾だった。

最初に見たときは、両親揃ってイタイ人なのかと戦慄したが、感情に合わせてピコピコ動いたり、寝起きの時は伏せられたりしているので、作りものでは無いようだった。

両親にそんなオプションが付いてるのだから、当然俺もイヌ耳&尻尾を標準装備していた。

更に、出産祝いを持って来たり、赤ん坊（俺の事ね）を見に来たりした両親の知人や友人の方々も、俺や両親と同じだったので、そういう種族なのだという事をようやく理解した。

そんな訪問客や両親の会話などから断片的に得た情報によると、俺の種族は白狼天狗という妖怪だということが分かった。

そして、この場所は、妖怪の山と呼ばれる天狗や河童の住む山の、白狼天狗が住む村の一つである事も知った。

「柵の様子はどうかしら、楓」

縁側で俺をあやす母さんにそう聞いたのは、母さんの幼馴染の綾あや織おり桔梗ききょうさんだ。

この人は、母さんのお産に立ち会い、産婆として俺を取り上げてくれた人でもある。

「見ての通り、元気に育っているわ」

「そう。それなら良かったわ。ところで…」

綾織さんは笑顔を引っ込め、部屋の隅の方に訝しげな目を向けた。そこには縦線をまといながら壁に向かってこちらに背を向け、床に「の」の字を延々と書き続けている親父、楠の姿があった。

「……あなたの亭主は、いったい何をやっているのかしら？」

「楠くんは、私が柵にばかり構っているから、拗ねちゃったのよ」

「……子供ねえ」

綾織さんは呆れたように呟き、盛大な溜息を吐いた。
その気持ちはよく分かる。

良いトシした大人の男が拗ねている様は、見えて非常に鬱陶しい。

「そういえば、明日なんでしょう？ 栞ちゃんが戻ってくるのは」
「ええ。栞ちゃんも、柵に会うのを楽しみにしてるって」

栞？ まだ新キャラが居たのか。

俺が母さんの顔見つめると、それに気付いたのか、母さんは俺に微笑みかけた。

「あら。栞ちゃんが気になるのかしら、柵。栞ちゃんはあなたの従姉よ。とても可愛い子よ」

従姉のお姉さん。実に良い響きだ。心が震える。

どうしても、よろしくない妄想がオーバードライブしてしまうエロゲ脳な俺。

まあ、今の俺は赤ん坊だし、あんまり意味無いが。
とりあえず、今はそれよりも。

「ひう…ふあああん…」

腹が減ったので、飯を要求するため、俺は泣き声を上げた。

「あらあら。お腹が空いたのね。ちょっと待っててね」

母さんが上着をはだけ、俺の前に乳房を露わにした。
こちら、最初の頃はかなりドギマギしたものだ、今ではすっ

かり慣れてしまった。

この人は母親で、俺は赤ん坊だと割り切ってしまうかどうかという事は無い。

母さんの乳首に吸いつき、俺は母乳を吸い始めた。

「子育てって、大変なものだと思っていたけど、案外そうでもないわね」

「確かに、この子は大人しいかも」

「夜泣きも殆どしないのよ。泣くのは、お腹が空いたときとおしめの時ぐらいかしら。目を離しても、何でもかんでも口に入れたり、危ない事をしたりしないし…」

「あら、お利口さんね」

そんな女性二人の会話を聞き流しながら、ひたすら自分の食欲を満たしていた俺の上に影が差した。

「あら。どうしたの、楠くん」

影の正体は親父だった。

真一文字に口を引き結んだ親父は、母さんの質問には答えず屈みこみ、いきなり俺の頬っぺたを抓りやがった。

「ぴゃっ!？」

突然の事に目を白黒させる俺。

母さんや綾織さんも、止めるのも忘れて呆気にとられている。

「ひ、ひああああああん!!」

何すんだクソ親父!! とばかりに、俺は思いつきり泣き喚いた。

俺の泣き声で、母さんと綾織さんはハッと我に返った。

「ちょ、ちょっと、楠くん!？」

「何してんのよ、アンタ!!」

女性二人の非難を浴び、しかし親父は、悪びれるでもなく、俺を指さし言い放った。

「柵がいやらしい目つきをしていた!」

予想外の反論に、俺も母さんも綾織さんも目が点になった。

「俺には分かる! 何しろ柵は俺の息子だ! 母親に欲情したに違いない!」

「な、何言ってるの、楠くん!？」

「頭おかしいんじゃないの、アンタ!」

自分のお袋に欲情した事あんなのか親父!

「ぐっ…」

俺たち3人の視線を一斉に受け、さっきまでの威勢はどこへやら、親父は途端に涙目になった。

「う、うああああああああああああん!! お、俺が一番楓を愛してるのにいいいいいい!!」

やがて親父は、大泣きしながら家の中に戻って行った。
そんな親父を、俺たちは呆気にとられながら見送った。

「ねえ、楓…」

やがて、綾織さんが、おもむろに口を開いた。

「あんなのどこが気に入って一緒になったの…？」

心底ゲンナリした様子の綾織さんに、俺は同意だとはかりに何度も首を縦に振った。

「あんなところが可愛いんじゃない」

語尾に「はあと」とでも付きそうな甘ったるい口調で、頬まで赤らめながら母さんは言った。

案の定、綾織さんは砂でも吐きそうな表情になった。

「自分の息子にまでヤキモチを焼くなんて、私をそれだけ愛しているっていう証拠じゃない？」

「そ、そうなの？」

「たまに構ってあげると、尻尾をブンブン振って大喜びするところなんて、とっても可愛いわ」

「はあ…サヨウデゴザイマスカ…」

……母さん、綾織さんドン引きしてるよ。

「…さて。そろそろ帰るわ」

まだまだ続きそうな母さんの惚気話をさえぎる様にして、綾織さんは立ち上がった。

「あら。もう少しゆっくりしていけば良いのに」

「ん、なんか疲れちゃったし。またね、櫛」

綾織さんは俺の頭を優しく撫でた後、軽く地面を蹴った。
そのままふわりと宙に浮かび、あっという間に飛び去って行ってしまった。

天狗というだけあって、空は普通に飛べるらしいのだが、俺も成長したら飛べるようになるんだろうか。

だとしたら、中々楽しそうだ。

そういや、子供の頃の夢は戦闘機パイロットだったっけなー。

小学校低学年の頃「将来の夢」というお題の作文発表会で、「おきくなったら、じえいたいおのせんとおきのりになって、わるいしなちよんろすけやんきーをやっつけます！」なんて作文を発表して、バリバリの組合員だった当時の担任教師をフアビヨラせたのは良い思い出。

小さくなっていく綾織さんの姿を眺めながら、そんなセピア色の思い出に浸っていると。

「あら？ 誰か来るわ」

綾織さんが飛び去っていた方向とは別の方向に顔を向け、母さんが言った。

そちらに顔を向けると、空に小さい点があった。

その点は見える見るうちにこちらに近づき、次第にそれが人の姿である事が分かった。

山伏が被るような頭巾ときんを頭に付け、赤いダンダラ模様の袴を履いた女性だった。

見た目だけで言えば、女の子と言った方が適切かもしれない。

「こんにちは、楓おばさん！」

庭先に軽やかに着地したその子は、満面の笑みを浮かべながら言
った。

妖怪の山編 2

「こんにちは、楓おばさん！」

綾織さんと入れ替わる様にして、庭先に降り立ったのは、見た目15、6歳の女の子だった。

少し吊り目気味の意思の強そうな目と凛々しい太眉、肩口で切り揃えた頭髮から、活動的でどこことなく少年のような印象を受けた。

両親や村人達が普通の着物だったため天狗と聞いてもいまいちピンと来なかったが、頭巾と法衣、一本足の高下駄など、この子は天狗らしい格好をしていた。

「あら、柎ちゃん！」

どうやら、この子がさっきの会話にあった従姉のお姉さんらしい。

「お休みが取れるのは、明日じゃなかったの？」

「えへへ……そうだったんですけど、無理を言って今日来ちゃいました。早く赤ちゃんが見たくて」

「あらあら……」

「わあ！ この子ですね。可愛い」

柎さんは満面の笑みを浮かべ、俺の顔を覗き込んだ。
いかん。ちょっとドキッとしてしまった。

俺はロリコンでは無い。

無い、はず、なのに……ぬう。

「さ、柎。挨拶しなさい。あなたの従姉の柎お姉さんよ」

「ふふ、よろしくね、柎」

柁さんは俺の小さな手をそっと握った。

「柁ちゃん、良かったら柁を抱いてみる？」

「え！ 良いんですか!？」

柁さんの顔がぱっと輝いた。

それに合わせて尻尾がブンブンと勢い良く振られる。

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

「はい……気を付けてね」

柁さんは、母さんから俺をおそろおそろ受け取り、自分の腕に抱き抱えた。

む……意外とあるな。

「可愛い、頬っぺたプニプニしてる」

柁さんの髪やもふもふのイヌ耳が俺の頬をくすぐり、柄にもなくドキドキしてしまう。

「柁ちゃんは、誰か良い人は居ないのかしら？」

俺たちの様子を微笑ましそうに眺めながら、母さんは言った。

「え？ 居ませんよ、そんな。第一、私にはまだ早いです」

「あら、そうなの。柁ちゃんは可愛いから、てっきりオス共が放っておかないと思ったんだけど」

「も、もう！ 何言ってるんですか!」

顔を真っ赤にして全力否定。こういう事に慣れていないんだろうなあ。反応が初々しい。

しかし、尻尾がブンブン振られているところを見ると、可愛いと褒められて満更でも無いようだ。

「でも、それならちょうどよかったわ」
「何がですか？」

キョトンとした表情で小首を傾げる柊さんに、母さんは晩のおかずでも告げるようにとんでもない事を言った。

「うちの子が大きくなったらどうかしら？」
「え、え、ええええっ!？」

ちょっと待て。その理屈はおかしい。

「私と楠くんの子供だし、結構良いオスになると思うわよ？」
「そ、そ、そんな、歳が違いすぎますっ!」
「あら。60歳しか変わらないじゃない」

60歳「しか」って。
いやいやいや。人間の感覚で物を考えちゃ駄目だよな。なにせ、妖怪なんだし。

にしても、柊さんは、こんな見た目でも60年も生きているのか
……

「私と楠くんだって、150年近く離れているのよ? 60年なんて大した差では無いでしょう?」
「そ、それはそうかもしれませんがどっ」

150年……150年ねえ。

人間の感覚で言ったら、2，3歳離れている程度なんだろうか。口ぶりからすると、そんな感じに聞こえるんだよね。

「柵を自分好みの理想の殿方に育て上げて、刈り取ってみたいと思わない？」

「え？ え？ え？」

ちよっ、ちよっ、ちよっ……

いきなり、何言いだすんだよ、母さん！

「私はそうやって、楠くんを大きくなるまで調き……コホン……育てたのよ。ふふ、懐かしいわ」

なん、だと……

お、親父がアレなのは、すべて母さんの狂育の賜物だったってことなのか……？

「そ、そそそ、そんなこと、私には無理ですっ！」

「あら、残念ねえ……」

いったい、どこまで本気だったのか、母さんはあっさり引き下がった。

まともな人だと思っていたが、母さんに対する認識を改めたほうが良いのかもしれない。

「そうだ、椀ちゃん。帰ってきたばかりで悪いのだけど、少し柵を見てもらってもいいかしら？ おしめもご飯も済んだばかりだから、しばらくは大丈夫だと思うし」

「それは構いませんですけど、どうかしたんですか？」

「実はね……」

母さんはさっきの顛末を話して聞かせた。
綾織さんに話した以上に、いかに自分が親父に愛されているかを
重点的にだ。

「は、はあ。そんなことが……」

やはりというか、栞さんは、さっきの綾織さん同様、なんとも微妙な表情をして聞いていた。

「そういうわけで、少し楠くんの相手をしてくるわ」

「わかりました。柵を連れて、その辺りを散歩してきます」

「ごめんなさいね」

素晴らしい残し、母さんはそそくさと家の中に戻っていった。

しばらくして、家の中から、親父の嬉しそうなはしゃぎ声と、それを宥める母さんの声が聞こえてきた。

「仕方の無いお母さんとお父さんでちゅねー」

栞さんは顔を寄せ、おどけた様に言うと、俺を腕に抱いたまま村の中を歩き始めた。

俺の住んでいる村は、住民が移動手段として空を飛ぶ事が出来る

ためか、同じ村の中でも互いの家同士がかなり離れている。

10キロや20キロ離れているのもザラで、俺の家の周りも、一見すると森と畑しか目に付かない。

そんな日本の原風景の中を、俺を抱いた柎さんがテクテクと歩いていく。

母さんや親父に抱かれて散歩したことはあるので、見慣れた景色ではあったが、今回は従姉のお姉ちゃんである柎さんに抱かれての散歩だ。

何か、いいね。心が滾る。ロリに見えて結構あるし。うん。

あ、そうだ。

空を飛んでみたいんだよな、俺。

柎さん、空を飛んでくれないかなあ。

「あー、うー」

「どうしたの、柎？」

俺は身体を動かして空を指さす。

言葉がしゃべれないってのは、こういうときに不自由だよな。

「もしかして、空を飛べって言うてる……？」

「うーうー」

俺がコクコクと首を縦に振ると、柎さんは驚いたように目を丸くした。

「あなた、もしかして私の言葉がわかったり……？」

ちゃんと理解してますよー、とばかりに俺は笑ってみせた。

赤ん坊の笑う攻撃って無敵だよな。

特に、面倒見のよさそうな女性に対しては。

「ふふ、まさかね。いいわ。ちょっとだけなら」

柊さんは俺をしつかりと抱き締めると、トンと軽く地面を蹴った。エレベーターで上昇する時のような浮遊感を感じたと思ったら、俺を抱いた柊さんは、地面から数十メートルほどの空中に舞い上がっていた。

おおおっ、すげえ！

里の様子が一望できるぜ！

「こ、こらっ。危ないわよ！」

興奮して思わず身を乗り出そうとした俺を、柊さんは慌てて抱え直した。

「まったく、もう。おとなしい子だと思ってたけど、結構やんちゃなのね……」

すみません、中の人がアレなもので……

「さ、もう降りるわよ。危ないからね」

えー。

出来れば、あちこち飛び回ってほしいんだけどなあ。

俺の不満げな様子を感じ取ったのか、柊さんは苦笑気味に微笑みかけた。

「大きくなったら、いくらでも飛べるようになるんだから、我慢しなさい。ね」

そう言って、俺の鼻をツンとつついた。

「それに、いつまでもこうしていると、ちょっと困った人に見つかる可能性が……」

「あやや？　そこにいるのは樫じゃないの」

女性のものらしきその声に、樫さんは「あちゃー」とでも言いたげな表情になった。

けれども、無視するわけにもいかなかったらしく、身体ごと声のほうを振り返った。

そこに立っていた……というか、浮かんでいたのは、これまた天狗のような格好をした女の子だった。

ただし、俺や樫さんと違い、犬耳と尻尾は無く髪の色は黒で、代わりに背中にカラスのような黒い羽が付いていた。

「こんにちは、文さん」

「ええ、こんにちは。こんなところで何を……ッ!？」

文さんとやらは、樫さんに挨拶を返そうとし、腕に抱かれている俺に気づき、見る見るうちに驚愕の表情を浮かべた。

「な、なんてこと……!　まさか、私の知らないところで、樫がひっそりと大人の階段を登りきっていたなんて……!!」

「な、な、何を言ってるんですか、文さんっ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴る樫さんに構わず、文さんとやらは、どこから取り出したのか、えらく年代物のカメラをこちらに向けていた。

「あっ!　しゃ、写真撮らないでくださいよ!」

「何を言っているの!　こんなスクープを見逃すわけにはいかない

でしょう!」

楽しそうに言いながら、彼女は年代物のカメラのシャッターを切りまくった。

ひとしきり写真を撮り終わると、今度は手帳と万年筆を取り出し、ずいっこちに詰め寄ってきた。

「で!？ お相手は誰なの?」

「だ、か、ら! この子は私の子じゃありません! 叔母夫婦の子供ですっ! 私の従弟ですっ!」

椀さんが必死に事情を説明すると、さっきまでキラキラと輝いていた文さんの目に、明らかな落胆と失望の色が広がっていった。

「なーんだ、そういうことだったの。まったく、紛らわしいわね」
「何言ってるんですか。文さんが勝手に勘違いしただけでしょ」

椀さんは疲れたようにがっくりと肩を落とした。

「でも、椀に似て可愛い子じゃない。将来美形になるわよ」
「えへへ。やっぱりそう思います?」

椀さんは、まるで自分が褒められたかのように、嬉しそうに微笑んだ。

「自分好みのオスに育てて、ころあいを見計らって美味しくいただくいちやうってわけね!」

「違います! どうしてそうなるんですか!?」

母さんと同じ事言ってるよ、この人。

ひよつとしたら、根っこの部分が同じなのかもしれないなあ。

「こんにちは、赤ちゃん。柊ママのお友達の射命丸 文でちゅよ」
「だ、誰が、ママですかっ!？」

この時は名前しかわからず、柊さんの仲の良い友達程度にしか思っ
ていなかった。

後から知ったことなんだが、文さんは柊さんの職場の上司で、鴉
天狗という種族らしい。

上司といっても、柊さんとの掛け合いを見ている限りでは、親友
といっても良い間柄に見える。

柊さんが文さんに良い様に弄られているように見えない気もしな
いでもないけど…。

「いやはや。しかし、本当にびっくりしたわよ。先を越されたかと
思ったわ」

「相手もないのに、そんなわけ無いじゃないですか」

「何言ってるの。あなたの隊にいるオスの白狼天狗は、みんなあな
たを狙ってるのよ？」

ほほう、そうなのか。やっぱり、柊さん人気なんだな。まあ、可
愛いしな。見た目よりもあるし。

「特に、ほら、あの大橋とかいうオスの白狼天狗なんて、あなたに
ぞっこんじゃないの」

「大橋が……ですか？」

柊さんは、心底嫌そうに顔を顰めた。

「私、ああいうガサツなオスは大嫌いです」

「あやややや。手厳しいわね」

顔も知らない大橋さん、ご愁傷様です。

「じゃあ、どんなオスが好みなの？」

「いいじゃないですか、そんなことはどうでも……」

「話したって減るもんじゃないし。教えなさいな」

万年筆と手帳を手に、じりじりとこちらに詰め寄る文さん。

樫さんは本気で困っているようだったが、性格なのかきっぱりと断ることが出来ないでいる。

よし、ここは助け舟を出すか。

「ふあ、ふああっ、ふああああああん！！！！」

「柵！？」

「あややややや！？」

効果は抜群だった。赤ん坊の泣き声は最強だな。

「ごめんなさい、文さん。もう戻りますね！」

「ああっ、ま、待ちなさい！」

文さんは追って来るようなことはしなかった。

樫さんを助けるための演技だったんだが、樫さんは何か異常があつて泣いたように思ったのか、滅茶苦茶慌てている。

俺は、文さんの姿が見えなくなったあたりでぴたりと泣くのを止めた。

「あ、あらっ？ 柵……？」

驚いたように俺の顔を覗き込む樫さんに向かって、俺はキャッキヤツと笑って見せた。

「も、もしかして、私を助けるために？　ふふ、まさかね……」
「あー」

そのまさかですよー、とばかりに、俺は樫さんに手を伸ばした。

「ありがとうね、樫ちゃん。櫛の面倒を見てもらって」
「い、いえっ……」

樫さんは母さんに俺を返しつつ、顔を赤らめて目を背けた。
それもそのはずで、母さんの服装が微妙に乱れていたからだ。
頬もどことなく上気しているし、隣にいる親父は一仕事やり終えたような満足げな表情をしているし……。

何やっていたのか丸わかりだ。

ある日突然、弟や妹が出来たりして。

「またいつでも来て頂戴ね」

「は、はいっ、それじゃ、また！」

樫さんはあわただしく飛び去っていった。

その日を境に、樫さんがたびたび訪れるようになり、退屈しないですむようにはなったのだけれど。

まさか、母さんの戯言を真に受けたわけではない……よね？

妖怪の山編3

「可愛かったなあ…」

知らず知らずのうちに、そんな言葉が口から漏れていた。

叔母夫婦に子供が生まれたと聞き、無理を言って休みを貰い、久しぶりに生まれ故郷の村に帰ったが、その甲斐は充分にあった。

産まれた子の名前は櫛と言い、とても可愛らしい利発そうな男の子だった。

短い間だったけど、抱かせて貰ったときの柔らかい感触や無邪気な笑顔が忘れられない。

今まで、休暇や非番の日は、宿舍の自室でダラダラしていたり、仲間と大将棋を指して時間を潰したりしていたけど、今度からはために村に帰る事にしよう。

そんな事を考えながら、短い休暇を終えた私は、隊の屯所に戻って来た。

「あっ、櫛！」

屯所の前に降り立った途端、仲間の白狼天狗達が私の方に駆け寄って来た。

「櫛、おめでとう！」

「なんで、黙っていたの？ 水臭いなあ！」

興奮した面持ちで、口々に話しかける同僚達の様子に、私は首を傾げた。

「嘘だろう？ 嘘だと言ってくれ、犬走！！」

「相手は！ 相手は誰なんだあああ！！」

号泣しながら詰めよってくるオス達もいる。
目が血走っていて少し怖い。

「：どうしたの、みんな」

「ほら、これ」

戸惑う私に、同僚の一人が新聞を手渡した。

文さんが御山の妖怪達に発行している文々。新聞だった。

もうそれだけで、記事に目を通さずとも、皆が騒いでいる理由が分かった気がした。

おもむろに新聞を広げみると、案の定：

『スクープ！ 白狼天狗の犬走 柵に隠し子！？』

一面にそんなテロップの記事が載っていた。

私が柵を抱いている写真付きで。

まったく、文さんにも困ったものだ。

抗議をしても、きつとなしのつぶてなのだろう。

文さんならきつと胸を張って、「嘘は書いていないわ！」と力強く断言するに違いない。

確かに、最後が「！？」なので、嘘は書いていない。

それが、どれほど真実とかけ離れていようが、嘘だけは書いていない。

絶対に嘘は書かないというのが、あの人のポリシーだからだ。

以前、嘘でなければ、どんな内容でも良いのかと質問したところ、「それがジャーナリズム宣言というものよ！」と、これまた力強く

断言された。

実際、この新聞を読む妖怪達にとって、記事の信憑性よりもいかに面白いかのほうが重要なのだ。

「ねえねえねえ！ 相手は誰なの！？」

「もしかして、うちの隊のオスだったり？」

目を輝かせ、これでもかと言うくらい尻尾を振りながら、私に詰め寄る同僚達。

彼らだって、本当は分かっているはずだ。

この記事が、文さんの悪ふざけの産物であることを。

それを分かってこうやってはしゃいでいるのだから、まったく始末に負えない。

「あ、あのね、みんな。この子は…」

「お前ら！ いい加減にしろ！！」

私が溜息交じりに説明しようとしたとき、それを掻き消すような怒号が響いた。

その瞬間、騒いでいた同僚達が一斉に押し黙った。

私に群がる同僚達を押し退けるようにして掻きわけ、姿を現したのは、皆よりも頭一つ分ぐらい大柄なオスの白狼天狗だった。

「大橋」

大橋は私を一瞥した後、威圧するように同僚達を見渡した。

小柄で華奢な体格の白狼天狗達の中にあって、大橋は背も高く肩幅も広い。

そんな彼の視線を受けて、同僚達は首を竦めた。

「犬走が困っているだろう。だいたい、この記事は射命丸様の書いたものだぞ?」

大橋はそう言いながら、フンと鼻を鳴らした。

気圧されるように、同僚達が一步さがる。

もしかして、私に助け船を出したつもりなのだろうか。

ガサツな奴だとばかり思っていたけど、今回ばかりはありがたい。

「みんな。この子は叔母夫婦の間に生まれた私の従弟よ。その子の子守りをしていたところを、文さんに写真を撮られたのよ」

改めて、私がそう説明すると「なーんだ」というあからさまな落胆の声や、「俺は信じてたぜ、犬走!」などと何故か泣き出すオスの声が辺りに広がっていった。

「ありがとう、大橋。助かったわ」

「気にするな」

私が礼を述べると、大橋は鼻息も荒く、得意げな表情で胸を張った。

少しは彼に対する認識を改めても良いかもしれない。

「だいたい、このガキの間抜け面を見ろよ。こんなのが犬走の子供なわけないだろう」

前言撤回だ。

やはりこいつは駄目だ。

私を庇ってくれたことには感謝するが、大好きな叔母夫婦の子供で、可愛い従弟でもある櫛を、事もあるうに間抜け面呼ばわりとは。ガサツなうえに無思慮な輩だ。いったい、どういう育ち方をして

きたのか。

きつと、両親の愛情が足りなかったに違いない。

そこで、はたと気が付く。

それは、柵にも言えることではないのだろうか。

両親の愛情という点では問題ない。

むしろ心配なのは、溺愛され柵が甘やかされ過ぎたりしないかという事だ。

柵もいずれは成長し、私と同じ哨戒天狗として隊に配属され、御山の警備に当たる任に就かなければならない。

そうなったとき、可愛い従弟が大橋のようなオスになってしまったら、目も当てられない。

そうならないためにも、柵をどこに出しても恥ずかしくないような、立派な白狼天狗に育て上げるのが、従姉としての私の役目だ。そう。

あくまで、白狼天狗として一人前に育てるのだ。

楓おばさんや文さんが言っていた、自分好みに育てて云々…というのとは一切関係は無い。

………決して。

妖怪の山編 3. 5

「柵は、私が立派な白狼天狗に育ててみせます！　それが、従姉としての私の務めですから！」

権さんが、2度目に俺の家を訪れた時の事だった。

耳と尻尾をピンと立て、更に両手をグッと握りしめ、俺達親子に向かつて、妙に力強く、どこか悲壮な決意のようなものを滲ませながら宣言した。

母さんと親父は、一瞬呆気にとられたようだったが、すぐに、よろしくね権ちゃん、やあ、権ちゃんなら一安心だ、などと嬉しそうに笑いあった。

「うふふ……ねえ、楠くん。上有住　権と犬走　柵、どちらが良いかしら？」

「うむ。どっちもゴロは悪くないな」

何をどう勘違いしたのか、そんなことまで言い出し始めた。

「い、言っておきますけど！　柵の将来の事を思っているだけです！」

当然、権さんは顔を真っ赤にして全力否定。

「ええ、ええ。分かっているわ、権ちゃん……孫の名前も今から考えておきましょうか？」

「そうだな。孫の名前は、是非とも光宙に……」

駄目だ、この両親。早く何とかしないと。

そんなこんなで。

椛さんは、仕事が休みの日には、俺の家を訪れ、俺の面倒を見る事が多くなったんだが。

「はいはい。キレイキレイにしましょうね」

現在俺は、庭先の縁側で、椛さんに「アレ」の始末をしてもらっている最中だったりする。

母さんの時は、母親なんだしと割り切る事が出来たが、椛さんの場合は、そんなふうに割り切る事が出来ない。

だってさ、見た目が15、6歳の女の子だよ？

今の俺は赤ん坊とはいえ、中の人はおっさんなんだぜ？

いかがわしい店でそういうプレイをしてもらっているような、そんな背徳感でいたたまれない。

「椛も、もうすっかりお母さんね」

「も、もう！ 何言ってるんですか、文さん！」

ちなみに、今日は鴉天狗の射命丸 文さんが一緒だ。

この人はーというか、鴉天狗全般に言える事らしいが、妖怪の山の広報担当らしく、個人個人が好き勝手に新聞を作り、発行しているのだという。

カメラと手帳（文花帖というらしい）を四六時中持ち歩いているのはそのためだ。

ちなみに、文さんの書いている「文々。新聞」は、購読者数がそ

こそ多く、我が上有住家でもその新聞を取っているのだそうだ。

「あ、写真撮るときは、フラッシュたかないで下さい！」

うん。フラッシュは勘弁してほしいな。

直視すると、目がチカチカするし。

「ふふふ。椀の子育て奮戦記は中々の人気なのよ？ 知っていたかしら？」

「……知ってます。物凄く不本意ですけど。記事にするのを即刻やめて欲しいです」

「それは聞けないわね。読者からも好評だし」

ご自慢のカメラを弄り回しながら、文さんは、にんまりと笑った。この人、椀さんと俺の記事にしているらしい。

いったい、どんな記事になっているか良く分からないが、椀さんのうんざりした口ぶりからすると、碌な内容じゃないんだろうな。

「そうそう、読者からの声もあるのよ？ いくつか紹介するわね」

そう言って、文さんは懷から例の文花帖を取り出した。

そこには、文さんの集めた新聞ネタが、びっしりと書き込まれている。

チラッと見た事があるが、何が書いてあるのか全く読めなかった。字体が、オカルト番組かなんかで見た天狗の詫び証文にそっくりだった。

「えーっと、色々あるわよ……例えば『椀可愛いよ椀』とか『犬走は俺の嫁』とか『犬走イイ！』 つか、いつか俺の子をををを！』とか『キャーモミジサーン！』とか『椀ちゃんウフ

フ』とか、他には……」

「も、もう良いです。お腹いっぱいです……」

柊さんは、真っ青な顔で頬を引き攣らせていた。

これは、ドン引きするのも無理は無い……

柊さんが人気なのは分かったが、なんというか、アレなコメントばかりだ。

「柊ちゃんは随分人気があるのね」

母さんがお茶とお茶受けを持って縁側に現れた。

「あ、どーも。柊クンのお母さん。お邪魔してます」

「いらっしやいませ、射命丸様」

柊さんは口調はともかく「文さん」なんて名前で呼んでるのに、

何で母さんは「射命丸様」なんて、畏まった呼び方をしてるんだろ。

文さんのほうも、柊さんと対するような砕けたものではなく、慇懃な口調にガラッと変わってしまう。

「最近、柊は私よりも柊ちゃんに懐いていて、母親としての自信が揺らいでおりますわ」

「あややや。それは初耳です！」

文さんが目を輝かせる。

「嫁姑の息子の奪い合いですね！ これは良いネタになります！」

「ちょ、ちょっと、何言ってるんですか、文さん……！」

「でも、もう良いんです」

母さんはふつと寂しそうな表情になると、儚げな溜息を吐いた。

「柵は柵ちゃんにあげます。その代わり、やがて生まれてくる孫を貰いますわ」

「おおっ、これは爆弾発言です！」

「あーもう！ 二人とも、いい加減にしてください！」

とうとう溜まりかねたのか、柵さんは、俺を抱いたまま勢いよく立ちあがった。

ちよつとびっくりした。

「もう、柵ちゃんったら。そんな大声出したら、柵がびっくりするでしょう？」

「そうよ、柵。そんなんじゃ、ママ失格よ」

咎めるような口調ながら、二人は明らかに柵さんの反応を楽しんでいる。

二人の顔には、まったく同じ種類の、人をからかうような笑みが浮かんでいるからだ。

「ううー……」

口をへの字に引き結び、涙目で唸り声を上げる柵さん。

この人は、根が真面目すぎるんだろーな。

さらっとスルー出来ればいいんだろーけど、些細な冗談でも真に受けて大真面目に反論してしまう。

そこを突かれ、良い様にからかわれてエンドレス。

母さんや文さんみたいな人にとっては、格好の弄り相手だろー。

なんか、こう、クルクルと良く変わる柵さんの表情は、小動物的で可愛い感じがする。

少し気の毒ではあるけど。

「さて、枕で遊ぶのはこのぐらいにして、私はそろそろ帰ります。記事を書かなければなりませんので」

文さんが腰を上げた。

いったい、どんな記事になるのやら。

悪い予感しかない。

「それでは、今後とも文々。新聞をよろしく！」

そう言い残すと、文さんは瞬きする間に飛び去ってしまった。

「も、もう……文さんったら……」

「あらあら。相変わらず、慌ただしいお方ね」

無然とする枕さんと、楽しそうな母さんの表情が実に対照的だった。

翌日の「文々。新聞」がどんな内容だったかは分からないが、数日後に訪れた枕さんの疲れ切った表情から察すると、今まで以上に碌でもない記事だったのは想像に難くない。

妖怪の山編 4

待ちに待った非番の日が訪れた。

非番の日に村に帰って櫓の面倒をみるのは、ここ最近の私の日課となっていた。

手早く朝食を摂り身支度を済ませ、少しだけ、宿舎の扉を開けて外の様子を確認する。

……右よし。左よし。

能力を使って更に周囲の様子も探る。

よし。文さんの姿も同僚達の姿もない。

そこまで確認し、私はようやく扉を開け屋外に出た。

「あれ、椀。出掛けるの？」

いざ、村に向けて飛び立とうとしたとき、背後から声を掛ける者があった。

振り返ると、そこには、帽子を被りリュックを背負った水色の髪の少女。

私の友人、河童の河城にとりだった。

「に、にとり。どこに居たの？」

能力を使ってまでして、周囲に人影が無かったのは確認済みだったはずなのに。

「ああ、これのおかげだよ」

にとりは、普段着の上に雨合羽のようなものを羽織っていた。

「まだ試作段階なんだけどね。光学迷彩スーツだよ。ちょっと脅かしてやろうと思って」

そう言っけにとりは、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「今日は非番でしょ？ 暇を持て余してるだろうと思って、将棋の相手でもしようと思たんだけど」

「お生憎様。見ての通り、出掛けるところよ」

「ふーん…」

にとりは、探る様な視線を私に注いだ。

「どこ行くの？ まるで、これから逢瀬にでも行くみたいにウキウキしてるけど？」

「んなっ！？ 何を言ってるの！？」

予想外の一言に、思わず声が裏返った。

「その慌てぶりが怪しいなあ。宿舎を出るときも、随分と周りを気にしていたみたいだし」

「…そんなじゃないわよ。従弟の相手をしに行くだけよ」

「ああ、何年か前に哨戒天狗達が、柵の隠し子だなんだと騒いでたあの子？」

「そうよ」

「ふうん。そっか」

にとりは、何やら考えるような素振りをして押し黙った。

「…もう、行っても良い？」

私の声は少しだけいらついていた。
貴重な時間を、少しでも無駄にはしたくない。

「私も一緒に行って良い？」

「えっ？」

「や、椀の可愛い従弟がどんな子なのか、見てみたいと思ってさ」

「だ、駄目よ！」

「どうして？」

「そ、それは…」

反射的に拒絶したものの、特に明確な理由があるわけでは無い。
ただ、何となく…

何となくだけど、私以外のメスに柵を会わせるのが嫌だった。
ただでさえ、文さんという最も厄介な人に知られているのだ。

「そ、そう！ あの子、人見知りが激しいから！」

その挙句、口から出たのが、そんな苦し紛れの言い訳だった。
にとりは、あからさまに不審な目で私を見ている。

「ふーん…文さんや、哨戒天狗達の言ってた事は本当みたいだね」
「な、何よ、それ」

「椀が、従弟を自分好みに育てて、婿にしようとしているって」
「ああ…」

思わずその場につくりと膝を付きそうになった。
まったく。

どうして、こう、そっち方面に結び付けたがるのだろうか。
私は純粹に、柵のことを思い、立派な白狼天狗になってほしいが
ために面倒を見ているだけなのに。

何にせよ、そういった誤解を抱かれるのは好ましい事ではない。
きちんと誤解を解く必要があるか。

「…分かったわ。一緒に来ても良いわよ」

月日の経つのは早いものです。

俺ももう3歳になりました。

言葉がしゃべれるようになりました。

歩けるようになりました。

一人でおしっこが出来るようになり、両親が大変喜んでいました。

でもね、母さん。だからといって、村中に紅白まんじゅう配るのは、どうかと思うよ。

さて。

3歳児ともなれば、色々なものに興味を持つ年頃だ。

俺もそんな欲求を満たそうかと思う。

何しろ、この世界については、まだまだ分からない事だらけなのだ。

分かっているのは、俺の住んでいるこの場所が、妖怪の山と呼ばれるという事だけ。

もっとも、話してる言語は日本語だし、服装や生活様式も一昔前

の日本人そのものなので、日本のどこかである事は間違いないだろう。

問題は、それがいつの時代でどの地域なのか、なんだが。

同年代の友人が居れば、一緒に遊びながら、色々と情報収集が出来るんだろうけど、どうやら、この村で子供は俺だけらしい。

なんでも、村では60年ぶりに生まれた子供なんだとか。

まあ、寿命の長い妖怪が、そんなにポコポコ生まれたら生態系のバランスが崩れるもんな。

ちなみに、60年前に生まれたというのが、俺の従姉の栞さんだったりする。

そういえば、今日は栞さんが来る日だったな。

色々と、今まで分からなかった事を聞いてみようかな。

母さんに聞いても良いんだけど、故意に間違った知識を植え付けられそうで、なんだか怖い。

「ねえ、母さん。今日は栞さんが来る日だね」

縁側に腰かけ、足をぶらぶらさせながら、傍らの母さんに問い掛けた。

「そうね。ふふふ…栞は、栞ちゃんが好き？」

「う、うん。好きだよ」

「そう、好きなのね？　じゃあ、大きくなったら、栞ちゃんをお嫁さんにしたい？」

なんで、こう、そっちの方向に持って行きたがるかなこの人は。

前世の記憶があって、本当に良かった。

そうでなければ、こういう刷り込みを真に受けて、親父みたいなアレになってしまっていたところだ。

幸いな事に、栞さんにそういう気が一切無いようなのが、それが

せめてもの救いだ。

純粹に弟みたいな従弟として接してくれているしね。

「え、なに？ 分かんない…」

そう言って、小首を傾げ、すっとぼけてみせると、母さんは頬に手を当て、困ったように溜息を吐いた。

「楠くんの際は、わりとスムーズに洗の…コホン…教育出来たんだけど、なかなか上手くいかないものねえ…」

せ、洗脳！？ い、今、洗脳って言おうとした！？

「あら、栞ちゃんが来たみたい」

俺の動揺を知ってか知らずか、母さんははぐらかすように空を見上げた。

仕方なく俺もその視線を追うと、そこには確かに栞さんの姿があった。

「あら。隣に見かけない子がいるわね」

「ほんとだ。誰だろう」

やがて、栞さんと隣の子は庭先に着地した。

水色の髪の毛の帽子とリュックを背負った、見た目だけで言えば、栞さんと同じ15、6歳程度に見える女の子だ。

「楓おばさん、櫛。こんにちは」

「こんにちはー」

「いらっしやい、栞ちゃん。隣の子はお友達？」

「はじめまして、椛の友人の河童の河城 にとりです」

その子はそう言って帽子を取り、ぺこりと頭を下げた。
河童？ 河童なのか、この子は。
初めて見たけど、普通の人間と変わらないように見えるんだが。
強いて違う所を言えば、髪の色ぐらいか？

「椛、にとりさんに挨拶しなさい」

「あ、は、はじめまして。上有住 椛です」
「君が椛くんね。よろしく」

にとりさんは、そう言って俺の頭を優しく撫でた。
うん。幼児の特権だよな。

年上のおねいさんに無条件で可愛がってもらえるっていうのは、
実に良いものだ。

あ、あれ？ 椛さん、なんで怖い顔で睨んでるの…？

「どうしたの、椛。怖い顔して」

「……何でもない」

小首を傾げるにとりさんに、椛さんはぶっきらぼうに答えた。

「何言ってるのさ。椛くんが怯えてるじゃない」

「そうなの、椛？」

一転して、優しい笑顔を浮かべ問いかけてくる椛さんに、俺は無
言でブンブンと首を横に振った。

「そうよね。もう、にとりったら。おかしなことを言わないでよ」
「あー、まあ、いいや…」

にとりさんは帽子で表情を隠し、困ったようにポリポリと頬を掻いた。

「それじゃ、楓おばさん。柵と遊んできますね」

柵さんはそんなにとりさんに構わず、俺に向けたのと同じ笑顔のまま母さんに言った。

「ええ、お願いね、柵ちゃん、にとりさん」

母さんは、お姉ちゃん達の言う事を良く聞くのよ、と言って俺の頭を撫で、家の中に戻って行った。

去り際に「ライバル登場かしら？ ふふふ」とか聞こえたけど、きつと空耳に違いない。

妖怪の山編5

柊さんが遊びに来ました。

今日はお友達を連れて来ました。

河童のにとりさんです。

文さんに続いて、二人目の女の子です。

野郎はどうでも良いけど、女の子の知り合いが増えるのは喜ばしい限りです。

今、二人とお散歩をしているところです。

右側に柊さん、左側ににとりさん、間に俺を挟み、3人仲良くおてて繋いで歩いていきます。

傍目に見れば、仲の良い姉弟みたいな感じに見える事でしょう。

「柊くんはいくつになるのかな？」

「3歳です」

「3歳かぁ。年の割にはしっかりしてるね」

褒められて悪い気はしないけど、ちょっとこそばゆい。

中の人はおっさんだしね。

「私の里にも7歳の子供が居るけど、その子よりもずっと落ち着いて見えるよ」

お、それは良い事を聞いた。

年の近い友人がゲット出来るかも。

「へー。会ってみたいなー」

「そう？ それじゃ、今度来る時に連れてくるよ」

「うん！」

これは結構な収穫かもしれない。

椛さんが遊びに来てくれてはいるが、やはり歳の近い友人の方が、何かと気兼ねしなくても良い。

だいいち、椛さんだって、休みの日ぐらい、ゆつくりと身体を休めたいだろうし、負担の軽減にもなるだろう。

あまり頼りっぱなしっていうのも悪い気がする。

「……良かったわね、櫛。新しいお友達が出来るかもね？」
「う……ん？」

優しい椛さんの声に頷きかけ、俺は凍りついた。

声とは裏腹に、椛さんが全く笑っていなかったからだ。

いや、口元には確かに笑みが浮かんでいるんだが、目に全く感情のようなものが浮かんでいなかった。

人形が笑っているような、恐ろしく平坦な作り笑い。

普段なら、とても魅力的に見える八重歯も、この時ばかりは、獲物を食い殺そうとするかのような、猛獣の牙のようにしか見えなかった。

「椛ー？ どうしたの？」

「……………何が？」

にとりさんの問いに「何が？」と答えるまでの微妙な間が怖い。

表情が表情なだけに、得体の知れない恐怖を感じる。

「……分かりやすい性格をしてるよね、椛は。櫛くんを取ったりしないから、安心しなよ」

「なっ！ 何を言ってるのよ！！」

あー、なるほど。そういうことか。

機嫌の悪い理由が何となくわかったぞ。

いつも自分に懐いている子が、友人とは言え、自分以外の相手と仲良くするのが気に入らないんだな。

わかるわかる。俺にも似たような経験があるし。

前世で子供の頃に飼っていたハムスターが、飼い主の俺にはめちやくちや噛みついて来るのに、たまたま見せた友人には、噛むどころか掌で眠ってしまうくらいに懐いて、かなりショックを受けたっけ。

今の樫さんは、きっとそんな心境なんだろう。

それならば、ここはひとつ、無邪気な幼児パワーを発揮して、この雰囲気はどうにかしよう。

俺は、口をへの字に引き結び、思いっきり鼻を啜りあげた。

「けんか……してるの？」

更に、半ベソをかいいたような表情で、二人の顔を交互に見上げた。

「な、何言ってるの、樫！ 喧嘩なんてしてないわよ。ねえ、にとり？」

「う、うん。もちろんだよ！」

「よかった」

いかにも、安心したと言った感じの、無邪気な笑みを浮かべて見せる。

二人の表情が、途端に可愛らしい小動物でも見つめるような、柔らかなものになった。

ふふふ。こういうときのために、両親の目を盗んで、鏡で笑顔の練習をしていた甲斐があった。

こういう手が通用するのは今のうちだけだろうけど、使えるうち

は最大限に活用しなければ損だ。

笑顔を武器に使う幼児。

うん。不気味だ。

俺だって充分黒いよな。母さんの事をとやかく言えないかもしれないかもしれん。

まあいいや。

不穏な雰囲気を拭い去る事は出来たので良し。

これで当初の目的に移る事が出来る。

幸いな事に、にとりさんもいるので、情報収集の幅が広がるというものだ。

「ねえ、樫さん。樫さんは、どんなお仕事してるの？」

まずは当たり障りのない質問からだ。

常々疑問に思っていた事でもあるし、この際だから聞いてみようかと思う。

「私の仕事は、妖怪の山を警護する哨戒天狗よ。侵入者が居ないか常に目を光らせ、ひとたび侵入者を発見したら直ちに現場に急行し、追いつ返すのよ」

樫さんは、胸を張って誇らしげに言った。

イヌ耳が得意げにピコピコと動き、同じように尻尾が揺れている。自分の仕事に誇りを持っている事が、はっきりと分かった。

そういうのって、ちょっと羨ましいな。

「あなたも大きくなったら、私と同じ哨戒天狗として任務に就く事になるのよ」

「そーなのかー」

「そのためには、私の言う事を良くく聞いて、立派な大人になる

必要があるわ」

「そ、そう、なの……?」

笑顔を浮かべ、俺の頭を撫で撫でする柊さん。

な、なんでだろう……いつもと同じ笑顔の筈なのに、この、胃に来る重圧感はいったい……

「もっとも、妖怪の山に侵入するようなモノ好きはそうは居ないけどね」

にとりさんは、苦笑しつつ肩を竦めた。

そういえば、この人は何をしてるんだろうか。

「にとりさんは、どんな事をしてるの?」

「私? 私たち河童は技術屋だからね。もっぱら機械弄りが仕事かな」

「文さんたち鴉天狗の使っているカメラも、にとりたち河童が作ったのよ」

「へえ、すごいや!」

「ま、まあ。作ったと言っても、外の世界の技術の劣化版だよ」

「外の世界?」

この単語は前にも聞いた気がする。

そうだ、思い出した。

俺が産まれたとき、確か親父が外の世界の育児本だとか何とか言っ
つて、た○ごクラブから、とんでもない名前を付けようとしたんだ。

「説明してあげても良いけど、柊にはまだ難しいかもね」

「そうだね。もう少し、大きくなってからの方が良いかも」

「えー、教えてよー」

多分、2人とも、3歳児には理解できないと思っているんだろう。外の世界と言うのは、俺が生まれ変わる前まで暮らしていた日本の可能性が高い。

今生きているこの世界と、外の世界は、いったいどういう関係にあるんだろうか。

知ったところで、どうにかなるわけではないだろうが、無性に気になるのだ。

「教えてあげましょうか？」

「「「えっ？」」」

背後からの声に、俺たち3人は同時に振り返った。

いつの間に現れたのか、そこに立っていたのは、紫色のゴスロリっぽいドレスに身を包んだ金髪美女だった。

大して陽射しが強いわけでもないのに、日傘をさし、それを弄ぶようにクルクルと回している。

美人なんだが、なんだろう……口で説明するのが難しいんだけど、口元に、本能的な不安を煽るような笑みを湛えている。

なんというか、一言で言い表すと、胡散臭い。

「あなたは……」

椀さんがさり気なく、俺の身体を背後に隠すように前に出る。

声に隠しようも無い警戒の色が現れている。

にとりさんのほうを窺って見ると、同じように硬い表情になっていた。

もしかして、ヤバイ人なんだろうか。

「外の世界の事が知りたいの？ 坊や」

そんな二人を無視するように、胡散臭い美女は俺に微笑みかけた。

「え、えーっと……」

言いようのない不安に駆られるその視線に耐えられず、気が付くと俺は、椀さんの影に隠れるようにして、袴をぎゅっと握りしめていた。

「あらあら。私のような美女に話しかけられて、照れているのかしら？ 可愛いわねえ。食べちゃいたいくらいに」

「……八雲 紫さん」

優雅に微笑む金髪美女に、椀さんは今まで聞いた事のない硬い声で言った。

「あら。私の事を知っているの？ 白狼天狗さん」

「この幻想郷に住む者で、貴女を知らない人妖が居るとでも？」

「あらあらまあまあ。木端天狗にまで知られているなんて、光栄なことですわ」

「気紛れを起こすのは貴女の勝手ですが、年端もいかない子供をからかうのは止めてもらえませんか？ いいトシをして」

ある一部分を物凄く強調した言い方に、金髪美女——八雲さんの口の端が僅かに引き攣った。

「うふふ……もしかして、弾幕ごっこのお誘いなのかしら？」

「……お望みとあらば」

「ちょ、ちょっと、椀……！！」

突然睨み合いを始める樫さんと八雲さん。

挑むような樫さんの視線に対し、八雲さんは、一見すると余裕綽々といった笑みを浮かべているが、目が全く笑っていない。

オロオロするにとりさん。

ワケが分からない俺。

どうしてこうなった。

「……ばかばかしい。偶々貴方たちの姿が見えたから、親切心を起こしただけなのに」

溜息交じりの八雲さんの一言と共に、一触即発の空気が一瞬にして霧散していった。

樫さんも僅かに肩の力を抜き、にとりさんは安堵の溜息を吐く。

「本当に、それだけなんですか？」

「当たり前でしょう」

未だ完全には緊張を解かない樫さんに、八雲さんは呆れたように言った。

「その坊や。今度は、その怖いお姉さんが居ない時に、じっくりと教えてあげるわ」

八雲さんはそういうと、空間に手を掛け押し開いた。

俺の貧弱な語彙力では、そうとしか表現が出来なかった。

空間に突如穴が開き、八雲さんは胡散臭い笑顔で微笑むと、その穴の中に身を躍らせたのだ。

八雲さんの姿が見えなくなると同時に、穴はすぐに消えて無くなったが、閉じる寸前に穴の隙間から、数え切れないほどの、こちら

を睨みつける沢山の目が見えた気がした。

「……行ってみたよね」

「そうだね。まったく、樫だったら。あの八雲 紫に喧嘩を売るなんて無謀すぎるよ」

「別にそんなつもりじゃ……樫にちよっかいを出そうとしたのは向こうだし」

「樫くんの事になると、本当に見境無くなるんだね……」

あー、やっぱり、俺にちよっかいを出されそうになって腹を立てたのか。

しかも、今度は見ず知らずの赤の他人だしなあ。

俺の事を大事に扱ってくれるのは嬉しいけど、ちよっと過保護な気がするな。

胡散臭い人だったけど、もしかしたら、色々教えてもらえたかもしれないし。

それを考えると、ちよっと惜しかったかもしれない。

妖怪の山編 6

「今日は、疲れた……」

布団に横になり、天井の木目を眺めながら、ぼそりと呟いた。
現在の時刻は丑の刻、午前2時頃。

親子3人、仲良く川の字になって床についている。
母さんも親父も既に寝入っており、安らかな寝息と、時計の秒針の立てるカチカチという音だけが聞こえてくる。

明治初期ぐらいの農村の生活様式に見える割に、俺の家には時計があつたりする。

外の世界の技術を流用し、にとりさんたち河童が作ったものらしい。

機械式なので、定期的にネジを巻く必要があるのが、ちょっと面倒だ。

それにしても、今日は色々な事が起こりすぎた。
そのせいで、普段の数倍は疲れたはずなのに、妙に目が冴えて、なかなか眠る事が出来ない。

もっとも、色々あつた割には、収穫はそれほどでもなかった。
にとりさんと知り合えたのは、それなりに収穫ではあつたけど。
あと胡散臭い金髪美女。八雲さん……だっけ？

とりあえず、分かったのが、柎さんの仕事の哨戒天狗って言うのは、平たく言えば自衛隊ってことと、にとりさん達河童はエンジニアということ。

柎さんと八雲さんの会話から、この世界が幻想郷と呼ばれていること。

そして、まだ確証は無いが、外の世界とやらが、俺のもと居た日本だということぐらいかな。

「うー、トイレ、トイレ……」

俺は、両親を起こさないように、そっと布団から抜け出した。小用を済ませ、縁側を通って寝室に向かう途中、ふと夜空を見上げた。

そこには、空いっぱい広がる満天の星空と、それを圧するように白く輝く満月があった。

こんな星空、俺のもと居たところだったら、北海道の原野にでも行かないか見る事が出来ないんじゃないだろうか。

少なくとも、俺の住んでいた都心部じゃ、こんな星空を見上げる事は出来なかった。

最初に見たときは、あまりの星の多さにビビってしまったほどだったが、今では病みつきになってしまい、今回のように、たまに夜中にこっそり起きだして、夜空を眺める事がたびたびある。

「ここは、いい所だなあ……」

すぐに寝室に戻らず、縁側に腰を降ろし、しばし夜空を堪能する。思わず、そんな独り言が零れてしまった。

「そう。幻想郷を気に入ってくれたのね。それは良かったわ」

突然、横から聞こえた女性の声に、俺は驚いて顔を向けた。

そこには、俺と同じように縁側に腰を降ろしている、豊かな金髪
の美女がいた。

紫色のドレスに身を包み、夜中だと言うのに日傘をさしているその女性の端正な顔には、胡散臭い笑みが張り付いている。

「こんばんは、坊や」

日傘をたたみ、女性は優雅に微笑んだ。

「……こんばんは、八雲……さん」

呆気にとられながらも挨拶を返すと、八雲さんは嬉しそうに微笑んだ。

「いったい、どこから湧いて出たんだ。」

「なんで、俺の家を知ってるんだ。」

「嬉しいわ。私のこと、覚えていてくれたのね」

「そりゃあね。」

あれだけ意味不明で、唐突な出現の仕方をされたら、嫌でも忘れられない。

「イケナイ子ね。こんな夜遅くまでおつきしてるなんて」

「あ、そ、その。眠れなくて。お星様を見てたの」

「あら、そうなの。ふふふ」

八雲さんは、相変わらずの笑みを浮かべたまま、すすっと俺の隣に身体を寄せて来る。

「さり気なく距離を置こうとしたら、それを察したかのように、一気に密着してきた。」

「うお、やわらけえ。」

「椀さんやにとりさんが美少女だとすれば、この人は間違いなく美女だ。」

彼女らには決定的に欠けている、妖艶な大人の女の魅力に満ち溢れている。

「スタイルもグンバツ。そしてなにより、胸がデカイ。」

「顔が赤いわよ。熱でもあるのかしら」
「——っ!？」

八雲さんは突然顔を近づけると、そのまま額をコツンと合わせてきた。

頬を擦る吐息と、輝くような金髪から香るほのかな甘い香りに、急激に頭に血が上るのが分かった。

子供をからかって遊んでいるのは丸分かりだが、それでも、こんな美女に密着されると、妙な気分になってしまう。

ふと、脳裏に椀さんの顔が浮かんだ。

口をへの字に引き結び、怒っているというよりも、泣くのを必死に堪えているような、そんな表情だった。

「や、やめてよ……」

何故か罪悪感で一杯になり、俺は少し乱暴に八雲さんを押し退けた。

「あら、照れちゃった？　可愛いわね。うふふ……」

八雲さんは、別段嫌な顔をするわけでもなく、どこから取り出したのか、扇子で口元を隠しながらクスクスと微笑んだ。

「ところで、上有住　柵くん……だったかしら？」

あれ。俺、この人に名乗ったっけ？

「私の前では、無理に子供のフリをしなくても大丈夫よ？」

「え……な、なんの、こと……?」

すつとぼけようとして見事に失敗した。

顔を引き攣らせてフリーズしてしまう俺を、八雲さんは意味深な笑みを浮かべ面白そうに眺める。

「言葉通りの意味よ。記憶を持ったまま転生した外来人の方」

「が、外来人……？」

「そう。貴方の知りたがっていた、外の世界の日本からこの幻想郷に迷い込んだ人間。それが外来人よ」

やっぱりそうなのか。

外の世界が日本だと言う事が分かったからと言って、何かが変わるわけでもないが、自分の気持ちに一応のケリが付いた。

「八雲さん、その」

「紫と呼んでもらえるかしら？ 八雲はもう一人いるから」

「じ、じゃあ、紫さん」

俺は、今まで疑問に思っていた事、誰にも聞けなかった事を質問した。

その結果、いくつかの事が分かった。

幻想郷と呼ばれるこの世界が、日本の中に存在し、日本の国内外を問わず、妖怪や妖精、神々と言った、外の世界で忘れ去られ、幻想となった者たちが辿り着く場所であること。

外の世界とは二重の結界で区切られ、通常の手段では外から入る事も出来なければ、中から出る事も出来ないこと。

稀に何かの拍子に結界を踏み越え、幻想郷に入り込む人間が居るが、それが世間一般で言われる神隠しであること。

この世界で人間は少数勢力であり、妖怪や妖精・神々と言った存在が勢力の大半を占めていること。

妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を恐れ、退治する関係にあること

……等々。

「神隠しにあって、こっちに迷い込んだ人間を、外来人と言うんだね」

「そう。そして、そんな人間の大半は、妖怪の餌になって終るわ」

紫さんは口元を扇子で隠しながら、意味ありげに目を細めた。

「私のように、人間を餌にしている妖怪は沢山いるから……」

「え……?」

思わず後ずさる俺に、紫さんは苦笑を浮かべた。

「貴方を食べたりはしないわ。元人間と言っても、今は妖怪ですもの。それとも、別の意味で食べて欲しいかしら?」

「……そういう冗談は勘弁してください」

「あら、残念ね」

まったく。

うちの母さんといい、この人といい……

幻想郷で美女にカテゴライズされる人って、みんなこうなのか?

柊さんやにとりさんも、いずれこうなってしまっただろうか。

だとしたら、悲しすぎる……

「まだ質問があるんだけど」

「何かしら?」

「俺みたいに、外の世界で死んだ人間が、前世の記憶を持ったまま、幻想郷に転生するなんてことは有り得るの?」

「さあ? どうかしら?」

口元を扇子で隠したまま、紫さんは相変わらずの意味深な笑みを浮かべている。

……この人、絶対黒幕だよな。

だいたい、何で俺が、転生したってこと知ってんだ。

「……あなたは、いったい何者なんですか」

「私？ 私は見ての通り、人妖無害な清純派美少女妖怪よ？」

人間を餌にしてるって言ったじゃん。
有害じゃん。

「柵……？」

さらに質問を重ねようとしたとき、寝室の方から母さんの声がした。

俺が隣で眠っていない事に気付いたらしい。

「そろそろ、お暇した方が良さそうね」

紫さんは小声でそういうと、昼間と同じように、何もない空間に手を掛けて押し開いた。

「それじゃあね、柵くん。また会いましょう」

紫さんは色っぽい仕種でウインクをすると、俺が何か言う間もなく、開いた穴の中に身を躍らせた。

穴の中から見える目が半端無く気持ち悪いんだが、この人は平気なのか……？

「柵……！ どうしたの、こんなところで」

「あ、か、母さん……」

月明かりに照らされた母さんの顔は、いつもと違う不安げな表情だった。

さり気なく、紫さんが居たあたりを確認するが、彼女が開いた空間の穴はきれいさっぱり消えていた。

「ごめんなさい。眠れなくて、お星様を見てたの」

「本当にそれだけ？　話し声が聞こえたけど……？」

怪訝そうな母さんに、内心で冷や汗をかく。

母さんは訝しげに周囲を見回し、まるで犬のようにクンクンと鼻を鳴らした。

「……何か、匂うわね。年増の阿婆擦れの匂いにするわ」

「な、なにそれ。分かんないよ」

そういや、紫さんっていくつなんだろうか。

見た目は20代前半ぐらいだけど。

迂闊に聞いたりしたら、2度目の死を迎えそうな気がする。

「こんなところにいつまでも居たら風邪をひくわ。さ、早くねんねしなさい」

「はい」

俺は素直な良い子を装い返事をする、母さんの後に続いて寝室に戻って行った。

紫さん自身は、胡散臭い得体の知れない人だったけど、彼女と話す事は不思議と不快ではなかった。

無理に子供の振りをする必要が無いというのが大きいかもしれない

い。

……だからといって、信用できるわけではないけど。

布団に潜り込んで目を閉じると、今度はすぐに睡魔が訪れ、そのまま俺の意識は眠りに落ちて行った。

幻想郷のどこか——八雲邸——

「ただいま、藍」

「……おかえりなさいませ、紫様。玄関から入って下さいといつも言ってるじゃないですか」

突然、壁に隙間を開いて姿を現した主を、彼女の式であり従者で

ある九尾の狐——八雲　藍は嘆息と共にたしなめた。

「固い事を言わないの。いつもの事でしよう？」

宥めるようなからかうような紫の口調に、藍は諦めたように肩を落とした。

確かに、こんなやり取りはいつもの事だ。いちいち気にしていても仕方が無い。

「紫様。随分ご機嫌のようですが？」

「あらそう？」

久しぶりに人間でも食してきたのだろうか、と藍は思った。

「ねえ、藍。この幻想郷をどう思う？」

「幻想郷を、ですか？　そうですね……」

藍はしばし考え、自分の考えを述べた。

幻想郷は、人とそれ以外の者が、お互いの領分を侵さず、互いに恐れ敬いあう遥か昔の世界。

自分のような者にとってはまさに理想郷と言える、と。

「ただ……」

「ただ？」

「危うさのようなものは常々感じています。所詮は閉じられた世界ですから」

「そう……」

紫は何かを考えるように、視線を中空に向けた。

「あなたの言うとおり、どんなに素晴らしいと思えても、所詮は閉じられた世界。流れというものが無い。放置していれば、澱み腐っていくわ。だから」

一旦言葉を切った主の表情を、藍は窺うように見つめた。

「外から少し刺激を与えて、その澱みを解消する必要があるわ」
「刺激、ですか」

「ええ」

「しかし、過ぎた刺激は毒になるのではないでしょうか。ここは、外の世界とは違います」

「その通りよ。だから、そのあたりのバランスをきちんと考えないとね。ふふ……」

自分の式に意味ありげな笑みを向けた後、暫く寝ると告げ、紫は自分の寝室に姿を消した。

妖怪の山編 6. 5

……………暇だ。

縁側からぼけーっと空を見上げ、俺は溜息を吐いた。

椀さんが俺の家に遊びに来れる日というのは、実はそれほど多くは無い。

そのため、殆ど日は、暇を持て余し気味だ。

両親が遊んでくれたりはするが、母さんは家事、親父は畑仕事で基本的に二人ともそれほど暇ではない。

ある時、あまりにも暇なので、何か本でも無いかと思ってたら、幻想郷縁起という面白そうな本を見つけた。

最初の数ページに目を通して見たところ、幻想郷の妖怪や地理について解説した資料集のようなものだった。

これは面白いと思い、読み進めようとしたところで、親父に取り上げられてしまった。

「梶。これはお父さんの大事な本だから、悪戯しちゃ駄目だぞ？」

親父はそんな事を言いながら、本を子供の俺では手の届かない高い所に置きやがった。畜生。

仕方がないので、新聞でも読んで時間をつぶす事にした。

文さんの発行している文々。新聞だ。

新聞なら、例え悪戯されたとしても、自分達が読み終わった後なら別に問題ないと考えているのか、母さんも親父も特に何も言わなかった。

たぶん、子供が背伸びして親の真似をしている微笑ましい図にでも映っているのだろう。

ちなみに、幻想郷……というか、妖怪の山には印刷技術ぐらいいはあるらしく、新聞は文さんの手書きでは無い。

新聞としての信憑性はともかくとして、読み物としては、なかなか面白く、多少の暇つぶしにはなるのだが、1時間もすれば読み終わってしまう。

そうになると、途端にする事が無くなってしまい、またぼけーっと空を見上げる事になる。

これが、大半の日常の過ごし方だった。

「……ねえ、楓。柵って、いつもあんな感じなの？」

今日は綾織さんが遊びに来ていた。

母さんと二人、俺の近くでにこやかに談笑しており、二人の会話が聞くとともに耳に入ってきて来ていた。

「ふふふ……ここ最近、哨戒天狗の仕事が忙しくて、柵ちゃんが遊びに来れないから、寂しいんでしょうね」

いやね、母さん。

寂しいっていうよりも、退屈なだけなんだよ。

そういや、にとりさんが歳の近い子を連れて来るって言ってたけど、いつになるんだろうか。

「柵は柵ちゃんに良く懐いているものね」

うーん……周りからは、そういうふうに見えるんだろうか。

「そうなのよ。柵ちゃんが来ると、盛んに尻尾を振って喜んでいるもの」

「私も柵ちゃんと一緒にいるのを何度か見掛けた事あるけど、嬉しそうに尻尾を振っていたわね」

……え？

「……ちょ、ちょっと、待ってよ！」

俺は勢いよく立ちあがり、二人に向かって叫んだ。

「どうしたの、柵」

「お、俺、尻尾なんて振ってないよ！」

母さんと綾織さんは顔を見合わせ、愉快そうに微笑みあった。

「あらあら……あんなに大喜びしていたくせに」

「自分では気づいていなかったのかしらね」

二人はそう言って、笑みを一層深くした。

そんな二人の様子にちょっとイラついて、更に何か言ってやろうと口を開きかけた時だった。

「あら、柵ちゃんが来たわ」

「えっ？」

突然、明後日の方向を指さす母さん。

それにつられて、俺は母さんが指し示す方向に目を向けた。

しかし、その先には、雲一つない青い空が広がっているだけで、柵さんの姿はどこにもなかった。

「自分の尻尾を見てご覧なさい」

笑みを含んだ母さんの声に、俺は身体を捻って自分の尻尾を見る。そこにあったのは、千切れてどこかに飛んで行くんじゃないかっ

てぐらい、ブンブンと振られている自分の尻尾だった。

自分の意思とは無関係に動く尻尾に、俺は愕然とした。

暫く振られ続けていた尻尾は、次第に動きを緩やかにしていき、やがて停止した。

その様子は、ぬか喜びさせられて、しょんぼりと項垂れているようにも見えた。

「ね？ 身体は正直でしょう？」

こ、これは、どういう事なんだ。

もしかして、自分でも意識していない潜在的な部分が、尻尾にダイレクトに現れているとか、そういう事なのか。

つまり、俺は、心の奥底では梶さんの事が。

「……なんだか、櫛の事が心配になってきたわ。昔の楠を見ているみたいで」

「フフフ……楠くんもそうだったわね。懐かしいわ……私が遊びに来るたびに、今の櫛みたいに尻尾を振って喜んでいたわ。今もただ」

「……あなたの調教のかいがあってね」

そんな二人の会話に、俺は目の前が真っ暗になった。

つ、つまり、俺は将来、親父のようなアレになってしまおうってことなのか……？

母乳を飲んでいる息子に嫉妬したり、子育て中の女房に構ってもらえずいじけたり、たまに構ってもらうと、比喻でなしに尻尾を振って喜んだり……

身近に反面教師がいるだけに、自分の情けない将来像がこれでもかというぐらいに想像できてしまい、思わずよろめいた。

……でも。

ふと、権さんの笑顔が脳裏をかすめる。

権さんなら、別に良いかな、とか思い始めている時点で、もしかしたら、もう手遅れなのかもしれない。

妖怪の山編 6. 8

「はい、楠くん、あーん」

「あーん……」

母さんに手づから飯を食わせてもらい、親父はだらしく相好を崩していた。

もちろん、尻尾をパタパタと振りながらだ。

もぐもぐと咀嚼して飲み込んだ後、だらしない顔で、もう一度、あーんとばかりに口を開ける。

なにこの気色悪い雛鳥。

いずれ、俺もこうなってしまうのかと思うと、生きるのが辛い。

「もう、楠くんったら。ご飯粒が付いてるわ」

「おっと、いかん」

口元の米粒を取ろうとする親父を制し、母さんはおもむろに親父の口元の米粒を摘み取り、お約束通り自分の口元に運んだ。
そして、二人で目と目で語り合うように微笑みあった。

「……………ごちそうさま」

「あら、櫛。もういいの？」

「うん。もうお腹いっぱい」

いろんな意味で。

「なんだ、櫛。最近、元気が無いな」

「この頃、栴ちゃんが哨戒天狗の仕事で来れないから……」

「ああ、なるほどな」

勝手に言ってるよ、もう。

俺の住んでいる村の中を、大きな河が流れている。

妖怪の山の頂上付近にある大きな滝から流れているらしい。

その河から、各集落のほうに小川を引き込み、生活用水や農業用水として使用しているのだが、小川と言っても、3歳児の俺にとってはそれなりに深く、流れも結構早い。

「あんまり川に近づいちゃ駄目よ」

「はい」

朝食を終えた後、親父は畑仕事に、母さんは小川で洗濯を行っている。

俺はというと、洗濯をしている母さんの近くで、水面を遊弋するアメンボやらミズスマシやらを眺めていた。

暇だった。

一人遊びは限界があるし、両親の仕事を手伝おうにも、3歳児に出来る事なんて何もない。

せいぜい、邪魔をしないように大人しくしているしかない。

人間（妖怪だけど）する事がないのが一番辛い。

俺は顔を上げ、空を見つめながら溜息を吐いた。

あー……空飛んでみたいなあ。

樫さんは、大きくなればいくらでも飛べるようになるってんだけど、どのぐらいに成長したら飛べるようになるんだろうか。

「柵？　いくら空を眺めてても、柵ちゃんは来ないわよ」

分かってるって。

別に柵さんの事を考えてたわけじゃないよ。

「あ、柵ちゃん」

いやいやいや。

そんな、昨日の今日で引っかけたりは。

ブンブンブンブンブン……

「身体は正直ねえ」

鬱だ。

「柵ったら、意地っ張りね。お父さんは、とても素直だったわよ？」

素直だった結果が、アレじゃないか。

俺は、自分の尻尾をひっ掴み、じっと見つめる。

どうにかして、コイツを自分の意思通りにコントロール出来ないものか。

いちおう、神経が通っているわけだし、どうにか出来ない訳は無いよな。

まさか、腹芸ならぬ尻尾芸まで覚えなくちゃならないなんて。

嫌な方向に奥が深いな、白狼天狗。

「あら？　誰か来たわ」

母さんの声に、俺は尻尾から手を離し顔を上げた。

母さんの視線の先に目を向けると、誰かが飛んでくるのが見えた。俺は、反射的に後ろ手に自分の尻尾を押さえた。

そんな俺を、母さんが微笑ましそうに見つめているのが癪に障る。

「あら残念。椀ちゃんじゃないわね」

「……見りゃわかるよ」

やって来たのは、にとりさんだった。

「こんにちは、楓さん、櫛くん」

「こんにちは、にとりさん」

「こんにちはー」

ひととおり挨拶を交わした後、にとりさんは、なんだか申し訳なさそうに頭を掻いた。

いったい、どうしたんだらうか。

「実はね、櫛くんに謝りに来たんだ」

「え？」

何の事かと首を傾げると、この前来た時に、俺に歳の近い子を紹介してくれると言う話、それがポシヤったことを謝りに来たのだと言う。

なんでも、その子に俺の事を話したところ、かなり内向的な子らしく、恥ずかしがって会いたくないと駄々をこねたらしいのだ。

「そういうことで、謝りに来たの。ごめんね、櫛くん」

「ううん。気にしないで」

頭を撫でるにとりさんに、俺は笑いながら答えた。

そんな事を、わざわざ伝えに来るなんて、随分と律義な人だ。

まあ、確かに残念ではあるけれど、にとりさんに責任がある事じゃないし。

ちなみに、にとりさんが紹介してくれるはずだった子と知り合うのは、もう少し先の事になる。

「本当にごめんね。それじゃあ……」

「え、もう帰るの？」

せっかく来たんだから、ゆっくりしていけばいいのに。

というか、俺の相手をしてほしい。

暇で暇で死にそうなんです。お願い。

「ゆっくりしていいよ、にとりさん」

「あはは……そうしたいのは、山々なんですけど」

にとりさんは、苦笑しつつ頬を掻いた。

「その、枕が拗ねちゃうので」

「あらあら……ごめんなさいね。気を使ってもらって」

「や、良いんですよ。傍で眺めながら、枕をたきつけるのも面白……」

……コホン……彼女とはずっと良い友人でいたいし」

……にとりさん。

あなただけは、あなただけは、まともな人だと思っていたのに……

「そ、そういうわけで、そろそろお暇しますね」

「また、今度ゆっくりしていいね」

「ええ、是非。柵くん、今度は枕お姉さんと一緒に来るからね」

にとりさんは、俺に微笑みかけたあと、瞬く間に空に舞い上がって行った。

にとりさんが見えなくなると、母さんは洗濯を再開し、俺は再び暇を持て余し始めた。

……自分の尻尾の調教でもするかな。

「くしゅん！」

「あやや？ 風邪でもひいたの、権？」

妖怪の山編 7

この前の誕生日で7歳を迎えた。

転生してから7年も経つわけだが、俺の周囲は相変わらずだ。

人間の感覚で7年ともなると、周囲の環境はかなり変わってくるはずなのだが、俺が生まれた時と全くと言って良いほど変わっていない。

過保護な両親と、従姉の椀さん、椀さんがたまに連れてくる（勝手について来る？）文さんやにとりさんといったお友達が遊びに来るのも今まで通りだ。

それなりに、充実した妖怪ライフを送っていると言っても良いだろう。

7歳にもなると、そこそこ両親の手伝いも出来るようになって来たので、以前に比べれば、それほど暇をもてあまさなくても済むようになっていた。

それと、最近になって、親父は母さんが絡まない限り、比較的まとまとという事を発見した。

妖怪の山を始めとした、幻想郷の各地域や住んでいる種族についての事や、俺達天狗についても色々教えてもらった。

紫さんから予め聞いていた事と被る部分もあったけど、情報の裏を取る事が出来ただけでも十分意義があったし、補完的な知識を得る事も出来た。

……今まで、散々「アレ」呼ばわりしてごめんね、親父。

そうそう、何年前かに、読もうとして取り上げられた本―「幻想郷縁起」も読ませてもらった。

人里に住んでいる稗田という一族の人間が、代々編纂してきた幻想郷についての書物で、代が替わるごとに書き改めて出版されるため、時期によって内容が異なっているらしい。

親父も何冊か持っていて、親父曰く「間違った記述も多いが、人

間にしては良く調べている」のだそうだ。

「この辺りで良いかな」

今日は親父に連れられ、村の中にある、ちょっとした高台のような所に来ている。

遊んでくれるのかと思ったが、どうやらちょっと違うらしい。

「柵。そろそろお前に、空の飛び方を教えよう」

「ほ、本当!？」

やった! ついに! ついに来たよ!

これで、念願の空を飛べるぞ!!

今までは、村の中の、しかも自分の家の周辺しか出歩いた事が無かったが、空を飛べるようになれば格段に行動範囲が広がる。

「どうやるの!?! どうやるの!?! はやく、教えてよ!!!」

未だかつてないほどに俺は興奮していた。

柵さんに抱かれて飛んだ時の、あの感動が未だに忘れられないのだ。

興奮のあまり、鼻息も荒く親父に縋りついたくらいだ。

自分の尻尾もブンブン振られているだろうけど、そんな事は気にならなかった。

「こらこら。落ち着きなさい」

親父は苦笑しつつ、屈みこんで俺に目線を合わせた。

「いいか? まずは、両腕を大きく広げて、自分が空を飛ぶ姿をイ

メージするんだ」

「イメージ？」

「そうだ。こう、ぶわーっと、風と一体化するような感じで」

教え方が、大雑把過ぎるぞ、親父。

俺はとりあえず、言われたとおりに両腕を開き、目を閉じて意識を集中させてみる。

柁さんに抱かれて空を飛んだ時の、空中から自分の住んでいる村を見降ろした、あの時の興奮を思い出しながら。

「よし、上手いぞ！ その調子だ！」

親父の声に目を開けると、俺の身体は10メートルほどばかり浮かび上がっていた。

親父が俺を見上げ、「GJ!」とばかりにサムアップしている姿が小さく見えた。

「う、うわあ!？」

予想外の光景にパニックになり、集中が途切れてしまったせいか、俺の身体は重力に従い落下する。

あわや地面に衝突と思った瞬間に、間一髪飛び上がった親父に受け止められた。

「初めてにしては、上出来だ！ 流石は俺と楓の息子だ」

親父は嬉しそうに言いながら、俺を静かに地面に降ろした。

「さあ、もう一度やってみなさい」

「う、うん」

呼吸を整え、両腕を開き、目を閉じて意識を集中する。

大空を飛ぶ姿を強くイメージして……

しばらくすると、軽い浮遊感と共に、両足が地面から離れるのが分かった。

うつすらと目を開けると、俺の身体が徐々に浮かんで行くのが分かった。

思い切って目を開けてみる。

そのとたん、がくんと身体が傾いだ。

「わっ！」

「おっと！」

落下した所を、再度親父にキャッチされた。

「まずは、目を瞑らないでも、集中が出来るように練習だな」

確かに……

空を飛ぼうとするたびに、そんな事をしてたらキリが無い。

その後も何度か練習を繰り返したが、どうも思うようにいかない。浮かぶぐらいなら何とか出来るが、目を瞑ってしっかりと意識を集中させる必要があるし、目を開けるとたちまち集中が切れて落下してしまう。

これは、一朝一夕には行かなそうだ。

しかも、この「飛ぶ」という行為、これがけっこう疲れる。主に精神的に。

RPG的に言うなら、MPを消費しているような感じだろうか。

「今日はこのぐらいにしておこうか」

「ま、まだ、大丈夫……」

「駄目駄目。これ以上やったら倒れちゃうぞ」

少しでも早く空を飛べるようにしたい。

そんな気持ち先走り、俺は疲労をおして練習を続けようとしたが、親父にストップをかけられてしまった。

「慌てる必要は無いぞ、櫛。初めてでここまで出来たんだ。コツを掴めば、直ぐに自由自在に飛べるようになるさ」

そんな感じで、空を飛ぶ練習最初の一日は終わったんだが、その日以来、俺は事あるごとに空を飛ぶ練習を繰り返した。

両親や、遊びに来る栳さんにせがみ、練習に付き合ってもらったのだ。

その甲斐あって、最近では目を閉じて意識を集中しなくても飛べるようになり、ゆっくりであれば自由に空中を動けるようにもなった。

安全のため、保護者同伴でなければ空を飛ばせては貰えなかったのが、まあ、不満と言えは不満だった。

ちょっとした事件が起きたのは、そんな時だった。

起きた、といっても、起こった原因は100%俺にあり、俺の無思慮が引き起こした挙句、周囲に多大な迷惑を掛けてしまった出来事だった。

その日は、栳さんが非番の日だったので、俺は縁側に腰かけ、彼女が遊びに来るのを待っていた。

しかし、いつまで経っても訪れる気配が無い。

待ちくたびれていると、庭で洗濯物を干していた母さんが、俺の方を振り返り言った。

「……柊ちゃん、今日は来れなくなったみたい」

「え、そうなの？」

「ええ。柊ちゃんの隊で、抜き打ちの演習があったみたい。非番の哨戒天狗も全員駆り出されてるわ」

有事に備えての訓練の一環なのだろうか。

柊さんに、空を飛ぶのに付き合って欲しかったんだけどなあ。残念だ。

「でも、何で分かったの？」

「母さんの能力、『千里先の音を聞き取る程度の能力』のおかげよ」

「能力」というものを知ったのは、この時だった。

なんでも、この幻想郷の住人には、ごく少数ではあるが、人間や妖怪を問わず、特殊な能力を持つ者がいるらしい。

その種類は千差万別で、先天的に持っているものもあれば、後天的に発現するもの、もともと持っていた能力が変質したものと、かなりバリエーションに富んでいるらしい。

母さんの『千里先の音を聞き取る程度の能力』は、文字通り遠方の音を聞き取る事が出来る能力で、場所がはっきりと分かっているれば、かなり精度の高い音を拾う事が出来るらしい。

母さんは柊さんの隊が駐屯している場所を知っているので、哨戒天狗達の会話を拾って知ったという事だった。

母さんの能力って……端的に言えば、地獄耳か？

「ちなみに、柊ちゃんの能力は、『千里先を見通す程度の能力』よ。

だからね、櫛」

母さんは、微笑みながら俺の顔を覗き込んだ。なんか、ちょっと怖い。

「将来、櫛ちゃんと結婚して浮気なんてしたら、一発でばれちゃうわよ？ ふふ、気を付けなさい」

うわあ。

もしかして、今この瞬間も櫛さんが見てたりとか？

いや、まさか。

さすがに、それは、無い……よね？

「そして、お父さんの能力は『千里先に声を届ける程度の能力』よ」

親父の能力は、母さんの能力の声バージョンか。

よくよく考えてみると、櫛さんも母さんも親父も、何気に軍隊向けの能力だよね。

「ふふ、思い出すわあ……」

母さんは、うつとりとした表情で目を細めた。

あー、やばい。

この表情になると、アレが始まる。

「お父さんがまだ哨戒天狗だった頃、隊の任務で私と暫く会えない時でも、四半刻（30分）おきに能力を使って『愛してる』『早くお前に会いたい』って囁いてくれて……離れていても、とてもとても幸せだったわ。いつだって、心は一つって実感できたもの」

それ、嬉しいの……？

親父がはげしくキモイんだが。

「柵にはどんな能力が発現するかしら。楽しみだわ」

俺の能力、か……

今のところ、特別な力があるようには思えないな。

俺は現状に満足してるし、特別な能力なんて無くても良いや。

元人間の俺からすれば、空を飛べるだけでも、充分特殊な能力だし。

「それよりも、母さん。空を飛ぶ練習に付き合ってよ」

「ごめんなさいね、柵。洗濯物を取り込んだら、御夕飯の支度があるから」

「じゃあ、父さんに……」

「畑仕事の邪魔をしちゃダメよ。今日は諦めなさい」

母さんはそう言い残すと、洗濯物を取り込んで屋内に戻って行った。

むう、困ったな。

柵さんが来ない、空を飛ぶ事も出来ないとなると、途端にする事が無くなってしまう。

そうになると、あとは……

「親の目を盗んで、一人でコッソリとやる！」

これしかないだろう。

実は、こんな事は今までにも何度かあった。

そのたびに、両親の目を盗んでは、一人で空を飛んだりしていたのだ。

俺は、両親や椀さんを始めとした周りの大人達からは、「頭が良く聞きわけの良い子」という有難い評価を得ている。

前世の記憶があるから、両親や、周囲の大人達が困りそうな事をやらないようにしてきただけなのだが、そのおかげで、「良く言い聞かせておけば、目を離しても大丈夫」と思われているようだった。それを利用するようで多少良心が痛まないでもなかったが、空を飛ぶという魅力にはどうしても抗えなかった。

「ちよっと、遊びに行ってくるー」

縁側から屋内に向かって叫ぶ。

屋内から返ってくる母さんの「暗くなる前に帰ってくるのよー」という声に送られ、俺は自宅の敷地の外に出た。

ある程度家から離れた後、周囲に誰もいない事を念入りに確認し、軽く地面を蹴って飛び上がった。

すっと、俺の身体は5、6メートルほど浮き上がった。

あまり高度を上げると見つかる可能性があるので、地面から数メートルほどの高さを保ちつつ、森の木々に隠れるようにして飛行する。

今までは村の外に出た事が無かったが、今日はちよっとだけ遠出をしてみようと思う。

それほど離れるつもりは無いし、妖怪の山から外に出なければ大丈夫だろう。たぶん。

村の外に出たあたりから一気に高度を上げてみる。

とはいえ、せいぜい地面から2、30メートル程度なので、大人の天狗が普段飛行する高度に比べれば匍匐飛行しているようなものだ。

さすがに、そんな高度を飛ぶにはまだまだ技量不足だ。いつかは飛んでみたいけど。

時間にして30分程経った頃だろうか。

森の木々の間を縫うようにして、空中散歩を楽しんでいた俺の視界に、何かが過った。

驚いて反射的に木の幹に身体を隠す。

おそろおそろ、木陰から顔を出すと、俺の鼻先を何か玉のようなものが掠めて行った。

首をすくめながら、飛んできた方向に目を向けると、そこには、こちらを指さしてケタケタと笑う少女が二人浮かんでいた。

まるで、写真から顔の部分だけ切り取って貼り付けたような薄っぺらい笑顔の少女達の背中には、蝶のような羽が付いていた。

「よ、妖精……？」

始めて見る妖精の姿に、俺は紫さんや親父から教わった妖精についての知識を思い返す。

幻想郷の自然現象が具現化したものと言われ、一部の例外を除いて、人間の子供以下の力しか持ち合わせていない存在だが、それだけに環境の影響を受けやすく、幻想郷に何らかの異変が起きると、活発化して凶暴になるともいわれている。

だいたい、そんな感じだったはずだ。

「こ、こんにちは……」

刺激しないように、なるべく低姿勢で挨拶すると、二人の妖精は相変わらずの笑みを浮かべたまま、顔を見合わせた。

「これ、なにー？」

「てんぐ。こっぽてんぐー」

「てんぐかー。こっぽかー」

二人は同時に俺の方に向き直る。

切り貼りしたような笑みを浮かべたまま、俺の方に両手を向けた。ちょうど、「結んで開いて」の開いてのようなポーズだった。

意図が分からず、呆氣にとられて見ていると、二人の妖精の手の間から、ソフトボール大のカラフルな玉がいくつも現れ、俺の方に向って飛んできた。

「うわああああ!？」

慌てて身を躲すが、全てを避け切ることが出来ず、何発か身体に当たってしまう。

大して痛くは無かったが、パニックになった俺は、妖精達に背を向け一目散に逃げ出した。

「てんぐーよわいー」

「にげるなー」

ケタケタという笑い声に交じり、そんな声が聞こえてきたが、当然待つわけがない。

さっきの玉のようなものが何発も背後から飛んできたが、幸い当たる事は無かった。

どこをどう逃げ回ったのか分からないが、気が付くと、妖精は居なくなっていた。

俺は、荒い息を吐きながら地面に着陸する。

かなり激しく飛び回ったせいか、気力も体力も限界だった。

木の根元に座り込み、必死に呼吸を落ち着ける。

ようやくひと心地ついて、そこではじめて陽が落ちかけている事に気付いた。

そろそろ帰らなければ両親が心配する。

疲れた身体に鞭を打って立ち上がり、俺は愕然とした。

「ハハハ、どうだ……?」

妖怪の山編 8

「ふう……」

宿舍の自室に戻った私は、疲れた身体を寝台に投げ出した。

宿舍の外からは、どんちゃん騒ぎの賑やかな音が、風に乗って微かに聞こえてくる。

同僚達が、演習終了後の打ち上げ宴会をやっているのだ。

とても参加する気にはなれなかった私は、適当にお茶を濁して自室に引き上げてきたところだった。

時計に目をやると、既に亥の刻（22時頃）だ。

演習が早く終われば、櫨の所に行こうかと思っただけど、さすがにこんな時間からでは無理だ。

最近、空を飛べるようになった櫨だが、まだまだ危険なので、私や両親が見ていない所では飛ぶ事を禁止されている。

言いつけを破ったりはしない聞き分けの良い子なのだが、それだけに、今日はがっかりしているのではないかと思う。

全くもって忌々しい。

よりによって、私の非番のときに総隊演習が行われるとは。

近年稀に見る大規模な演習は、実働部隊である私達白狼天狗だけでなく、整備・開発を担当するにとり達河童、演習の様子を取材に来た文さん達報道部門の鴉天狗も参加していた。

演習の間中、私の機嫌は最悪だった。

理由は、今更言うまでもない。

そのイライラの矛先は、当然、演習で仮想敵役を演じた同僚達に向けられたわけで、弾幕戦だけでなく、格闘戦でもかなり本気で叩きのめしてしまった。

私にやられたオスの白狼天狗達は、何故か嬉しそうな顔をしていたが、頭でも打ってしまったのだろうか。

我ながら、やり過ぎてしまった感があつたので少しだけ心配だ。

「わふ……もう寝よう……」

欠伸を噛み殺し、明りを消そうと立ち上がったその時、自室の扉をノックする音が聞こえた。

「もう、誰よ。こんな時間に……」

ぼやきつつも、無視するわけにはいかず、私は扉を開けた。

「はい、柊！ 演習お疲れ様ー」

「おつかれさまー」

そこに立っていたのは、酒瓶とつまみを抱えた文さんにとりだつた。

「……文さん。それに、にとり」

「もう、柊ったら。見掛けないと思ったら、いつの間にか自室に戻っていたのね」

「せっかく無事に演習が終わったんだから、楽しもうよ」

そんな事を言いながら、二人は私を押し退けるようにして部屋に上がり込んで来た。

そうこうしているうちに、テーブルの上にツマミを広げ、あつという間に宴会の席を作り上げてしまう。

「何ボーっとしてるの？ ほらほら、座って座って！」

文さんに強引に座らされ、手に持たされた盃になみなみと酒を注

がれた。

「「それじゃ、かんぱーい！」」

「はぁ……かんぱーい」

逆らっても無駄なので、仕方なく二人に合わせ唱和した。
そのまま無造作に、水のように喉に流し込む。むせた。

「おーっ、良い飲みっぷりだねえ。さ、もっと飲みなよ」

「……飲んでるわよ」

「飲み方が足りないわ。さあ、もっとぐーっ&行くのよ、ぐーっ
！」

「だから、飲んでますってば……」

にとりと文さんから矢継ぎ早に酒を注がれ、私は半ばやけくそ気
味に飲み干していった。

「柊くんに会えなくて機嫌が悪いのは分かるけどさ。最近の柊は付
き合いが悪いよ？」

「そうよ、柊。たまに会えないぐらいの方が、会えた時の喜びもひ
としおよ。そのほうが愛情も深まるというものよ」

「柊は、関係ありません……ひっく」

だん！ と盃をテーブルに置く。

まあまあ、とかなんとか言いながら、にとりが追加の酒を注ぐ。
私にばかり飲ませて、二人は全く飲んでいない気がするのは、気
のせいだろうか。

「ふふふ。今日は良い写真が沢山撮れたわ。現像するのが楽しみね」

ご自慢のカメラをいじりながら、文さんは嬉しそうに言った。
一体どんな写真なのやら。ひっく。

「椀の凜凜しい写真も撮れてるわよ。現像出来たら、櫛クンにも見せてあげましょう。きつと椀に惚れ直すわよ」

「そんなこと、しあくてもいいれす……ひっく」

「まあまあ、椀。もっと飲みなよ」

盃に注ぎ足される酒を、何も考えずに機械的に口に運ぶ。

酔いが回って来たのか、ちよつと頭がぼーつとしてきた。

文さんは、何故私にカメラを向けているのだろう。

パシャパシャとシャッターを切るような音が聞こえるのは何故だろう。

「はい、椀、こっち向いて。はい……そうそう、ちよつと小首を傾げて……良いわよー、赤く上気した頬！　ちよつと乱れた着衣！　萌えるわー」

「なんれ、しゃしんとつてるんれすか……？」

「まあまあ、椀。もっと飲みなよ」

「ひっく……んく、んく、んく……」

にとりに促されるままに盃を口に運ぶ。

ちよつと口の端から酒が零れそうになり、それを舌でチロリと舐めとる。

「おおー！　今の！　イイ！　凄く良いわー！！」

「だから、なんれ、しゃしんを……？」

「別に、妖怪の山で、最近人気急上昇中の椀の艶姿を記事にして、更に写真売り捌いてポロ儲けしようなんて思っただけから、気にしないでいいのよ」

「そうだよ、椀。もっと飲みなよ……ごめんね、椀。發明って、すつごくお金がかかるんだ……」

「……ひっく。そう、れす、か……」

そろそろ、限界かもしれない。

二人の言っている事が良く分からなくなってきた。
瞼が重くなり始め、船を漕ぎ始めているのが自分でも分かる。

「ふふふ。これで、文々。新聞の購買数も鰻登りね！」

嬉しそうな文さんの声に、僅かに意識が覚醒した。

……そうだ。

どうしても、文さんに一言、言わなければならない事があったのだった。

私は、盃をテーブルの上に置いた。

結構大きな音がしたらしく、文さんにとりが驚いたように、私の顔を注視した。

「ひっく……文しゃん！」

「ど、どうしたの、椀」

なぜか、文さんは、たじろいだように身体を強張らせた。

「……あんまり、変な記事を書からいでくらはい……櫛の教育に悪いのれす……」

「あら。櫛クンは私の新聞を読んでもの？」

目を輝かせる文さんに、私は頷いた。

楓おばさんが言うには、私が来れない日などは、『文々。新聞』をよく読んでいるらしいのだ。

僅か7歳で新聞を読み耽るような賢い子が、文さんの新聞の悪影響を受けて歪んでしまったりしたら目も当てられない。

「……そういうわけなのれ、嘘・大袈裟・紛らわしい記事は、極力書かないでほしいんれす」

「それは心外な言い草ね、樫。清く正しい私の書く『文々。新聞』が、柵クンの教育に悪いだなんて」

「……ふふ、ふふふ、ふふふふ……文さんったら、面白い事を言いますね」

「も、樫……？」

「ひっく！ 千年以上も、生きてるくせに、清く正しいとか……ひっく！」

「な、何を言い出すのよ、樫！」

「幻想郷でも屈指の古株のくせして、清く正しいとか、ありえません」

「あ、あ、あり得ないと言われても、現にこうして、あり得ているんです！」

くす。何の答えにもなっていません。

柵だって、もう少しまともな言い訳をしますよ？

それとも、トラストミー、とでも言うつもりですか？

「ご自身の、ひっく！ 過去のやんちゃを記事にした方が、部数を稼げるんじゃないですか？」

「ちょ、ちよっと、樫……！？」

邪魔よ、にとり。

しがみ付いてこないで。

「そうですねえ。例えば『幻想郷最速のブン屋、射命丸 文の赤裸

々な過去を大暴露!？ 清く正しいのは見せかけだけか!？』とか
どうでしょう?」

「う、うわあああああああんっ!! 柁なんか、一生見廻りだけ
してれば良いんだあああああ!」

「あ、あ、あ、文さん!？」

文さんは物凄い勢いで飛び出して行ってしまった。
追いかけるようにして、にとりも飛び出していく。
やって来た時も慌ただしかったが、帰る時も慌ただしい。
せめて、扉ぐらいきちんと閉めてから出て行ってほしい。

「ひっく……まったく、もう」

後に残されたのは、テーブル上に散らかった酒瓶と酒の肴。
いったい、誰が片づけられているのだろうか。

『柁ちゃん! そこに居るかい!？』

扉を閉めるために腰を浮かせたところで、聞き覚えのあるオスの
声が室内に響いた。

どうして、楠おじさんの声が聞こえるのだろうかという疑問が頭に
浮かんだが、すぐにそれが、おじさんの能力―『千里先に声を届け
る程度の能力』によるものである事を思い出した。

いったい、こんな時間にどうしたというのだろう。

いつもと違った切羽詰まった声に、ほんの少し酔いが醒めた。

『もし、聞こえているなら、こっちに来てほしい。柁が……柁が、
遊びに行っただけ戻って来ないんだ!』

酔いがいっぺんに醒めた。

妖怪の山編？

私は取る物も取り敢えず、宿舎から飛び出した。

宴会場の真っ只中を駆け抜けて行っただけ、同僚達が目を丸くしていたが、構ってはいられなかった。

全速力で柵の家に向かう。

既に子の刻（0時）を過ぎようとしていたが、柵の家は煌々と明かりが照らされており、庭には両親である楓おばさんや楠おじさん、綾織さんを始めたとした村の住民達が大勢集まっていた。

「おばさん、おじさん！！」

村の住民達を掻き分けるようにして二人の元に辿り着いた私は、楓おばさんの憔悴しきった姿に愕然とした。

「私が……私が、柵をきちんとしていなかったから……っ」

楠おじさんや綾織さんが宥めているが、泣き腫らして真っ赤になった目から、絶え間なく大粒の涙をボロボロと零していた。

「おばさん。柵が居なくなっただけの事を、詳しく教えてください」

私が尋ねると、楓おばさんはのろのろと顔を上げ、その時の状況をぼつりぼつりと話し始めた。

自分自身の能力で私が来られない事を知ったおばさんは、柵に今日は空を飛ぶ事が出来ない事を伝えた。

柵は空を飛びたがっていたが、おばさんは家事、おじさんは畑仕事があったため、今日は諦めるように言い含めたのだが、その後、柵は家の外に遊びに行き、そのまま陽が落ちても戻って来ないのだ

という。

今まで、柵が言いつけを破るような事は無かったので、楓おばさんはすっかり柵を信用しきっていたのだ。

もしかして、勝手に一人で空を飛んで、村から出てしまったのだろうか。

だとしたら、非常にまずい事態だ。

「柵ちゃん。疲れているだろうけど、手伝ってほしい」

「ええ、もちろん」

楠おじさんの言葉に、私は力強く頷いた。

「もう一度、手分けして探そう。みんな、息子が迷惑を掛けて申し訳ないが、よろしく頼む」

楠おじさんは、真剣な面持ちで、集まった村の住民達に向って、深々と頭を下げた。

村のみんなは、「任せとけ」「応」などと威勢の良い返事残し、次々と柵の搜索に飛び立っていった。

私ものんびりとしてはいられない。

彼らを追うようにして夜空に飛び立った。

木の根元で膝を抱えながら、俺は途方に暮れていた。

太陽が完全に沈んでから、結構な時間が経過したと思う。

森の中は闇に包まれ、生い茂る木々の枝葉の隙間から覗く星の光が僅かな光源だ。

人間だった時と異なり夜目が利くため、視力を失わずに済んでい

るのが唯一の救いだろうか。

母さんと親父、心配してるだろうな。

……それにしても、幻想郷の夜の森というのは不気味だ。

良く分からない鳥か獣の鳴き声や、遠吠えのようなものがそこらじゅうから聞こえるし、小動物か何かだろうか、あちこちで何かが動く気配がする。

茂みがガサガサ動き、闇に紛れてそいつらが動き回るたびに、俺はビクリと身体を強張らせる。

物凄く心臓に悪い。

遭難した時は、下手に動き回るとかえって危険なので、助けが来るか明るくなるまで、ここでじっとしているつもりだったが、このぶんだと俺の神経が持ちそうにない。

村の外に出ても、どうせ妖怪の山の中だし、危険は少ないと高をくくっていたんだが、こんな樹海じみた所だとは思わなかった。

常識的に考えれば、7歳の子供がよく知りもしない所にホイホイ出掛けたら、危険なのは分かり切っていたはずだ。

今更ながら、自分の想像力の無さが嫌になってくる。

「……何だこれ」

ふと地面に視線を下ろすと、どこから湧いて出たのか、すぐそばに何か丸いものが5、6個転がっていた。

サッカーボールぐらいの大きさの、薄汚い毛皮をまとった球体だった。

茶色のマリモに見えなくもない毛玉のようなそれは、身動きするようにブルブルと小刻みに震えている。

気味が悪いので、距離を置こうと腰を浮かしたその時だった。

紙風船を割った時のような気の抜けた音と共に、毛玉から何かが飛んできた。

「痛っ!?!」

その飛んできた玉のような何かをモロに顔面に受けてしまい、俺はその場にひっくり返った。

最初に玉を飛ばしてきた毛玉に連鎖するように、他の毛玉も似たような音を発しながら、無数の玉を飛ばして来た。

「ひ、ひいっ!!」

またもや恐慌状態に陥った俺は、背中にいくつもの玉を受けながら、転がる様にしてその場から逃げ出した。

どこをどう走ったのかははっきりと覚えていないが、我に返ったときは、ひどい有様だった。

茂みに身体をひっかけたり、木の根や地面の段差に足を取られ、盛大にすっ転んだりしたせいだろう。

全身泥まみれなうえ、身体のアちこちが痣や擦り傷だらけだった。畜生。

何なんだ、この人外魔境は。

ああ、妖怪の山だったっけ。

「……やばい、泣きそう」

前世を合わせれば30代半ばにもなる良い歳をした男が、迷子になり涙目になっている図は、色々な意味で終わっていると思う。

「グルルルルルルル……」

そして、とことん運に見放されていた。

前方の茂みから聞こえてきた獣の唸り声に、俺は身を竦ませた。理性がさっさと逃げろと警告するが、身体が全く言う事を聞かず、

指一本動かす事が出来ない。

やがて、唸り声の主は、おもむろに茂みを掻き分け、のっそりとその姿を現した。

「ク……クマ……？」

俺は呆けたようにクマを見上げ、そのまま尻もちをつくようにへたり込んだ。

自分が小さいせいだろうか、俺の知識にあるクマに比べ、随分と大きく見える。

クマは覆いかぶさるように俺を見下ろし、首を傾げるような仕草を見せた。

そこには、ぬいぐるみのような愛嬌の欠片など一切無い。

乱杭歯の覗く大きく裂けた口から、ダラダラと粘性のある唾液を垂れ流している様は、どう見ても目の前の餌を値踏みしているようにしか見えなかった。

緊張の糸が完全に切れてしまった俺は、丸太のような腕をゆつくりと振り上げるクマを、ただ茫然と見上げていた。

幻想郷のどこか——八雲邸——

「あらあら。大ピンチねえ。鬼熊に遭遇するなんて」

隙間に映し出される映像に、紫は扇子で口元を隠しながら楽しみに微笑んだ。

鬼熊は、長い歳月を経て妖力を得た熊が妖怪化したものだ。多少の知恵が回り、人里に降りて人間や家畜に危害を加える事も少なくないが、空は飛べず霊弾を撃つ事も出来ない。

図体と臂力だけが取り柄の、妖怪としては低級が存在だが、それでも、人間や櫛のような子供の妖怪にとっては脅威だ。

「よろしいのですか、紫様。このままでは、彼は……」

傍らに控える藍が、窺うように主に問いかけた。

「構わないわ。代わりは用意できるもの。それに」

微笑みを浮かべながら、紫は言葉を続ける。

「いつまでも物見遊山気分が抜けないようでは、どのみち幻想郷では長生き出来ないわ」

「確かにそうかもしれませんが……」

藍は、主の横顔から、隙間に映し出される映像に視線を移す。

鬼熊が、今まさに、腕を振り降ろそうとしている様子が目に入っ
た。

もう間もなく、彼は物言わぬ肉塊となり果て、鬼熊の腹に収まる
事だろう。

「でも、大丈夫よ。あの子は運が良いから」

紫の台詞とほぼ同時に、隙間の向こうに弾幕の雨が降り注いだ。

私の能力―『千里先まで見通す程度の能力』は、遙か遠方を見通す能力ではあるが、遮蔽物に遮られると、そこから先は効果が得られない。

効率的に柵を探す方法として思いついたのが、出来るだけ高度を上げ、上空から俯瞰する事で、遮蔽物の影響を可能な限り避けながら搜索する方法だった。

しかし、妖怪の山の樹海は、生い茂る樹木の枝葉が地面を覆い隠しており、結局のところ、期待していたほどの効果は得られなかった。

それでも、闇雲に探し回るよりはと、根気強く地表付近の搜索を続けた。

時々、視界の端に動く影を見つけるが、野生の獣だったり、妖精や下等な妖怪の類だったりして落胆させられる。

そうやって探し続けてどのぐらい経っただろうか。

能力の使い過ぎで、目がチカチカしてきた頃、視界の端に動く影を見つけた。

その影は、野生の獣などとは明らかに違い、しっかりと二本の足で走っていた。

時折躓いて転んだりしながら、何かから逃げるように必死に走るその姿は、私の可愛い従弟―柵のものだった。

「良かった。無事だった……」

思わず安堵の息が漏れる。

ホッとすると同時に、ほんの少しだけ目頭が熱くなってしまった。こうしてはいられない。早く迎えに行かないと。

柵は、村とは全く反対の方向に向かっていった。

そのまま進んでしまうと、無名の丘の方に行ってしまう。

すぐにでも柵の元に向おうとしたその時、私は凍りついた。

柵の行く手を遮る様に、大きな黒い影が現れたからだ。

その巨大な影は、鬼熊のものであった。

長い歳月を経て妖力を得た熊が妖怪化したものだが、狼が験を積んで天狗に転じた、私達誇り高き白狼天狗と異なり、多少の浅知恵が回る程度の、図体と臂力だけが取り柄のケダモノだ。

その鬼熊が、柵に向かって腕を振り上げていたのだ。

柵は、疲労のためか、それとも恐怖のためなのか、その場にへたり込んで呆然としている。

考えるよりも先に身体が反応していた。

急降下しながら、鬼熊と柵の間に弾幕を展開する。

まだかなりの距離があつたが、私の能力と併用すれば、この程度の精密射撃は容易だ。

降り注ぐ弾幕に驚いた鬼熊が動きを止めた。

その一瞬の隙を見逃さず、私は鬼熊に躍りかかった。

俺とクマの間に、光り輝く無数の弾が降り注ぎ、クマはたたたらを踏んだように動きを止めた。

直後に響く鈍い打撃音。

何が起きたのか、とっさには理解出来ず、目の前の光景に俺は啞然とした。

そこには、クマの側頭部に跳び蹴りを決めている樫さんの姿があったからだ。

高下駄の一本足が、クマのこめかみのあたりに深々とめり込んで

いた。

柎さんは、クマの頭を足蹴にした反動を利用して、身体を捻るように半回転させながら、よろめくクマの鼻面に回し蹴りを叩きこんだ。

クマは悲鳴すら上げず、スローモーションのようにゆっくりと仰向けに倒れていった。

手足が微かに痙攣しているところを見ると、死んではないようだ。

「柎！ 柎！ 大丈夫？ しっかりして！」

轟沈したクマには一瞥すらくれず、柎さんは俺の肩を揺さぶった。俺が反応出来ないでいると、軽く頬を叩きながら何度も繰り返し呼びかける。

「も、柎、さん……？」

「良かった……！！」

呆けたような反応を返す俺を、柎さんは思いつき抱き締めた。柎さんの柔らかい身体の感触に、ようやく自分が助かった事を実感した。

そう理解した途端、迷子になってからの事がフラッシュバックのように思い出され、途端に身体の震えが止まらなくなった。

助けられる直前の、乱杭菌を覗かせるクマの表情が脳裏を掠めたところで、とうとう限界が訪れた。

もし。

もし、柎さんが来るのが、後ほんの少しでも遅かったら。

「ひっ、うっ、ううっ、ぐっ、ぐううっ……」

必死に堪えようとするが、口から漏れる嗚咽を抑える事が出来ない。

「大丈夫。大丈夫よ、柵。もう心配いらないわ」

「ご、ごめっ、ごめんなさい、ごめんなさい……うっ、うあ、うあ
ああああああっ」

柵さんに縋りついて、俺は馬鹿みたいに泣き喚いた。

自分の思慮の足りなさに対してなのか、迷惑を掛けてしまった事
に対してなのか。

何に対しての謝罪なのか、自分でもよくわからないが、ただひた
すらに、まるでオウムのように「ごめんなさい」ばかりを繰り返し
た。

柵さんは、そんな俺の背中を、落ち着くまで黙って擦ってくれた。
どのぐらいそうしていただろうか。

今の自分が、柵さんの胸に顔を埋めて、泣きじゃくっていたこと
によりやく気付き、途端に気恥ずかしくなった。

「落ち着いた？」

顔を上げると、目と鼻の先に柵さんの笑顔があった。

「さあ、早く帰りましょう。お父さんもお母さんも心配しているわ」
「う、うん……」

柵さんの手を借りて立ち上がろうとするが、足腰に力が入らない。
腰砕けのように、ふにやりとへたり込んでしまう。

「柵……?」

「あ、あれ……」

必死に立ち上がろうとするが、下半身の感覚が、どうにも覚束ない。

そればかりか、不意にぐにやりと視界が歪んだ。

安心して緊張の糸が切れたせいか、今まで感じていなかった疲労感と、強烈な睡魔が一気に押し寄せてきた。

呼びかける柊さんの声をどこか遠くに聞きながら、俺は意識を失った。

妖怪の山編 10

柵の身体がぐらりと傾き、力を失ったように私の方に倒れ込んできた。

「く、柵!？」

もたれかかるようにして目を閉じてしまった柵を抱きとめ、慌てて呼びかける。

やがて、腕の中から聞こえてくる規則正しい安らかな寝息に、ほっとして安堵の息を吐いた。

おそらく、疲労が極限に達してしまったのだろう。

「まったく、もう……」

苦笑しつつ、柵の身体に異常が無いか確認する。

全身泥だらけの酷い有様で、身体中の至る所に擦り傷や痣を作っている。大きな外傷などは見受けられなかったが、このぶんだと、暫くの間、入浴するのが辛いだろう。

柵の背中と膝の裏に手を回し、よいしょとばかりに抱きかかえる。予想していたよりもずっと重かった。柵ももう7歳なのだから、考えてみれば当然だ。赤ん坊の頃からこの子を見ているが、子供の成長はあっという間だ。みるみるうちに大きくなっていく。それが楽しみではあるのだけれど、一抹の寂しさのようなものを覚えてしまうのは何故だろう。

頭を振って、余計な考えを追い出した。

こうしている間にも、楓おばさんと楠おじさんが、柵の帰りを今か今かと待ちわびているのだから。

私は柵の身体をしっかりと抱きかかえ、白み始めた夜空に舞い上

がった。

庭先に降り立った私に、楓おばさんと楠おじさんが真っ先に駆け寄って来た。

楓おばさんは、私に抱かれて眠っている柵を見て、最悪の事態を想像してしまったのか、顔を真っ青にしてよろめいて、楠おじさんに支えられた。

慌てて、疲れて眠っているだけと告げると、なんとか気を取り直したようだった。

鬼熊に襲われて危ういところだった事は、伏せておく事にした。今の楓おばさんにそんな事を話したら、間違いなく卒倒してしまう。

「もう、この子ったら……！　こんなに心配かけて……」

「おばさん、おじさん。あまり柵を怒らないであげてください。この子も十分反省していたから……」

「ええ、わかってるわ」

楓おばさんは、目尻の涙を拭いながら、泣き笑いの表情で何度も頷いた。

「はっはっは！　まあ、オスはこのぐらいの方が、元気があって良いだろう！」

「もう、楠くんったら……」

「まったく。何能天気なこと言ってるのよ」

カラカラと無責任に笑う楠おじさんを、楓おばさんが窘めるように、綾織さんは咎めるように言った。

櫂が無事に見つかったという安堵感からだろうか、村の皆は、そんなやりとりを呑気に笑いながら眺めていた。

もったも、危ういところで櫂を見つけた私としては、とても笑い事では無かったが。

あとほんの数秒でも発見が遅かったらと思うと……背筋が寒くなる。

眠っている櫂を楓おばさんに渡そうとして、ふと、袖の辺りを引っ張られるような違和感を感じた。

何だろうと見てみると、櫂の小さな手が、私の法衣の袖をしっかりと握りしめているのだ。

しかも、よほど強く握りしめているのか、指の色が白く変色していた。

「この子ったら……」

ちょっと可愛いな、と思ったけれど、このままにしておくわけにもいかない。

法衣の袖をつかむ櫂の指を、一本ずつそろそろと外していった。

しかし、全部の指が離れたと思った瞬間、今度は私の手をきゅつと握りしめてきたのだ。

「あっ……!？」

「あらあら……柁ちゃんと離れるのが嫌みたいね」

どこか嬉しそうな楓おばさんの声に、さざ波のように周囲に笑いが広がって行った。

頬が熱くなるのを感じながら、私はもう一度、櫂の指を一本ずつ

外していく。

完全に指が外れたとたん、柵の手は私の手を探すように中空をさまよった。

何度かその動作が繰り返された後、柵の手はがっかりしたように項垂れた。

や、やだ。なにこの可愛い生き物。

このまま、このまま持って帰りたい。

……………何を考えているんだ、私は。

「そ、それじゃ、私はもう戻りますねっ！」

若干の自己嫌悪に陥り、妙な考えを振り払うように、努めて大きな声で言った。

「もうこんな時間だし、今日はうちで休んでいったら？ 演習明けでお休みなんでしょう？」

「い、いえっ、大丈夫です！」

その提案に頷きたい気持ちを堪え、私は上擦った声で頭を振った。おばさん達に背を向け、屯所に向けて飛び立とうとした私の背に、今度は楠おじさんの声が掛った。

「だけど、目が覚めて柵ちゃんが傍に居ないと、柵はがっかりするかもなあ」

「そうねえ。もしかしたら、泣きだすかもしれないわ」

「うむ。散々迷子になって、ようやく柵ちゃんに助けてもらったというのに、気が付いたら傍に居ないなんて。俺だったら、手足を振りまわして大泣きする自身があるぞ」

楠おじさん……そんな事を自信満々に言わないでください。

「ねえ、椛ちゃん。最近、柵に会えない事が多かったでしょう？
お願いできないかしら？」

「……わ、分かりました……そこまで言うのなら……」

私が承諾すると、二人はパッと表情を輝かせた。

楓お婆さんの笑顔に、何か作為的なものを感じるのは、たぶん、
私の気のせい、だろう、うん。

そう、思う事にしよう……

柵が無事に戻ってきた事もあり、搜索を手伝っていた村の皆は、
楓お婆さんや楠おじさんの丁寧な謝辞に見送られて、帰宅していっ
た。

楓お婆さんは柵を寝室に運び、私と二人で身体を拭いて傷の手当
てを行い、汚れた服を寝巻に着替えさせた。

その間、柵は一向に目を覚まさなかったが、何度か私の手を握ろ
うとしてきたので、少し困ってしまった。

主に、私の理性的な意味で。

柵の手当でと着替えが終わると、私達3人もすぐに床に付いた。
布団の並びは、楠おじさん、楓お婆さん、柵を挟んで私の順だ。
あまりにも色々な事が起きすぎたせいか、身体は休息を欲してい
るにもかかわらず、目が冴えてなかなか寝付けずにいた。

「……椛ちゃん。まだ起きてる？」

もぞもぞと寝返りを繰り返していると、隣で眠る櫛の向こうから、
楓おばさんが小声で囁いた。

「あ、はい。まだ起きてます」

櫛や楠おじさんを起こさないように注意しながら、小声で返事を
した。

「栞ちゃんが櫛を抱いて戻って来た時、昔の事を思い出したの」
「昔の事、ですか？」

「いったい、どんな事だろうか。」

「楠くんもね、櫛と同じぐらいの歳に、御山の樹海で迷子になった
事があったの」

「そんなことが……」

「あのときは大変だったわ。私が見つけた時、危うく鬼熊に食べら
れそうになっていたんだもの」

「……………なんてこと。そんなところまで、同じだなんて。」

「寸前で助ける事が出来たから良かったものの、あと数秒遅かった
らどうなっていたか。今思い出しても背筋が寒くなるわ」

その時の事を思い出したのか、楓おばさんの声は、少しばかり震
えているような気がした。

「櫛が迷子になって、栞ちゃんに抱かれて戻って来た時、昔の自分
と楠くんを見ているようだったわ」

「確かに、似てますね……」

「ええ、そつくりよ。そして、私は確信したわ。櫛を任せられるのは櫛ちゃんしかいないって」

「お、お、おばさん……！！」

いったい、どこをどうすれば、そういうふうに話が飛躍するのだろうか。

「いい？ 櫛ちゃん。良いオスを創る最大のポイントは、幼少期の刷り込みにあるの。オスにとって、自分が絶対的な存在と言う事を良く刷り込ませるの。そういう意味では、今回の一件はポイント高いわよ？」

「ななな、何を言ってるんですか、おばさん！」

あんな事があつた直後だと言うのに、冗談にしても笑えない。

「あと、甘やかし過ぎても、厳しくし過ぎてもダメ。飴と鞭の絶妙なバランスが肝要よ。そのあたりの匙加減は、おいおい教えてあげるわ」

「だ、誰もそんな事聞いてません！」

つい声を荒げてしまい、隣で眠っている櫛がうぐんと唸りながら、目を覚ましそうになり、慌てて口を噤んだ。

「ふふ……それじゃ、おやすみなさい……」

言いたい事だけ言って、楓おばさんは眠ってしまった。

私はというと、突然妙な事を言われてしまったせいで、ますます目が冴えて眠れなくなってしまった。

結局、私が寝入る事が出来たのは、殆ど夜が明けかけてからの事だった。

妖怪の山編 11

「ご、ごめんなさいっ!!」

目が覚めた俺が真っ先に行ったのは、両親と柗さんに対しての土下座だった。

平身低頭、畳に額を擦りつけ、我ながら見事な土下座ぶりだったと思う。

「く、柗。大丈夫よ、お父さんもお母さんも私も、怒っていないから」

柗さんは慌てて、俺を起こそうと身体に手を掛けたが、俺は額に畳を擦りつけた姿勢のままだった。

「そうよ、柗。怒っていないから、ね？」

「オスはこのぐらいで丁度いいんだ。気にする事は無いんだぞ？」

母さんが宥めるように、親父が能天気に行ったが、とても顔を上げる気にはならなかった。

「柗。いつまでも、そうしてるわけにもいかないでしょう？　だから、顔を上げて、ね？」

柗さんに優しく促され、俺はおそろおそろ顔を上げた。

上目づかいに、怖々と3人の顔を見る。

両親も柗さんも、言葉や態度だけ見れば、普段と何も変わらない。だけど、3人とも目の下に濃い隈を作っていたし、母さんに至っては、俺が見つかるまで、ずっと泣いていたんだろう、まるで兎の

ように真っ赤に目を腫らしていた。

聞けば、村中総出での大搜索劇になっていたと言うし、梶さんに至っては、演習の直後で疲れていたにもかかわらず、俺の搜索に参加し、寸での所での化け物みたいなクマから救助してくれたのだ。いくら俺が考えなしの阿呆でも、そんな大騒動を引き起こしておきながら、平気な顔をしていられるほどお花畑脳じゃない。

「ほんとに、怒ってないの……？」

「ええ。でも、もうこんなことしちゃダメよ？ みんな心配していたんだから」

安心させるように微笑む梶さんの笑顔が、物凄く心に痛い……むしろ、怒鳴りつけて、拳骨かビンタの2、3発入れてくれた方がマシなくらいだ。

そのぐらいの罰を受けて、当然の事をしでかしたわけだし。以前から、漠然と感じていた事だけど、子供に甘いんだよな、みんなして。

妖怪は出生率が低いから、産まれた子供を大事に大事に育てようとして、ついつい溺愛してしまうんだろうか。

その気持ちは分からないでもないけど、子供は大人が考えているよりずっと狡猾だ。

ここでガツンと怒っておかないと、「このぐらいの事なら怒られない」と学習してしまい、また同じ事を繰り返す事になる。

偶に、子供は無邪気で可愛いとか、本気で言っているオバハンが居るが、自分のガキの頃がどんなだったか思い返してみれば、そんなわけがない事ぐらい、分かりそうなもんだろう。

話が逸れた。

ともかく、今回の一件で、多少の知識を得たとはいえ、この世界についてまだまだ何も知らないという事、未だに俺が、安全が無償で手に入ると信じ込んでいる平和ボケした日本人だったということ

を、改めて思い知らされる事になった。

今後は、もう少し慎重に行動する事にしよう。

……そんな騒動を引き起こしたわけだから、暫く家から出してもらえないと覚悟していたんだが、特にそんな事は無かった。

最初の数日は、大事をとって家で大人しくするようには言われたが、その後は概ね、今まで通りの変わらない日常が戻ってきた。

外出する時も、村の外に出ないようにと釘を刺されはするが、ただそれだけだ。

俺が言うのもなんだけど、本当に良いのか、それで。

二度と同じようなことを繰り返す気は無いが、ちょっと我が子を信用しすぎじゃないだろうか。

そうそう、一つだけ変わったことがあった。

柊さんが遊びに来る頻度が、今までに比べて少し多くなったのだ。相手をしてもらえるのは嬉しいけど、柊さんからすれば、危なかしくて目を離しておけないんだろうな。

そう考えると心苦しいものがあるが、彼女が訪れるたびに喜んで尻尾を振っている俺は、本格的に駄目なのかもしれない。

ちなみに、尻尾の調教は諦めた。

何度も挑戦してはみたものの、ちつとも言う事を聞いてくれないのだ。

本当に俺の身体の一部なんだろうか。

何かもう、別の生き物の様な気がしてならない。

「それじゃ、お願いね、柊」

「はい」

母さんから手渡された籠を受け取り、俺は元氣よく返事をした。籠の中身は、畑仕事をしている親父に届ける昼食の弁当。要するに、お使いを頼まれたのだ。

受け取った籠をブラブラさせながら、親父が野良仕事をしている畑への道を歩く。

飛んで行けばあつという間だが、一人で空を飛ぶ事については、さすがに禁止されたままなので、とてとてと歩いて行く。

うちの畑までは、子供の俺の足では30分程度だ。

道の両脇に生い茂る夏草の草いきれに多少辟易しつつ、暫く進むと大きな河に突き当たった。

妖怪の山の頂上付近にあるという大きな滝から流れて来ている河だ。

この河を渡って少しの所に、親父がいつも野良仕事をしている我が家の畑がある。

渡してある橋の半ばまで差し掛かったときだった。

何気なく、上流付近に目をやると、川上から何かが流れてくるのが見えた。

流木か何かの類だろうか、ぼんやりと眺めていたが、近づいて来るにつれ、それが人の形をしている事に気付いた。

一瞬、村の誰かが泳いでいるのかとも思ったが、どう見ても、泳いでいるというより、漂っているようにしか見えなかった。第一、服を着たままで、しかも、うつ伏せの状態というのが不自然だ。

「まさか、水死体とかじゃないよな……？」

思わず呟いてから、自分の想像に背筋が寒くなった。

橋の欄干から、おそるおそる、数メートル下を覗き込む。

人影は岩場に引っかかったらしく、橋の袂付近で動きを止めていた。

誰かを呼びに行くべきだろうかと思ったが、その人物はうつ伏せ

になっている。

もし、まだ生きているのなら、すぐに引き上げれば助かるかもしれない。

……ここに流れ着くまで、ずっとあの状態だった事を考えると、望み薄ではあるが。

俺は周りを見回し、誰もいないことを確認すると、意を決して欄干から飛び降りた。

足場に注意しながら、慎重に岩場に降り立ち、ビクビクしながらその人物を覗きこむ。

背格好だけから判断すると、10歳を少し過ぎたぐらいの子供に見える。

ふと、服装を見てある事に気付いた。

「緑の帽子とリュック、それに水色の服、青い髪……どこかで見たような……」

そうだ。にとりさんと同じ格好だ。とすると、河童なんだろうか。うつ伏せになっているその人物の身体を起こそうと、しゃがみ込んだその時だった。

何の前触れもなく、うつ伏せだった人影が、水飛沫を上げながら勢いよく起き上ったのだ。

ひゃあ、と間拔けな悲鳴を上げ、俺は仰け反った。

岩場に足を取られ、ひっくり返った拍子に、強かに背中を打ち付けてしまった。

畜生。最近、こんな事ばかりだ。

内心で悪態を吐き、背中の痛みになんがら顔を上げると、立ち上がったそいつとモロに目があつた。

濡れて海草のように垂れ下る青い髪の隙間から覗く目が、じっと俺を見つめている。

全身から水を滴らせ、俺をねめつけるようなその視線は、起き上

った水死体のもののようにかなり怖い。

思わず、ひっと息を呑み、情けなく後ずさってしまう。

「天狗……白狼天狗……」

絡みつくような視線で俺を凝視しながら、そいつはザバザバと河からあがってきた。

それから、ゆっくりと辺りを見回した後、濡れた髪から水を滴らせながら、軽く首を傾げた。

「し、知らない景色。ここ、どこ？」

「……白狼天狗の村だよ」

「そ、そう。それで、君、何？」

「お、俺は、この村の子供だよ」

「ふーん……」

濡れた髪を左右に掻き分けつつ、興味なさそうにのたまった。自分から尋ねておいて、ふーんとはなんだ、ふーんとは。なんか、だんだん腹が立ってきたぞ。

「お前こそなんだよ。水死体みたいに流れて来やがって」

俺が上擦った声で言うと、そいつは口の端を吊り上げた。笑ったのかもしれない。

「ぼ、僕、河童……」

やっぱりそうか。

にとりさん以外の河童を見るのは初めてだ。

「か、河童は、泳ぎが上手だから、か、河を流れて、来るの……か、河童の川流れ？」

「いや、それ意味違うだろ」

「そ、そう、だっけ……？」

なんか、やたらと言葉にどもるやつだな。

視線もキョドキョドとして落ち着きが無いし。

「ぼ、僕、青笹あおざさ 宗太郎そうたろう……よ、よろし……く？」

何で疑問形なんだろうか。

ともあれ、自己紹介をされたので、俺も自分の名を名乗った。

そうすると、河童——宗太郎は、何かに気付いたように、軽く目を見張った。

「き、君が、櫛……？」

「そうだけど……」

「にとり姉に聞いた……白狼天狗に、櫛っていう名前の、歳の近い子が居るって……」

「ああ……」

そうか。

こいつが、前ににとりさんが言っていた、俺と歳の近い子か。恥ずかしがりやで、俺と会うのが嫌だと聞いていたけど。

「う、うふ、うふふふ……君とは、仲良くなれそう……」

「そ、そそそ、そうかい？」

若干引きつつ、俺は愛想笑いを浮かべた。

「……あ、そう、だ」

宗太郎は背負っていたリュックを降ろし、その奥からごそごそと何かを取り出した。

「はい、これ……」

手渡されたものを反射的に受け取ってしまう。

見てみると、青々とした新鮮なキュウリだった。

宗太郎の顔を見ると、何かを期待するように、俺の顔を見つめている。

これはもしかして、食えと言う事なのかな。

上目づかいに宗太郎の顔を見ながら、俺はキュウリの端っこを齧った。

「……美味しい？」

「う、うん。美味しいよ」

咀嚼しながら応えようと、宗太郎は、にへらあつと相好を崩し、うふうふと笑った。

うん、まあ、確かに瑞々しくて美味しいキュウリだ。

喉が渴いていたし、丁度良かったかな。

「あーっ！ いたいた！ こんなところまで流されて！」

聞き覚えのある声に空を見上げると、そこにはにとりさんの姿があった。

「にとりさん！」

「よっと！ こんにちは、柵くん」

俺達の近くに着地したにとりさんは、笑顔で俺に挨拶した後、宗太郎の頭をぺちりと叩いた。

「宗太郎！ 流れの早いほうに行っちゃ駄目だって言ったでしょ？」
「う……ご、ごめん、なさい……」

にとりさんに叱られた宗太郎は、しゅんとなって俯いた。
やっぱりこいつ、流されて来たんだな。

「ごめんね、柵くん。うちの子が迷惑かけなかった？」

「う、ううん。そんな事無いよ」

「そう？ それなら良いんだけど……」

まあ、驚きはしたけどね。

「宗太郎が柵くんと一緒に居たから驚いたよ。もう、自己紹介は済んだの？」

「う、うん。済んだ、よ……」

にとりさんが尋ねると、宗太郎はうふうふと笑いながら言った。

「僕達……し、親友になったよ」

「し、親友!？」

友達ならまだしも、それを飛び越えて親友!？

「そうなんだ。よかったね、宗太郎」

「う、う、うん……うふ、うふふふ……」

いやいやいや、にとりさん。

そこは突っ込もうよ。

むしろ、突っ込んでくださいよ。

「柵くん。こんな子だけど、これから仲良くしてあげてね」

「よ、よろしく、ね。柵。うふふ」

「え！？ えーと、は、はい……」

にとりさんの笑顔と、妙なプレッシャーを感じる宗太郎の笑みに反論できず、俺は曖昧に頷いた。

「さ、帰るよ、宗太郎。みんなが心配してるんだから」

「う、うん……またね、柵……」

「ごめんね、柵くん。また今度、この子と遊んであげてね」

「え、あ、はい」

手を振って飛び立っていくにとりさんと宗太郎。

そんな二人に、俺も手を振り返した。

宗太郎が、やたらと名残惜しそうにしていたけど、気に入られてしまったのかな。

歳の近い友人が欲しいとは思っていたけど、なんというか、色々予想外だ。

「はあ……帰るか……」

食べかけのキュウリを齧りつつ、俺は家に帰る事にした。

「ただいま」

「おかえりなさい、
棚。お父さんにお弁当を届けてくれた？」

「……………あ」

妖怪の山編 12

ふと気がつくと、自分の名前が思い出せなかった。

自分がどんな顔をしていたのかも分からなくなっていた。

まあ、それについては、10年も自分の顔を見ていなければ、記憶があやふやになってしまふのは仕方が無い。

大して出来の良いツラでも無かったし。

しかし、家族は？ 両親は健在だったか？ 兄弟はいたのか？

友人は？ 恋人はいたのか？

そう簡単に忘れてたりしないはずの事が、ことごとく、自分の記憶から抜け落ちていた。

本当に唐突だった。

少し前までは、当たり前のように覚えていたはずなのに。

人間だった頃の俺が、どんな奴だったのか、全く思い出せなくなっているのだ。

覚えているのは、俺が死んだ時の、日本や諸外国の政治経済や社会情勢など。

といっても、専門的なものではなく、あくまで一般常識レベル、時事ネタ程度のものだ。

あとは、その頃の日本の風俗や自分がやっていた仕事や、昔好きだったアニメやゲームの事など。

だけど、それは、知識であって、記憶ではないはずだ。

極端な話、人間だった頃の記憶や知識なんて、覚えていなくても、今の生活には何の支障も無い。

しかし。

自分が自分で無くなっていくような、得体の知れない恐怖と違和感はある。

ぽっかりと抜け落ちた箇所、本来の自分では無い何かが埋め込まれ、自分自身の存在が改竄されていくような感覚だ。

ふと、親父の持っている幻想郷縁起が頭に浮かんだ。

その著者である稗田家の当主は、転生を行う事により、何代にも渡って幻想郷の記録を残し続けていると、自らの著書に記述していた。

転生には、寿命を終える何年も前から特別な準備が必要であり、記憶を持って転生する代償として、一代の寿命が普通の人間に比べ極端に短い。

更に、死んだ後、次の身体の準備が出来るまでの間、閻魔様の小間使いとしてコキ使われる羽目になるのだという。

そこまで七面倒な手間暇を掛けて、初めて記憶を持ったまま転生が出来るとの事なのだ。

俺は本当に、転生とやらをして、人間から白狼天狗に生まれ変わったのだろうか。

今では、それも疑わしい様な気がする。

俺はいったい何者で、これからどうなって……

「柵ー。柵ちゃんが来たわよー」

「はーい！」

……まあ、いいや。

そういう面倒なことは、今度暇な時にでも考えよう。

俺は元気よく返事を返すと、尻尾を振りながら庭に飛び出して行った。

「ふふ……柵も、ようやく自分の気持ちに素直になって来たわね」

櫛が櫛に連れられて外出した後、楓は一人ごちた。

雲ひとつない青空の中、小さくなっていく二人の姿を見送りつつ、ここ最近の櫛の変化を思い返してみる。

近頃の櫛は、櫛が遊びに来た時、嬉しくて尻尾を振ってしまう事を気にしなくなったのだ。

少し前までは、その事を恥ずかしかって尻尾を抑え込んだり、尻尾を振らないように無駄な努力をしていたようだが、ようやく受け入れるようになったのだ。

白狼天狗が尻尾を振ってしまう状況は、大きく分けて二つある。

一つは、本人にとって、どうしようもないくらい嬉しかったり楽しかったりした時。

もう一つは、心の底から好意を寄せている相手と会った時だ。

楓が見る限り、櫛が尻尾を振る相手は櫛だけだ。

文やにとり、少し前に友人になった宗太郎という少年と会う時は、多少尻尾が揺れていたりはするが、櫛と会う時のように、千切れんばかりに振られてはいない。

迷子になって、櫛に救助されたという経験が、櫛を素直にさせたのではないかと楓は考えていた。

楓は、オスがメスに尻尾を振る行為を、恥ずべき事だとは思っていない。

むしろ、それはメスに対する絶対的な親愛と忠誠を示すものであり、誇らしいものだとする考えにいる。

自分の夫、楠がそうであるように。

あとは、それが恋愛感情に発展し、ゆくゆくは、お互いがお互い無しでは居られない、共存関係になれば言う事は無い。

自分と、楠の関係のように。

「今のうちから、色々と根回ししなくちゃね……ふふふふ」

嬉しそうに呟く楓の尻尾は、千切れんばかりに振られていた。

「!？」

突然、背筋を駆け登った強烈な悪寒に、私はビクリと身体を震わせた。

得体の知れない不快感に、身体中の産毛が総毛立つ。見ると、隣を飛んでいる柵も、同じように小さく身体を震わせていた。

怯えるように耳をペタンと伏せ、自分の身体を抱き締めるようにして身を竦ませていた。

尻尾が逆立ち、大きく横に広がっているのは、理性ではどうにもできない、本能的な恐怖を感じている証拠だ。

自分の尻尾を確認してみると、同じように広がっていた。もしかしたら、いつぞやの隙間妖怪が、何か良からぬちよっかいでも仕掛けて来たのだろうか。

不安そうな上目遣いで見上げる柵と目が合った。

「さ、最近、涼しくなってきたせいかな、肌寒く感じる時があるみたいねっ」

不安を払拭するように、私は努めて明るい声で言った。

「季節の変わり目だし、風邪をひかないように気を付けるのよ?」
「う、うん。柵さんもね」

ややぎこちなくではあるが、柵は私に笑みを返した。
……まあいい。

良く分からないものに時間を費やしている暇は無い。
そうでなくとも、柵と過ごせる時間は限られているのだ。

「柵も随分上手に飛べるようになったわね」

「そうでしょ？　だから、もう一人で飛んでも……」

「それは駄目」

「ちえー」

そんな会話を交わしつつ、私と柵は、村の中にある小高い丘まで飛んで来た。

少し前まで、柵が空を飛ぶ練習をしていた場所でもある。

「柵さん。ここで何をするの？」

丘に降り立ったところで、柵は小首を傾げ私に尋ねた。

私は微笑み、やや腰を落として柵と視線を合わせた。

「前にも話したと思うけど、あなたは大人になったら、私と同じ哨戒天狗になるの」

「うん」

「そのために、これから霊弾の撃ち方を覚える必要があるわ」

れいだん？　と繰り返し、柵は軽く首を傾げた。

「そう。こういうのよ」

私は立ち上がり、5間（約9メートル）ほど離れた場所にあった、

漬物石ぐらいの大きさの石に手を向けた。

掌に軽く靈力を込め、その石に向けて靈弾を撃ち出す。

掌から飛び出した白い靈弾は、狙い変わらず、石を弾き飛ばした。

「すごい！」

柵が歓声をあげ、盛んに拍手をした。

この程度の事は天狗なら誰でも出来る事なので、柵の無邪気な称賛がちよっとくすぐったい。

そう思う反面、多少嬉しくはあるが。

「今の弾って、前に俺が迷子になった時、クマから助けてくれた時のやつ……？」

「そうよ。あんなふうに沢山の靈弾を、隙間なく張り巡らせる事を弾幕というの」

「はあ、弾幕かあ」

柵は感心したように何度も頷いた。

「さあ、やってみなさい……あそこの石を狙ってみて」

「ど、どうやるの？」

私は戸惑う柵の手を取り、的に向かって真っ直ぐに掌を向けさせた。

「しっかりと的を見据えて。足を肩幅ぐらいに開いて、背筋を伸ばして……」

私に言われるままに、柵は神妙な面持ちで素直に従った。

「掌に自分の力が集まって行くのをイメージするのよ。そして、それを放つの」

柵は、軽く目を瞑って集中し始めた。

伸ばした柵の掌に、霊力が集中していくのが分かった。

「やっ！」

柵は大きく目を開き、気合いと共に霊力を解放した。

ぽん、というちよつと間の抜けた音と共に、柵の掌から小さな白い霊弾が現れた。

霊弾は、現れると同時に柵の足元に落下し、申し訳なさそうに地面を転がった後、地面に染み込むように消えていった。

「は、初めてにしては上出来よ、柵！」

何とも言えない微妙な雰囲気吹き飛ばすように、わざとらしいぐらいに明るい声で言った。

「そ、そうなの……？」

「ええ！ さあ、もう一度やってみて！」

やや不審そうな顔をしながらも、柵は素直に従った。

気を取り直すようにして、的にした石に向け、背筋を伸ばし掌を向けた。

——数時間後。

あれからずっと霊弾を撃つ練習を続けたが、結果は最初と全く変わらなかった。

始めの数回ぐらひは、柵も熱心に練習を繰り返していたが、全く結果が伴わないとなるや、次第にやる気を失っていき、しまいには私に背を向け、いじけるように膝を抱えて地べたに座り込み、地面に「の」の字を書き始めたのだ。

こんな所は楠おじさんにそっくりだ。

やっぱり親子なんだなあ、と妙なところで感心してしまった。

こういう所は、あまり似て欲しくないのだけれど。

「だ、大丈夫よ、柵！ 最初は誰でもこんなものよ。諦めずに練習を続けていれば……」

「……」

柵は俯いたまま顔を上げない。

空を飛ぶ事が思いのほか上手いきすぎたせいか、その反動も大きかったのかもしれない。

ふと、ある事が閃いた。

……そうだ。

柵は空を飛ぶ事が何より大好きだ。

それならば。

「ねえ、柵」

私は、柵の背中に優しく声を掛けた。

「霊弾を撃てるようになれば、自由に空を飛ぶ許可が貰えるかもしれないわよ？」

落ち込んだようにべったりと伏せられていた櫛の耳が、勢いよくピンと立った。

「……村の外に出ても怒られないかもしれないわね。何しろ、自分で自分の身を守るようになるわけだし」

今度は尻尾がピンと立った。

次いで、勢いよく立ち上がり、やる気と決意に満ちた表情で、私の方を振り返った。

「頑張るよ、櫛さん！」

思ったとおりだった。

櫛は好奇心が旺盛な分、興味が無いものに関しては全く関心を持たない。

今回の霊弾の練習にしても、将来、哨戒天狗になったら必要だから、という認識程度でしかなかったのだろう。

大好きな空を飛ぶという事と絡めてやったらどうかと思って試してみたなら、予想以上に上手くいった。

練習を再開してみると、さっきまでとは打って変わった、著しい上達ぶりを見せていた。

弾速はかなりゆっくりで、きちんと意識を集中しなければ的に当てる事も出来ないが、そこまで出来れば上等なものだ。

「今日はこのぐらいにしましょうか」

「ま、まだ、大丈夫！」

私は思わず口元を綻ばせた。

空を飛ぶ練習をしている時も、こんな感じで、疲れてフラフラになるまで練習を止めようとしなかったのだ。

「聞き分けなさい。もう日が落ちて来たし、私も屯所に戻らないとならないわ」

「そっかー……」

項垂れる櫓の頭を、私はくしゃくしゃと掻き回した。

「大丈夫。櫓なら、すぐに上達するわ」

「うーん……だと良いんだけど」

そんな感じで、霊弾を撃つ練習初日は終了したが、その日以来、私が訪れるたびに、霊弾の練習をせがまれるようになったのは言うまでも無い。

妖怪の山編13

九天の滝の裏には、私達哨戒天狗の詰め所のひとつがある。

普段の生活や鍛錬を行う屯所とは違い、持ち回りで警戒待機に就く者が詰める待機所のようなものだ。

妖怪の山への侵入者が現れた場合、ここに詰める者が真っ先に現場に急行する事になる。

詰所には二人一組で詰める事になっており、その日は、私も一人の同僚が警戒待機の任に就いていた。

しかし、この警戒待機という任務は、はっきり言って暇だ。

重要な任務だという事は理解しているが、そもそも、妖怪の山に無断で立ち入るような輩は殆どいないからだ。

稀に、人里の人間が道に迷って入り込むが、私達が駆け付ける前に獣や妖怪の餌食になる事の方が多い。

そのため、いかに暇を潰すかが重要になってくるわけで、そのとき私は、同僚と将棋を指していたところだった。

同僚の似内にあない梓あずさは、訓練生時代からの同期で、階級は私と同じ三等狼曹。隊の中では、最も仲の良い友人だ。

「……」

彼女は、思案顔で将棋盤を睨みつけ、しばし黙考した後、おもむろに駒を動かす。

……ばちん。

「……」

対する私も、一寸の逡巡と思考の後、駒を動かす。

……ぱちん。

暫くの間、そうやって、交互に駒を動かし続けていた。

「樫さあ」

不意に梓が口を開いた。

私は将棋盤から顔を上げる。

「最近、付き合い悪いよね」

「……そう?」

私は首を傾げ、梓の顔を見つめた。

「そうだよ。宴会にも顔を出さないしさ」

「……そう?」

「そうだよ」

梓のぱっちりとした大きな目が私を見つめている。

二つ結いになっている髪が兎の耳のようにぴよこんと揺れた。同性の私から見ても可愛らしい。

言われてみれば、確かにここ最近、同僚達と一緒に酒を飲んだ記憶がない。

私自身、天狗のご多分に漏れず酒は大好きで、今までは非番の前日などには、宴会に参加して夜通し飲み明かした事もあった。

「従弟くんが生まれた辺りからじゃないかなあ?」

「……そう?」

「そうだよ」

それきり会話が途切れ、私と梓は無言で互いの駒を進めた。
耳に入るのは、滝の音と互いに駒を動かす音だけになる。

「梶さあ」

暫くすると、また梓が口を開いた。

私は将棋盤から顔を上げる。

「従弟くんが大事なのは分かるけど、私達との付き合いが疎かにな
ってるよ？」

「……そう？」

「そうだよ」

言われてみれば、確かにそうかもしれない。

非番の日は櫛の所に遊びに行く関係で、どうしても前日は早めに
休む必要がある。

酒など飲んで酔い潰れるわけにはいかないからだ。

そうでなくても、最近、櫛に新しい友人が出来た。

宗太郎という名前の、にとりの里の河童の子供で、河原で櫛と遊
んでいるところを度々見掛けることがある。

にとりは、櫛には同性の歳の近い友人が必要だと言っていたが……

そ、その……

ま、万が一、櫛が、しゅ、衆道にでも目覚めてしまったらしたら、
どう責任を取ってくれるのか。

そんな心配もあり、櫛から目を離すわけにはいかないのだ。

「……私は、櫛に立派な白狼天狗になって欲しいだけなの」
「ふうん……」

……ばちん。

「従弟くん、歳幾つだっけ？」

「10歳よ」

「10歳かあ。じゃあ、あと2年だね」

「……そうね」

梓の言う「あと2年」とは、櫛の元服まであと2年という意味だ。白狼天狗のオスは、12歳で元服すると同時に、哨戒天狗の養成所に入所し、3年間の厳しい訓練に明け暮れる事になる。

訓練課程を無事修了すれば、晴れて哨戒天狗として任官し、隊に配属されることとなる。

メスの場合は志願制なので、本人が哨戒天狗になる事を希望しなければ、必ずしもその必要はないが、オスである櫛は、哨戒天狗になる事が義務付けられている。

身体や精神に深刻な障害でも無い限り、本人がどれだけ嫌がっても、拒否する事は出来ないのだ。

「ねえ、櫛。従弟くんを、隊の屯所に連れて来てみない？」

意外な一言に思わず顔を上げると、梓は将棋盤越しにぐっと私に顔を寄せてきた。

驚いて、思わず仰け反ってしまう。

いったい梓は何を言っているのだろうか。

櫛を連れて来いだなんて。

「元服が近いんだしさ、哨戒天狗がどんな仕事なのか、従弟くんに教えてあげる意味も含めてさ」

「駄目よ！」

「なんでー？」

「そ、それは……」

反射的に否定してしまったものの、特に理由があるわけでは無いので、すぐに言葉に詰まってしまう。

「そ、そう！ 柵は人見知りが激しいから！」

誤魔化すように目を反らし、そんな言い訳をしてしまった。

……なんだか、前にも同じような事があった気がする。

「えー、射命丸様はそんなこと言ってなかったけどなあ？ 好奇心旺盛で、人懐っこい子だって言ってたけど……？」

文さん……余計な事を。

「た、隊長が許可するわけじゃない！」

「大丈夫でしょ？ 遊びに来るわけじゃないんだし」

確かに、将来の為の見学という名目で申請すれば、問題なく許可は下りるだろう。

実際、私が柵ぐらいの歳の頃、見学で隊の屯所を訪れた事があった。

「柵はきっと嫌がると思う……」

嘘だ。

梓の言うとおり、柵は好奇心旺盛な子だ。

哨戒天狗の仕事が見学できると聞けば、柵は嫌がるどころか、大喜びするだろう。

何しろ、私自身が常日頃から、御山の治安維持を一手に担う哨戒

天狗が、どれほど素晴らしい仕事であるか、何度も繰り返し聞かせていることもあって、哨戒天狗の仕事に強い興味を示しているのだ。

「嫌かどうか、本人に聞いてみないと分からないじゃない」

「それはそうだけど……」

私が口籠ると、梓は不審そうに眉根を寄せた。

「なんで、そんなに渋るの？ 将来の婿が、自分以外のメスに目移りしたら困るから？」

「……違うわよ」

またその話か。

最近、ようやく下火になって来たと思っていたのに。

「なら、別に良いでしょ？ 従弟くんに立派になってほしいのなら、将来自分が就く事になる仕事を理解させる事も重要だと思うよ」

悔しいが正論ではある。

どうにも釈然としない気持ちでいっぱいだったが、断るに足る明確な理由があるわけでもない。

私は溜息交じりに承諾した。

「……分かったわよ。隊長に申請してみるわ……それはそれとして、梓」

「なに？」

ぱちん！

「王手。詰みよ」

「んあっ！」

将棋盤を覗きこみ、梓は頓狂な声を上げた。

「ま、待った！ 今の一手待った！」

「駄目」

「そ、そこを何とか！」

「駄目ったら駄目。これで、私の15連勝ね」

「ううー！」

頭を抱え悶える梓の姿に、ちよつとだけ溜飲が下がった。

「……器用なもんだなあ」

「うふ、うふふふ……そう、でしょう？」

俺が感嘆したように呟くと、宗太郎はうふうふと得意げに笑った。
ある意味衝撃的だったあの出会いの後、宗太郎とはそれなりに仲
良く付き合っている。

やはり同性の友人と言うのは、何の気兼ねもしなくて済むので楽
だ。

宗太郎が俺の村に来る時は、河童らしく河を下って来る事が多い。
そのため、俺達は河原の周辺で遊ぶ事が殆どだ。

宗太郎の目の前には、デフォルメされた龍の石像がある。

河原に落ちていた漬物石ぐらいの石を素材に、宗太郎がたった一

本の彫刻刀で作り上げたものだ。

それも、一時間足らずの短時間で。

彫刻に関してド素人の俺でも、それが尋常な技では無いことぐらい理解できる。

簡略化されているとはいえ、立派な角や長い髭など、神話上の龍の特徴が上手く表現されており、十分売り物として通用するクオリティだった。

外の世界の観光地に良くある、チープな出来で値段だけは高いやつとは雲泥の差だ。

「か、河童は、手先が器用だから……」

宗太郎は、照れ臭そうに言った。

技術者としての器用さと、創作物を作る上での器用さは別物だと思っただけど、河童はその両方に秀でているんだろうか。

それとも、宗太郎が特別なのか。

「こ、これ、櫛にあげる……」

宗太郎は、はにかむような笑みを浮かべながら、完成したばかりの龍神像を俺に差し出した。

「え。良いの？」

「うん……そ、そのために、作っ、た……」

「そ、そうなんだ」

受け取った龍神像を改めて観察してみると、目に当たる部分だけ、石が嵌め込まれたようになっていた。

「そ、その部分の色が変わって、あ、明日の、天気が、分かる……」

「へえ」

「的中率は、6割……ぐら、い？」

正直、微妙な数値だったが、付加価値として考えれば十分だろう。

「ありがとう。大切にするよ」

「く、柵は、僕の親友だから、ね……うふ、うふ」

親友かどうかはともかくとして、友人と呼べるのは確かに宗太郎だけだ。

柵さん達は、友達というのとはちょっと違う。

「ねえ、宗太郎。同じぐらいの年齢の子供を集めて、勉強を教えたり一緒に遊ばせたりするようなところは無いのかな？」

要するに、学校に準ずる施設が無いかどうかだなんだが。

「ひ、人里には、寺小屋っていうのが、あるみたい……」

「寺小屋か……」

しかも、人里か。

人里がどこにあるのか分からないし、それ以前に、妖怪が人間の子供に交じって一緒にお勉強ってわけにはいかないだろうな。

「で、でも、柵の場合は……」

「うん？」

「12歳になって元服したら、哨戒天狗の収容……コホン……訓練所、に入る……から」

しゅ、収容所！？ 今、収容所って言おうとした！？

詳しく聞いてみると、宗太郎が言うには、オスの白狼天狗は必ず
哨戒天狗にならないければならず、12歳になると、生まれた村を離
れ、そこで3年間の厳しい訓練があるのだという。

しかし、収容所って……やっぱり、あれかな。

某海兵隊映画みたいなタフガイ気取りとアホ勇者用の訓練所で、
「口で空想垂れる前と後にサーと言え！」とか「お前を見ると嫌に
なる！ 現代美術の醜さだ！」とか罵倒されたり扱かれたりするん
だろうか。

………ちょっと楽しそう。

「く、櫛……」

馬鹿な事を考えていると、宗太郎が神妙な面持ちで俺の両手を握
ってきた。

ガシツという感じじゃなく、なんか、こう、まるで恋人にでもす
るようにやんわりと。

「く、訓練、辛いかもしれないけど、が、頑張って……」

「んえ！？」 あ、ああ、うん。あ、ありがと……」

………なんか、宗太郎ってたまに、こう、なんだろう。

いや、いやいやいや。

きつと、気のせいだ。そうに違いない、うん。

「ま、まあ。まだ2年も先の事だろ？ 気が早いよ」

「う、うん。そう、だね……」

もっとも、俺達妖怪からしたら、2年なんてあっという間かもしれ
ないけど。

そうこうしているうちに、あたりが薄暗くなってきた。

日没が近い。

「そ、それじゃ、今日は帰る、ね……」
「うん。また今度」

宗太郎はザバザバと河に入って行き、何度もこちらを振り返りながら、上流に向けて泳いでいった。

さすが河童なだけあって、河の流れなんてものもしない達者な泳ぎぶりだ。

でも、最初に会った時は流されて来たんだよな、あいつ。
いつまでも、ここに一人で居ても仕方が無いので、俺も帰る事にした。

宗太郎にもらった龍神像を抱え、自分の家に向けて歩き始めた。
その道すがら、自分が将来就く事になる、哨戒天狗について考えてみた。

樫さんは、俺の所に遊びに来るたびに、哨戒天狗の仕事の重要さと素晴らしさを力説してくれる。

そのせいか、俺自身、哨戒天狗の仕事に興味が湧いていた。
具体的にどういう事をやっているのか、訓練や実任務を見学させてもらえないだろうか。

自衛隊や在日米軍みたいに、基地祭みたいなイベントは無いんだろうか。

自衛隊の場合だと、事前に申請すれば、基地の見学をさせてもらえる所もあったよなあ。

こっちはどうなんだろうか。

今度、樫さんが来たら、聞いてみよう。

キャラ設定と言う名の話数稼ぎ+言い訳とか

言い訳+13話終了時点でのキャラ設定

＊読まなくても何ら問題はありません。チラシの裏レベルの内容です。

いまさらですが、このSSはかなりアレです。

プロットを起こす前に、椛との濡れ場を文章にしたというところからして救いようが無いぐらいアレです。

今後、そのアレさ具合に磨きがかかると思いますので、よろしくお願いします。

引き返すのなら今の内です。

言い訳終了。

あくまで、13話終了時点でのキャラ設定なので、話数が進むにつれ変わる可能性があります。

しかも、殴り書きレベルです。

東方Project公式の設定と大きく異なる部分があります。

というか、意図的に無視している部分が多々あります。

また、書籍関連は求聞史紀・文花帖以外の小説や漫画の設定は完全に無視しています。

そのため、綿月姉妹や量産型レイセンなどは登場しません。

霖之助・三月精は、求聞史紀や文花帖で言及されている程度には登場させるかもしれませんが。

ちなみに、オリキャラの名字は、JRの某ローカル線の駅名から拝借しています。

上有住 櫛（かみありす くぬぎ）

種族…天狗—（白狼天狗）

性別…オス

能力…なし

年齢…10歳—（13話終了時点）

主人公。

外の世界で不慮の事故により死亡し、それまでの記憶を持ったまま白狼天狗に転生（？）した、しがないサラリーマンの三十路リーチ男。

過保護な両親や従姉に囲まれ、それなりに充実した妖怪ライフを送っている。

周囲からは無邪気で好奇心旺盛ながら、大人の言う事を良く聞く子と見られているが、中の人は外の世界の手垢の付きまくった大人の男なので、子供である事を最大限に利用したりと時々腹黒い。

しかし、幻想郷についての知識が希薄なためか、考えなしの行動で周囲を騒動に巻き込む事があったりと、外の世界でそれなりの年齢だった割には、ガキっぽいところもある。

おっぱい星人。

犬走 椛（いぬばしり もみじ）

種族…天狗一（白狼天狗）

性別…メス

能力…千里先まで見通す程度有能力

椛の従姉。

御山（妖怪の山）の警備に当たる哨戒天狗で、階級は三等狼曹（自衛隊で言うところの三曹、諸外国の軍隊で言うところの伍長）

自分の任務に忠実で、強い誇りと使命感を持っている。

良くも悪くも真っすぐな性格で、あまり融通が利かず冗談が通じない。

そのため、上司であり友人でもある射命丸 文から弄られる事が多い。

裏表のない言動からか、隊の同僚達からはオスメス問わず人気があり、オスの中には彼女に懸想している者も少なくない。

従弟の椛を立派な白狼天狗にするため、非番を利用して面倒を見ている。

隠れSで、酒に酔うとその片鱗を覗かせる事がある。

所属する隊の中ではTOP5に入るぐらいの実力者で、弾幕戦よりもCQCのほうが得意。

顔立ちは少し吊り目気味で太眉。

華奢な見た目に反して意外とある。

ちなみに、椛の服装は、上着は山伏の様な法衣で、二次絵によくある、霊夢の様な腋丸出しでは無い。

袴は、これまたよく二次絵などで見掛けるパンチラ上等なミニスカではなく、剣道の袴のような、ズボンタイプのもので、他の哨戒天狗も基本的にそれに準じている。

回し蹴りとか飛び蹴りとか、激しい運動の多い日も安心。

上有住 楓（かみありす かえで）

種族…天狗一（白狼天狗）

性別…メス

能力…千里先の音を聞き取る程度の能力

櫛の母親で椀の叔母。

どんな時でも、見る者に安心感を与える柔らかな笑みを絶やさず、よほどの事が無ければ取り乱すような事が無い。

物腰柔らかく言動も極めてまともだが、恋愛観に関しては「良いオスは巡り合うものではなく、自らの手で育てるもの」という独特の価値観を持っており、それが唯一の真理であると信じて疑わない所がある。

現に、150近く年下の楠を、生まれて間もない乳飲み子の頃から自分好みに調教し、頃合いを見計らって結婚している。

椀の事は実の娘のように気に掛けており、将来は息子である櫛の嫁にと、陰に日向に暗躍している。

上有住 楠（かみありす くすのき）

種族…天狗（白狼天狗）

性別…オス

能力…千里先に声を届ける程度の能力

柵の父親で、元哨戒天狗。

息子に嫉妬する程に妻が大好きで、楓が絡むと息子にアレ呼ばわりされるくらいに駄目な人になってしまう。

物心つく以前から楓に調教されてきたせいか、楓に対しては完全なイエスマンで、言動に疑いを持つという事が皆無。

普段は野良仕事をしているが意外に博識で、幻想郷縁起を始め蔵書も多い。

楓が絡まなければそれなりにまともで、柵が迷子になった時、村の住民の多くが搜索を手伝ってくれた事から、それなりに人望もある。

射命丸 文（しゃめいまる あや）

種族…天狗（鴉天狗）

性別…女

能力…風を操る程度の能力

柵の上司の鴉天狗の少女。

見た目は柵より少し年上ぐらいだが、1000年は生きている大妖怪。

「文々。新聞」という新聞を発行しており、常に万年筆とカメラと文花帖を携帯している。

他の鴉天狗と新聞の発行部数で競い合っており、特ダネ探しに余念が無い。

誰に対しても慇懃な口調を崩さないが、椀やにとりといった個人的に友誼を結んでいる相手には、砕けた口調になる。

普段は椀をからかい、その反応を見て楽しんでいるが、極稀に逆襲される事もある。

椀が産まれた頃、椀の子育て日記を記事として掲載し、売り上げ部数がかなり上がったらしい。

河城にとり（かわしろにとり）

種族…河童

性別…女

能力…水を操る程度の能力

椀の将棋仲間でもある河童の少女。

割と常識人だが、掴み所の無いところもあり、文と一緒にあって椀をからかう事もある。

河童は妖怪の山における技術者集団で、彼女も例外ではなく、発明や未知の技術に触れる事が大好きで、現在のところは光学迷彩スーツの開発に力を注いでいる。

哨戒天狗の装備や設備にも、にとり達河童の考案した技術が生かされており、メンテナンスも河童達が行っている。

そのため、白狼天狗と個人的な付き合いのある河童も多い。

八雲 紫（やくも ゆかり）

種族…妖怪

性別…女

能力…境界を操る程度の能力

幻想郷の管理人さん。

永遠の17歳。

色々と黒幕。

八雲 藍（やくも らん）

種族…妖獣（式神…九尾の狐）

性別…女

能力…式神を操る程度の能力

紫の式。

色々と苦勞性。

綾織 桔梗（あやおり ききょう）

種族…天狗（白狼天狗）

性別…メス

能力…不明

楓の幼馴染で、柵が産まれる時には産婆を務めた。

村の顔役でもあり、住民達からの相談を受ける事も多い。

ちなみに独身。

引く手数多らしいが、彼女自身は恋愛や結婚に一切興味が無いらしい。

楓の楠育成計画を間近で見ていたせいもあるかもしれない。

青笹 宗太郎（あおざさ そうたろう）

種族…河童

性別…男

能力…不明

にとりの里の子供で、柵より4歳年上。

口下手で人見知りが激しく、他人との会話もどもりがち。

柵を一方的に親友視している。

似内 梓（にたない あずさ）

種族…天狗（白狼天狗）

性別…メス

能力…不明

椀の同僚の哨戒天狗。

訓練生時代からの同期のため、隊の中では椀と最も仲が良い。
将棋を指す事がよくあるが、一方的に負け続けているらしい。

大橋（おおはし）

種族…天狗（白狼天狗）

性別…オス

能力…不明

椀と同じ隊に所属する哨戒天狗。

椀に気があるらしいが、当の椀からは嫌われている。

一言多く空気の読めない性格で、椀曰くガサツで無思慮な奴。

今のところMOB。

再登場の予定無し。

妖怪の山編 14

「……という事があったのさ、まる、と」

ちゃぶだい
卓袱台の上に鉛筆を置き、俺は頭の上で手を組むと、うーんと伸びをした。

最近、四畳半という狭さながらも個室を与えられ、プライベートな空間を得たついでに日記を書き始めていた。

母さんに筆記用具が欲しいとお願いしたところ、紐でノートのように束ねた紙と何本かの鉛筆を貰った。

鉛筆がある事がちよつと意外だったが、よくよく考えてみると、鉛筆が日本に入ってきたのは江戸時代初期の頃だし、殆ど普及はしていなかったが、明治時代には市販もされていた。

以前、紫さんに聞いたところによると、幻想郷が外の世界と隔離されたのは、明治時代初期頃とのことだったので、幻想郷に鉛筆があっても不思議ではない。

河童が量産しているらしく、人里ではどうか知らないが、妖怪の山ではそれなりに普及しているみたいだ。

「書いたら、お母さんにも見せてね」

俺に鉛筆と紙を渡しながら、母さんはそんな事を言った。

日記なんて、人に見せるもんじゃないでしょ、とあきれ顔で言ったところ、途端に傷つけられたような表情になって項垂れてしまった。

「そんな……櫛が私に隠し事をするなんて……お父さんは、毎日書き上がるたびに、喜んで私に見せてくれたのに……」

……幼少時の教育って、ほんと怖いな。

「でも、柊ちゃんにはちゃんと見せなきゃ駄目よ？」

「なんでさ」

「夫婦の間で隠し事はいけないわ」

「意味が分かりません」

数日前のそんなやり取りを思い返し、軽い頭痛を覚え眉間を揉み解した。

母さんの脳内では、俺と柊さんは既にそういう事になっているらしい。

柊さんに、自分と同じ道を歩ませたいらしいんだが、なんだかなあ。

普段の俺に接する態度から見ると、多少独占欲が強い気がしないでもないが、柊さんは俺の事を可愛い弟程度にしか思っていない。もっとも、10歳の子供相手に、母さんが期待するような感情を抱く方がどうかしているわけだが。

俺の方はどうなのかというと、正直よく分からない。

無意識のうちに尻尾を振ってしまうくらいだから、好意を抱いている事には間違いないだろう。

それが恋愛感情なのかどうかは別問題としてだ。

「……柊？ まだ、起きてるの？」

その声に振り返ると、僅かに開いた襖の隙間から、母さんが顔を覗かせていた。

「もう遅いから、早く寝なさい。明日は柊ちゃんが遊びに来るんだし」

「うん。もうすぐ寝るよ。おやすみなさい」

母さんのおやすみなさいの声と共に、襖が閉じられる。

あまり眠くは無いけど、もうすぐ深夜の零時。

子供が起きているには遅い時間だ。

布団に入ろうとして、ふと、卓袱台の端に置いてある冊子が目に入った。

それは、日記を書く参考にしなさいと、筆記用具とともに母さんから手渡された、親父が昔書いた日記だった。

色々と突っ込みたいところではあったけど、母さんの言動をいちいち気にしていたらキリが無いので、その時は何も言わず、大人しく親父の日記を受け取った。

それきり目を通していなかったが、せっかくなので寝る前に、当時の親父が書いた日記がどんなものなのか読んでみる事にした。

そのうちの一冊を手に取り、布団に入った。

母さんが言うには、親父が今の俺ぐらいの年齢の時に書いたものらしい。

鉛筆ではなく毛筆で書かれたものだった。

表紙をめくってみると、意外と達筆な字で書かれており、ちょっと驚いてしまった。

だけど、行書体で書かれているせいか、少し読みにくい。

『○月×日 今日には楓お姉ちゃんとお飯事をした。将来の予行練習と言っていた。意味が分からなかったけど楽しかった……』

楓お姉ちゃん、ねえ。

親父はガキの頃、母さんの事をそう呼んでいたのか。

更にページをめくり、読み進めてみる。

『●月◆日 今日は楓お姉ちゃんがお菓子を作ってくれた……』

『△月□日 今日は楓お姉ちゃんと一緒にお風呂に入った……』

『■月？日　今日は楓お姉ちゃんと一緒にお昼寝をした……』

……眩暈がしてきた。

母さんの事しか書いてない。

本当に日記なのか、これ。

「これはまた、随分と濃い内容ねえ……本当に日記なのかしら」

まるで、俺の心中を代弁するかのように、隣から声がした。

頬を擦る吐息と、身体の左側に感じる柔らかいふくよかな感触。

視界の端にちらつく流れるような金髪。

驚いてそちらを振り向くと、目と鼻の先には、一度見たら忘れられない端正な金髪美女の顔があった。

その金髪美女は、俺に寄り添うように寝そべり、これまた、一度見たら忘れられない胡散臭い笑みを浮かべていた。

思わず声を上げそうになった俺の口を、金髪美女――八雲　紫さんの手がやんわりと塞いだ。

「大声を出したら、ご両親に気付かれるでしょう」

目で騒がないから離してくれと訴えると、紫さんは俺の口を塞いでいる手をゆっくりと離れた。

「ゆ、紫さん。随分と久しぶりだね」

布団から身体を起こし、さり気なく距離を置きながら尋ねた。

「そうね。お久しぶり。元気でやってるかしら？」

「……まあ、それなりに」

「それは重畳ですわ」

紫さんは扇子で口元を隠し目を細めた。

初めて出会った時もそうだったけど、なんでこの人は、何の前触れも無く唐突に現れるんだろうか。

「ところで、何か用なの？」

「様子を見に来ただけよ。特に変わりは無いかしら？」

「うん。特には……」

変わらない、と喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「どうしたの？ 何かあるのかしら？」

紫さんが微笑みながら小首を傾げた。

「ねえ、紫さん……」

良い機会だったので、俺は紫さんに、最近の自分の身に起こっている変化——前世での記憶が無くなっている事について話した。

ある日突然、それまで覚えていたはずの、前世での自分の名前や家族すら思い出せなくなった事。

その割に、それまでの生活で得たであろう知識や経験なんかは覚えていた事など。

まともな答えが返ってくる保証は無いけど、こんな事を話せる相手が他には居ない事も事実だ。

話を聞いてもらうだけでも、多少は気分が楽になるかもしれない。

「ふうん……人間だった頃の記憶が無くなって来ているのね」

「そうなんだ。何もかも忘れているわけじゃないんだけど……」

例えば、死んだ時の事などは、鮮明に覚えているのだから堪らない。

アスファルトに叩きつけられ、想像を絶する激痛と共に手足が有り得ない方向にへし折れる感触や、自分の頭蓋骨が碎ける音なんかとか。

思い出しただけでも寒気がする。

「別に構わないんじゃない？ 忘れたところで、こちらの生活に支障があるわけではないでしょう？」

「それはそうけど……」

「それよりも、あなたが人間だった頃に外の世界で得た知識や経験を使って、幻想郷で何かしようとは思わないのかしら？」

「それは、全く思わないなあ」

出来ないと言った方が正確だろうか。

そもそも、そういった知識や経験が生かせるインフラが、こっちは無いわけだし。

「それは、あなたの工夫次第では無くて？」

急にそんな事を言われても困ってしまう。

物凄いチート能力でもあれば話は別だけど。

例えば、ゲームやアニメのファンフィクションでよくある、神様のミスで死んでしまい、なんか凄い能力貰ってゲームやアニメの世界に転生し、原作キャラを押し退けて、無双しまくりの、ハーレムしまくりのっていうやつだ。

「紫さん。俺に何か凄い隠された能力があったりとかしないかな」

「しないわ」

「即答!？」

「何夢みたいなこと言ってるの」

いや、まあ……たしかに、仰る通りなんですけどね……
実を言うと、ちょっとだけ、期待したんだよなあ。
やっぱり、現実はそのままで甘くは無いつてことか。

「……紫さん。もうひとつ。この前、聞こうと思って聞けなかった
事があるんだ」

「あら。何かしら？」

紫さんは、微笑みながら優雅に小首を傾げて見せた。

「いい加減、正直に話してくれよ。俺を転生させたのは、紫さんな
んだろう？ いったい、どういう理由なんだ？ どうして俺だった
んだ？」

「買取りも良いところ。私に、外の世界の人間を幻想郷に、しかも
妖怪に転生させるような力は無いわ」

口元を覆っていた扇子をぴしゃりと閉じると、紫さんは笑みを引
っ込めた。

「幻想郷縁起は、あなたも目を通した事があるでしょう？ あれの
著者である稗田の当主の事も」

「ああ……」

「本来、記憶を持ったまま転生するには、それだけの手間とデメリ
ットが必要になるの」

「……なら、なんで俺は？」

「……さあ？」

紫さんとはばけたように言い、さっきまでの胡散臭い笑顔に戻っ

た。

自分じゃないと言いながらも、この思わせぶりの言動。
何がしたいのか、何が目的なのか全く分からない。

「ただ一つ言えるのは、あなたの存在は、幻想郷ではイレギュラー
だと言う事」

「イレギュラーね……」

「そう。だから、何か問題を起こさないか、こうして様子を見に来
ているのよ」

「……俺はてつきり、面白半分の暇つぶしだと思ってた」

「それもあるわね」

むしろ、そっちが主目的じゃないのか。

俺を煙に巻いて楽しんでるようにしか思えない。

「何か問題を起こさないようにって言うけど、問題ってどんな？」

「そうね。この幻想郷の存在に、深刻な影響を与えるような事よ」

「いやいやいや。俺にそんな大それたこと出来るわけ無いでしょ」

元平均的な日本人で、妖怪に転生したとはいえ、何か特殊な能力
があるわけでもない。

空を飛んだり、ヘナチヨコな霊弾を撃ったりは出来るが、その程
度は天狗なら誰でも出来るわけで、特別な能力ってわけじゃない。

紫さんの方こそ、俺を買被り過ぎなんじゃないのか？

「では、例え話をしましょうか」

「例え話？」

「ええ」

紫さんは頷き、親指と人差し指で丸を作って見せた。

「このぐらいの大きさの石を、池に放り込んだらどうなるかしら？」
「は、波紋が出来るんじゃないの……？」

質問の意図が分からず、俺は自信なさげに答えた。

「そうね。波紋が出来るわ。でも、こんな小さな石で出来る波紋なんて、あっという間に消えてしまうわね」

「放り込み方にもよるんじゃない？ 力いっぱい叩きつけるようにしたら、盛大に水飛沫が上がるだろうし、波紋も遠くまで広がる。運の悪い魚が、石に当たって死ぬかもしれない」

俺のその答えが気に入ったのか、紫さんは生徒を褒める時の教師のような表情で微笑んだ。

「それでは、同じぐらいの大きさの石を、今度は金魚鉢に放り込んだらどうなるかしら？」

……そういうことか。

何となく、質問の意味が理解出来た。

「小さな小さな金魚鉢によ。軽く放り込んだだけでも、中のお魚さんはびっくりするかもしれないわ。それこそ、あなたが言ったように、叩きつけるように放り込んだりしたら、大変なことになりそうね」

つまり、俺は放り込まれた石というわけか。

「……それで、石を放り込んだのは誰なの？」

「さあ？ 誰でしょう？」

……自分だって言ってるようなもんじゃないか。

俺の無然とした表情が面白いのか、紫さんは揶揄するような笑みを浮かべた。

色々と気に入らない。

「ふふ……それじゃあ、夜も遅いし、そろそろ帰ろうかしらね。またね、柵くん」

「ああ……」

俺の内心の苛立ちなんて気にする素振りも見せず、紫さんは以前と同じように、空間を両手で押し開き、薄気味悪い目が覗く隙間の中に、何の躊躇も無く身を躍らせた。

紫さんの姿が隙間の中に消えると、空間の裂け目も何事も無かったかのように消え失せた。

室内の僅かに残る、紫さんの甘い残り香が、妙に忌々しかった。

「ああ、くそっ」

短く悪態を吐くと、俺は布団をひっ被った。

気が楽になるどころか、かえってにモヤモヤした気分になってしまい、その夜は良く眠る事が出来なかった。

妖怪の山編15

あの後、紫さんの突然の襲来でよく眠る事が出来ず、普段よりずいぶん早くに目が覚めてしまった。

かといって、二度寝するには遅すぎる時間だったので、眠気覚ましも兼ねて、朝靄の漂う中、適当にブラブラと家の周りを散歩して時間をつぶす事にした。

「起^たて一系の大君を〜♪ 光と永久^{とわ}に戴^ときて〜♪ 臣民我等皆共に〜♪ 御稜威^{みいつ}に副^そわん大使命〜♪」

昨夜から続くモヤモヤした気分を吹き払うように、お気に入りの軍歌を口ずさんでみる。

うむ。やはり軍歌は良い。軍歌は日本人の魂の歌。いつも俺の心に希望と勇気と安心を与えます。

「あやや。随分とご機嫌ね、櫛クン」

聞き覚えのある声に空を見上げると、そこに居たのは文さんだった。

どうやら、新聞配達の途中らしい。

「おはようございます、文さん」

「おはよう。はい、今日の新聞」

「ありがとうございます」

着地した文さんから、刷りたてのインクの匂いにする新聞を受け取った。

文々。新聞は、文さん自身が取材から記事の編集、印刷まですべ

て一人でやってるらしい。

よくも、それだけ手が回るもんだ。

「今日は早起きね、柵クン？」

「はい。たまたま目が覚めちゃいました」

柵さんが敬語で話しているせいか、文さん相手だと俺も敬語になっ
てしまう。

「ふーん……たまたま、ねえ」

文さんは八つ手の団扇で口元を隠し、意味ありげな笑みを浮かべ
た。

「柵クンが早起きする時って、決まって柵が来る日よね」

「へ？　そ、そんな事……」

あるかもしれない。

よくよく思い返してみると、柵さんが来る日は確かに早起きだっ
たような気がする。

だけど、今日は本当に偶然だ。

紫さんが夜中に尋ねて来なければ、まだ眠っていたはず。
たぶん。

「今更隠す事でも無いでしょうに」

にやにやと笑う文さんに、俺は無然とした。

文さんといい紫さんといい、俺の周りには、どうしてこう、他人
をおちよくるのが好きな人ばかり居るんだろうか。

「それより、配達途中だったんじゃないんですか？」

ちよつと腹が立ったので、俺の口調はつっけんどんだった。

「あやや。怒らない怒らない。実はね、柵クンにプレゼントがあるのよ」

「……プレゼント？」

「ええ。本当はもう少し早く渡すつもりだったんだけどね……」

文さんはそう言いながら、肩から提げている新聞の束が入っている鞆を漁り始めた。

「あつた、あつた。これよ」

文さんが取りだしたのは、一冊の手帳のようなものだった。

大きさは、写真のL版ぐらいだろうか。

思わず反射的に受け取り、その表紙に書かれている文字に仰天した。

「い、犬走 柵写真集!？」

「柵クン用に厳選した柵の写真集よ」

得意げな文さんの台詞を聞き流し、期待と好奇心に震える手で、表紙をめくってみる。

そこにあつたのは、訓練中のものを撮影したのだろうか、右手に大きな剣、左手に柵さんの名前を象徴するような紅葉マークをあしらった盾を携えた、柵さんの凛々しい写真の数々だった。

弾幕戦の最中を流し撮りしたものなのか、左手に構えた盾で無数の霊弾を受け流しつつ、柵さん自身も相手に向かって霊弾を撃ち返しているスピード感あふれる写真だった。

他にも、格闘戦の訓練なのか、敵役の哨戒天狗と切り結んでいる写真や、他の哨戒天狗と一糸乱れぬ編隊飛行をしている写真なんかもあった。

「かっこいい……」

思わず呟いてしまう。

文さんは満足げに、そうでしょう、そうでしょうと頷いた。

いつ撮ったものなのか尋ねたところ、何年か前の演習の取材を行った時のものらしい。

もしかしたら、その演習があった時期というのは、俺が迷子になったあの時かもしれない。

「気に入ってくれたようで良かったわ。この先、何か辛い事や泣きたい事があったら、それを見て自分自身に発破をかけるのよ」

「うん……」

「椀って隠れファンが多いから、この手の写真集は良い稼ぎになるの」

「へえ……」

「そうそう、椀にはくれぐれも見つからないようにね。隠し撮りしたものもあるから」

「はあ……」

文さんが何か言っていたが、写真集に完全に見入っていたので、殆ど上の空だった。

「それじゃ、私は配達の続きがあるから行くわね」

文さんの飛び立つ音に、俺は慌てて顔を上げた。

「あ、あの！　これ！　ありがとうございます!!」

軽くこちらに手を振り返し、文さんはあっという間に飛び去って行った。

文さんを見送った後、俺は再び写真集に没入した。

写真のほとんどが、訓練の様子を撮影したものだったが、最後の一枚だけが他の写真と異なっていた。

その最後の一枚で、俺は完全にやれてしまった。

頬を上気させ、トロンとした潤んだ瞳でこちらを見つめる椀さん。桜色の唇を悩ましげに半開きにして、両手で可愛らしく盃を持っている。

服装は乱れており、着崩れた上着の肩口から鎖骨のあたりまで覗く肌は朱に染まり、履いている袴は太股のあたりまで大胆に捲れ上がっていた。

どれだけの間、その一枚に見入っていたのかは分からない。いったい文さんは、どんな状況でこんな素晴らしい写真を撮ったのだろうか。

唐突に我に返った俺は、何となく周囲を見回した後、いそいそと写真集を懷に仕舞い込んだ。

「はぁ……」

私は宿舎の自室から外に出るなり、溜息を吐いた。

今日は非番なので、これから柵の家に遊びに行くところだ。

普段なら、一寸も無駄に出来ないとはかりに飛び立つところなのだが、今日は少し事情が異なる。

梓に言い包められる形で、柵の見学の申請を隊長に出したところ、却下してほしいという私の一縷の望みも空しく、私が面倒をみるなら問題は無いと、あっさり見学の許可が下りてしまったのだ。

今日は、それを柵に伝えに行くところなのだ。

柵が嫌がったり乗り気でなかったりした場合、無理に連れて来ないという約束だったが、あの子の事だから、屯所の見学が出来ると知って、かえって大喜びするだろう。

哨戒天狗の任務に興味を持ってくれるのは嬉しいが、梓を始めとしたメスの同僚達が、面白半分に柵にちょっかいを出すのが目に見える。

それを考えると頭が痛い。

「どうしたの、柵。何だか、浮かない顔をしてるね」

「……にとり。姿を消したまま声を掛けないでよ」

背後からの突然の声に内心ぎょっとしたが、平静を装ってゆっくりと振り返った。

そこには、いつかの雨合羽のようなものを羽織り、バツが悪そうに頭を掻いているにとりの姿があった。

発明品のテストをするのは良いが、私を相手に実験するような真似は止めて欲しい。

「あはは、ごめんごめん。今から、柵くんのところに行くの?」
「そうよ」

まさか、ついて来るつもりなのだろうか。

「何だか憂鬱そうだね? いつもはウキウキしてるのにさ」
「そんな事無いわ。普段通りよ」
「ふーん……」

にとりは後ろ手を組んでやや前屈みになり、探るような上目遣いで私の顔を覗き込む。

妙に居心地の悪い視線に、私は僅かに身動きする。

「そういえば」
「な、なに?」
「今度、柵くんに隊の屯所を見学させるんでしょ?」
「……そうよ」

大方、同僚達の噂話でも耳にしたのだろう。
別に隠すことでもないので私は頷いた。

「なるほど。それで機嫌が悪いわけか」

合点がいったとばかりに、にとりはうんうんと頷いた。
なんだか、無性に気に障る。

「従弟のお姉さんとして心配なのは分かるけどねえ」

揶揄するような態度が気に障ったが、にとりの言いたい事は良く

分かっているつもりだ。

いずれ隊に配属されれば、嫌でも同僚達の目に触れるわけだし、実際に哨戒天狗になった後、私と同じ隊に配属されるとも限らない。構いすぎるのは、良くないと言いたいのだろう。

「……もう、行くわ。櫛が待ってるから」

「あ、櫛！」

それでも、心配なものは心配なのだ。

世間知らずのあの子が、同僚達に遊び半分にある事無い事を吹き込まれ、妙な方向に歪んでしまったりしないかと思うと、気が気ではないのだ。

それに、あの子は普段は素直で良い子なのだが、数年前の迷子の時のように、稀にとんでもない騒動を起こす事がある。

可能な限り、目を離したくないのだ。

普段だって、訓練や哨戒の合間に、能力を使って櫛の様子を見守っているくらいだ。

大抵は、楓おぼさんの家事や楠おじさんの畑仕事を手伝っていたり、河童の友人と遊んでいたりで、そういった兆候は見られないが、それでも油断は禁物だ。

そんな事を考えながら飛んでいるうちに、櫛の家の上空に到達した。

庭先で、楓おぼさんが微笑みながら手を振っているのが見えた。櫛も縁側に腰を降ろして私を見上げている。

「こんにちは、楓おぼさん、櫛」

「いらっしやい、櫛ちゃん」

「こ、こんにちは……」

なんだか、櫛の様子がおかしい。

どこかオドオドしていて、私と目を合わせようとしな

顔が少し赤いし、熱でもあるのだろうか。

そのわりに、力いっぱい尻尾を振っているので、体調が悪いとい

うわけでは無いようだけれど。

何かあったのだろうか。

「柵……？ どうしたの？」

心配になった私は、柵の顔を覗き込んだ。
柵はビクリと身体を強張らせ、熟した柿のように真っ赤になっ

てしまった。

突然、弾かれたように立ち上がった柵は、そのまま厠の方に走っ

て行ってしまった。
私は訳が分からず、呆氣に取られたまま、走り去って行く柵の後

ろ姿を見送った。

「ふふふ……柵ったら……」
何故か楓おぼさんは、そんな柵の様子を、どこか嬉しそうに眺め

ていた。
不思議そうに見つめていると、楓おぼさんは悪戯っぽく微笑んだ。

「あの子、柵ちゃんの事をメスとして意識し始めたのかもしれない

わね。良い傾向だわ」

「な、何を言ってるんですか！？ まだ子供ですよ、あの子は！」
「あら。そんな事関係無いわ。楠くんだってそうだったもの。やっ

そ、そんな。

いくらなんでも、そんな事は……

「柊ちゃん、顔がにやけてるわよ？」

「そ、そんな事ありませんっ!!」

「落ち着け、落ち着け……」

トイレに逃げ込んだ俺は、必死に自分自身に言い聞かせていた。
今朝方、新聞と一緒に文さんからもらった柊さんの写真集。

その最後の一枚のせいで、妙に柊さんを意識してしまい、落ち着かないのだ。

「これは、あれだ。寝不足のせいで気が昂ってるんだ。そうに違いない」

うん、そうだ。そうに決まってる。

深呼吸、深呼吸。

すーはー……すーはー……

……よし。

落ち着いてきた。

殆ど、暗示みたいなもんだが、まあ良し。

俺はトイレを出ると、柊さんと母さんの居る庭に戻って行った。

「柵……大丈夫？」

「だ、大丈夫！ 何とも無いよ！」

心配そうに尋ねる柵さんに向かって、無駄に元気よく答えた。

そんな柵さんとは対照的に、母さんは何やら訳知り顔で笑っているが、気にしない事にする。

「それじゃ、いつもの所で練習しましょうか」

「う、うん！」

「ふふ……行ってらっしゃい」

妙に嬉しそうな母さんに見送られ、俺達は、いつも霊弾の練習をする丘に向かった。

「えっ、隊の見学？」

霊弾の練習の合間の小休止時の事だった。

柵さんが、自分の所属する隊の見学を試してみないかと誘ってくれたのだ。

これは、正に渡りに船だ。

柵さんが、あれだけ誇りに思っている哨戒天狗とは、一体どんなものなのか、自分が将来就くことになる仕事がどんなものなのか、詳しく知りたいと常々思っていたところだったのだ。

「柵が嫌なら、構わないのだけれど……」

「嫌じゃないよ！ したい！ 見学したいよ！」

勢い込んで柁さんに詰めよると、何故か柁さんは困ったような疲れたような笑みを浮かべた。

「そう……やっぱり、そうよね……」

そして、小さく嘆息する。

何故だろう。

自分から話を持ちかけて来たわりには、あまり嬉しそうじゃない。柁さんは、俺が哨戒天狗に興味を持つ事を、喜んでくれていると思っていたんだけどな。

「そ、そうだ！ おばさんとおじさんにも、許可を貰わないと駄目ね！」

「え？」

「い、いくら、柁が見学したいと言っても、ほら、色々と心配だろうし！」

「う、うん」

まあ、確かに、親に話さず勝手に決めるわけにはいかないだろうけど……

ちよっと、柁さんの態度がおかしい。

まるで、俺が断ったり、両親が許可しない事を期待しているみたいだ。

俺の不審そうな表情に気付いたのか、柁さんは慌てて取り繕うような笑顔を浮かべた。

「そ、それじゃ、戻って確認しましょうか！」

「う、うん……」

……そんなわけで、そうそうに練習を切り上げて家に戻ってきたのだが。

「あら、見学させてもらえるの？　柵、是非そうさせてもらいなさい。ねえ、楠くん？」

「うむ。柵にとっても、良い社会見学になるだろう」

俺の予想通り、あっさりと両親の許可が下りた。

それを聞いた柵さんは、何処か失望したように溜息をついた。

そんな柵さんの様子に、母さんと親父も不思議そうに首を傾げている。

「……それじゃ、来週迎えに来るから、準備をしていなさい」
「わかった！」

柵さんの態度が気にはなったが、あまり深く考えず、俺は元氣の良い返事を返した。

妖怪の山編 16

それから一週間、見学の日が来るまで、待ち遠しくて待ち遠しくて仕方が無かった。

哨戒天狗隊の屯所が見学できるのが楽しみだったというのもあるが、それ以上に、空を飛んで村の外に出られる事が嬉しかったのだ。何しろ、俺が村の外に出たのは、3年前の迷子になったあの時だけなのだ。

まともに村を出るのは、今回が初めてだと言っても良い。

遠足が楽しみで仕方が無い子供のような、そんな落ち着かない心境で、両親に指摘されてからかわれる事もあった。

「柵。準備は良い？」

「うん！」

迎えに来た柵さんに向かって、俺は満面の笑みで頷いてみせた。

「柵。柵ちゃんの言う事をきちんと聞くのよ？」

「屯所には入っちゃいけない所も多いから、勝手にウロウロしちゃだめだぞ？」

「分かってるよ」

母さんと親父は、少し心配そうだ。

信頼できる従姉と一緒に、俺を村の外に出すのが心配なんだろう。

過去にあんな騒動を引き起こしているんだから、当然と言えば当然だ。

「柵ちゃん、避妊はきちんとね？」

「な、なななっ、何を言ってるんですか、おばさん!!」

予想の斜め上に行く母さんの一言に、柗さんは一瞬目を丸くし、顔を真っ赤にして怒鳴り返した。

「あら。見学にかこつけた逢瀬じゃなかったの？」
「違います!」

母さんは頬に手を当て、心底意外そうに首を傾げる。
「いったい、どこをどうすればそういう発想になるんだ。」

「俺達としては、孫の顔を見れるのは客かではないが、親になるにはそれなりの準備と覚悟が必要だからな」

「お、お、おじさんまで!!」

「予行練習は十分に行うべきだけど、万が一という事もあるし……」
「く、柗! 行くわよ!!」
「わわっ!」

両親の戯言を振り切るようにして、柗さんは俺の手を引いて飛び立った。

下から微かに、「今夜はお赤飯ね」などという嬉しそうな声が聞こえたが、無視する事にした。

柁さんの隊が駐屯している屯所は、御山の頂上付近にあり、麓に近いこの村からは少し距離があるらしい。

俺達は、村の中を流れる河の上を、上流に向かって飛んでいった。村を出て、山の頂きに近づくにつれ、あたりの景観が徐々に変わっていく。

大きくゆったりとした流れだった河は、幾つもの支流が合流し、徐々にその流れを早め、やがて、切り立った崖の合間を流れる急流の様相を呈していった。

柁さんにとっては見慣れた光景なんだろうが、俺の目には、全てが真新しく映り、刻一刻と峻厳さを増していく溪谷の様相に、ひたすら感動していた。

何か変わったものを見つけたたびに、興奮したように柁さんに尋ね、柁さんは苦笑しつつも、そんな俺の質問に優しく答えてくれた。景色に見惚れていると、ふと、溪流の川面に誰かが居る事に気付いた。

両手を広げ、まるでフィギュアスケートの選手のように、クルクルと回転している。

紫さんに匹敵するような、ゴスロリのドレスを身に付けている、緑色の髪の女性だった。

髪の色以外、見た目は人間のように見えるが、妖怪の山に居るのだから、おそらく人間では無いのだろう。

「柁さん。あそこで誰か回ってるよ」

「あれは、厄神様よ」

「厄神様？」

「そう」

さすが、幻想郷。妖怪や妖精だけでなく、神様もいるらしい。

柁さんによると厄神様は、幻想郷に数多く存在する八百万の神の一柱なのだという。

幻想郷中の厄をその身に集め、浄化するという非常に重要な役目を担う神様で、彼女が居なければ、幻想郷は瞬く間に厄塗れとなってしまう、妖怪も人間も住む事が出来なくなってしまうのだそう。暫く眺めていると、厄神様はこちらに気付いたのか、一旦回転を止め、スカートの裾を摘んで優雅に微笑みながらお辞儀をした。

返礼する柊さんに倣い、俺も慌てて頭を下げた。

「大事な神様なんだね」

「ええ。でも、あの方は、常に厄を纏っているから、近づくのは危険なのよ」

柊さんは少し気の毒そうに呟いた。

幻想郷中の厄という厄を集めている彼女の周囲には、常に濃密な厄が漂っており、並みの人間や妖怪なら、頓死してしまうほどに強力らしい。

力のある妖怪なら平気かもしれないが、私程度ではおそらく唯では済まない、柊さんは付け加えた。

柊さんが唯では済まない程なら、俺は間違いなく死ぬる。

「出来る事と言ったら、こうして離れた場所から、敬意を持って頭を下げるくらい……」

「そうなんだ……」

再び回転を始めた厄神様と別れ、俺達は河の上流を目指す。

「向こうに大きな池が見えるでしょう？」

柊さんは、溪谷から少し離れた場所にある池を指さした。

鬱蒼とした木々に囲まれているにもかかわらず、池のある部分だけが開けており、日の光が差し込んでいるように明るく、どこことな

く神聖な雰囲気を感じられた。

池のほとりには、何かを祀っているような小さな祠も建っている。

「あそこは大蝦蟇の池。文字通り、大きな蝦蟇蛙が棲んでいるわ」
「へえ」

いわゆる、主みたいなもんだろうか。

まあ何にせよ、妖怪の山に住んでいるカエルなんだから、ただのカエルでは無いんだろうな。

そんな事を考えながら、池の方を眺めていると、どこからともなく妖精が現れた。

女子中学生の夏服の様な服装で、背中には6枚の氷細工のような羽が付いている。

俺が迷子になった時に遭遇した妖精は人形ぐらいの大きさだったが、そいつは、12、3歳の子供ぐらいの背丈があった。

妖精は、6枚の羽根を忙しく動かし、池の中央付近を飛び回りながら、何を思ったのか、水面に向かって罵声を浴びせ始めた。

「ばか」だとか「あほ」だとか「でべそ」だとか、幼児だってもう少しまともな事を言うんじゃないかってぐらい、貧弱で残念な語彙力だった。正直、聞くに堪えない。

ひとしきり罵詈雑言を浴びせ続け、疲れてきたのか、暫くすると肩で息をつき始めた。

「あの妖精、何してるんだろ？」

「……見てなさい、柵。面白いものが見れるから」

内心で首を傾げつつ、視線を池の方に戻すと、今度は水面に向かって弾幕を撃ち込み始めた。

妖精の放つ霊弾が着水するたびに、水音と共に無数の波紋が水面に広がっていく。

その合間に、妖精の「どうだ、参ったか!」とか「あたいは最強だ!」などという声が聞こえてくる。

やがて、「俺達には見えない何か」との戦いに勝利したらしい妖精は、腰に手を当て、鼻息も荒く仁王立ちでふんぞり返った。

しかし、彼女の勝利宣言(?)は長くは続かなかった。

突然、盛大な水飛沫を上げながら、彼女の前に冗談のように大きいカエルが姿を現したからだ。

「も、も、樅さん! あ、あれは……?」

「あれが、この池の主の大蝦蟇よ」

モロに水を被って、オタオタする妖精を、大蝦蟇はカエル特有のギョロ目で睥睨する。

ようやく我に返り、逃げようとする妖精を、一瞬にして舌で絡め取り、あっという間にその大口に収めてしまった。

妖精を口に含んだ大蝦蟇は、咀嚼するかのように、暫くモゴモゴと口を動かした後、空に向かって口を窄め、ふっと息を噴きだした。

「ああああああああああっ!」

吐き出された唾液塗れの妖精は、ドップラー効果を伴った悲鳴を上げながら、物凄い勢いで空の彼方に吹き飛んで行った。

俺は呆気にとられ、妖精がすっ飛んで行く様を見送った。

えーと。こ、こういうときは、アレか?

敬礼しながら、無茶しやがってとても眩くべきなんだろうか。

再び池に目を戻すと、ぶくぶくと水面を泡立てながら、巨大ガマガエルが水中に沈んで行くところだった。

気のせいだと思うが、吊り上がった口の端が、まるで笑っているかのように見えた。

「あの妖精、どこからかやって来て、ああやって池で騒いでは、大蝦蟇にお仕置きされているのよ」

柁さんが溜息交じりに呟いた。

ウンザリとしたその口ぶりからすると、今の光景を何度も目の当たりにしているんだろう。

「何で、そんなことしてるの？」

「分からないわ。知恵の足りない妖精のやる事だし、何か意味があるとは思えないけど」

何気にきつい一言だけど、幻想郷縁起にも妖精は頭が弱いみたいな事書いてたしなあ。

俺が迷子になった時に遭遇した妖精も、そんな感じだったし。

そういえば、死んでも一回休みですぐに復活するから、憂さ晴らしには最適みたいな事も書いてたっけ。

稗田の当主って、何気にえぐい。

「さあ、行きましょう。屯所はもう少し先よ」

「うん」

と、まあ。そんな感じで。

始めてみる妖怪の山の様々な顔に、ある時は感嘆し、ある時は驚愕しながら、柁さんにひつついて溪谷を遡って行った。

にとりさん達河童の棲んでいるらしい谷を通り過ぎたあたりで、凄まじい轟音を轟かせている大きな滝が見えて来た。

盛大な水飛沫を上げる滝の麓には綺麗な虹がかかり、いったい、どれだけの落差があるのか、上の方は靄がかかってよく見えない。

「櫛、こっちよ」

呆けたようにその大瀑布を見上げていると、櫛さんに苦笑気味に袖を引かれた。

滝のある所から暫く行った所に、櫛さんの隊の屯所はあった。

屯所の正門と思しき箇所、剣と盾を帯びた二人の白狼天狗が守衛に立っており、門柱には『第六十四哨戒飛行隊屯所』と書いてあった。

『第六十四哨戒飛行隊』というのは、おそらく部隊名なのだろう。

「ここが、私が普段の生活や訓練をしている隊の屯所よ」

門に向けて足を進めながら、櫛さんは傍らの俺に話しかけた。

やがて、守衛の二人がこちらに気付いたのか、直立不動で櫛さんに敬礼した。

櫛さんもそれに対して答礼する。

「さ、櫛。挨拶なさい」

ちょっと気後れしてしまった俺は、櫛さんの陰に隠れるようにして、やや上目遣いでぺこりと頭を下げた。

「か、上有住 櫛です。本日は、ご迷惑をおかけするかもしれません、よろしくお願いします！」

可能な限り礼儀正しく自己紹介する。

二人の白狼天狗は、一瞬目を丸くしたが、すぐに相好を崩した。

「か……可愛いっ!!」

「この子が、犬走三曹の秘蔵っ子ですね！」

二人の白狼天狗は、尻尾をブンブン振りながら、橿さんを押し退けるようにして俺の傍に駆け寄って来た。

そして矢継ぎ早に、「いくつになるの?」「好きな食べ物?」「趣味は?」などと、質問をぶつけてくる。

予想外の反応に若干戸惑い、及び腰になりながらも、二人の質問に答えていった。

その度に、二人の白狼天狗は、何が楽しいのかキヤーキヤーとはしゃいでいた。

「可愛いし礼儀正しい! これは、犬走三曹が入れ込むのも分かる!」

「良いなあ、良いなあ、三曹! 私もこんな子を育ててみたいです!」
そして、媚にしたいです!」

啞然とする俺にかまわず、守衛の二人は、口々に勝手な事を言っている。

多少辟易しつつも、悪い気はしない。

二人とも、橿さんに劣らぬ美少女だし、子供である今の内だけだとはいえ、異性にちやほやされて嬉しくないわけがない。

自然と、自分の顔が緩んでくるのが分かる。

もしかしたら、若干にやけていたかもしれない。

「んっ、んんんっ!」

背後から聞こえた、苛立ちを隠しきれないような咳払いに、思わず身体がビクリと緊張する。

守衛の二人も、俺と同じように身を竦ませていた。

「……見学の手続きを済ませたいのだけけど?」

「し、失礼しましたッ！」

「た、直ちに！」

二人は、弾かれたように俺から離れ、一人が詰所のような建物に慌ただしく駆け寄り、受付のような所から、筆記用具を手に戻ってきた。

「はい、柵くん。これに名前と歳と住所を書いてね」

「どうやら、入出管理台帳のようだ。」

言われたとおり、住所氏名年齢を記入していく。

「丸字で可愛い字ね」

「ど、どうも」

一通り記入し終えた後、鉛筆と台帳を返す。

彼女はそれにさっと目を通した後、見学に関する簡単な注意事項を伝えた。

引率者（この場合は柵さん）の指示に従う事、単独行動は取らない事、立入禁止の区画には入らない事など……

まあ、これに関しては、常識的に行動していれば問題は無いだろう。

「わかったかな？」

「はい。大丈夫です」

俺の返事に、説明してくれた白狼天狗は満足そうに頷いた。

「ようこそ、第六十四哨戒飛行隊へ。歓迎するわ」

二人の守衛に見送られ、俺と樫さんは屯所の門をくぐった。

妖怪の山編 17

「さ、櫛。着いて来なさい」

「う、うん」

見学の手続きを済ませた俺は、若干緊張しつつ、櫛さんの後に続いて屯所の門をくぐった。

哨戒天狗隊の屯所と言えば、外の世界の軍隊や自衛隊に相当する妖怪の山の治安組織だ。

緊張しつつも物珍しさから、おのぼりさんよろしく、キョロキョロと屯所内を見回す。どんな珍しいものがあるのかと興味津々だった。だったんだけど。

（意外と普通……？）

屯所内は、きちんと区画整理されており、建物などの施設は規則正しく整然と並んでいるが、一目でそれと分かるような特別なものがあるわけではない。

そうと言われなければ、ここが軍隊の駐屯地だなんて、気が付かないかもしれない。

正直、ちよつとばかり拍子抜けしてしまった。

辺りには、櫛さんと同じ格好をした白狼天狗の姿が見える。櫛さんと同じ哨戒天狗のようだ。よく見ると、袴の色が赤と青の二種類ある事に気付いた。

「袴の色が二種類あるんだね」

「袴の色は、オスとメスで分かれているわ。オスが青でメスが赤よ」

わざわざ分ける事に何か意味があるんだろうか。班や小隊ごとに

分けるとかだったら、識別を容易にするためとか、何かしらの理由が考えられるけど。

そんなこと考えながら眺めていると、白狼天狗以外に、河童の姿が見える事に気づいた。

「屯所には隊に所属している白狼天狗以外にも、にとりたち河童や、文さんたち鴉天狗が出入りしているわ」

「へえ」

樫さんによると、河童は哨戒天狗の使用する装備品や施設の開発や保守を担当しており、鴉天狗はそれぞれが大天狗直属の監査役で、調査や指導のため屯所に出入りしているのだという。

ちなみに、大天狗というのは、鴉天狗や白狼天狗などを取り纏めている上級の天狗で、その名の通り身体が大きいらしい。

「鴉天狗の仕事って、新聞記者だけじゃなかったんだね」

「一応、報道部門の担当でもあるわ。監査役としてあちこちを飛び回る事を利用して、新聞記者を兼任しているの」

二足の草鞋を履いているわけか。

それって、何気に大変なんじゃないのかな。

しかし、それよりも、本来の役職である監査役っていうのが、すごく気になる。もしかして、アカの共産主義国家が文民統制（笑）の名目で部隊に派遣する政治将校みたいなもんなのか？

そこまでいかないとしても、隊としては、結構扱いに困るんじゃないだろうか。機嫌を損ねでもしたら、ある事無い事報告されたりする可能性があるわけだし。

「でもね、新聞のほうは殆ど趣味の産物よ。だから、内容を真に受けちゃ駄目。特に、文さんの新聞なんて、信憑性の欠片の一切無い

捏造記事が殆どなんだから」

「そ、そうなんだ」

やや強い語気に、俺は少し気圧されてしまった。

まあ、無理もない。俺の知る限り、樫さんは一番の被害者なわけだし。俺だってこの先、その被害に会わないとは限らない。

でも、文さんから貰った樫さんの写真集は、俺の一生の宝物です。

「それから、鴉天狗は、私達白狼天狗にとっては上司にあたるから、無礼な態度を取っては駄目よ。天狗社会は上下関係には厳しいんだから」

「わかった」

上司と言っても、職務上のものではなく、天狗としての地位が上という意味なのだろう。今の話を聞く限りだと、鴉天狗の指揮系統は、哨戒天狗隊とはまったく別物のようだし。

もっとも、文さんを見ると、あまり偉ぶっているようには見えない。気さくというか、馴れ馴れしいというか、そんな感じだ。樫さんとは、個人的な交友関係があるからなのかもしれないけど。

ちなみに、いくつかある哨戒天狗隊を取り纏めているのも大天狗で、こっちは、地位も指揮系統上でも真正銘の上司に当たり、その下に各白狼天狗隊の飛行隊長がいて、更にその下に分隊長や樫さんのような一般の隊士がいるのだそうだ。ややこしい。

まあ、とりあえず、だ。

今は、そんな七面倒な上下関係うんぬんよりも、屯所の見学が先決だ。

「樫さん。俺、樫さん達が、普段どんな訓練をしているのか見てみたい」

期待を込めて尋ねると、椛さんは少し申し訳なさそうに、困ったような笑みを浮かべた。

「残念だけど、今の時間帯は訓練はしていないの。他の所なら、案内出来るのだけれど……」

ありゃ。そうだったのか。

そうなる……困ったな。

屯所の見学の主目的がそっちだっただけに、他に見学したい所を具体的に考えていなかったのだ。

どうしようかと、考え込んでしまった時だった。

「おい！ 椛ー！」

頭上からの声に、思わず上を振り仰ぐと、一人の哨戒天狗がこちらに向かって降りて来るところだった。

俺達の前に着地したその哨戒天狗は、やあ、とばかりに手を上げて、人懐こい笑みを浮かべた。

その拍子に、頭の両脇で結んでいる髪が、ぴよこんと揺れた。兎の耳みたいで、なかなか可愛いらしい。

「……梓。屯所内は、緊急時以外飛行禁止の筈よ」

「まあまあ、固いコト言わない」

咎める椛さんに向かって、梓と呼ばれた哨戒天狗は、全く悪びれず、ひらひらと気安く手を振って見せた。

「何言ってるの。柵の前で、先輩である梓が規定違反をしてどうするの」

「君が椛の従弟くんね。はじめましてー」

尚も非難を止めない栳さんをスルーし、梓さんは俺の前に屈みこんだ。

「栳お姉さんの親友の似内　梓よ。よろしくねー」

俺の顔を覗き込みながら、にっこりと微笑んだ。

さっきの守衛二人もそうだったけど、わざわざ子供目線で話しかけてくれるあたり、みんな良い人ばかりだ。

「は、はじめまして。上有住　柵です」

どことなく面白くなさそうな栳さんを、横目でチラチラと伺いながら、俺は梓さんに向かって、ぺこりと頭を下げた。

「うんうん。お行儀の良い子だねー」

さっきの守衛同様、梓さんの顔がぱつと輝き、優しく俺の頭を撫で回す。

ちやほやして貰えるのは嬉しいけど、それに反比例するように、栳さんの表情が渋いものになっていき、悪いことをしているわけではないのに、何故か罪悪感が込み上げてくる。

「ところで、これからどうするつもりだったの？」

「……屯所の案内をしようとしていたところ。柵は、訓練の見学をしたかったみたいだけど」

栳さんは仏頂面で答えた。

「なるほどねえ……あ、そうだ」

そんな柊さんの様子を気にも留めず、梓さんは、名案が思い浮かんだとばかりに、ポンと手を叩いた。

「それならさ、私と柊で、柊くんに模擬戦を見せてあげるってのはどう？」

「ちょっと、梓。何を言っているの？」

予想外の提案だったのか、柊さんは目を丸くし、非難めいた声を上げる。

「良い考えでしょ？ どう、柊くん？」

戸惑う柊さんを余所に、梓さんは同意を求めるように俺に微笑みかけた。

「柊くんも、お姉さんの勇姿を見てみたいでしょう？」

俺の脳裏に、文さんからもらった写真集に掲載されていた柊さんの凛凛しい姿が浮かぶ。

あの柊さんの姿を、間近で、自分自身の目で見てみたい。

「見たい！ 見たいです！」

俺は、梓さんに向かって、力一杯頷いた。

柊さんは、あまり乗り気ではないようだったけど、それでも、好奇心には勝てなかったのだ。

「駄目……かな？」

媚びるような上目遣いで樫さんを見上げると、樫さんは、うっと言葉に詰まった。

樫さんには、こういうおねだりの仕方が一番効果があるのは、前回で実証済みだ。

「だってさ。樫？」

「も、もう……仕方ないわね」

樫さんは、僅かに頬を赤らめ、そっぽを向きながらも承諾してくれた。

何だか妙に楽しそうな梓さんに先導されてやって来たのは、屯所の外れにある、練兵場と呼ばれているのだっ広い広場だった。

日常的な基礎訓練なんかはここで言い、規模の大きい演習クラスのものになると、屯所の外にある演習場で行われるのだそうだ。

「訓練には、状況に応じて色々な種類があるけど、今回は、もっとも基本的な一対一の模擬戦を見せてあげるね」

訓練用の剣と盾を手に、梓さんが言った。

練兵場のすぐ隣にある、訓練用の装備を保管している倉庫から持ってきたものだ。

得物の剣は、訓練用なだけあって刃が引いてあるみたいだけど、どう見ても鉄製だ。本気で殴られたら骨ぐらい簡単に折れるんじゃないだろうか。

盾の方は素材は良く分らないが、円形であまり大きくは無く、

腕に嵌めて取っ手を握るタイプのものだ。攻撃を防ぐというより、受け流すような使い方をするのだろう。

「それじゃ、始めようか、椛？」

「ええ。柵、危ないから、離れていなさい」

俺が練兵場の端まで下がった事を確認し、椛さんと梓さんは向き合った。

お互いの距離は、だいたい10メートルぐらいは離れている。

「本気で来なよ、椛！ 従弟くんが見ているからって、花を持たせたりはしないからね！」

椛さんに向かってびしっと剣の刃先を向け、挑戦的に啖呵を切る梓さん。

対する椛さんは、口に出しては何も言わず、軽く肩を竦めただけだった。

俺が固唾を飲んで見守る中、先に仕掛けたのは梓さんだった。

一瞬にして空中高く飛び上がると、地面に居る椛さんに向かって凄まじい密度の弾幕を叩きつけたのだ。

押し潰すように殺到する弾幕を、椛さんは避けようとはせず、それどころか、押し寄せる弾幕の真っ只中に、なんの躊躇もなく飛び込んで行った。

一瞬、勝ち目が無くなって自棄になったのかと思ったが、すぐにそれが間違いであることに気付いた。

椛さんは、霊弾と霊弾の間に出来た僅かな道を縫うようにして、弾幕を回避しているのだ。

道と言っても、当然弾幕は絶え間なく移動しているので、一瞬後には霊弾に埋め尽くされて直ぐに消えてしまう。

少しでも判断を誤れば、殺到する弾幕に身体を打ちすえられて、

あえなく撃墜されてしまうだろう。

そんな豪雨のような霊弾を紙一重で回避しつつ、樫さんはあつという間に梓さんに肉薄した。

右手に握った剣を、下からすくい上げるようにして振り抜く。

梓さんは、狼狽したように、樫さんの一撃を剣で受け止めた。がきん、という鉄同士を打ち合わせる、鋭く乾いた音が練兵場に響く。

続けざまに二合、三合と剣を打ち合わせ、四合目に切り結んだところで鏑迫り合いの状態になった。

空中で、目まぐるしく互いの位置を入れ替えながら、二人はギリギリと剣を擦り合わせる。

「ちょ、ちょっと樫！ もう少し手加減してよ！」

「さつきと言ってる事が違うじゃない！」

「あ、あれは、その……その場のノリというか、勢いというか……うわ!？」

台詞の途中で、樫さんは身体ごと剣を引いた。

その拍子に、梓さんの身体がバランスを崩したように傾ぎ、前へ泳いだ。

その隙を見逃さず、樫さんの右足が跳ね上がり、梓さんの身体を蹴り飛ばそうとした。

梓さんは寸での所で、樫さんの蹴りを盾で防ぎ、その反動を利用して後方に跳び退る。

すかさず追撃に移る樫さんに向かって、梓さんは霊弾を放つが、体勢が悪いせいか、難なく回避されてしまう。

慌てて剣で迎え撃とうとする梓さんに向かって、樫さんは左手に持っている盾を、まるでフリスビーか何かのように、勢いよく投擲した。

「んのわっ!?!」

妙な悲鳴を上げながら、それでも梓さんは、回転しながら飛来する盾を剣で弾いた。

追撃に備え、慌てて剣を構えるが、視線の先に椀さんの姿は無い。その時、背後からすつと首筋に剣の刃の部分を添えられ、梓さんはぎくりとしたように身体を強張らせた。恐る恐る首をめぐらし、背後を確認する。

そこには、口をへの字に引き結び、剣を梓さんの首筋に当てている椀さんの姿があった。

梓さんが盾に気を取られている隙に、背後に回り込んでいたのだ。

「詰みよ。梓」

「うう……参りましたあ……」

梓さんは、降参とばかりに、剣と盾を持った両手をだらりと下げた。

妖怪の山編 18

模擬戦を見学させてもらった後は、二人に連れられて、屯所内の他の施設の見学をさせてもらったり、哨戒天狗の基本的な任務の一端などを説明して貰った。

そういった諸々が一通り終わった頃、俺達三人は、食堂を兼ねている休憩所のような所で、昼食を摂りながら小休止していた。

任務の合間の休憩をしているのか、俺たち以外にも何人かの哨戒天狗の姿が見える。

部外者の俺がこんな所にいるのが気になるのか、チラチラとこちらを気にするような視線を送ってきている哨戒天狗が何人かいる。袴の色からするとオスの哨戒天狗のようだ。

「見学できる場所は、一通り案内したけど、どうだった？」

「模擬戦が一番面白かったよ。梓さんの弾幕は綺麗だったし、樫さんは凄く格好良かった！」

梓さんの放った色とりどりの弾幕は、とても華やかで、見とれる程に綺麗だったし、圧倒的な物量で押し寄せるそれを、板○サーカスばりの高機動で躲していく樫さんもまた凄かった。

戦闘訓練というよりも、いかに美しく魅せるかを競う何かの競技を見ているような、そんな気分だった。

時間にすれば、ほんの数分程度の出来事なのだが、インパクトは十分だった。

「格好良かったってさ。良かったね、樫」

「え、ええ……」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら梓さんが水を向けると、樫さんは

少し照れ臭そうに、曖昧な笑みを浮かべた。

「も、模擬戦以外はとうだったの？」

「え？ えーっと……」

正直、模擬戦のインパクトがあまりにも強かったので、他の場所についてはあまり印象に残っていなかった。

ああ、そうだ。ただ一ヶ所だけ例外があった。

それは、屯所の資料館だった。

自衛隊の基地や駐屯地にも良くあるもので、屯所や部隊の歴史についての資料や、部隊の功績なんかが展示されている建物だ。

そこには、隊の歴代飛行隊長の写真や経歴などが展示されていたんだけど、その中に良く知る人物を見つけ、俺は自分の目を疑った。

『第六十四哨戒飛行隊 第二十七代飛行隊長 上有住 楠 二等狼佐』

そう、親父の名前だったのだ。

「……父さんが、ここの隊長だったってことにびっくりした」

写真の中の親父は、今よりも幾分若く（今でも見た目は十分若い）自信に満ち溢れた、精悍な面差しをしていた。

何度も何度も名前と写真を確認し、挙句に樫さんに同姓同名で容姿がそっくりの別人なんじゃないかと確認したくらいだった。

母さんに嬉しそうに尻尾を振って、だらしなく甘えてばかりいるあの親父と、写真の中の凜凜しい青年将校の姿が、どうしても同一人物とは思えなかったのだ。

哨戒天狗の階級が良く分からないので、二等狼佐がどの程度偉いのかははっきりと分からないが、飛行隊長を務めるくらいなんだか

ら、自衛隊に照らし合わせると二佐（中佐）ぐらいになるんだろうか。

ちなみに、今の飛行隊長が二十八代目ということなので、前任者が親父だったという事になる。

「楠おじさんからは、何も聞いていなかったのね」
「うん……」

親父は、そんな事は何も話してくれなかったからなあ。今更ながら、親父の事について何も知らない事に気付いた。

いや……よくよく考えてみると、親父だけじゃない。母さんの事だって、よく知らない。

それに、椀さんの事だってそうだ。椀さんは俺の従姉で、母さんの姪だ。ということは、椀さんの両親のどちらかの姉か妹という事になる。

だけど、俺は、叔父叔母にあたる椀さんの両親に会った事が無い。椀さん自身に訊ねた事もない。

いまさら訊ねてみるにしても、タイミングが悪すぎる。

万が一、椀さんの両親が故人だったり、あまり仲が良くなかったりしたら尚更だ。

「椀？ どうしたの？」

黙りこくってしまった俺に、椀さんは怪訝そうに首を傾げた。

俺は慌てて、誤魔化すように何でもないと笑った。

「それで、椀くん。見学してみて、将来、哨戒天狗になる事についてはどうかな？」

「はい！ 大丈夫です」

梓さんの問いに、俺は何の躊躇もなく力強く返事をした。

見学するまでは、多少の不安はあった。なにしろ、将来は必ず哨戒天狗になることを義務付けられているというのだから、不安を感じない方がおかしい。有り体に言えば、徴兵されるわけなんだし。

しかし、屯所の見学や哨戒天狗の通常任務を柁さんに詳しく説明され、俺の中から、そんな不安は払拭された。

哨戒天狗の通常任務とは、その名の通り哨戒飛行。妖怪の山に侵入者が居ないかどうか、上空から監視するのが主な役目だ。

つまり、仕事で好きだけ空が飛べるのだ！

訓練はきついだろうし、有事にきちんと闘えるのかどうかという不安はあるが、それを差し引いても、任務で空を飛び回れるというのは、俺にとっては十分魅力的な職場環境だ。

「柁くんは立派だね。まだ小さいのに、御山を護る誇りと自覚を持っている。ご両親や柁の教育が良かったのかな」

なんか、梓さんが、物凄く好意的な拡大解釈をしている。

俺は単純に好き勝手に空を飛び回ってみたいだけなんだよね……

梓さんが言っているような高尚な考えは、頭の片隅にも無いわけ。

「私の村にも、柁くんと同じ年の子がいるんだけど、柁くんとは大違いだよ」

「そ、そうなの？」

「うん。哨戒天狗の訓練所に入ったら、柁くんの同期ってことになるのかな」

そうなのか。

どんな子なんだろうか。

歳の近い友人が宗太郎しかいないので、ちょっと興味がある。

「両親や周りの大人に甘やかされまくって育った子でさ、あんなんで訓練に耐えられるのか、今から心配だよ」

梓さんはそう言って、盛大な溜息を吐きだした。

「哨戒天狗の屯所の見学をしてみないかって誘ってみたけど、まるで興味なさそうだったしね」

うーん。

まあ、それは仕方が無いんじゃないかな？

俺だって、樫さんから何度も聞かされていなければ、大して興味を持たなかったかもしれない。

将来、必ずその職に就かなければならないと言われても、「そうなのかー」程度にしか思わなかっただろう。

そういう子供には、まず興味を持ってもらわないと駄目だと思う。

そう、例えば……

「樫さん、梓さん。訓練展示みたいなことって、やってないのかな」「訓練展示……？」

質問の意図が分かりかねたのか、樫さんと梓さんは、不思議そうに顔を見合わせた。

「えーっと、つまり、定期的に屯所を一般開放して、訓練の様子を見せたり、屯所の施設を公開しているのかな、って」

簡単にいえば、外の世界で自衛隊が、地域住民や国民の理解を得るために定期的に行っている、基地祭や駐屯地祭のようなイベントを、行っているのかどうか確認したかったのだ。

「そんな事はやっていないわ」

樫さんは事もなげに言い、梓さんも頷いた。

二人とも、俺がどうしてそんな質問をしたのか、分かりかねているようだった。

「そういうイベント……行事を定期的に開催して、俺たちみたいな子供に、哨戒天狗隊の訓練の様子なんかを見学して貰って、興味と理解を深めてもらうようにすれば、梓さんの所の子みたいに、今まで興味を持っていなかった子も、哨戒天狗カッコいい！！　って感じで、考えが変わるんじゃないかな？」

外の世界の場合、そういったイベントは、国民や各国の武官に自国軍隊の精強さと、いかに税金が適正に使われているかをアピールし、理解を深めてもらう事に主眼が置かれている。

その中でも訓練展示というものは、敵が攻めて来た時、どうやって対処するのかをわかりやすく、展示するアトラクションのようなものだ。

陸海空でそれぞれ見せ方は異なるが、主に「カッコよさ」をアピールし、若い世代に対するリクルートの側面が強い。

哨戒天狗隊でもそういうイベントを開催してみてはどうかと思いつたのだ。

「でも、櫛。メスの白狼天狗は志願制だから効果があるかもしれないけど、オスは将来、必ず哨戒天狗になるのだし、そこまでやって興味を持ってもらう必要はあるのかしら」

「そこだよ、樫さん。義務だから、そう決まっているからと、イヤヤ哨戒天狗になると、哨戒天狗格好良い！　俺も私も、御山を護るために粉骨碎身滅私報国するぞ！　みたいな意気込みで哨戒天

狗になるのでは、士気が違うでしょ？」

「確かに、そうね……」

「俺だって、樫さんが哨戒天狗について色々教えてくれなければ、興味を持ったりしなかったもん。宣伝は大切だよ」

「なるほど……」

そうだ、宣伝と言ったら。

「そういう行事に、大天狗様みたいな上司の天狗達を招待するのも良いかもしれない。我々はこうやって日夜厳しい訓練に励み、妖怪の山の独立と平和を守っています、みたいな事を強調すれば、隊の予算だって増やしてもらえるかもしれないし」

樫さんと梓さんは目を丸くし、意外そうな表情で俺を見つめていた。

冷静になって良く考えてみたら、10歳の子供が言う様な事じゃないよな。

思わず熱くなってしまったが、妙な勘違いをされると困るし、そろそろ自重しよう。

「なかなか面白そうじゃない」

梓さんは、興味深そうに食いついて来た。

「ねえ、樫。隊長に進言してみたら？ 私面白い考えだと思うよ」
「え、ええ」

梓さんに比べ、樫さんは、あまり乗り気では無さそうだ。

もしかしたら、訓練の様子を見世物にするという事に、抵抗を感じているのかもしれない。

それからしばらくの間、俺達3人は適当に雑談を続けていたが、
椛さんが飲み物を持ってくると言って席を外した。

「いや、すごいね、櫛くん。とてもウチの村の子と同年代とは思えないよ。さすがは、あの上有住二佐の息子さんだね」

「ど、どうも……」

頻りに感心しながら、梓さんは俺を褒めた。物凄くくすぐったい。

「あの、梓さん。俺の父さんって、結構有名なんですか？」

おずおずと尋ねると、梓さんは軽く目を見張った。

俺が親父の事について何も知らない事に驚いたのかもしれない。

「そりゃ有名だよ。白狼天狗で君のお父さんを知らない者は居ないよ」

……まじですか。

「ここの先代の飛行隊長で、吸血鬼異変で大活躍した方だからね」

吸血鬼異変というのは、俺が産まれるずっと前に幻想郷で発生した異変の事だ。幻想郷縁起にも詳しい内容が記載されていなかった。詳細は分からないが、外の世界から侵入した吸血鬼が、圧倒的な力で他の妖怪達を支配下に収め、敵対者を排除し、幻想郷の存在に関わる大事件となった異変だ。

結局、この異変は幻想郷の大妖怪とやらが、騒動の元凶の吸血鬼を叩きのめして解決したらしい。

叩きのめした大妖怪というのが誰で、叩きのめされた吸血鬼がどうなったのかは明記されていない。

「詳しい事は、直接お父さんに聞いてみると良いよ」

「は、はあ……」

ちえつ。もったいぶらずに、さわりだけでも良いから教えて欲しいな。

「……それにしても、遅いね、椀は。飲み物を持ってくるだけなのに、何を時間食ってるんだろ」

梓さんは少し腰を浮かせ、椀さんが向かった先に視線を向けた。釣られるようにして、俺も梓さんの視線の先に目を向ける。

そこには、お盆に3人分の飲み物を乗せた椀さんが居た。

傍に立っているやけに背が高く、体格のがっしりとした、厳つい顔立ちのオスの白狼天狗と何やら話をしていた。

そいつは壁に手をつき、椀さんを上から覗き込むようにして顔を近づけ、親しげに何事かを話しかけていた。

なんだ、あいつ……随分と馴れ馴れしいな。顔を近づけ過ぎだろうが。

「ありゃ、大橋だ。定期哨戒から戻って来たのかな」

大橋、というのか。

なんだか、無性に腹の中がざわざわとして落ち着かない。

俺の友好的とは程遠い視線に気づいたのか、大橋とかいう白狼天狗が俺のをほうに目を向けた。

思いのほか鋭い目付きだったので、俺は思わず顔を伏せて目を反らしてしまった。

我ながら情けない。

「あいつね、椛に気があるんだよ」

その声に俺は、はっとして顔を上げた。

俺の視線を受け、梓さんは面白そうな笑みを浮かべた。

「まあ、椛に気があるのは、大橋だけじゃないんだけどね」

端正な顔に人の悪い笑みを張りつかせたまま、梓さんは辺りに視線を巡らせた。

釣られて、俺も辺りの様子を窺う。

周囲のオスの白狼天狗達が、何とも言えない落ち着かない表情で、椛さんと大橋の会話を眺めていた。

「他のオス達は、互いに牽制しあって手を出せないでいるけど、大橋は見ての通りの強面だし、隊の中では結構実力もあるからね。そんな事はお構いなしにコナを掛けてるわけ」

もう一度、二人に視線を戻す。

大橋は、相変わらず椛さんに馴れ馴れしく話しかけていた。

いや、もしかしたら。

あれは、馴れ馴れしいというよりも、親密さの表れではないのか。腹の中のモヤモヤが、胃の辺りにどんどんわだかまっていくな。

そうこうしている内に、ようやく会話が終わったのか、椛さんがお盆を持って俺達の方に戻って来た。

「ごめんね、二人とも。大橋につかまっちゃって」

俺は椛さんから手渡された椀の中の果物の果汁と思われるものを、一息にあおった。むせた。

「だ、大丈夫！　もう、一氣にあおるからよ」

咳込む俺の背を、椀さんの手が優しく擦ってくれたが、礼を言う気にはなれなかった。

「どうしたの、椀？　何かあったの？」

「……別に」

俺の答えに椀さんは、訝しげに眉を顰めた。

「梓、何かあったの？」

「別に、何も？」

梓さんは面白そうに笑いながら、受け取った果汁を飲んでいた。

休憩の後も、俺は二人に案内されて残りの施設を見学させてもらった。

しかし、休憩所での事がずっと後を引いていたせいか、そのあたりの事を殆ど覚えていない。

やがて、見学の時間が終わり、梓さんに別れを告げ、椀さんに連れられて帰宅の途についた。

「本当にどうしたの、椀。休憩が終わってからおかしいわよ？　具合でも悪いの？」

「な、何でもないよ……」

あの大橋というオスとは、いったい、どういう関係なんだろうか。その事ばかりが頭にあり、帰宅するまでの間、柗さんとどんな会話を交わしたか良く覚えていない。

柗さんは、色々と氣遣う様な言葉を掛けてくれたんだろうけど、対応はかなりおざなりだったに違いない。

家に帰りつくまでの間、何度かその事を訊ねようとしたが、結局聞くに聞けないまま、自宅に帰りついた。

両親も、俺の様子がおかしい事に気付いたのか、心配するように訊ねて来たが、曖昧な笑みを浮かべ、何でも無いの一点張りで推し通した。

夕食もあまり喉を通らず、起きていても何もする気になれず、日記をつけた後は、さっさと布団に潜り込んだ。

そんなモヤモヤを抱えたまま、屯所の見学は終わりを告げたのだった。

妖怪の山編 19

柵の見学が終わった後、私は自室で報告書を作成していた。

見学などで部外者を屯所内に入れた場合、引率者が報告書を隊長に提出しなければならないからだ。

といっても、形式的なものなので、それほど面倒な作業ではない。

「……こんなところかしら」

私は軽く息を吐き、筆を置いた。

紙面に軽く目を走らせ、誤字脱字などの問題が無い事を確認する。それを紐で留めると、宿舎のある営内から、隊長の執務室のある区画へ向かった。

「柵……大丈夫かしら」

その道すがら、思い浮かんだのは、柵の事だった。

あの子の様子が明らかにおかしくなったのは、休憩のときに私が飲み物を入れるために席を外した時からだった。

それまでの明るさがなりを潜め、不気味なぐらいに静かになっていたのだ。

ピンと立っていた耳はぺったりと伏せられ、楽しげに揺れていた尻尾も力なく項垂れていた。

見学を再開した後もそれは変わらず、それまでは、私や梓の説明に興味深そうに耳を傾け、物珍しげに案内された場所を見回しては、私達を質問攻めにしてきたのに、案内の間中、ずっと上の空で、私の説明にも、曖昧に相槌を打ったり頷いたりするのみだった。

梓に何かあったのか聞いても、素知らぬ顔で意味深な笑みを浮かべるだけだった。

挙句に、櫛くんも立派なオスだってことじゃない？ などとわけのわからない事を言う始末だ。

結局、見学が終わった後も櫛の様子は変わらず、家まで送り届けた時も、それは変わらなかった。

しかも、出迎えた両親や私への挨拶もそこそこに、そそくさと屋内の自室に戻ってしまった。

普段なら、私が帰るまで見送ってくれるはずなのにだ。

当然、楓おばさんや楠おじさんが、櫛の変調に気が付かないわけがなく、何があったのかを私に尋ねて来た。

私自身は、心当たりが全くなかったが、親である二人なら、私では気付かないちょっとした事からでも原因が特定できるかもしれないと思い、出発した時から戻ってくるまでの間、覚えている限りの詳細を二人に話した。

心配そうに私の話に耳を傾けていた楓おばさんと楠おじさんだったが、休憩所での出来事を話し終えたとなん、合点がいったとばかりに、何かに納得した表情になり、顔を見合わせて微笑みあった。

二人は私に向かって、何の心配もいらないから、いつも通りに接してあげてくれと言うのみだった。

何だか、一人だけ蚊帳の外に置かれている気がして釈然としなかった。

そういえば、頻りに私と大橋の関係を聞いて来たけど、何か意味があったのだろうか。

「よう、樫」

そんな事を考えながら通路を歩いていると、その大橋が声をかけて来た。

上背のある大橋は、壁に手をついて、私の行く手を塞ぐようにして、上から顔を近づけて来た。

休憩所でもそうだったのだが、最近のこいつは、何を勘違いして

いるのか妙に馴れ馴れしい。

それに加え、いつの間にか私を名前で呼ぶようになっていた。

自分で言うのも何だが、私はあまり社交的では無い。故に、親しいわけでもない輩に軽々しく名前を呼ばれる事に非常に抵抗があるのだ。

「何してんだ、こんな所で」

「……見学の報告書を隊長に提出しに行くところよ」

私が何処で何をしようとした、それが大橋に何の関係があるのだろうか。

「ご苦労なこった。子供の我儘に付き合うのも大変だったろう？」

「別にそんな事はないわ。そもそも、見学しないかと持ちかけたのは私なんだし」

軽く睨みつけてやると、大橋は鼻白んだ。

バツが悪そうに私から目を反らし、小声で何事かを呟く。

「他に用が無いなら、私は行くけど？ 退いてもらえる？」

「あ、ああ……」

大橋の無駄に大きい図体の横をすり抜け、私は隊長の執務室へ向かった。

扉の前で軽く呼吸を整え、ノックと共に来意を告げる。

「犬走 樫三等狼曹であります。報告書の提出に参りました」

「入れ」

「はっ。失礼します」

扉を開け直立不動で敬礼をし、隊長のデスクに歩み寄った。

「こちらになります」

「うむ」

報告書を受け取った隊長は、ページをめくり、さらさらと目を通していく。

しばらくの間、ページをめくる音だけが聞こえる。

「ほう……」

やがて、あるページに目を通した時、隊長は僅かに目を見張り、感嘆の声を上げた。

隊長の興味を惹いたのは、柊が私と梓に話してくれた、例の訓練展示についての箇所だ。

「さすがは、あの方のご子息だ。面白い着眼点だ。検討の余地はあるかもしれない」

そう言って隊長は顎を擦り、感じ入ったように何度も頷いた。あの方というのは、もちろん、柊の父親の楠おじさんの事だ。柊が褒められているのが、何だか自分の事のように嬉しい。

「ご苦労だった、犬走三曹。下がって良し」

「はっ。失礼致します！」

私は直立不動で敬礼すると、踵を返した。

「あ、そうだ。ちょっと待て、犬走」

「はい？」

唐突に呼び止められ、隊長のほうに向きなあった。

「あー、その、なんだ……」

隊長は何かを誤魔化すように、私から目を反らし頬を掻いた。
私は不審に思い、首を傾げた。

普段、明朗快活な隊長にしては珍しく、妙に齒切れが悪い。

「その、だな。私が昔世話になった上官に息子さんが居てだな」
「はあ……」

猛烈に嫌な予感がしてきた私は、徐々に自分の頬が引き攣っているのを感じた。

「そろそろ、身を固めようとしているわけだ、うん」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「いや、あれだ！ 別にな？ 所帯を持ってと言っているわけではなく、会ってちょっと話をしてだな……」

思わず声を荒げる私を宥めるように、隊長はまあまあとばかりに両手を上げた。

「お見合いをしろ、って事じゃないですか！」

「まあ、そうなんだが……」

隊長はじつと私の目を見つめる。

「それとも、懇意にしているオスでも居るのか？」

「い、いませんけど……」

「なら、問題無かろう!」

じよ、冗談では無い。

私は結婚はおろか、色事すら全く考えては居ないのだ。

いずれはそうなるだろうが、哨戒天狗の仕事にやりがいを感じているうちは、そんなつもりは欠片も無い。

ましてや、例え形だけだとしても、身も知らないオスとそんな席を設けるなんて願い下げだ。

しかし、困った。断るにしても、何かしらの口実が必要だ。

職務上の命令では無いので、もちろん突っぱねる事は出来る。しかし、それでは色々と角が立ち、後々面倒なことにもなりかねない。組織とはそういうものだ。

焦りに焦った挙句、私はとんでもない事を口走ってしまった。

「つ、付き合っているオスは居ませんが! 私には許嫁が居ます!」

「ほう……? 誰なんだ? うちの隊のオスか?」

「く、櫛がそうです!」

「な、なんだって!?!」

隊長は頓狂な声を上げ、目を丸くした。

それはそうだろう。

10歳の子供が許嫁だなんて聞いたら、誰だってそうなる。私だってそうなる。

しかし、ここで押し通せなければ、見合いをさせられてしまう羽目になるのは明白だ。

「た、確かに、今はまだ子供です。ですが、櫛はあの吸血鬼異変で活躍した上有住二等狼佐の子です。いずれ成長すれば、良いオスになる素質は十分にありますから!」

内心で櫛やおばさんおじさんに謝罪しつつ、私は胸を張って答えた。

「そうか……まあ、相手が上有住二佐のご子息なら、仕方が無い。先方も諦めてくれるだろう」

溜息交じりの隊長の言葉に、私は胸を撫で下ろした。

現在では予備役に退いているとはいえ、楠おじさんの知名度は大きい。

何だか、虎の威を借る狐みたいで情けないけど、この際、背に腹は代えられない。

「た、隊長。この事は、内密にお願いします」

「ああ、分かっている。そんな事が隊内に知れ渡れば、オスが暴動を起こすからな……」

「……は？」

「いや、何でも無い。下がっても良いぞ」

「は、はっ！ それでは、失礼します！」

必要以上に大きな声で言い、隊長が次に何か言いだす前に、そそくさと隊長室を辞した。

廊下に出た私は、意に沿わないお見合いを断る事が出来た安堵感と、断る為の口実とはいえ、櫛をだしに使った罪悪感の入り混じった、深いため息を吐いた。

今更ながら、もっとうまい口実があったのではないかと悔やまれるが、後の祭りである。

隊長は内密にしてくれると言っていたし、それを信じる事にしよう。

無理矢理自分自身を納得させると、私は営内の宿舎に戻って行った。

この時の私の出まかせが、後々ともない事を引き起こす事になるのだが、もちろん、その時の私を知れる由も無かった。

「——んむ……」

目が覚めると、真夜中だった。

時計に目をやると、時間の針は深夜の3時を指している。

一度布団に入ると朝まで目を覚まさない俺だが、中途半端に早寝してしまったせいか、こんな時間に目が覚めてしまった。

もぞもぞと寝返りをうち、布団を引っ被る。

暫くの間、そうやって布団の中でごそごそやっていたが、一度去ってしまった睡魔は中々やってこない。

俺は早々に二度寝を諦め、隣室の両親を起こさないように注意しながら縁側に出た。

空を見上げると、そこには満天の星空が広がっている。

何度見ても、その威容は圧倒的としか言いようが無いほどに素晴らしい。

それだけに、昨日の自分の情けなさが思い返されて、暗澹たる気分になる。

「ああ、くそっ」

言いようの無い苛立ちに、癩癩でも起したように、バリバリと頭

をかきむしった。

「柊？ どうしたんだ、こんな夜中に」

背後から掛けられた声に、ぎくりと身体を竦ませる。
恐る恐る振り返ると、そこに立っていたのは親父だった。

「夜空を見ていたのか」

親父は咎めるでもなく、俺の隣に腰を降ろした。

「柊ちゃん、心配してたぞ？」

「う、うん……今度会ったら、謝る……」

「そうしなさい」

消え入るような声で返事をする、親父は苦笑しつつ、宥めるように俺の頭をポンポンと叩いた。

「休憩所で柊ちゃんと話していたオスだけだな？ 柊ちゃんに聞いたら、ただの同僚だって言ってたよ」

「ふ、ふうん……」

「だから、心配する事はないぞ」

「別に……」

俺は探るような親父の視線を避けるようにそっぽを向いた。

「恥ずかしがる事はないぞ、柊。父さんにも同じ経験があるからな」

親父は、昔を懐かしむような口調で呟き、遠い目で夜空を見上げた。

思わず親父の顔を注視すると、それに気付いた親父は、照れ臭そうに笑った。

「何しろ、母さんが父さん……お前のお爺さんと話をしていただいで、今のお前みたいになったからなあ」

親父……母さんの父親に嫉妬した事があるのか。

身内にまで嫉妬するとかどんだけだよ。

もつとも、母さんに意図的にそう育てられた可能性も考えられるが。

「それに比べれば、お前のなんて可愛いものだ」

ま、まあ。確かにそうかもしれない。

少なくとも俺は、栲さんが自分の父親と仲良くしていたからと言って嫉妬したりはしないだろう。

「よし。ちょっと待っている」

そう言い残し、親父は立ちあがり、廊下の奥に消えて行った。

暫くすると、親父は手に何かを持って俺の所に戻って来た。

親父の手にあるものを理解した俺は、目を丸くした。

「こういう時は、酒でも飲んで良い気分になって寝ちまうに限る」

親父は爽やかな笑顔で微笑んだ。

呆氣に取られる俺を尻目に、鼻歌なんぞを口ずさみながら、盃に並々と酒を注いでいく。

「さあ、飲め！」

表面張力で盛り上がった盃を、俺の目の前に差し出した。

「ちょ、ちょっと待ってよ、父さん！俺はまだ子供だよ！？」

「気にするな！父さんもお前ぐらいの時は、ガンガン飲んでたぞ！」

マジかよ。何てガキだ。

「そして、酔った振りをして母さんに抱きついたりしてな！それは実に良いものだ！」

セクハラじゃねーか！最低だ！

「というわけで、一気にグーッと行け、グーッと！」

何が「というわけで」なんだか。

しかし、このぶんだと、飲むまで解放してくれそうにない。

昔話なんかでは、天狗は酒に滅法強いって聞くし、子供とはいえ、天狗の俺にはある程度アルコールに対しての耐性があるのかもしれない。

俺は、恐る恐る、盃に口を寄せ、舐めるように啜った。

その瞬間、親父の顔や辺りの景色が、ムンクの叫びのようにぐにやりと歪み。

俺は呆気なく意識を失った。

翌朝、親父が母さんにシコタマ怒られたのは言うまでもない。

妖怪の山編20

村の中に小さな社がある。

地方の田舎なんかには、自治体が管理している無人の神社があったりするが、あんな感じのもので、村の住人が定期的に管理を行っている。

秋 静葉・秋 穰子という姉妹の女神を祀っているお社で、姉である静葉様が秋を司る神で、妹である穰子様が豊穰をつかさどる神だ。

この姉妹の神様、特に妹神の穰子様は、豊穰を司るということもあり、人里でも信仰が厚いらしい。豊穰の女神ということから転じて、子宝や安産の神としても崇められており、俺の両親も熱心に御参りをしていたんだそうだ。

俺はまだ見た事は無いが、両親によると、二人とも黄金色の髪をした可愛らしい少女で、姉妹なので容姿は良く似ており、姉神のほうは髪飾りを付けていて、妹神のほうは帽子をかぶっているのだそうだ。

この二柱の神様はなかなかフレンドリーらしく、人里・妖怪の里を問わず、収穫祭に顔を出して、里の人妖と飲み食いしていることがあるという。

俺が産まれた後も、両親はこの二柱を篤く信仰しており、定期的に畑で採れた農作物（主にサツマイモ）なんかを奉納していたりする。

12歳の誕生日——元服を迎えた俺は、両親と共に、氏神社でもあるその社に、お供え物を持って報告に訪れた。

ご神徳により授かったこの子（俺のことね）が、無事に成人する事が出来たので、ご報告申し上げますという、いわゆるお礼参りみたいなものだ。

もっとも、何か特別な事をするわけではなく、神前に御神酒など

の供え物をささげ、二礼二拍手一礼、普段と変わらない参拝を、家族で行うというだけだ。

そんな慎ましい成人式を恙なく終え、俺達は家路についた。

「おう、そうだった」

家まであと少しというところで、親父が何かに気付いたように立ち止った。

「楓。悪いが、先に帰っていてくれないか？ 櫛も一人前になった事だし、見せておきたいものがあるんだ」

俺に見せたいもの？

一体なんだろうか。

見上げる俺の視線に気づいたのか、親父は微笑んだ。

いつもの能天気な笑顔ではなく、今までに見た事の無い、どこか陰りのある謎めいた笑みだった。

「……そう。分かったわ」

母さんは、親父の表情で何かを察したのか、理由は聞かず、あまり遅くならないようにねと微笑み、俺達に背を向けると、家の方に歩いて行った。

「さあ、櫛。着いて来なさい」

親父は、俺の返事も待たずに、家とは逆の方向にずんずん歩いて行く。

俺は慌てて親父の後を追った。

俺達は、集落のある村の中心部からどんどん外れ、鬱蒼とした木

々が生い茂る村の外れに向かって行った。

村の中は隅々まで知ってはいるが、それでも村の外れの辺りの事は殆ど分らない。

迷子になったという「前科」もあるせいで、近寄る事を固く禁じられているからだ。

周囲の様子が、次第に見覚えの無い景色に変わって行き、いったい、何処に連れて行かれるのか、だんだん不安になってきた。

「父さん。何処まで行くのさ」

「もうすぐだよ、もうすぐ。時に櫛。椀ちゃんとは仲良くしているか？」

俺の不安を感じ取ったのか、親父がそれを払拭するような優しい口調で訊ねて来た。

「もちろんだよ」

俺は躊躇なく答えた。

屯所の見学の一件で、少し会うのが気不味かった時期があったが、それも今ではすっかり元通りになっている。

「まあ、普段のお前達を見ていれば分かるがな」

そう言って親父は、頬を緩ませた。

「元服を迎えて、大人になった心境はどうだ？」

「……良く分らないよ」

正直、全く実感がわかない。

誕生日を迎えてひとつ歳を取っただけ、という感覚の方が強い。

これを機に、何か特別な能力にでも目覚めるとかいうのなら話は別だけど。

「ははは……そうだろうな。父さんも同じだったよ」

ひとしきり笑った後、親父は意味ありげに、にやりと口の端を吊り上げた。

「もうしばらくすると、御山から哨戒天狗の訓練所へ入所するように通達が来る。そうすれば、暫く櫛ちゃんとも会えなくなる」

「う、うん」

「だから、今のうちにうんと甘えとくと良いぞ？　なんなら、筆下ろしもしてもらったらどうだ？　父さんも、入所前に母さんにな……フヒヒ」

こ、このエロ親父……

そんな下らんエロトークを聞かせるためだけに、わざわざこんな所まで連れて来やがったのかよ。

文句の一つでも言っただろうと口を開きかけたところで、不意に親父が立ち止った。

「着いたぞ。ここだ」

目の前の光景に、喉元まで出掛かっていた言葉を飲みこんだ。

木立の中、ぽっかりと開けたようになっていたそこには、俺の腰ぐらいの高さの石が、等間隔に規則正しく、整然と立ち並んでいた。

「は、墓……？」

予想外の光景に、俺は喉の奥から絞り出すようにして呟いた。

木々の間から差し込む暖かな木漏れ日のおかげで、墓地特有の陰鬱とした雰囲気は、殆ど感じられない。

墓石自体は長い風雨に晒されたためか、少し古ぼけてはいるが、周りに雑草などは生えておらず、誰かが定期的に手入れをしているのが見て取れた。

「俺に見せたいものって……これのこと……？」

「……そうだ」

親父は厳かに頷いた。

「ここに眠っている者の殆どは、吸血鬼異変の時、父さんの部下だった者達の墓だ」

呆然とする俺に、親父はぽつりぽつりと、当時の事を話してくれた。

吸血鬼異変が起きた頃、幻想郷では、元凶となった吸血鬼が他の妖怪達を支配下に置いて、着々と勢力を伸ばしていたが、妖怪の山では特に具体的な対策は取らず、それを傍観していた。

長く平和な時期が続いていた事もあり、妖怪の山の上層部は、事態を楽観的に捉えていたのだ。

それどころか、上層部の一部には、「閉鎖的な妖怪の山を外つ国の妖怪に開放しよう!」「妖怪の山は天狗や河童だけのものではない!」「妖怪の山開放は愛のテーマだ!」など、噴飯ものの意見まで飛び出す始末だった。

何時の時代、何処の世界にも、救いようの無いお花畑脳はいるものらしい。

上層部がそんな感じなので、哨戒天狗隊も動くに動けなかったわけだが、哨戒天狗隊の中でも、まさか幻想郷最強の種族である天狗に喧嘩を売るわけが無いという、希望的観測が大勢を占めていた。

「俺も同じ考えだった。まさか、天狗に戦を仕掛ける暴挙に出るわけがないだろうと、高をくくっていたんだな」

しかし、幻想郷の妖怪の大半を支配下に置いて調子づいていた吸血鬼は、何の前触れもなく妖怪の山に侵攻を開始した。

準備不足だった妖怪の山は、完全に虚を突かれる形となり、哨戒天狗隊も組織だった反撃が出来ないまま、各地で敗退を重ねていった。

そんな中、水際で踏みとどまり、真っ先に反撃を開始したのが、当時親父が隊長を務めていた第六十四哨戒飛行隊だった。

数で圧倒的に勝る敵に対し、親父の隊は地の利を生かした、少数精鋭によるゲリラ戦を展開した。

奇襲・伏撃・補給線の寸断・指揮官クラスの妖怪の暗殺などで、吸血鬼の元に下った妖怪達に多大な出血を強いた。

「みんな必死だったよ。俺達の背後にはこの村があったからな。何しろ、俺も含め、隊士の殆どはこの村の出身だった」

妖怪の山を護ろうなんて崇高な信念は無かった。

皆、家族や友人、生まれ育った場所をを護りたい一心で、ただひたすらに戦ったと親父は続けた。

親父達の奮闘が功を奏し、その間に態勢を立て直した他の隊が各地で反撃を開始した。

吸血鬼の下に降った妖怪の多くは、強い者に従い、言われるがままに、勢いに乗って攻め込んできただけの烏合の勢だった。個々の妖怪の力だけを見れば、天狗の力を上回る者も多かったが、混乱から回復し、組織力と統制力を取り戻した天狗の敵ではなく、程なく妖怪の山から、吸血鬼の手先となった妖怪達は駆逐された。

その直後、元凶となった吸血鬼は、大妖怪とやらの叩きのめされ、

異変は終息に向かったのだという。

ちなみに、吸血鬼の侵攻前に友愛（笑）論を唱えていたお花畑脳は、吸血鬼に内通していた裏切り者だったらしく、異変終結後、外患誘致罪として粛清されたそうだった。

「隊は殆ど壊滅に近い状態だった。無傷だった者は誰一人おらず、隊士の半数以上が命を落とした」

この世界での戦争（と言えるのか分からないが）に現代戦の定義を当て嵌めるのも間違っている気がするが、通常、部隊の3割に損害が出れば、組織的な戦闘は不可能となり「全滅」と判定される。

5割以上の損失となれば、それは「壊滅」となり、部隊そのものが瓦解したとみなされる。

そんな状態になっても、継戦能力を失わなかったのは、隊士ひとりひとりの士気が高かった事もあるだろうが、それ以上に、指揮官としての親父が優秀だったからでもあるだろう。

事実、異変終結後、親父は暫く英雄扱いだったらしい。

「……笑えるだろう？ この墓の数だけ、俺は部下を殺したんだ。それを英雄扱いと来たものだ」

妖怪の山としては、親父を偶像化する事で、自分達上層部の見通しの甘さから起きてしまった今回の惨事から、天狗や河童の目を反らしたいという打算もあったのだろう。

華々しい成果だけを強調し、過去の致命的な失敗を無かった事にするやり口は、外の世界でもよくあることだ。

そんな上層部の思惑に嫌気がさしたのか、親父は現役を退いて予備役に入り、現在に至るのだという。

「ここで眠っている者達は、自分の護るべきものの為に戦って死んだ。

柵。今のお前に、護りたいものがあるか？」

墓石と墓石の間をゆったりとした歩調で歩みながら、親父は俺に問いかけた。

「俺は……」

真っ先に思い浮かんだのは、柵さんの顔だった。
あの人を護りたい。助けになりたい。

「俺は、分からないよ……」

しかし、口から出たのは別の言葉だった。

柵さんを護りたいなんて、大それた事は口にできなかった。
散々迷惑をかけて、下らない事で臍を曲げて、無用な心配ばかりをかけて。

そんな様のくせに護るだなんて、おこがましい。

「……そうか。お前にはまだ早いかもしれなかったな」

そう言って微笑した親父の顔を、何となく直視できず、俺は顔を反らした。

その先に、他のものとは明らかに違う墓石があった。
等間隔で並んでいる他の墓とは違い、まるでその二つだけが、ぴったりと寄り添うようにして立っているのだ。

そして、そこに刻まれた墓碑銘。

掘られていた文字は殆ど掠れかけていたが、「犬走」という二文字だけは、はっきりと読み取れた。

「……柵ちゃんの両親の墓だ」

俺の視線に気づいたのか、親父は静かに言った。

柁さんの父親は、親父の幼馴染で、隊では親父の副官的な立場だったらしい。柁さんのお母さん――俺の母さんの妹なんだが、彼女は隊士ではなく、負傷者の後送や食料の補給支援など、村の有志で構成された後方支援要員の一人だったそうだ。

隊の後方支援は、村の住民の殆どが参加しており、俺の母さんも参加していたらしい。

ジュネーブ条約なんてものがあるわけの無い幻想郷、そんな非戦闘員も、容赦なく妖怪達の攻撃の的になった。

その結果、戦闘に巻き込まれ、死傷する者も少なくなかった。

そして、その死者の中に、柁さんのお母さんも含まれていたのだ。

「柁ちゃんは今のお前くらいの年頃だった。両親の戦死を告げた時のあの子の顔は、今でも良く覚えている」

俺は墓石を凝視したまま、親父の独白を聞いていた。

「みすみす両親を死なせてしまった俺を責めるでもなく、悲嘆に暮れて泣き伏せるでもなく、顔を上げ真っ直ぐに俺を見つめ、俺の言葉聞いていた」

むしろ、悪し様に罵ってくれた方が気が楽だったと、親父は語った。

妹に先立たれた母さんも、親父を責めることは無かった。

それだけに、親父の自責の念は、相当なものだったのだろう。

その後、柁さんは、両親の喪があけるや、哨戒天狗に志願した。

母さんや親父を始め、村の皆は猛反対したらしいが、頑として聞かなかったらしい。

「椛ちゃんが哨戒天狗を志した理由は分からない。両親の背を追いたかったのかもしれないし、彼女なりに護りたいものが出来たからなのかもしれない」

椛さんや、いつもヘラヘラしている親父に、そんな過去があったなんて知らなかった。

言葉を無くして立ちつくしている俺の肩に、親父が手を置いた。

「椛。お前にも、いつか必ず、大切なものを護る為に闘わなければならない時が来る」

俺は戸惑いつつも頷いた。

「その時、立ち向かうか、逃走するか。あるいは、どちらも放棄して諸手を上げるか」

ここに眠っている皆は、大切なものを護る為に闘って命を落とした。

俺に、そんな格好良い事が出来るだろうか。

「その時が来たら、どんな結果になろうとも、後悔だけはするな。そして、自分の選択に最後まで責任を持て。いいな？」

「……はい」

「よし！」

俺の返事に、親父は破顔一笑した。

「湿っぽい話はこれで終わりだ！ さあ、家に帰るぞ。楓達が宴会の準備をしているからな！」

「え、宴会？ 何の……？」

「もちろん、お前の元服祝いに決まってるだろう？ さあ、帰るぞ！」

さっきまでのシリアスな雰囲気はどこへやら、いつもの脳天気な親父に立ち戻っていた。

その変わり身の早さに軽く眩暈を覚えつつ、スキップでもしそうな軽い足取りの親父を慌てて追いかけた。

今日は、櫛の12歳の誕生日——元服の日だ。

生憎、任務の為、一緒にお礼参りに行く事が出来なかったが、せめて一言お祝いの言葉だけでもと、簡単な祝いの品を手し、櫛の家を訪れた。

「……………」

家の庭で繰り広げられているどんちゃん騒ぎに、私は啞然とした。あちこちには、空になった酒樽や酒の肴が無造作に転がり、幾人かの村の天狗達が、車座になって浴びるように酒を飲んでいる。中には、酔い潰れて死体のように転がっている者もいた。

私は頭痛を堪えるように、こめかみを揉み解した。大方の予想はついている。

櫛の元服祝いと称して村の皆が集まり、当初の目的そっちのけで宴会が始まってしまったのだろう。

当の櫛や両親はどこだろうと、辺りを見回していると、どんとい

う衝撃と共に、背後からぶつかるものがあつた。
勢いにたたらを踏みながら、肩越しに振り返り、その正体に目を丸くした。

「ふへへへ……杭さんだー」

顔を真っ赤にして、今まで見た事もないくらいに、だらしく相好を崩した柵がいたからだ。

「杭もみもみ」

「……！！ こ、こらっ！ ど、どこ触っているの！！」

これが隊の同僚のオスだったりしたら、容赦なく投げ飛ばし、肋骨の二・三本は覚悟してもらうところなのだが、さすがに柵相手にそんな手荒な真似は出来ない。

私達に気付いた何人かが、「いいぞ、もっとやれ」だとか「さすが楠の息子だ」などと、無責任な歓声を上げて囃し立てた。

「い、いい加減にしない、柵。酔った勢いでメスに悪戯するなんて、オスとして最低の行為よ」

「いいえ、酔っていません。酔った振りをして、いやらしい事をしているだけです」

出来るだけ冷静を装い咎める私に、柵は一瞬だけ真面目な顔になつて答えた。

言葉を失つて哑然としている私に構わず、柵は甘えるようにして私に抱きつき、スリスリと頭を擦りつける。

これで、両手が私の胸を弄っていなければ、犬がじゃれついているみたいで、可愛らしくはあるのだが……

「本気で怒るわよ、櫛！」

櫛を引き剥がそうともかく私を肴に、周りの野次馬達は酒を嘗めつつ、やんややんやと大騒ぎしている。

挙句には、そのまま押し倒せなんて、ふざけた事を言い出す始末だ。

「あら、椀ちゃん！ 来てくれたのね」

いい加減、野次馬共を怒鳴りつけてやろうかと思っていた矢先、野次馬を掻き分けながら、楓おばさんが現れた。

お酒が入っているのか、ほんのりと頬が色付いており、何とも言えない色気のようなものを醸し出している。

「か、楓おばさんっ！ いったい、櫛にどれだけ飲ませたんですか！？」

櫛にしがみ付かれたまま、私は悲鳴のような声を上げた。

おばさんは頬に手をあて、少し困ったように小首を傾げた。

「それがね、ほんの御猪口一杯だけなのよ。いくら成人したからといって、本格的に飲ませるわけには行かないでしょう？」

「た、たった御猪口一杯で……？」

「そうなのよ」

それはそれで心配だ。

いくらなんでも弱過ぎる。

隊に入れば、宴会も頻繁に行われる。酒が入るたびにこんなになっ
ていては、話にならない。

「ん……む……」

不意に柵の動きが緩慢になり、ぐったりと私にもたれかかって来た。

慌てて身体を支えると、柵は幸せそうな寝息を立てて眠りに落ちていた。

「あら。眠っちゃったみたいね」

「あーもう！」

まったく、手の掛かる子だ！

こんなことで、この先始まる哨戒天狗の厳しい訓練に耐えられるのだろうか。

先行きに不安を感じながら、私は柵の身体を抱え上げた。

「……おばさん。柵を家の中に運んできます」

「来たばかりでごめんなさいね。お願いしても良いかしら？ 私は、酔い潰れてどこかに埋もれている楠くんを発掘してくるわ」

楠おじさん……息子を放置して何をしているんですか。

なんだか最近の柵は、どんどんおじさんに似て来ている気がするし、非常に心配だ。

柵を布団の上に寝かせ、ようやく一息ついた。

庭からは、風に乗って宴会のどんちゃん騒ぎが聞こえてくる。

宴はまだまだ続きそうだが、参加する気になれなかった私は、特に理由もなく、柵の安らかな寝顔を見つめていた。

「ん……柵、さん……」

僅かに柵の口が開き、私の名前を呟いた。

布団の中から柵の手が伸び、まるで私を探すように中空をさまよう。

「はいはい。どうしたの？ 私はここにいるわよ」

寝惚けているだけだと知りつつも、私は苦笑しながら答えた。

すると、私の声に反応するように柵の手が動き、私の手を掴んだ。てっきり、寝惚けているものとばかり思っていた私は、少し驚いてしまった。

「護るから……」

「えっ」

「柵さんは、俺が護るから……」

柵の呟きに、私は自分の頬が緩んでいくのを抑えられなかった。

「生意気ね……十年早いわよ」

御猪口一杯でこんなになっってしまうクセに。

寝言とは言え、一端のオスみたいな事を言っ

「ふふ……精々期待させてもらうわ」

柵の手をそっと布団の中に戻しながら、私は呟いた。

——お父さん。お母さん。

ようやく柵にも、護りたいものが出来ました。

妖怪の山編 21

「似合うわよ、櫛。昔のお父さんを見ているみたい」

姿見に全身を映しながら、俺は天狗の象徴とも言うべき頭襟とぎんの顎紐を締めた。

母さんは嬉しそうに微笑みながら、背後から俺の肩に手を置いて、感慨深げにしみじみと頷いている。

目の前の姿見に映し出される自分の格好は、山伏を思わせる鈴懸すずかけと結袈裟ゆこげさに黒と青のダンダラ模様の袴という、オスの哨戒天狗の姿だ。

元服から数カ月たったある日。

御山から、哨戒天狗の訓練所へ入所するようにとの通達が届き、俺はいよいよ、村を離れる事になった。

その通達を持ってきたのが、文さんと同じ鴉天狗だったんだが、これがまた非常にムカつく奴だった。

白狼天狗の上司だからなのか知らないが、終始こちらを見下した態度で、一方的に用件を告げ、放り投げるように書簡を渡すと、さっさと帰ってしまったのだ。

まあ、どうでも良い事だけど。

「どこからどう見ても、立派な哨戒天狗に見えるわよ」

「そ、そうかな……」

母さんは手放しに喜んでいるが、俺としては、服に着られているという感覚が強く、なんだか落ち着かない。衣装のサイズが、少し大き過ぎるというのもあるだろう。

成長した時の為に大きめに作ったと母さんは言っていたが。

「それじゃ、皆の所に行きましようか」

「う、うん……」

高下駄を履き、その慣れない感覚に四苦八苦しなから、母さんに続いて玄関を出る。

その瞬間、周りからおおっつという歓声と拍手が沸き起こり、俺は思わず身体を強張らせた。

家の外には、栴さんや桔梗さんを始めたとした村の天狗達だけではなく、文さんやにとりさん、宗太郎の姿まであった。

皆、俺の見送りに来てくれたらしい。

感激する半面、見世物になっているような気がして、少し気恥ずかしい。

「栴坊^{ぼん}も、いよいよ哨戒天狗か。いやあ、時間が過ぎるのは早いな」
「栴ちゃんの後ろをちょこちょこ付いて回っていた頃が懐かしいわね」

村の大人達のそんな会話が耳に入った。

……俺って、そんな感じだったんだろうか。

「はい、栴クン、こっち向いて」

横合いから掛けられた文さんの声に、反射的にそちらに顔を向ける。

その途端、眩いフラッシュが視界を覆い、思わず目を細めた。

「いい！ いいわよ、栴クン！ 凛々しいわ！」

「……文さん。俺なんか撮っても、新聞のネタにならないでしょ」

立て続けに浴びせられるフラッシュに、辟易しながら言った。

「どんなものでも、どんな事でもネタにする。これが真のジャーナリストというものよ！」

「……つまり、好き勝手に捏造するってことですか？」

「ジャーナリスト宣言よ！」

今度から、「文々。新聞」をアサ〇ル新聞って呼ぶぞ。

「まあ、冗談はともかくとして。新人哨戒天狗の名簿作成用の写真を撮ってるの。お仕事よ、お仕事」

本当かよ。何かうそくさいんだよなあ。

……まあ、いいか。

なんだかんだ言って、この人には色々とお世話になったし。

主に、櫛さんの写真集とか。

「いよいよだね、櫛くん」

「く、櫛……」

声を掛けて来たのは、にとりさんと宗太郎だった。

にとりさんは普段通りだったが、人見知りの気がある宗太郎は、周囲の喧騒が気になるのか、半ばにとりさんの陰に隠れるようにしている。

「気負い過ぎても仕方が無いし、あまり無茶はしないで、適度に頑張るよ」

「うん。ありがとう、にとりさん」

にとりさんらしい激励(?)の言葉に、俺は思わず笑みを浮かべた。

「げ、元気でね、柊……」

「お、おう……」

宗太郎が、目を潤ませながら、俺の手をきつく握りしめた。

「ぼ、僕の事、わ、忘れないでね……」

「お、大袈裟だな。3年経てば、また会えるだろう？」

今生の別れじゃあるまいし。

俺達妖怪に取って、3年なんて、あっという間だろう。

それに、鴉天狗が持ってきた書簡には、半年に1回は里帰りが許可されるとあったし、3年待たなくても会う機会はある。

それにしても、さっきから文さんのカメラのフラッシュが鬱陶しい。

名簿作成用っていうなら、2，3枚撮れば十分だろうに。

「柊」

柊さんの声に、俺は振り返った。

微笑みながら俺を見つめる柊さんの表情は、嬉しそうでもあり、どこか淋しげでもあった。

「いよいよね」

柊さんは俺の法衣の襟元を直しながら、しみじみと呟いた。

その温もりと感触が心地良い半面、これからしばらく会えなくなる事を思うと、何とも言えない淋しさを覚える。

思えば、柊さんには生まれてこの方、迷惑をかけてばかりだった。いつか、その恩を返せる時が来るんだろうか。

この人を守るぐらいになれるんだろうか。

「ほらほら、頭襟がずれているわよ」

「あ、いけね……」

慌てて頭上の頭襟の位置を直し、顎紐を締め直した。

それを眺めている周囲からの微笑ましそうな視線が恥ずかしい。

「忘れ物は無いわね？」

「大丈夫だよ」

俺は、背負っている背嚢を親指で指し示した。

それには、着替えと、訓練所までの地図、筆記用具などの簡単な私物が入っている。

そして、もちろん、柎さんの写真集も一番奥に収まっている。

「もし、途中で鬼熊に出会った時は、空中に逃げなさい。あいつらは空は飛べないから。休憩する時は、逃げやすいように、高い木の上で休めば安全よ」

「分かった」

「訓練はとても厳しいけど、最後まで諦めては駄目よ」

「はい」

「よし。良い返事よ」

柎さんは満足そうに微笑むと、俺の頭を優しく何度か撫で回した。完全に子供扱いだが、まあ、仕方が無い。

柎さんからすれば、おしめを取り換えた事すらある俺なんて、幾つになっても手のかかる弟みたいなもんだろう。

「あれ、そういえば……」

俺は辺りを見回した。

こういう時に、一番騒がしいはずの、親父の姿がどこにも見当たらないのだ。

「父さんは、何処に行ったの？」

「変ねえ……さっきまで、近くに居ただけれど……」

椀さんが不思議そうに首を傾げたその時だった。

「おおおい、柵ー!!」

聞き覚えのある大音量の大声と共に、人垣を掻き分けるようにして親父が姿を現した。

今までどこで何をしていたのか、身体中埃塗れだった。

「もう、楠くんったら。何処に行ってたの？」

母さんが軽く咎めるように言うと、親父は埃まみれの顔を上げ、爽やかな笑みを浮かべた。

「納屋でこれを探していたんだ」

親父が差し出した手に握られていたのは、鉢巻のような細長い、妙に黄ばんだ布きれだった。

「息子よ！　これを持てい！」

「何これ……って、臭ッ!？」

眼前に突きだされたそれに不用意に顔を近づけ、あまりの異臭に

鼻を覆って仰け反った。

臭氣が目に染み、涙が滲んできた。

「これはな、我が上有住家の男子が、哨戒天狗の任に就く際、必ず身につけていた由緒正しい鉢巻だ。歴代上有住家男子の血とか汗とか涙とか、その他色々なものが染み込んでいる素晴らしい逸品だ！」

絶賛引きまくっている俺を余所に、親父は得意げに高説を垂れる。

「というわけで、これをお前に託そう！ 必ずや、ご先祖様がお前にご加護を……」

「ありがとう、父さん。超いらねえ」

満面の笑みを浮かべながら、全力でお断り申し上げた。

うずくまって「の」の字を書き始めた親父を何事も無かったかのようにスルーし、見送りに来てくれた村の皆への挨拶回りを済ませる。

名残惜しかったが、そろそろ出発の時間が迫っていた。

初日から遅刻なんてしたら締まりが無い。

「えー、それでは、お集まりの皆様方！」

桔梗さんの声に、皆がそちらを注目する。

「上有住 柵くんのご活躍とご健勝を祈念し、万歳三唱でお見送りをお願いします！」

桔梗さんの「万歳！」の第一声を皮切りに、万歳の大合唱が始まった。

……なにこの、出征兵士を見送る図。滅茶苦茶恥ずかしい。

ちなみに万歳は、手のひらを前にするのではなく、耳と平行にして手を上げるのが正しいやり方だ。

手のひらを前にすると、それは降参します、を意味するので注意が必要だ。

どうでも良い事だけど。

「そ、それじゃ、行ってきます！」

必要以上に大きな声で叫び、椀さんの真似をして敬礼をすると地面を蹴った。

皆からの激励の声を背に、俺は空高く飛び上がった。

「……おっかしいなあ」

俺は、クヌギの巨木のとっぺんに腰を降ろし、背囊から取り出した地図と睨めっこをしていた。

威勢よく村を飛びだしたものの、早速道に迷ってしまったのだ。

いちおう、地図にはランドマークが示してはあり、それを目印に飛んできたはずなんだが、いつの間にか、自分の現在地が分からなくなってしまったのだ。

「あそこに小さく見えるのが、大蝦蟇の池だな……そこからこっちに向かって……こう行って……うーん……」

地図に示された通りに飛んできた筈なんだが、目的の訓練所は影も形も見えない。

一度村に戻ろうかという考えが頭をよぎったが、あれだけ盛大な

見送りを受けた後で出戻るなんて、あまりにも格好悪い。

もっとも、戻ろうにも、村がどっちにあるのかわからない状態だったりするが。

途方に暮れて、四方を見回していると、かなり遠くの平野部にいくつかの建物が密集している箇所を発見した。

白狼天狗の視力が無ければ、気付かなかっただろう。

注意深く観察してみると、いくつかの建物からは煙が立ち上っており、そこで生活が営まれている事が分かった。もしかして、あれが人里だろうか。

こんなときにも関わらず、俺は人里に行ってみたいという欲求が湧き上がっていった。

考えてみれば、幻想郷の人間には一度も会っていないのだ。

この世界の人間が、どんな暮らしをしているのか見てみたい。

「……いやいやいや。やっぱり駄目だ」

迷子になっている最中で、そんな事をしている余裕は無い。

それに、妖怪がいきなり人里に現れたら、驚かれるに決まっている。

紫さんは、「妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治するもの」と言っていたし、もしかしたら、退魔師みたいなのが出て来て、退治されるかもしれない。

俺は頭を一つ振って、気を取り直すように、再び地図に目を落とした。

その時、地上のほうから物音が聞こえ、俺はそちらに目を向けた。

俺が注視する中、ガサガサと茂みが揺れ、その中から一人の女の子が飛び出してきた。

黒の山高帽と黒い衣装、それらとは対照的な純白のエプロンドレスという、見事にモノクロな服装だった。手には、まるであつらえ

たように竹箒を手をしている。

山高帽から溢れる少しクセのあるくすんだ金髪が、人形のように可愛らしい少女の顔立ちに良く似合っていた。見た目の年齢は、俺と同じぐらいだろうか。

「……魔女っ子？」

思わずそう呟いてしまうほどだった。

茂みから飛び出してきたその女の子は、地面に足を取られたのか、派手にすっ転んだ。それでも、手に持った箒は手放さない。よほど大切なものらしい。

痛そうに顔を顰め、膝を擦る女の子の背後の茂みが激しくざわめいた。

物音に気付いた女の子が振り返り、その表情が恐怖に歪んだ。

おそらく、俺の顔も、似たような表情になっていただろう。

茂みを掻き分けて現れたそいつは、俺が迷子になった時に襲われた、鬼熊とかいう巨大な熊の妖怪だったからだ。

迷子になって、こいつに食われかけた時の恐怖がフラッシュバックのように蘇り、俺の身体は恐怖でガクガクと震え始めた。

「ガル……ガールル……！！！」

知らず知らずのうちに、喉の奥から怯えた唸り声が漏れる。

「く、来るなー！ あっち行けー！」

女の子は涙目になりながらも、手に持った箒を振りかざし、気丈に鬼熊を打ち据える。しかし、鬼熊は鬱陶しそうに顔を顰めはするものの、大した打撃にはなっていない。

このままでは、彼女は鬼熊の餌食になってしまう。

俺は、恐怖で硬直する身体を叱咤し、無我夢中で飛び出した。

「うあああああああああ！」

悲鳴とも雄叫びともつかない声を上げながら、鬼熊に向かって霊弾を放った。といっても、樫さんのような高密度・高精度の弾幕を張れるわけでは無い。所詮は目くらましだが、こちらに注意を引きつける事ぐらいは出来る筈だ。

鬼熊はこちらを見上げ、威嚇するように大口を上げ咆哮した。込み上げてくるあの時の恐怖を必死に堪え、俺は鬼熊に向かってありったけの霊弾を放つ。弾幕なんて呼ぶのもおこがましいほどの、お粗末すぎる攻撃だったが、幸いなことに、オツムのあまりよろしくない鬼熊の注意を完全に俺に移す事には成功した。

頭上を飛び回る俺を忌々しそうに睨みつけ、嫌がらせのように放つ霊弾を鬱陶しそうに手で払おうとする。

こいつは空を飛べないので、こちらが空に居る限り、危険は無い。今のうちに逃げてくれればと、女の子の方を見ると、腰が抜けてしまったのか、尻もちをついたまま呆然としている。

こうなったら、隙を見て抱きかかえて空に逃げるしかないが、もう少し、奴を彼女から引き離す必要がある。

不意に、鬼熊が蹲るように屈みこんだ。

俺の霊弾にこんな化け物を倒すほどの威力は無いが、もしかしたら、上手い具合に急所に命中したのかもしれない。

何にせよ、動きの止まった今がチャンスだ。

この隙に女の子を拾い上げるため、鬼熊の横をすり抜けようと急降下する。

その時、蹲っていた鬼熊が素早く身体を起こした。

大きく振り上げたその手には、俺の頭より一回り大きな石が握られていた。

鬼熊が蹲っていたのは、俺の霊弾が効いていたからではなく、空

にいる俺を攻撃するために、地面に埋まっていた石コロをほじくり返していたからだったのだ。

頭を上げたそいつと目が合う。乱杭歯の覗く口の端を吊り上げ、嗤っているような気がした。

慌てて急制動をかける俺に向かって、鬼熊は勢いよくその石を投げ飛ばしてきた。

「うわわっ！」

寸での所で躲す事が出来たが、完全にバランスを崩してしまい、殆ど墜落寸前の体で地面に不時着した。

それを見計らったように、鬼熊は歓喜の声を上げながら、巨体に似合わない猛スピードで、俺に向かって突進してきた。

俺は殆ど半泣きになりながら、女の子に向かって駆け寄った。

未だに呆然としている彼女を抱きかかえると、すぐさま地面を蹴る。

間一髪だった。

足元を、鬼熊の振りまわした剛腕が通り過ぎて行った。

数十メートル上から地上に目を向けると、無念そうな唸り声を上げ、奴がこちらを見上げていた。

何度か、未練たらしきうろろと歩きまわっていたが、やがて諦めたのか、鬼熊は茂みの中へと消えて行った。

地面に降りるのは危険なため、俺は自分が休んでいたクヌギの巨木の太い枝に、女の子を座らせた。

思わず、考えなしに助けてしまったが、これで良かったんだろうか。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

声をかけると、青ざめた表情ながらも、女の子はしっかりと返事をした。

水筒を差し出すと、おずおずと口を付けて飲み始めた。そこで、ようやく一息ついたようだった。

「助けてくれたの……？」

「ま、まあ。行きがかり上、そうなるのかな」

「そっか。ありがとう……」

安心したのか、女の子はぎこちないながらも笑みを浮かべた。

「怪我は無い？」

「ん、大丈夫だよ」

女の子は、上目遣いに俺を見上げた。

「天狗？」

「そう。白狼天狗」

「……その、触っても良い？」

「へ？」

一瞬、何の事を言っているのかと思ったが、どうやら、俺の狼の耳が気になるらしい。

「別に良いけど……」

俺がそう答えるや、彼女は嬉しそうに口元を綻ばせ、俺の両耳に両手を伸ばした。

「お、おお……ふかふか。ふかふかだ」

やたらと嬉しそうに、俺の耳をわさわさと撫で回す。恥ずかしい上に、少しくすぐったい。

「ねえねえ！」

「な、なに？」

「尻尾も触って良い？」

「え、いや、ちょっと、ま……うひんっ！」

俺に答える暇も与えず、彼女は尻尾を胸に抱きしめた。

今まで感じた事の無い奇妙な感覚が背筋を駆け登り、身体中が粟立つ。

不快な感覚では無かったが、それだけに、その、色々とよろしくない。

「うふ、うふふふ……もふもふしてる」

そんな俺に構わず、女の子はうっとり目細め、俺の尻尾に頬ずりし始めた。

「お、おふ、ふあつ。ま、待て、待てってばあ！」

俺が強引に尻尾を奪い返すと、女の子は不満そうに頬を膨らませた。

「な、なあ。君は俺が怖くないのか？」

「怖い？　なんで？」

女の子は、心底不思議そうに首を傾げた。

「いや、まあ。いちおう、俺も妖怪だからさ。さっきの熊と同じよ
うな」

「ううん、怖くないよ。助けてくれたじゃない。それに、もふもふ
だし!」

俺の尻尾に熱い視線を注ぎながら、女の子は断言した。
もふもふは関係ないだろう。

「天狗さん。お名前教えて? 私、霧雨 魔理沙!」

女の子――魔理沙は、元気よく名前を名乗った。
近くで見ると、本当に人形のように可愛い。
魔女っ子ルックスが良く似合っている。

「俺は、上有住 柊。見ての通り、妖怪の山の白狼天狗だよ」
「柊くんね。よろしく」

「ああ、よろしく……ところで、どうして、こんな場所に居たんだ
?」

この辺りは、人里からは随分と離れているようだし、第一ここは
妖怪の山だ。

人間が、おいそれと立ち入るような場所じゃない。
俺が訊ねると、魔理沙は帽子のひさしを下げ、表情を隠した。

「……私は、魔法使いになりたいの」
「魔法使い?」

「うん。そのために、魔法の森に行こうとしてたんだ」

魔法の森の事なら、幻想郷縁起にも載っているので知識としては
知っている。

詳しい場所は分からないが、妖しいキノコ類が生い茂り、それの出す胞子が魔法使いの魔力を高める触媒になるらしい。

しかし、その胞子が普通の人間にとっては有害で、妖怪にとってもあまり良いものではなく、魔法の森には妖怪もあまり棲みついていないと聞く。

どうやら、魔法の森に向かおうとして、道に迷って妖怪の山に足を踏み入れてしまったらしい。

「そこにすごい魔法使いが居るって聞いて、弟子入りしようとしているの」

魔理沙は顔を上げ、真摯な眼差しで俺を見つめた。

「ねえ、柵くん。私を魔法の森に連れてってくれないかな」

「その前に、親御さんはどうしたんだ？」

すると魔理沙は、再び俯いてしまった。

「相談したけど、魔法使いになるなんて、絶対に駄目だって。そんな暇があったら、仕事の手伝いをしろって」

そりゃあそうだ。

いくらここが幻想郷だからって、我が子に魔法使いになりたいなんて相談されて、許容する酔狂な親がいるとは思えない。

親御さんの意見は至極もつともだ。

「だから、家出して来たの」

「ちょっと待て」

駄目だろ、それは。

「ねえ、お願い！ 私を魔法の森まで連れてって！」

「駄目駄目。家に帰るんだ」

だいたい、魔法の森に行っただとして、その凄い魔法使いとやらが弟子にしてくれるとは限らないだろう。

それに、あそこのキノコの胞子は人間にも妖怪にも良くないものらしいし、どうやってそれを防ぐつもりなんだ。

ごくごく常識的な事を訊ねると、彼女は言葉に詰まった。

やはり、そのあたりの事は、何も考えていなかったらしい。

「とにかく、魔法使いになるまで帰らない！ もう決めたの！」

しかし、魔理沙はそう言って頑として聞かない。

「ったく！」

俺は魔理沙を抱えて立ち上がった。もちろん、人里に送り届けるためだ。

同じぐらいの背格好の子を抱え上げているにも関わらず、殆ど重さを感じない。

今更だけど、天狗の身体能力は、人間に比べてかなり優れているみたいだ。

「や、やだ！ 帰りたくない！」

「こらこら暴れるな。危ないだろう！」

じたばたと無駄な抵抗をする魔理沙を宥めすかし、俺は再び空を飛んだ。

目的地は、さっき木のとっぺんから見えた人里と思しき集落だ。

最初のうちは激しく抵抗していた魔理沙だったが、人里が近付くにつれ、観念したのか次第に大人しくなっていた。

妖怪の俺が、いきなり人里に飛び込んでも大丈夫かという不安があったが、一刻も早く、この家出少女を両親の元に返して安心させてやりたかった。

人里の上空まで来ると、広場のように開けた所に、大勢の人間が集まっているのが見えた。

皆が一様に驚いた表情で、こちらを見上げている。

俺はあえて、そんな人だかりの中に、魔理沙を抱えたまま降り立った。

周りの人間達が一斉にどよめき、遠巻きに俺達を見守っている。

「ほら、魔理沙。お家はどこなんだ？」

魔理沙を降ろし訊ねるも、彼女は竹箒を抱き締め、俯いて何もしやべらない。

周囲の人間達は、俺達を遠巻きに見つめながら、隣同士でひそひそと囁き合っているだけで、こちらに声をかけて来る様子は無い。

「えーっと、お騒がせしてすみません」

このままでは埒が明かないので、俺はその場にいる人間達に向かって声を張り上げた。

俺が声を発した事に驚いたのか、周りの人間達が、怯えたように一斉に下がった。

その拍子に、何人かが尻もちをつき、お年寄りに至っては、その場に跪いて手を擦り合わせて念仏まで唱える始末だ。

「この子……霧雨 魔理沙ちゃんの親御さんはいらっしゃいますか？
妖怪の山で保護したので、連れて来たんですが……」

出来るだけ刺激しないように来意を告げるが、群衆は隣近所と顔を見合わせたり囁き合ったりするのみで、誰も俺の質問に答えようとはしない。

暫く途方に暮れていると、俺達を取り巻いていた人垣が二つに割れ、その奥から、ゆったりとした歩調で、歩み寄って来る人影があった。

頭に奇妙デザインの帽子を乗せた、髪の長い凜とし佇まいの若い女性だった。

青みがかった不思議な色合いの長い髪に、身に纏っている青を基調とした服装が良く似合っていた。

群衆のうちの誰かが、「慧音様」と呟くのが聞こえた。
どうやら、この女性の名前らしい。

「せ、先生……」

半ば俺の背後に身を隠すようにして、魔理沙がぼつりとつぶやいた。

俺達の前まで来たその女性は、周りの連中とは対照的な落ち着いた物腰で、口元に柔らかな笑みを浮かべた。

「魔理沙を連れて来てくれた天狗と言うのは君の事か？」

「は、はい。そうです」

「そうか。私は、上白沢 慧音。人里で顔役をやっている者だ。そして、寺小屋の教師もやっている。教え子が迷惑をかけたようで申し訳ない」

「い、いや、大した事じゃありませんから」

深々と頭を下げる慧音さんに、俺は慌てて言った。

「そんな事は無い。これから人手を集め、危険な山や森に搜索に向かうとしていたところだったんだ」

成程……だから、こんなに人だかりが出来ていたわけか。

「よければ、君の名前を聞かせてくれないか？」

「白狼天狗の上有住 櫛です」

俺の自己紹介に頷きつつ、慧音さんは傍らの魔理沙に視線を転じた。

「さて、魔理沙」

屈みこんで魔理沙に視線を合わせると、慧音さんは安心させるかのように彼女の両肩に手を置き、にっこりと微笑んだ。

「事情はお前のご両親から聞いている。魔法使いになる事を反対されて、家を飛び出したんだそうだな？」

「は、はい……」

魔理沙は、小動物のように身体を小さくし、消え入りそうな声で返事をした。

良く見ると、僅かに身体が震えている。

「いつも寺小屋で言っているな？　両親や、周りの人達に迷惑をかけてはいけない、と」

慧音さんの表情は優しく、口調は幼子に語りかけるような柔らかいものだったが、逆らい難い妙な圧迫感を伴っていた。

「言い付けを破ったのだから……分かるな？」

慧音さんのその言葉に、魔理沙の顔が恐怖に引き攣った。

魔理沙の肩に置かれた慧音さんの両手には、傍目に見てはつきりと分かるほど力が籠っていた。

慧音さんは、少しのけぞるように顎を上げて頭を引いた。

そして次の瞬間。

「びぎゃ！」

ごすん、という鈍い打撃音とともに、魔理沙はもんどりうって倒れた。

慧音さんが、魔理沙に頭突きをお見舞いしたのだ。

啞然とする俺に向かって彼女は、平然とお仕置きだと言い、額を抑えて悶絶している魔理沙を、猫の子でも持つように、軽々と肩に抱え上げた。

人間の女性とは思えないその腕力に、俺は目を見張った。

「私は半人半獣だからな。普通の人間に比べれば、体力はあるのさ」

半人半獣とは、普段は人間だが、何かのきっかけで身体の一部が全身が動物になってしまう種族の事だ。

あまり立ち入った事を聞くのも何なので、俺は「なるほど」と軽く同意するだけに留めた。

「良ければ、君に何か礼をしたい。妖怪とはいえ、里の人間を助けてくれたのだからな」

「礼だなんてそんな……」

助けることが出来たのだって、たまたま道に迷ってしまったから

だし、態々礼をしてもらおうほどの事でも……

……あれ？

そういえば、俺、何で道に迷っていたんだっけ。

そこまで考えが至ったところで、俺は自分の頭から血の気が引く音を聞いた。

「し、しまったあああああ！！！」

「お、おい！　どうしたんだ、君！！！」

里中に響き渡る絶叫を発した後、慧音さんの止める声を振り切って俺は空に飛び上がった。

妖怪の山編22

「ま……間に、間にあった……」

魔理沙を人里まで送り届けた後。

半ばやけくそで妖怪の山中を飛び回り、なんとか出頭時間ギリギリに訓練所を見つける事が出来た。

「やあ、来たね。刻限ピッタリだったねえ」

息も絶え絶えの状態で訓練所の門に飛び込んだ俺に、門の付近に立っていた教官と思しき白狼天狗が、にこやかに微笑みながら声をかけてきた。

「はあ、はあ、はあ……かつ、上っ、ゴホッ！ 上有住 柵ですっ！ 通達に従い、出頭致しました。お、遅く、なりましたっ！」

必死に呼吸を整え、姿勢を正し来意を告げた。

「上有住 柵くん、だね。はい、確認したよ。良く来たね」

教官は終始笑顔を決やさず、手にしていた名簿で俺の名前を確認した。

「入隊式が始まるまでは少し時間があるから、待合室で休んでいると良い。案内してあげるよ」

「は、はい」

俺は若干戸惑いつつ、先に立って歩き出した教官の後について行

った。

訓練所の敷地内は、以前訪れた椋さんの隊の屯所とあまり変わり映えしないものだった。

まあ、軍隊の駐屯地なんて、大抵そんなもんなだろう。

「この部屋で待っててもらえるかな。入隊式になったら呼びに来るから」

なんだか、教官が妙に優しい。

これではまるで、お客さん扱いだ。

案内された部屋に入ると、そこには俺の同期生になる哨戒天狗の卵達がいた。人数は20人弱といったところか。全員オスだった。

適当に空いている席に腰を降ろしつつ、さり気なく同期生達の様子を窺ってみる。

早くもグループを作り、数人で固まって暢気におしゃべりをしている連中、どこかオドオドとした不安そうな表情で、所在無げに室内を見回してる者、気難しそうに腕組みをし、瞑想しているかのようにじっと目を瞑っている者など様々だった。

どうやら、俺以外は全員集まっているみたいだ。

散々道に迷って疲れていた事もあり、適当な奴と会話しようとも思わず、椅子にもたれかかったまま、入隊式の時間になるまでボーっと過ごす事にした。

「よお」

そうやって暫く呆けていると、声を掛けてくる奴がいた。

顔を上げると、どこことなく軽薄そうな笑みを浮かべた一人の同期生が立っていた。糸のように細い釣り目が、何処となく狐を連想させる。

数人で固まっておしゃべりをしていた連中の一人のようだ。そい

つの肩越しに、遠巻きにこちらを窺っている何人かの姿が見える。

無下にするのも何なので、俺はやあと挨拶を返した。

するとそいつは、にと口端を吊り上げ、馴れ馴れしく顔を寄せて来た。

「入隊初日から、遅刻しそうになったみたいだな」

そいつは、からかうようなニヤニヤ笑いを浮かべながら言った。少しムツとしたが、せっかくの高校デビュー(?)の機会をふいにするのも勿体ない。これから3年間、同じ釜の飯を食う事になるわけだし、程々に仲良くしておいた方が良さだろう。

「実は、道に迷っちゃってさ……」

俺は誤魔化し笑いを浮かべつつ、頭を掻きながら言い訳まがしく言った。

するとそいつは、一瞬呆気にとられるように口を開けた後、笑いながら俺の背中をバンバンと叩いた。痛い。

「面白い！ 面白いよ、お前！」

いったい何がそんなに可笑しいのか、そいつは文字通り腹を抱えて笑い転げた。

俺が無然としていると、表情からそれを読みとったのか、そいつは目尻の涙を拭いながら、悪い悪いと謝った。

どうもこいつは、クラスに一人はいる、お調子者みたいな奴のようだ。この人懐っこいというか、馴れ馴れしい性格で、周囲の連中と仲良くなったのだろう。

気が付くと、さっきまで、遠巻きに眺めていた他の同期生達が、俺達の周囲に集まって来ていた。

「俺は松倉って言うんだ。お前は？」

その馴れ馴れしいお調子者が名乗ったので、俺も自分の名前を名乗った。すると、松倉と周囲の同期生達が、一様に驚いた表情になった。

「お前、もしかして、あの上有住二等狼佐の親戚か何かなのか？」
「それ、俺の親父」

すると、周囲のどよめきがいっそう大きくなり、室内の他の同期生達も驚いたようにこちらを見ていた。

その中には、俺が室内に入った時、見下すような視線を送っていた奴も含まれていた。

「なあなあ。二佐って、家ではやっぱり厳しかった？」

「そりゃあ、厳しいに決まってるだろ！ 口で言葉を垂れる前と後にサーと付けなければならぬに決まっている！ そうだろう？」

矢継ぎ早に質問をぶつけられ、俺は少したじろいだ。親父の知名度の意外な高さに戸惑いを覚える。

何しろ、俺の知る普段の親父は、息子の俺がその場に居ようが居まいが、暇さえあれば母さんとイチャイチャしているダメな人だからだ。

「二佐は、普段どんな事をしてるんだ？」

「普段は、野良仕事をしているけど……」

戸惑い気味に答えると、周りからおおという歓声が上がった。

「成程！ 農作業を通じて、体力の錬成を欠かさず行っているわけか」

「……へ？」

「それだけじゃないぞ。農業を営んでいるのは、有事の際に備えて、補給物資の備蓄確保のためだろう！」

「いやいやいや……」

何かえらい勘違いをしているぞ、お前ら。農作業は、まあ、体力を付けるには最適かもしれないけど、補給物資の備蓄なんてご大層なもんじゃなく、単にウチの食いぶちを稼いでいるだけだし。

第一、俺の一家の生産量だけで、隊の作戦行動に必要な物資を調達できるわけがないだろう。

英雄扱いされていたから仕方がないとはいえ、ちょっと親父を買い被り過ぎだ。

「なあ。あいつ、いるだろう？」

松倉が意味深な表情で、何処かへ顔を向けた。

その視線の先には、こちらを見ている一人の同期生の姿があった。室内に入った時、ニヒルに腕組みをして瞑想じみた事をしていた奴だ。

俺の視線に気づいたのか、そいつは友好的とは程遠い、敵愾心剥き出しの目で睨みつけて来た。

なんなんだ、いったい。

「あいつの名字、小佐野こさのっていうんだけど、聞いた事あるだろう？」

「え？ えーと」

誰だろう。全く聞いた事がない。

曖昧な態度の俺を余所に、松倉は俺の知らない話を、聞いてもい

ないのに次々に話してくれた。

あの小佐野とかいう奴の父親は、俺の親父同様、吸血鬼異変で活躍した哨戒天狗らしい。幼い頃から、哨戒天狗になるべく父親から厳しい教育を受けていたらしく、そのせいなのか、妙に気位が高いんだそうだ。

こういう時、情報通のお調子者というのは有り難い。

「お前が来る前に、あいつに声を掛けたんだけどさ、鼻で笑われて無視されちゃったんだ」

そう言って松倉は、肩をすくめた。

「気をつけろよ、上有住。あいつ、お前の事をライバル視してるぜ」
「何で……？」

「そりゃあ、お前の親父さんが有名人だからに決まってるだろ」

人の悪い笑みを浮かべながら、芝居がかった仕草で人さし指を立てて見せた。

「それに、あいつの親父は、異変で活躍したって言っても、お前の親父さんほどの戦果を上げたわけじゃないからな。ここでお前より優秀な成績を修めれば、父親の意趣返しにもなるってもんだろ」

意趣返しって……別に親父に何かされたわけじゃないんだろう？

面倒くさいなあ……

ほんと、そういうのは勘弁してほしい。

当時の親父達がどうだったかは知らないけど、今の俺達には何の関係も無い事だろうに。

俺のうんざりした顔が余程面白かったのか、松倉は可笑しそうに喉の奥でクックツと笑った。

こいつはこいつで、他人の厄介事が楽しくて仕方がないみたいだ。そんな感じで適当にだべっていると、不意に部屋の扉が開いた。現れたのは、先程門の所で俺を出迎えてくれた教官の哨戒天狗だった。

室内が一斉に静まり返り、俺を含めた全員が、教官のほうに目を向けた。

「待たせたね。入隊式の準備が整ったから、講堂に集ってもらえるかな？」

相変わらずの、人好きのする柔和な笑みを浮かべながら、教官は言った。

ここまで一貫して笑顔を絶やさないと、逆に不気味になってくるな……

何だか、似たような光景をどこかで見たような気がするぞ。

俺達はおしゃべりを止めて、教官に続いてぞろぞろと部屋から出た。

よくある学校の体育館みたいな所に集められた俺達の目の前、講壇のように高くなっているところの壁に、『哨戒天狗教育飛行隊入隊式』という横断幕が掛けられていた。

まるで、小学校か何かの入学式のようなだな、と思っていたら、やっている事は正しく入学式と同じだった。

訓練所長兼飛行隊長の挨拶と訓示に始まり、担当教官による哨戒天狗の任務や訓練の概要についての簡単な説明などがあった。

そして最後は、哨戒天狗の宣誓で締めくくられた。

配られた紙に書いてある宣誓文を一斉に読み上げるというものだったが、これが殆ど自衛隊の宣誓文と同じだった事が少し可笑しかった。

「いやあ、なんかあっさり終わったなー」

入隊式を終えた俺達は、最初に集められた部屋に戻っていた。

「だよなあ。厳しいって聞いてたけど、これなら大丈夫そうだな」

「教官も優しそうだったし、訓練って言っても、大した事無さそうだな」

そこかしこから、そんな声上がり、皆一様にリラックスした和やかな雰囲気で、取り留めのない雑談にふけていた。

しかし、俺は他の連中ほど樂觀的にはなれなかった。

というのも、ある事を思い出したからだ。

それは、昔テレビで見た、自衛隊の入隊式のドキュメンタリー番組だ。その番組でも、入隊式で自衛官としての宣誓を終えるまでは、訓練生達はお客様扱いだったのだ。正に、今の俺達のように。

そんな事を考えていると、唐突に扉が開き、何人かの教官達が高下駄の足音も高く、ドカドカと室内に入ってきた。

どの教官も一様に眦を吊り上げ、口をへの字に引き結んでいた。

その明らかに異様な雰囲気、室内の喧騒が潮が引くように静まり返っていった。

「お前ら。その場に起立しろ」

その中の一人が、眼光鋭く俺達を睥睨しながら、低く威圧的な口調で言った。

直感的にやばいと感じた俺は、即座にその場に起立したが、俺以外に起立したのは小佐野だけだった。他の連中は、さっきまでのギャップに頭が着いて行かないのか、怪訝そうな表情で、周囲と顔を見合わせていた。

次の瞬間、けたたましい騒音と共に、教官の傍にあった誰も使っていない椅子が床にひっくり返った。教官が蹴倒したらしい。

候補生達の表情が一斉に凍りつくが、教官達は顔色一つ変えていない。

「……立てと言ったのが聞こえなかったか？」

静かな怒気を漲らせた教官の一言に、候補生全員は血相を変えてあたふたと立ち上がった。

全員が起立したのを確認した教官は、厳かに口を開いた。

「まずは、哨戒天狗教育隊への入隊おめでとう。俺は、貴様らの教育を担当する宮守一等狼曹である。話しかけられた時以外は口を開くな」

教官は、直立不動で立っている俺達の間を大股で歩き始めた。

「宣誓を済ませたからには、ひよっことはいえ、貴様らは哨戒天狗の一員である。が……」

眼光鋭くねめつける教官の視線に、候補生達は、例外なく身体を強張らせ、恐怖の為だろう、尻尾を大きく膨らませていた。中には、涙目になって身体を小刻みに震わせ、尻尾を股下に挟み込んでいる者までいる。

「それが何だ。いつまでもピーシヤカと喧しく囀りやがって。夜雀か貴様らは。ああ？」

教官は、近くに居た候補生の一人にぐぐつと顔を近づけた。

顔に息が掛るほどの間近で目を覗きこまれた不幸なそいつは、気の毒に涙目になっていた。

「お、おかつ、お母さん……怖いよう……」

横合いの少し離れたところから、そんな鼻声混じりの声が聞こえた。

横目でチラ見してみると、べそをかく様に唇をへの字に歪め、目に涙を溜めながらブツブツ呟いている奴がいた。

どのグループにも加わらず、不安そうに室内を見回していたやつだ。小柄で細身な白狼天狗が多い中、こいつだけは少しばかり横に広く丸っこかった。

「今、口を開いたのは誰だ!？」

耳聡い教官がそれに気が付かないはずもなく、鋭い目付きで辺りを見回す。

視線を受けた連中は、一斉に竦み上がった。

やがて、声の主を特定したのか、格好の獲物を見つけたとでも言いたげに、口の端を吊り上げた。

「お前か、豚饅頭」

教官は、そいつの胸倉を掴み顔を覗きむと、恫喝するように問い質した。

うっかり声を出してしまったそいつは、怯えたように尻尾を股下に挟み込み、気絶しそうなほどに顔面蒼白で震えている。

ここまでの一連の流れが、どこかで見た軍隊物の映画にあまりにも似通っていたため、教官の迫力に恐怖を感じながらも、内心少し可笑しかった。

「おい、貴様。何が可笑しい?」

不味い事に、それが顔に出ていたらしい。気が付くと、教官が剣呑な目で俺を睨みつけていた。

ずかずかと大股に俺の前に歩み寄ると、今度は俺の胸ぐらを掴み上げ、物凄い形相で俺の顔を覗き込んできた。

「皮被り。名前は？」

「かつ、上有住 柵ですっ……」

胸倉を掴まれているせいで、息が苦しく、掠れ気味の声になっていた。

「上有住？　そうか、そうか」

教官は底意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前もママのおっぱいが恋しいのか、んん？」

「ど、どちらかというと、従姉のおねいさんのおっぱいが恋しいです！　あります！」

止せば良いのに、余計な事を口走ってしまった。

「そうか、そうか」

教官が嘲るように笑った次の瞬間、腹部に衝撃が走った。

腹にキツイのを一発貰ったらしく、鈍痛に息が詰まり、膝から力が抜け立ってられない。

胸倉を掴んでいる教官の手が離れた途端、俺は腹を抑え、呻きながらその場に崩れ落ちた。

床に蹲り、込み上げてくる吐き気を堪え、全身から脂汗を流しながら、必死に呼吸を整える。

「いいか、良く聞け皮被り！」

頭上からは、容赦の無い教官の罵声が浴びせ掛けられた。

「ここでは親の七光が通用すると思うな！ 今度舐めた態度を取ってみろ！ 生まれて来た事を後悔する事になるぞ！ 理解したか！？」

「は、はい……」

息も絶え絶えにそう答えるのがやっとだった。

「よし、立て！ いつまで寝ていやがる！ 肥溜に叩きこむぞ！」

震える膝に何とか力を込め、荒い息を吐きながら立ち上がった。殴られた腹には、まだ重苦しい感触と鈍痛が残っていて、少しでも気を抜くとへたり込んでしまいそうになる。

俺への指導は効果覷面だったらしく、それ以降は誰一人として無駄口を叩く者は居なかった。

「……ふう」

手荒い洗礼を受けた後、俺は割り当てられた自室で荷解きをしていた。

もたもたしては居られない。身支度を済ませた後、さっきの教室で早速座学が行われるからだ。

部屋は二人一組で使用するため、俺の他にもう一人同室の奴がい

る。

同室の仲間とは常に助け合い、共に励み、お互いを高めていく最高の相棒だと教官は語った。

そして、もちろん、相棒や自分がへまをした場合、連帯責任で平等に罰を受ける事になる。

いわゆるバディシステムのようなのだろう。

で、俺の相棒になるのが誰かというと。

「あ、あ、あの……花巻 梅って言います。よ、よろしく……」

あの時、「お母さん」発言で教官に睨まれていた、小太りの白狼天狗だった。丸っこい顔が、どこことなく、ポメラニアンを連想させる。

「俺は上有住 櫛。よろしく。とりあえず、詳しい自己紹介は後にしよう。急がなきゃ、また教官に怒鳴り散らされる」

「う、うん。でも……」

「どうした？」

「筆記用具が無いんだ。持ってきた筈なんだけど……」

泣きべそをかきながらそんな事を言いだした。

花巻は、背囊を逆さまにして、自分の荷物を辺りに散らかしながら、必死に筆記用具を探していた。

「俺が貸してやるから！ 早くいくぞ！」

「う、うん……」

花巻を引き摺るようにして引っ張り、俺はさっきと同じ部屋に駆け込んだ。

既にほかの連中は集まっており、俺達が最後だった。

「随分とのんびりとしたご到着だな。上有住、花巻」

早速、教壇にいる教官に難癖をつけられた。

教官の手の中で、竹製の教鞭がぴしりと鳴った。

俺達は、揃って首を竦め、震えあがった。

「何か言い訳はあるか？」

「あ、ありません！」

「腕立て伏せ！ 用意！」

教官のその声に、反射的に腕立ての姿勢を取った。

花巻もあうあう言いながら、もたもたと腕立ての姿勢を取る。

そして、教官のカウントに合わせて、腕立て伏せが始まった。

教官の声に合わせてなので、伏せの時間が異様に長く、たった10回の腕立て伏せが非常に辛かった。

「よし、止め！ さっさと席に着け！」

急ぎ立てられるようにして立ち上がり、俺達は空いている席へ着いた。

そんな俺達を、同期生の殆どは同情と、俺じゃなくて良かったという安堵の目で見ている。

唯一人、小佐野って奴だけは、せせら笑うような、小馬鹿にした表情で眺めていたが。

——そんなこんなで、俺の哨戒天狗としての生活が慌ただしく始まったわけだが、早々に教官に目を付けられてしまう羽目になり、色々な意味で注目の的になってしまった。

まあ、自業自得だから仕方ないんだけど。

妖怪の山編23

柵が訓練所に入所してから、一カ月が経過したある日。

私は梓と共に、滝の裏の詰め所で、警戒待機任務に就いていた。警戒待機時の定番の暇つぶしである将棋を指しているところだった。

「王手！」

快活な声と共に、駒が将棋盤を叩く乾いた音が響き渡った。はっと我に返り、将棋盤を見渡すと、自分の王の逃げ場所は何処にも無かった。

「詰みだよ、樅」

手持ちの駒を片手でお手玉しながら、梓は勝ち誇るように胸を張った。

「……そうね。私の負けね」

私は降参を示すように肩の力を抜き、ふうっと溜息を吐いた。梓が、そんな私を見つめ、心配そうに首を傾げた。

「ねえ、樅。大丈夫？」

「……何が？」

「いや、なんかさ」

梓が少し言い難そうに鼻の頭を掻いた。

「従弟くんが訓練所に入ってから、様子が変だから」

「……そう？」

「そうだよ」

確かにそうかもしれない。

なんだか、張り合いが無いというか……

これまで強い誇りや使命感を感じていたはずの訓練や任務にも、いまいち身が入らないのだ。

梶は今、どうしているのだろう。

ちやんとご飯を食べているだろうか。

夜はきちんと眠っているだろうか。

苛められていたりはないだろうか。

実技や座学について行けているだろうか。

私が居なくてもきちんとしてやれているのだろうか。

ややもすると、そんな事ばかりを考えてしまう。

今まではそれほど実感が湧かなかったのだが、自分で考えている以上に、私の中で梶の存在は大きくなっていったのだ。

ふと、視線を転ずると、将棋盤の横に文さんが置いて行った文々新聞があった。

一面には、今回訓練所に入所する新人哨戒天狗の顔写真が掲載されていた。

もちろん、梶の顔写真も載っている。

「梶クンの同期生は、全員オスよ。少しは安心したでしょ、梶」

少し前に新聞を置いて行った文さんは、そう言って意味ありげに微笑んでいたが、梶に邪な考えを抱く者が、なにもメスだけだという保証は無いのだ。

きちんと見ていないと不安で不安で仕方がない。

最低でも、次に会えるまではあと半年。

長い。長すぎる。

「ねえ、椀」

顔を上げると、心配そうな梓の顔があった。

「次の交代が来たら、定時哨戒のついでに、訓練所の様子を見に行こうよ」

私は目を丸くした。梓は何を言っているんだろう。

部外者は訓練所への立ち入りは制限されているのに。

訪れた所で、門前払いされるのがオチだ。

「まあ、聞きなよ」

私の怪訝な表情で察したのか、梓は口元に微笑を浮かべた。

「私の村にも、柊くんと同期になる子が居て、同じ日に訓練所に入所したんだ」

それは前にも聞いた。

柊と違い、哨戒天狗にあまり興味を持っていないという事も。

「入所する日に、行きたくないーってひっくり返って駄々こねてさ。両親も随分甘やかしていたもんだから、ここまで嫌がるなら、無理に入所させなくても良いんじゃないかなんて言いだして。私の村でちょっとした騒ぎになったんだ」

それは、なんとまあ。

随分とだらしないオスだ。

勇んで出発した柵とは大違いだ。

「それで、結局その子はどうしたの？」

「うん。頭に來たから、私が首根っこ捕まえて、訓練所に手ずから叩きこんできたよ」

そう言って梓は、あははと笑った。

「……でもさ。そんな子だから、少し心配になって來てね。その子の両親も不安で夜も眠れない状態だし」

「それで、その子の様子を見に行くついでに、私にも柵の様子を見に行かないかって？」

「そうそう。でも、普通に訓練所に行ったらって、追い返されるのがオチでしょ？」

「そうね」

「でもね。実は、訓練所を遠くから見ることが出来る場所があるの」

意外な言葉に、私は梓の顔をまじまじと見つめた。

「普通の白狼天狗じゃ無理だけど、柵の千里眼テレグノシスなら見えるんじゃないかって場所が」

思わず耳がピクリと動いた。

「そこから、ウチの子の様子を見て欲しいかな、と思って。ついでと言うのも何だけど、柵も柵くんの様子が見れるでしょ？」

魅力的な提案ではある。

しかし、訓練所のある場所は、定時哨戒ルートとは大きく離れている。

もし、飛行隊長にバレたりしたら、大目玉を喰らうのは必至だ。そうでなくとも、任務中に私用で持ち場を離れるなんて、私の矜持が許さない。

櫛がまだ村に居る頃は、哨戒ルート上にあったため、様子を見る事に躊躇は無かったのだが。

「お願いできないかな、櫛。私を助けると思ってさ！」

葛藤していると、梓がパンと手を合わせて頭を下げた。

……そうだ。

こ、これは、僚友を助けるためだ。

私達天狗は、結束の強い妖怪。仲間を見捨てたり、困っている仲間を放置する事は絶対にあってはならない。

そう、これは梓を助けるためなんだ。

「わ、分かったわ。仕方がないから、付き合ってあげる」

「さすが、櫛！ 話が分かるね。助かるわー」

暫くすると、定時哨戒に出ていた同僚が戻ってきた。警戒待機を引き継ぐのと入れ替わりに、私と梓は定時哨戒へと出発した。

俺が訓練所に入ってから、早いもので一カ月が過ぎた。

入隊初日こそ、馬鹿な事をして教官に目を付けられもしたが、それがきっかけで不当な扱いを受けるとい事も無く、他の訓練生同様、分け隔てなく平等に扱われていた。

訓練内容は、大きく分けて二つ。体力錬成や戦闘技術など、身体を動かす事が中心の実技と、戦略・戦術、戦史や一般教養などを学ぶ座学だ。

「ほら、しっかりしろ、花巻！」

「もうだめ。死ぬ。死んじやう。死んじやうよお」

「泣き言を言う余裕があるうちは、簡単に死なないから安心しろ！」

ちなみに、今の課業は、体力錬成の為の長距離持久走。

だけど、ただのマラソンじゃあない。

アリスバック

糧食や水筒など、行軍に必要な装備を入れる背嚢に、同じぐらいの重量の石を重しとして大量に放り込んだものを背負い、なおかつ剣と盾も装備している。

完全武装での長距離マラソンなのだ。

俺の相棒の花巻は、小太りな見た目通りどん臭い奴で、特にこの手の持久力が必要になる訓練が大の苦手だ。

涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにした花巻に肩を貸し、最後尾を走っていた。

既に周回遅れとなっている俺達を横目に、他の連中が次々に追いついて行く。

最初の座学で教えられたのが、天狗は仲間を決して見捨てないという事だ。

そのため、相棒が困難な状況の時は手を差し伸べなければならぬ。

現に、相棒を見捨てて自分だけ先にゴールした同期の奴が、教官から厳しく叱責され、腕立て伏せの刑に処せられた事があった。

「なんでっ、空が飛べるのにつ、持久走なんてやるのお？」

「体力を付けるためだろ！」

俺自身、それほど余裕があるわけでもないのに、自然と口調はきついものになってしまう。

「おい、豚饅頭！ その体たらくはなんだ！？ 相棒にどこまで迷惑をかければ気が済む！ 馬鹿なのか！？ 阿呆なのか！？ 死ぬのか！？」

並走している教官が、花巻の耳元で怒鳴り散らす。
疲労困憊で、ある意味ヘブン状態の花巻は、教官の方を見る余裕すら無い。

「おい、皮被り！」

「は、はいっ！」

今度はこちらに矛先が向いた。俺は反射的に返事をする。

「貴様がしつかり手助けしてやらないから、コイツは何時まで経っても豚饅頭のままなのだ！ 違うか！？」

ご丁寧に俺の横に回り込み、息がかかるほどの間近で怒鳴り散らしてくださる教官の優しさに、色々なものが込み上げて来そうになる。

酸欠と装備の重さに、喘ぎながら額の汗を拭う。このぐらいで弱音を吐くわけにはいかない。

俺は歯を食いしばり顔を上げ、前方を見据えた。

柊さんだって、この辛い訓練を克服して哨戒天狗となったんだ。

あの人を護れるくらいに強くなるつもりなら、この程度で泣き言なんて言っていられないのだから。

「ここだよ」

定時哨戒に出た私達は、程なく梓の言う訓練所が見れると言う場所
所に辿り着いた。

梓の指さす方向に目を向けると、木々に隠れたかなり遠くに豆粒
ほどに小さく、訓練所の建物や敷地が見えた。

なるほど、確かにここからなら、私の『千里先まで見通す程度の
能力』なら、訓練生達の様子を見る事は出来る。

もちろん、建物の外に居ればの話だが。

「とにかく、見てみるわ」

はやる気持ちを抑え、私は能力を解放しようとした。

「うん、お願い。うちの子は少しふくよかだから、直ぐ分ると思う」

そ、そうだった。

あくまで、これは、梓の知り合いの子の様子を見るためであって、
柵の様子を見るのは、あくまでついだ。

気を取り直し、私は自分の能力を解放した。瞬く間に、望遠鏡を
覗きこんだように視界が拡大される。

どうやら、ちょうど実技の時間だったようで、演習場で長距離走
をやっている所だった。

訓練生達が、背囊を背負い、剣と盾を帯びて武装した状態で必死
の形相で走り込みを行っていた。

「……武装した状態で長距離持久走をやっているわ」

視点を演習場に固定したまま告げると、梓のうへえ、という声が聞こえた。

あれ、きつついんだよねー、という梓の声を聞き流し、私は柵の姿を探す。

……居た。

一人の訓練生に肩を貸しながら、疲労困憊の体で最後尾を走っていた。

思わず名前を叫びそうになるが、何とか寸での所でこらえる。

肩を貸しているのは、おそらく同室の相棒なのだろう。少し小太り気味で、いかにもどん臭そうな子だ。もしかしたら、あの子が梓の言っている子なのだろうか。

柵が肩を貸しているお陰で何とか足を進めてはいるが、いつ倒れてもおかしくないぐらいに足元が覚束ない。

この距離からは聞こえないが、柵が励ますように何事かを話しかけ、必死にその子を引っ張っていた。

その間にも、教官からは容赦の無い罵声を浴びせ掛けられ続けている。

柵は疲労と苦痛の絢交ぜになった表情で、必死に教官の罵声に耐えていた。

あんなに辛そうな柵を見るのは初めてだ。

いつも私の後ろを付いて回り、嬉しそうに尻尾を振っていた柵のあんな表情に、胸が張り裂けそうになる。

居たたまれなさに、知らず知らずのうちに、きつく拳を握りしめていた。

今すぐ飛び込んで行って、抱きしめてやりたい衝動に駆られる。

その時、柵と目が合い、私はハッとした。

視線が偶々こちらを向いただけであり、柵からこちらが見えてい
るわけではない事は分かっている。

私が驚いたのは、そんな理由からでは無い。

泣きそうなほどに顔を歪めてはいるが、櫛の目に、怯えや恐怖の色が一切なかったからだ。

教官の罵声に耐え、自分自身が疲れ果てているにも関わらず、相棒を決して見捨てず、思いのほか力強い足取りで前に進んで行く。その姿は、一端の哨戒天狗そのものだった。

「……櫛を見つけたわ」

冷静になった私は、淡々と梓に告げた。

「たぶん、同室の子だと思うけど、ちょっと小太り気味の子を引っ張っている」

「ああ……それ、うちの子——梅だわ」

梓は溜息交じりに呟いた。

「ごめんね、櫛。櫛くんに迷惑をかけちゃって」

「ううん。気にしないで」

私は苦笑しつつ頭を振った。

そうだ。誰が相棒になろうと、どれほど訓練が辛かろうと関係ない。

何があっても、最後までやり遂げるしかないのだ。

私だって梓だって、それを乗り越えて、こうして哨戒天狗の任に就いてるのだから。

私は軽く深呼吸をすると、能力を解除した。

「戻ろう、梓」

「えっ。もういいの？」

「もう十分よ。櫛は大丈夫。梓の所の子も、櫛と一緒に居れば大丈

夫よ」

私はそう言って梓に笑いかけた。

「そ、そう？　なら良いんだけど。次の定時哨戒の時にでも、また様子を見に来てみようか」

気を利かせたつもりの梓に、私は静かに頭を振った。

「その必要は無いわ。さ、戻ろ」

「あ、待ってよ、椛！」

――椛さんは、俺が護るから。

柵が寝惚け半分に呟いたあの時の言葉が思い返された。

寝惚けていたとはいえ、あの言葉は、柵の本心だったのだろう。そして、それを実現するために、あの子は必死で努力をしている。ならば、私はあの子を信じてやるだけだ。

私は、知らず知らずのうちに手のひらに滲んでいた血を、法衣の裏生地ですっと拭い去った。

妖怪の山編???(番外編)(前書き)

本編とは全く無関係な番外編です。

機動戦士ガンダムダム第08MS小隊のエンディング曲を聴いていて何となく思いつきました。

妖怪の山編??? (番外編)

「おとーさん、おはよー!!」

「ぐほおっ!?!」

腹部に加えられる衝撃に、俺は頓狂な声を上げ飛び起きた。

咳き込みながら目を開けると、目と鼻の先に、小さな女の子の顔があった。

妻をデフォルメしたような顔立ちの、可愛らしい俺達の愛娘だ。

娘は、耳をひよこひよこ動かし、盛んに尻尾を振りながら、クリクリとした大きな目で俺の顔を覗き込んでいる。

「お父さん、起きた?」

娘の背後から、俺の顔を覗き込む人物がいた。

割烹着姿の椛だ。

以前は髪を肩の辺りで切り揃えていたが、今では肩甲骨の辺りまで緩やかに伸ばしており、全体的に少し大人びた雰囲気醸し出している。

それに加え、何と言うか、身体つきが全体的に、女性的な柔らかさを帯びているというかなんというか……

どこことなく、俺の母さんを彷彿させる、大人の女性といった感じなのだ。

「非番の日だからって、いつまでも寝ていないで起きてくださいな」

「え、えっと。も、椛、さん……?」

呆けたように呟くと、椛は一瞬呆氣に取られた後、両手で口元を押さえ可笑しそうに笑った。

よほどおかしかったのか、目尻に涙まで浮かべている。
娘は、良く分かっていないようだったが、釣られて楽しそうに笑っていた。

「も、もう、あなたったら！ 寝惚けてるの？」
「え、あ、いや……」

確かに、変だな、俺。

柗「さん」だなんて、ガキの頃じゃあるまいし。

まあ、確かに、結婚した当初は、呼び捨てにするのにちよつと手間取ったが。

さすがに、子供まで作っておいて、今更それは無いよな。うん。

「さあさあ、顔を洗って来て下さいな。朝御飯にしましょう？」

「あ、ああ、うん。はい」

俺の返事になつこりと笑って頷くと、柗は部屋を出て行った。
娘もそれに続いてトテトテと部屋を出て行く。

「……起きるか」

俺はぼんやりと呟いた後、のろのろと寢床から身体を起こした。

手洗い場で顔を洗い、俺は居間に向かう。

柗も娘も既に席に着いており、俺の来るのを待っていた。

「それじゃ、頂きましょうか」
「頂きます」

「いただきます！」

椀に続き、俺と娘が唱和した。

今朝の献立は、御飯に味噌汁、焼魚とほうれん草のお浸しだ。
今更だが、日本の食卓というのは素晴らしい。

「美味しいな、この鮎」

「でしょう？　にとりから貰ったのよ」

そうなのか。

後でお返ししないとな。

「んしょ、んしょ……」

「ほらほら。もつときれいに取れるでしょう？」

焼魚の骨を取るのに悪戦苦闘する娘。

椀は、優しく微笑みながら、娘を手伝っている。

そんな二人をぼんやりと眺めつつ、俺は牛みたいにモゴモゴと口を動かしていた。

「あなた、どうしたの？　今日は様子が変よ？」

朝食を済ませた後、縁側から庭で遊ぶ娘を眺めている時だった。

娘は何が楽しいのか、庭の石や植木鉢を持ち上げては、石の下からうじゃうじゃと湧いて出る虫を見て、尻尾をブンブン振りながら、きやあきやあと騒いでいる。

のろのろと声の方に顔を向けると、心配そうに俺の顔を見つめる椀の顔があった。

「なんだかボーっとしていて、心ここにあらずって感じよ」
「ん、まあ……」

俺は鼻の頭を掻いた。

椛は気の無い返事と受け取ったのか、咎めるように、ほんの少し
眦を吊り上げた。

「もうっ。もう一人家族が増えるんだから、しっかりして頂戴」

そう言って椛は、自分のお腹を愛しげな手付きで撫で回した。
割烹着に隠れているせいで目立たないが、妻の胎内には第二子が
宿っているのだ。

出生率が低い妖怪であるにもかかわらず、第一子である娘に続き、
早くも第二子が産まれるのだ。

まあ、それだけ、俺達が励んでいたという事でもあるけれど。

「夢を見ていたんだ」

「……夢？」

照れ臭そうに言うと、椛は不思議そうに小首を傾げた。

「昔の……俺が子供だった頃の夢だよ」

「だから、起きぬけに『椛さん』だなんて呼んだのね」

椛は合点が行ったとばかりに微笑んだ。

「あの頃のあなたは可愛らしかったわ。家に遊びに行くと、嬉しそうに尻尾を振って大喜びしていたわね」

「そ、そうだったっけ……？」

俺はとぼけたように、椀から視線を反らした。

「私が他のオスと話をしていると、すぐにヤキモチを妬いていたわよねえ？」

「……それを言うなら、椀だって同じじゃないか」

悪戯っぽい笑みを浮かべる椀に、ちよつとムツとして言い返した。

「お前だって、俺が文さんやにとりさんと仲良くしてると、すぐに機嫌が悪くなっただろう」

「そ、そうだったかしら……」

「そうだよ」

口元に笑みを浮かべてはいるけど、顔の上半分は全くと言って良いほどに無表情で、能面が笑っているようなあの笑顔は、今でも軽くトラウマだ。

「何故か、オスと話していても機嫌が悪かったよな？」

宗太郎や梅と一緒に居る時も、何故か椀の機嫌は悪かったのだ。

「あ、あれは……」

今度は椀が在らぬ方に視線をさまよわせた。

「その……あなたが、良くない趣味に走らないか心配で……」

「何だよそれ……」

「も、もう！ そんな昔の事は良いでしょう、重要なのは今の筈よ！」

拗ねたように言いながら、柊は誤魔化すように俺に寄りかかってきた。

まったく。最初に昔の話を持ち出して、俺をからかって来たのはそっちじゃないか。

まあ、だけど。

確かに、昔の事なんかより、今の方が重要なのは確かだ。

柊の肩に手を回し、静かに抱き寄せる。

柔らかな彼女の身体の感触が実に心地良い。

「柊、愛してる」

「私も愛しています」

耳元で囁くと、すかさずそう返してきた。

くすりと微笑みあい、俺達はそっと唇を重ねた。

「おとーさん、おかーさん！」

庭で遊んでいた娘が、寄り添う俺達の元に駆け寄ってきた。

「あー！ また、いちゃいちゃしてる！ ずるい！ 私もいちゃいちゃするー」

「お、おいおい……」

娘は縁側に上がり、俺と柊の間に、強引に身体を挟み込ませてきた。

「赤ちゃん、いつ産まれるのかなー」

興味津々で俺達を見上げる無邪気な眼差しに、俺と柊は顔を見合

わせ笑みを浮かべた。

「あなたが良い子にしていれば、すぐに産まれるわよ」

「本当？　楽しみー」

娘は椀のお腹に顔を寄せながら、満面の笑みを浮かべた。
そんな娘の頭を、椀が愛おしそうに撫でまわした。

「ねえねえ、お父さん、お母さん。私知ってるよ！」

暫くの間、心地良さそうに椀に身を任せていた娘だったが、何かを思いついたように顔を上げた。

俺と椀は顔を見合わせ、笑いながら何かと訊ねた。

「赤ちゃんって、お父さんとお母さんが、お布団でプロレスごっこすると出来るんでしょう？」

返ってきた娘の答えに、俺達の笑顔は揃って凍りついた。

「こ、ここ、この子ったらもう！　ど、何処でそんな話を聞いて来たの？」

「だってー、夜にいつもこっそりプロレスごっこしてるの見てるもん！」

動揺を必死に押し隠そうとする椀に、娘は少しも悪びれることなく、更なる爆弾発言を行った。

これには、さすがの椀も二の句が継げなかったようだ。

助けを求めるように、俺の方に視線を向けるが、こんな時に頼られても困ってしまう。

「いやあ、ははは……子供はよく見てるなあ……」

「な、何を言ってるの!？」

挙句に、そんな馬鹿な事を口走り、椀の顰蹙を買う羽目になった。

「い、いいこと？」

椀は僅かに口元を引きつかせながらも、笑顔で娘の頭を撫でた。
母親の表情に気付いているのかいないのか、娘は無邪気に椀の顔を見つめ返した。

「お父さんとお母さんは、夜中にプロレスごっこなんてしてないの分かった？」

「えっ。でも……」

「い・い・こ・と？」

「ひっ!？ うっ、うん……」

俺の位置からは、角度的に椀の表情は見えなかったが、娘の怯えた表情から、大体どんな顔をしているのかは想像出来た。

まったく、子供の言う事なんだし、そこまでムキにならなくても。

「さ、分かったなら、お外で遊んできなさい？」

「い、行ってきまーす!」

娘は元気の良い返事を残すと、慌ただしく庭から飛び出して行った。

「まったく、もう!」

羞恥のためか、僅かに頬を上気させた椀は、腰に手をあて憤然と

していた。

俺は、苦笑しつつ、そんな椀の背中を眺めていた。

「おとうさん、おかあさん！」

すると、外に出て行ったとばかり思っていた娘が、軒先からひよっこりと顔を覗かせた。

「私が居ないからって、朝からプロレスごっこしちゃダメだよ！」
「こ、こらああああああっ！！！」

娘は天真爛漫そのものの笑顔でペロツと舌を出し、おどけたようにきやあと悲鳴を上げると、脱兎のごとく逃げ出した。

それを追いかけていく椀の背を眺めながら、俺はこの平和な日常が、いつまでも末長く続く事を願っていた。

妖怪の山編24

訓練所での生活は、厳しい訓練と座学に明け暮れ、正直楽では無い。

毎日、へとへとなるまで扱かれ床について、早朝に総員起こしで叩き起こされては、その日の訓練でたっぷりと扱かれる。

座学も重要で、きっちりと予習復習をしなければ講義についていけなくなり、教官に指導を受けるはめになる。

軍隊という特殊な環境では、「出来ません」「やってみただけ駄目でした」は許されない。「やれ」と言われた事は、必ず出来るようにしなければならない。

出来なければ、出来るようになるまで反復させられ、出来る奴もそれに付き合わされる事になる。

同期に迷惑をかけないためにも、日々の鍛錬や予習を怠る事は出来ないのだ。

しかし、一つ一つの課業を消化し、自分の身体に徐々に筋肉が付き始めてくるのを自覚するにつれ、何だか成長したような実感が湧いてくるのも事実だ。

それに何と言っても、半年に一度、一週間程度の里帰りで柗さんや両親に、遅しくなったと褒められると、少しずつ認めてもらっているような気がして嬉しい。

そんな感じで、息をつく間も無い毎日を繰り返すうちに、あっという間に2年の歳月が流れた。

相棒の花巻も、1年目の頃は、日に5、60回は教官に怒鳴られていたが、今ではその回数も10回程に激減している。そのおかげで、とばかりを喰らう回数も少なくなってきた。

性格は相変わらずだが、これは、まあ、仕方がないだろう。

そう簡単に自分の性格を変えられる訳でもないし。

「……吸血鬼異変が終結したのち、幻想郷では一つのルールが作られた」

教壇の前では、教官が教鞭で黒板を示しながら、声を張り上げていた。

現在の講義の内容は、幻想郷における、戦争条約とも呼べるものについてだ。

「それは、スペルカードルールという、揉め事を解決する手段だ。弾幕ごっこという俗称で呼ばれる事が多い」

吸血鬼異変、あるいはそれ以前の異変では、幻想郷に多くの物的・人的な被害を及ぼす事が少なくなかった。

小さな幻想郷にとっては、死活問題ともなりかねない。

それを憂慮した幻想郷の実力者達と博麗の巫女という人間が協議し、スペルカードルールという、「ごっこ遊び」を制定したのだという。

細々とした取り決めが色々とあるようだが、大まかに言うと、弾幕戦を挑んで相手の体力を奪うか、スペルカードという自分の霊力を封じ込めたものを使用して、相手の用意したカードを破ったりして勝敗を決めるらしい。

体力が尽きたり、用意した全てのスペルカードを破られたりしたら敗北となり、勝利した側もそれ以上の攻撃を加えることは禁じられている。

「このルールがある程度普及しているお陰で、現在の幻想郷は、例え異変が起きたとしても、解決する事が比較的に容易になっている」

ということとは、例えば異変が起きたとしても、親父の時のような血みどろの戦いに発展する事は無いわけだ。

この話を聞いて、少し安心した。
もし、有事が発生しても、多少痛い思いをするかもしれないが、死ぬことは無いからだ。

「異変の解決は、スペルカードルールの創設に関わった博麗の巫女が行うが、必ずしも巫女が解決しなければならないわけではない。過去に発生した異変では、博麗の巫女以外の実力者が解決した例もいくつかある」

博麗の巫女。

巫女さん。巫女さんか。うーむ。

ハカマスキーの俺としては、その巫女さんとやらに、大いに興味が湧いた。

そうだ、柊さんの服装を巫女服にコンバートしてみるとどうだろうか。

俺の脳内で、白衣と緋袴を纏った柊さんが、僅かに小首を傾げ、はにかんだ笑みを浮かべる。

……………いい。すごくいい。

犬耳、尻尾、巫女服。最強じゃないか。どんぶり飯5杯はいけるぞ。

「おい、上有住！ 何をニヤニヤしているか！？」

突然の怒号に、俺は妄想から現実に戻った。

顔を上げると、教官が眦を吊り上げてこちらを睨みつけている。
やばい、何か言い訳をしないと。

「あつ、ええと。し、質問であります！」

「なんだ？」

「スペルカードルールという、紛争解決手段があるにもかかわらず、

自分達が日夜厳しい訓練を行うのは何故でしょうか？」

口に出してから、しまったと思った。

何しろ、自分達哨戒天狗の存在意義に疑問符を投げかけてしまったからだ。

「スペルカードルールが、所詮は紳士協定でしかないからだ」

お前の知る事ではないと叱責されるかと思ったが、教官はあっさり俺の疑問に答えてくれた。

「スペルカードルールは、我々天狗の頭領で在らせられる天魔様も同意している。従って、我々から破る事は決してない。しかし敵対するものが破った場合はその限りでは無い」

つまり、万が一の備えなのだ。

紳士協定でしかないスペルカードルールなど、いつどんな理由で破られるとも限らない。

その時、スペルカードルール以外の戦い方を知らなければ、見通しの甘さから多大な被害を出した、吸血鬼異変の時と同じ轍を踏む事になる。

「理解したか、上有住」

「は、はい。ありがとうございます」

「よし。では、今回の講義はこれまで」

その言葉に、すかさず日直が号令を掛け、俺達は一斉に立ち上がり、敬礼と共に退室する教官を見送った。

一日の課業がすべて終了すると、後は消灯まで自由に過ごす事が出来る。

休憩室で寛ぐもよし、仲間同士でだべるもよし、自室で明日の予習するもよしだ。

ただし、食事や入浴なんかもこの時間内に済ませなければならぬ。

しかも、抜き打ちで非常呼集がかかる場合があるので、自由時間とはいえ、完全に気を抜くわけにはいかない。

ひとたび非常呼集がかかると、もぬけのからになった自室を教官や助教がチェックし、寝台のシーツの乱れや、私物入れに鍵がかかっていないといった不備が見つかると、途端に部屋中を足の踏み場も無いくらいに荒されてしまう。

戸棚や引き出しの中身は全てぶちまけられ、時には廊下に放り投げられてしまう事もある。

いわゆる、台風と言われる、この手の団体生活における風物詩の一つだ。

「随分と楽しそうだねえ」

ちょうど、夕飯を摂っている時の事だった。

相席で飯を食っていた松倉が、談笑している一団を眺めながら呟いた。

松倉と彼の相棒の部屋は、俺と花巻の部屋と隣同士ということもあって、俺達は割と仲が良く、自由時間につるんでいることが割と良くあった。

俺は、咀嚼していたものを、年寄りみたいにゆっくり飲みこんだ後、何かと質問した。

ちなみに、今食っている夕飯は、飯当番の同期が作ったやつだ。

ここでは、1から10まで自分の事は自分でやらなければならない。

宿舍の清掃、裁縫に装備の手入れなど、最初の一カ月で完璧に出来るように叩きこまれる。

飯の支度も同様だ。

味はお察しだが量だけは多いので、取り敢えず腹は膨れる。

「あれだよ、あれ」

松倉の視線の先には、何人かで固まって談笑している連中がいた。その中心にいるのは小佐野だ。

英雄（笑）の息子ということで、当初は何かにつけて俺に張り合ってくる事が多かったが、俺の体たらくぶりにライバル視する程でも無いと思ったのか、今ではそんな態度もすっかり鳴りを潜めている。

何となく、見下されているような気はしているが、そのぐらいなら別に気にするほどでもない。

「羽振りが良さそうじゃん、あいつら」

「んー、まあ。そうだね」

小佐野自身は、課業の成績は優秀だし、親が異変で活躍した英雄という血統書もある。取り巻きを侍らして、多少良い気になりたい気持ちも分かる。

まあ、性格にちょっと難があり、人の失敗を抉ったり、当番を他の奴に押しつけたりするような部分があるので、取り巻き以外にはあまり好かれてはいないようだけど。

しかし、実技・座学共に成績優秀で教官の受け自体は悪くないためか、面と向かって非難する奴はいないみたいだ。

俺個人としては、直接的に害がなければ、別にどうでも良いと考

えている。

「飲み物持ってくるけど、いる？」

「おう。頼むわ」

松倉の答えに頷いて、俺は配膳棚まで飲み物を取りに向かった。

「おい、上有住」

お茶を注いだ湯呑を両手に持ち、席に戻ろうとした時、取り巻きと談笑していた小佐野が声を掛けて来た。

そっちの方向に顔を向けると、小佐野とその取り巻き達が、ニヤニヤと馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。

「僕達のぶんも頼む」

「悪い。手が塞がっている」

盆を使えば良いだけの話だろうが、そこまでやってやる義理も無いだろう。

呆氣に取られている小佐野達に背を向け、俺は自分の席に戻った。

「ほら」

「おう。ありがとう」

俺は、松倉の前にお茶の入った湯呑を置き、自席に腰を下ろした。

「……うは、おっかねえ。滅茶苦茶睨んでるぞ、あいつら」

「まあ、大丈夫だろ」

敵愾心剥き出しの小佐野達を一瞥し、俺は喉を潤した。

うん。食後はやっぱり緑茶に限る。

「お前は大丈夫かもしれないけどな……」

松倉が、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべながら何かを言い掛けた時、食堂に誰かが入ってきた。

花巻だった。

オドオドと食堂内を見回し、俺達を認めると、小佐野達の横を通って小走りで駆け寄って来ようとした。

その足下に、唐突に一本の足が投げ出された。

足下に全く注意を払っていなかった花巻は、ものの見事に蹴躓き、顔からおもいきり床にダイブした。鈍い音が辺りに響く。顔面をモロに打ち付けたらしい。

その瞬間、小佐野達が爆笑した。

ある者は膝を叩き、ある者はうずくまる花巻を指さして笑い転げていた。

なるほど。

こういう意味か。

俺は、溜息をつきながら立ちあがった。

「花巻。大丈夫？」

涙目で鼻を抑えている花巻に声をかける。

花巻は上目遣いに俺を見上げ、コクコクと頷いた。

俺は花巻を立たせると、小佐野達に向き直った。

「小佐野。悪ふざけが過ぎるよ」

「人聞きの悪い事言うなよ。僕はそいつの為にやってやったんだぞ？」

傲然と胸をそびやかす小佐野に、俺は眉をひそめた。

「足を引っ掛けて転ばす事が、花巻の為なのか？ 愉快的理屈だな」
「鍛えてやったんだよ、そいつを」

いびつな形に口の端を歪ませ、小佐野は立ちあがった。

取り巻き達も同じように立ち上がり、半包围するように俺を取り囲んだ。

こちらの異様な雰囲気、他の連中も気が付いたらしい。
何事かといった不安な面持ちでこちらを注視している。

その中にさり気なく松倉もいたが、あいつは面白そうにニヤニヤと笑っていた。

助け船を出してくれる事をちよつとは期待していたんだけど、他人の厄介事が好物な松倉は、野次馬に紛れ込んで高みの見物を決め込んだらしい。

「お前も僕に鍛えて欲しいのか、上有住？」

俺よりも背の高い小佐野は、挑戦的な表情で、見下ろすようにして顔を近づけて来た。

「小佐野……」

「なんだよ」

俺は小佐野の顔をじっと見上げ、おもむろに口を開く。

「鼻毛が伸びてるぞ」

「んなっ!？」

面白いぐらいにうろたえた奴は、顔を抑えて滑稽なくらいに仰け

反った。

「まあ、嘘だけど」

悪びれずにしれっと言ってやると、野次馬の何人かが噴き出す音が聞こえた。

取り巻きのうちの一人も、釣られたのか噴き出していた。

その直後に、物凄い形相の小佐野に睨まれ、慌てて口元を押さえ俯いた。

「ば、ば、馬鹿にしているのかっ!!」

取り巻きの前で恥をかかされたからなのか、小佐野の声は随分と上擦った金切声だった。

いじめっ子に総じて言える事だが、こいつもやたらと沸点が低い。

「先にちよっかいを掛けて来たのはそっちだろう、エリート君」

「何い!」

「何をやっているか、貴様ら!!」

突然響き渡る怒号に、その場に居た者全員が首を竦めた。

俺と俺の胸ぐらを掴んでいる小佐野も同様だ。

呆然と声の方を見る俺達の目に映ったのは、野次馬連中を掻き分け、肩を怒らせて大股で歩み寄って来る、眉間に青筋を立てた教官の姿だった。

妖怪の山編25

「あー、疲れた……」

俺はへとへとになった身体を、寝台の上に投げ出した。

「ご、ごめんね。ごめんね、柵くん。僕のせいで……」

仰向けに横たわり、ぼんやりと天井を見上げていると、同室の花巻が泣きそうな顔で言った。

「気にするなって。お前のせいじゃないよ」

どう見ても、悪いのは小佐野達だ。花巻には何の責任も無い。俺は軽く手を上げ、花巻に向かって笑って見せた。疲労のせいで、どこことなく引き攣った笑みになってしまったが。

「それより、怪我は大丈夫か？」

小佐野に足を引っかけられた花巻は、受け身を取る間もなく、顔面からモロに床に叩きつけられたのだ。

どちらかと言うと、そっちのほうが心配だ。

「う、うん。ぼ、僕は大丈夫。平気だよ」

そう言って花巻は笑うが、額と鼻に貼られている絆創膏が痛々しい。

「ぼ、僕も、廁の掃除手伝うよ」

「良いって良いって。大丈夫」

食堂での一悶着の後。

教官に泣いたり笑ったり出来なくなるぐらいの叱責（もちろん鉄拳制裁込み）を受けた俺と小佐野は、罰としてその場で腕立て伏せ100回の刑に処せられ、更に、向こう一ヶ月間の便所掃除当番という、あまりにも名誉ある任務を拝命したのだ。

「貴様らクソ共の見苦しいツラが映り込むぐらい、ぴっかぴかに磨き上げろ！ チリひとつ、毛一本でも残したら……分かっていない？」

腕立て伏せの直後でヘトヘトになっている俺達にそう言い渡し、教官は立ち去った。

さっそく名誉ある便所掃除に取りかかったんだけど……小佐野が酷かった。

掃除の間中、こんな屈辱は初めてだとか、お前の侮辱には必ず報いを与えてやるとか、聞くに耐えない愚痴ばかりこぼして、全く作業がはかどらなかつたのだ。

そもその原因が自分自身にあるという事を、全く自覚していないのだから性質が悪い。

しかも小佐野の奴、掃除の仕方がとにかく雑なのだ。

目立つ所ばかりを適当に掃除して、部屋の隅や便器の裏の黄ばみなどは放置状態。

今まで当番を取り巻き達に押し付け、まともに掃除をした事が無かったのがありありと分かった。

お陰で、殆ど俺一人で掃除しているようなものだった。

これが、一ヶ月間というのは……正直つらいかもしれない。

やっぱり、花巻に手伝ってもらおうかな……

「よーっす」

何の前触れも無く部屋の扉が開き、脳天気な挨拶と共に松倉が入ってきた。ノックぐらいしろ。

「……何か用？」

寝台から上半身を起こし、胡乱げに睨みつける。
松倉に悪びれる様子は無く、遠慮なく俺達の部屋に入ってきた。

「災難だったなあ、上有住」

断りも無く俺の椅子に腰を降ろした松倉は、食堂で見たようなニヤニヤ笑いを浮かべていた。
台詞とは裏腹に、口調や表情からは、俺の厄介事を楽しんでいるようにしか見えない。

「まあ、犬に噛まれたと思って諦めるんだな」

俺は露骨に顔を顰めた。

他人事だと思いやがって。いい気なもんだ。

「で、でも……」

黙って俺達のやり取りを眺めていた花巻が、おずおずと口を開いた。

「い、犬のほうが、躰が出来るだけ、マシだと思うよ……?」

予想もしていなかった花巻の一言に、俺と松倉は沈黙し、まじま

じと花巻の顔を注視した。

「……お前も言うね」

僕何かおかしなことを言った？　とでも言いたげなキョトンとした表情で、花巻は小首を傾げた。

こいつ、意外と毒舌なんだな……

「ま、まあ、とにかく」

松倉が気を取り直すように、コホンとひとつ咳払いをした。

「小佐野達には気を付けろよ。あいつ、恥をかかされたと思っているから何かしてくるぞ」

「あー、はいはい。ご忠告ありがとうございます」

面倒くさそうにヒラヒラと手を振ると、松倉の奴はニシシと歯を見せて笑った。

コイツの事だから、むしろそうなた方が面白いとでも考えているんだろう。

「でも、柵くん……本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。たぶん」

訓練所内での私闘は、どんな理由であれ厳禁だ。

あいつも、馬鹿じゃないんだから、これ以上の問題を起こして、自分の経歴に傷を付けたりはしたくないだろう。

なにしろ、エリートなんだし。

そんな事を笑いながら言っていると、花巻は少し困ったように眉根を寄せた。

「ま、ま、まともな人なら、そう考えるだろうけど、こ、小佐野君って、少し、まともじゃないでしょ？」

「は、花巻……？」

「じ、自分の事を、と、特別だと思っている馬鹿^{たち}って、性質が悪いと思うし……」

花巻って、こんなキャラだったっけ……？

隠された本性を垣間見たような気がして、少しばかり背筋が寒くなった。

もしかしたら、食堂の一件で、密かに腹を立てているのかもしれない。

「そ、それより、もうすぐ長期休暇だな！」

俺同様に、得体の知れないうそ寒さでも感じたのか、松倉がやや強引に話題を変えた。微妙に声が上がっていた。

哨戒天狗の訓練生は、基本的に訓練所暮らしだが、半年に一度だけ、一週間程度の里帰りが許される長期の休暇がある。

休暇中の過ごし方は様々だが、大抵が実家に帰り、家族と過ごすのが殆どだ。

もちろん、俺達も同様だ。

「うん。そうだね……はやく、お母さんに逢いたいな」

花巻は心底嬉しそうに言った。

嬉しさのあまりなのか、尻尾が激しく左右に振られている。

訓練所に入所してから今年で3年目だというのに、マザコンぶりは相変わらずのようで、俺と松倉は揃って嘔き出した。

……まあ、俺もシスコンみたいなもんだから、そのへんはあまり

笑えないんだけど。

「で、でも、近所のお姉さんが凄く怖くて、帰るたびに苛められるんだ……」

さっきまでの嬉しそうな様子から一転して、しょんぼりと俯いてしまった。

振り子のように振られていた尻尾も力なく項垂れてしまう。

「なにっ。苛めてくれるお姉さんだと!?!」

松倉が妙な所に食いついて来た。

鼻息も荒く、花巻に詰め寄る。

「う、うん。オスなんだから、し、しっかりしなさいっていうのが口癖なんだ」

少し身体を仰け反らせながら、花巻はおずおずと答えた。

両親をはじめ、周囲の大人たちは優しくかったが、その近所のお姉さんだけは、花巻に厳しく、無理矢理空を飛ぶ練習や霊弾の訓練をやらされたのだという。

苛めと言うより、厳しいと言った感じだろうか。

「く、訓練所に入所する時も、行きたくないって言ったら、無理矢理ここまで引き摺られてきて……」

その時の様子を思い出したのか、花巻はくすんと鼻を吸った。

随分と過激な人みたいだ。

花巻のようなタイプにはたまらないだろう。

「くそお。なんて羨ましい……」

羨望の眼差しを向ける松倉を、花巻は奇妙な生き物を見る目で見つめていた。

「そういや、上有住。お前、従姉のお姉さんがいたよな？」

「あ？ ああ、うん。いるけど？」

「やっぱり、苛めてくれるのか？」

何かを期待するような目で、松倉は俺に訊ねて来た。

鼻息は荒く、目が異様にぎらついている。もちろん、尻尾も激しく振られていた。

まさか、こいつにこんなアレな性癖があったとは、知らなかった。

「なあ！ どうなんだ？」

若干引き気味の俺に構わず、松倉は興奮気味に詰め寄ってきた。期待に添えなくて悪いが、椀さんには、苛められた事はもちろん、叱られた記憶すら無い。

「……どちらかというと、可愛がられていた感じかな。優しい人だから」

「可愛がられる！ それはつまり、手玉に取られて弄ばれていたってことか！？ それも良いなあ！ くそっ、羨ましい！ 羨ましがるぞ、お前ら！」

「なんでそうなるんだよ……」

俺は呆れ半分で、花巻は呆けたように、一人身悶えする松倉を眺めていた。

その日の夜は、そんな感じの馬鹿話で、消灯までの時間を過ごし

た。

「樫、一等狼曹に昇進おめでとー!!」

歓声とともに、私の頭上で乾いた音が立て続けに鳴り響いた。

次いで、立ちこめる火薬の臭いとともに、頭上に色とりどりの細かい紙が降り注ぐ。

卓を挟んだ目の前には、手にクラッカーを構えた文さん、にとり、そして梓の3人が、三者三様の笑みを浮かべていた。

「はあ……ありがとうございます」

せつかくの祝いの言葉だったので、私は3人に向かって軽く頭を下げた。

柵が訓練所に入ってから1年半ぐらい経った頃。

突然、隊長室に呼び出された私は、飛行隊長に二等狼曹への昇進が決まった事を告げられた。

更にそれから半年ほど経った今日の朝、今度は一等狼曹への昇進が告げられたのだ。

こんな短期間のうちに、2回も昇進するなんてことは、異例中の異例だ。

「もう、樫ったら。せつかくの昇進祝いなんだから、少しは嬉しそうな顔をしなさい」

「そうそう! ほらほら、ぐーっと飲んで、ぐーっと!」

文さんが絶え間なくカメラのシャッターを切り、にとりが盃になみなみと酒を注いだ。

「櫛クンだって、きっと喜んでくれるわよ？」

「そうでしょうか……」

ふと櫛の顔が脳裏をかすめた。

月日の経つのは早いもので、あの子が訓練所に入所してから、3年目に入っている。

半年ごとに帰って来る櫛は、会う度に逞しく成長しているのが見て取れた。

衣服から覗く手足には、しなやかな筋肉が付き始め、身長もだいぶ伸びていた。

普段の所作についても、入所前の頼りない感じとは格段に異なり、ずいぶんとしっかりした印象を受けた。

訓練に真面目に取り組んで、自分を律しているのが良く見てとれた。

時折、生意気にもオスの顔をするようになり、柄にもなくドキリとしてしまう事が何度かあったくらいだ。

「そりゃあ、そうよ。大好きな櫛が偉くなったんだもの」

そう言って文さんは、当然とばかりに大きく頷いた。

私が昇進したと知れば、確かに櫛は祝福してくれるだろう。

私自身、昇進することが嬉しくないわけではないが、特別な功績を立てたわけでもないのに、立て続けに二階級も昇進する理由が分からない。

自分の預かり知らぬ所で妙な事が起こっているような気がして、素直に喜ぶ気になれないのだ。

「だけど、椋の実力から考えれば、これでもまだ昇進が遅い方だよね」

梓が酒を嘗めつつ言った。

「なにせ椋は、私達同期の中では一番の出世頭だったんだもの」
「そうだったんだ」

にとりが興味深そうに梓に聞き返した。

「幹部なんて、すぐだって言われてたもん」

「へえ！ そりゃすごいわ」

「そ、そんな事無いわよ……」

大袈裟なぐらいに目を丸くするにとりに、私は少し居心地が悪くなった。

幹部とは、三等狼尉以上の階級で、主に小隊長や飛行隊の幕僚など、隊の首脳部クラスを指す。

ちなみに、今回の私の階級——一等狼曹がどの程度のものかいうと、小隊の下にいくつかある分隊を指揮する小部隊の指揮官クラスだ。

「あの事さえ無ければねー」

ちびちびと酒を嘗めながら、梓がしみじみと呟いた。

「ああ、あの事ね。あれは、中々に大事だったわね。大天狗様が直々に裁定を下されたくらいだし」

「あー、あれか。下手をしたら、妖怪の山から追放されていたかも

しれないもんね……」

文さんにとりが、顔を見合わせ言った。

「ストイックな椀の引き起こした、唯一の男性問題だものね。諸事情により、記事に出来ないのが実に残念だわ」

揶揄するような、悪戯っぽい笑みを浮かべる文さんに、私は少しムツとした。

「……そういう下劣な言い方は止めてください」

「あやや。怒らない怒らない」

唇を尖らせる私に、文さんはヒラヒラと誤魔化すように手を振った。

私は、そんな文さんを上目遣いに睨みつけた。

「文さん。分かってると思いますけど」

「大丈夫よ。櫛クンに話したりはしないから」

「本当ですね？ あなたたちも……」

私は、にとりと梓の顔を順繰りに見つめた。

私の視線を受け、二人は慌てたようにコクコクと頷いた。

三人の言う「あの事」は、私のもっとも触れて欲しくない過去の一つだ。正に、黒歴史と呼んでも良い。

何かしら破廉恥な事をしでかしたわけではないが、私の浅慮で招いてしまった重大事である事は確かだ。

従姉として哨戒天狗として、常に櫛のお手本でなくてはならない私が、過去に何かしらの問題を起こしていた事を知られるのは、教育上あまりよろしくない。

それに……経緯はどうであれ、オスと問題を起こしてしまった事に変わりはないからだ。

「まあ、まあ！ 気を取り直して、今日はがんがん飲みましょう！」
「そうそう！ セっかくの祝いの席なんだし、たまには羽目を外して楽しもうよ」

誤魔化すように、文さんにとりが、矢継ぎ早に私に酒を勧めて来た。

自分達から話題に出しておきながら、勝手なものだ。

そんな感じで、なし崩し的に、建前上は私の昇進祝いの酒宴が始まったわけだが、いったん始まってしまえば、そこは気の置けない友人達との気楽な宴会だ。

翌日が非番と言う事もあり、私は久しぶりの酒盛りを大いに楽しんだのだった。

「ふー、ちょっと飲み足りなかったかしらねー」

椀の昇進祝いの酒宴は、全員に程良く酔いが回り、用意していた酒と肴も尽きた所で流れ解散となった。

友人達に別れを告げて帰路に付いた文だったが、ウワバミの多い天狗の中でも酒豪の彼女にとっては、先程の酒量では少し物足りなかった。

「夜雀の屋台でひっかけて行こうかな」

そう思い立った文は、自宅へ向けて飛んでいた進路を変更し、夜

雀の屋台へと向かった。

暫く飛び続けていると、やがて夜雀の経営する屋台が見えて来た。割烹着姿の夜雀が、甲斐甲斐しくウナギのかば焼きを焼いている姿が遠目に確認できた。

「あやや？ あそこに居るのは……」

先客の姿を確認した文は、反射的に近くの木陰に身を隠した。

何かやましい事があるわけではないが、とりあえず物陰に身を隠すのは、新聞記者の本能のようなものだ。

身を隠しつつ、様子を窺って見ると、先客は二人。

どちらもオスの白狼天狗だった。

二人とも文の良く知る人物だった。

一人は、彼女が監査役として派遣されている隊の飛行隊長、もう一人は。

「柵クンの……お父さんね」

彼女もよく知る柵の従弟、柵の父親だった。

「ふむ……現職の隊長と先代の隊長が、いったいどのような話をしているのかしら。何やら特ダネの匂いがするわね」

そう判断した次の瞬間、彼女の手には文花帖と万年筆があった。文は、生い茂る樹木に身を隠しつつ、二人のいる屋台に近づいて行った。

相手は嗅覚や聴覚に優れる白狼天狗だ。下手を打てば察知されてしまう。

細心の注意を払い、風下から慎重に接近する。
ギリギリまで近づくと、文は自身の風を操る程度の能力を使い、

二人の会話に耳を傾けた。

「……ご子息の事ですが、私の隊で預かる事になりそうです」
「そうか。まあ、そうなるだろうなあ」

文の耳に入って来たのは、二人のそんな会話だった。
どうやら、櫛の話題のようだった。

文花帖にペンを走らせながら、文はふと疑問を感じた。
訓練生の配属先の決定はまだまだ先の筈だからだ。

「やっぱり、どこの隊も敬遠するか」

嘆息混じりに吐き出される楠の一言に、文は合点が行った。

上有住 楠と言えば、吸血鬼異変で最も功績のあった哨戒天狗として、妖怪の山では知らない者がいないほどの有名人だ。

一線を引き、予備役となった今でも、その知名度は計り知れない。
その英雄の息子である櫛をどの隊に配属させるか、各隊の飛行隊長は頭を悩ませていたのだろう。

もし、櫛が自分の隊に配属され、先輩隊士に苛められたり、任務中の事故で大怪我でもしたら、隊長の管理責任を問われる結果となるからだ。

その点、第六十四哨戒飛行隊には、櫛の従姉である栞もいる。

櫛の相手を彼女に任せてしまえば良い。

そういった経緯で、言い方は悪いが、押し付けられてしまったのだろう。

現職の隊長が、異変の折、楠の部下だったという事も理由の一つかもしれない。

「迷惑をかけるな」

「とんでもない！」

慌てて首を振る隊長に、楠は薄く笑みを浮かべた。

「暫くの間は、犬走を分隊長として、ご子息を彼女の部下として配置しようかと考えています」

「まあ、妥当だな。椀ちゃんなら、必要以上に櫛を甘やかす事も無いだろうからな」

文花帖にペンを走らせつつ、文は椀の昇進理由を理解した。

（ふうむ。しかし……）

万年筆の尻軸を顎にあて、文は唸った。

正直、それを知ったからといって、特ダネというほどのものではない。

これは外れだったかと落胆しかけたその時だった。

「ええ。婚約者の犬走なら、そのあたりを上手くやってくれるでしょう」

隊長のその言葉に、文は自分の耳を疑った。

ほろ酔い加減だった文の頭から、一瞬にしてアルコールが抜けた。

「ん……？ 婚約者？」

「違うのですか？ 犬走本人から聞いたのですが。ご子息とは婚約者だと」

楠は一瞬きよんとしていたが、直ぐに何度も頷いた。

「あ、ああ。そうだとも！ そうかそうか、椀ちゃんがそんな事を

なあ……」

不審そうに首を傾げた隊長に、楠は誤魔化すように笑いながら、何でもないとはかりに軽く手を振った。

離れた場所でそれを聞いていた文は、興奮しながら話の内容を文花帖に逐一記録をしていた。

もちろん、写真撮影も拔かりはない。

耳聡い白狼天狗にシャッター音を気取られないため、能力で風向きを変えて音を隠す事も忘れない。

それにしても、樅め。常々怪しいとは思ってはいたが、やはりそういう事だったのか。

しかし、そう考えれば、これまでに彼女が見せた、柵に対しての異常なまでの独占欲の強さも理解できる。

これは、何としても記事にしなければならぬ。

今夜は徹夜になりそうだ。

一頻り二人の会話を聞き終えた文は、人知れずほくそ笑むと、思いかけず入手した特ダネに胸を高鳴らせながらその場を後にした。

妖怪の山編 26

「ん……う……」

気が付くと、既に朝になっていた。

どうやら、いつの間にか、卓上に突っ伏する形で眠ってしまったらしい。

のろのろとテーブルから顔を上げ、寝起きのぼんやりとした頭が覚醒するにつれ、ようやく、室内の惨状が理解出来てきた。

あちこちに徳利や酒瓶、ツマミとして持ち寄られた肴の残骸などが散乱していた。

もちろん、あの3人の姿はどこにもない。

騒ぐだけ騒いだ後、潰れてしまった私を余所に、後片付けもせず、にさっさと帰ってしまったらしい。

宴会がしたいだけの名目とはいえ、仮にも主賓であるはずの私を放置してだ。

友人達の心温まる所業に、込み上げてくる暗澹たる気持ちに胸が熱くなった。

この惨状の後片付けを、一体誰がやと思っているのか。

「まったく……」

憤懣やるかたない心境だったが、このままにしておくわけにもいかず、私はぶつくさ言いながら後片付けを始めた。

小一時間ほどして後片づけを終えた私は、湯浴みを行い、昨夜の汗と酒のおいを洗い流した。

そこで、ようやく頭がはつきりとしてきた。

壁に掛けてある暦に目を走らせ、今日の日付を確認する。

「いけない！」

思わず、小さくない声で叫んでしまった。

今日は半年に一度、柵が休暇で里帰りする日だったのだ。

しかも、今度の休暇は部隊配属前の最後の休暇だ。

隊に配属されれば、お互いの哨戒シフトも異なるわけだし、そうそう頻繁に会う事も出来なくなる。

つまり、柵と自由に過ごす事が出来る最後の期間なのだ。

そんな貴重な時間を、一秒たりとも無駄にすることは出来ない。慌てて身支度を整えると、朝食も取らずに自室から飛び出した。

営内に出た途端、私の高下駄が何かを踏みつけたらしく、足を滑らして思わず転びそうになった。

何とか体勢を立て直し、驚いて足元を見ると、営内の地面には、至る所に紙切れが散らばっていた。

どうやら、そのうちの一枚を踏みつけてしまったらしい。

その紙切れをよくよく確認してみると、『文々。新聞 号外』と大きく紙名が書いてあった。

私は、溜息を一つ吐き出し、得意げに胸を張る文さんの顔を思い浮かべた。

いったい、どんな特ダネを見つけたのかは知らないが、営内に不法投棄は止めてほしい。

それにしても、明け方近くまで一緒に飲んでいたはずなのに、よくもまあ、一晩で新聞を書き上げたものだ。

あの人のこのバイタリテイは、いったいどこから来るのだろう。あきれ半分感心半分で、私はおもむろに、足下に散らばる号外の一つを手を取った。

何の気なしに紙面に目を通し、自分の頭から血の気が引く音を聞いた気がした。

『哨戒天狗 犬走 柵の従弟育成計画の全貌をスクープ!!』

紙面にデカデカと、そんな下品なテロップが踊っていたからだ。
内容に関しても、正に噴飯ものだった。

どうやら、私が以前、お見合いを断る口実として隊長に話した出任せを、文さんがすっぱ抜いて記事にしたようなのだ。

一瞬、隊長が話したのかと思ったが、記事を読み進めてみると、隊長が夜雀の屋台で楠おじさんと飲んでいるときに、そのことを口にしたらしく、それを文さんが盗み聞きしていたらしい。

それだけならまだしも、私が将来、櫛を婿にするため、様々な調教を行っているなどという、根も葉もどころか、種さえ見当たらない捏造記事で溢れていた。

更に記事には、楠おじさんに否定する素振りは全く見られなかった事から、調教成計画は両親の合意の元で行われているとまで書いてあった。

「迂闊だったわ……」

私は呻き、眉間を揉みほぐした。

隊長が約束を破ったとは思っていない。

私から櫛が婚約者だと聞いていたのだから、父親である楠おじさんとその事を話すのは至極当然の事だ。

むしろ、その可能性を全く考慮せず、勢いのままに口から出任せを言ってしまった私の自業自得だ。

しかも、よりもよって、文さんに知られてしまうとは……

「あ、犬走!!」

新聞を手にしち尽くしている私に、同僚の一人が声を掛けて来た。それを引き金に、私の周りに、瞬く間に同僚達が集まってきた。

「ねえねえ！ 見たよ、この新聞！」

「いいなあ！ いいなあ！ 椀！ 私も婿を育てて娶りたい！」

口々に勝手な事を言いながら、振り切れんばかりに盛んに尻尾を振るメス達。明らかに楽しんでいるとしか思えない。

「ウソだろう！ あんな子供が婚約者なんて、倒錯的すぎるぞ！」

「嘘だと言ってくれ、犬走！！」

「むしろ、俺を調教してくれえ！」

血走った眼で、怒号というか慟哭というか、とにかく尋常ではない叫びを上げ、鼻息も荒く詰め寄って来るオス達。

ふと、同僚達の人垣の向こうに、飛行隊長の姿が見えた。

私と視線が合うと、口が「すまん」という形に動き、申し訳なさそうに私に手を合わせた。

暫くの間、呆氣に取られていた私だったが、次第に沸々と怒りが沸き起こってきた。

記事にした文さんに対してのものなのか、無責任に騒ぎ立てる僚友達に対してのものなのか、自分の迂闊さに対してのものなのかはよく分からなかった。

「い、い、いい加減にしろおおおっ！！」

思わず、子供が癇癪でも起こしたような怒声を上げてしまうが、もちろん逆効果だった。

同僚達は、面白がってますます私に纏わりついて来る。

こんな状態では、いつまで経っても櫂を出迎えに行けない。

「なんだ、ありゃ……？」

どうしたものかと考えあぐねていると、私を取り囲んでいた同僚の一人が、呆けたような声を上げた。

私を始め、周りの皆がその同僚の視線を追うように空の彼方に目を向けた。

周囲の喧騒がさざ波のように引いて行った。

さっきまでの青空に、何処から湧いたのか、赤い染みが広がって行くのが見えたからだ。

良く見ると、それは紅い色をした霧のようなものだった。

呆然と見守る私達の前で、陰気な色合いの紅い霧は、絵の具でもぶちまけたように空に広がり、瞬く間にお天道様を覆い隠していた。

2日目以降の便所掃除に、小佐野は姿を見せなかった。

代わりに日替わりで現れたのは、奴の取り巻き達だった。

教官直々の仰せを取り巻きに押し付けてバックレるなんて、実に良い根性をしていらっしゃる。

「教官に告げ口したら、分かっているだろうな？」

取り巻き達は、日替わりで俺に凄んだが、そんなつもりは毛頭なかった。

なぜなら、小佐野とやるよりも、取り巻き連中とやったほうが、掃除がはかどるからだ。

せっかく、短時間で終わらせる事が出来るのに、告げ口なんてしたら元の木阿弥だ。

取り巻きは、俺が恐れ入っているとでも勘違いしたのか、優越感

たつぷりで非常に満足そうだった。

そんな感じで、俺達に命じられた罰当番は終了したんだけど、小佐野が顔を出したのは、初日と最後の日だけだった。

最後の日に顔を出したのは、自分が最後までやり遂げたというアピールのつもりなんだろう。たぶん。

教官の元に出頭し、「任務」の終了を報告し、俺と小佐野に与えられた罰は、いちおう何事もなく終了した。

便所掃除当番が終了した後、しばらくは普通の訓練生活が続いた。松倉の警告（期待？）に反し、小佐野と取り巻き達が何かをしてくる素振りは無く、より実戦的で高度な内容になっていく日々の訓練に追われ、そんな事はきれいさっぱり忘れ去ってしまった。

そして、訓練修了の半年前、最後の里帰り時期となった。

相棒の梅は、実に嬉しそうに故郷の村に向けて飛び立っていった。そんな相棒を苦笑しつつ見送り、俺も自分の村に向けて出発した。早く栞さんに会いたくて仕方がなかった。

「おい」

暫くの間、自分の村に向けて飛行していると、突然背後から声を掛けられた。

振り返るとそこには、腕組みをしてふんぞり返っている小佐野がいた。

更に、俺の背後と左右には、取り巻き達が包囲するように取り囲んでいた。

「……何か用？」

ウンザリとした内心を隠そうともせず、俺は投げやりに問いかけた。

すると小佐野は、腕組みをしたまま、にやりと口の端を吊り上げ

た。

「なあに。この前、食堂で恥を搔かされた礼をしようと思ってな」
「礼……？ ああ」

言われて、思い出すまで暫く掛かった。
わりとどうでも良い事だったので、完全に忘れていた。

「……訓練所で私闘は厳禁だろう」
「ここは訓練所じゃないだろう？」

小佐野が見下すように言うと、俺を取り囲んでいる取り巻き達から、小馬鹿にしているような笑い声が聞こえた。

「それで、俺をよってたかってボコって溜飲下げようってか？ や
っすいプライドだな」

呆れ半分で溜息交じりに呟くと、途端に小佐野の表情が憎々しげに歪んだ。

「僕がそんな卑劣な真似をするわけがないだろう。こいつらは、お前が逃げないようにするための見張りだ」

さり気なく視線を巡らし、逃げられそうか確認したが、どうにも
厳しそうだ。

「一対一で完膚なきまでに叩きのめしてやる！ 覚悟しろ！」

びしっとなりに俺を指さし、力強く宣言した。
面倒くさい事になった。

よりにもよって、こんな時期にチョツカイを掛けてくるとは思わなかった。

ちなみに、小佐野とやりあって勝てる自信は全くない。

実技も座学も中の上程度の俺と違い、小佐野は常に首位をキープし続けている。

性格に問題はあるが、偉そうな態度を取るだけの事はあるのだ。

「行くぞ！」

「うわ！」

言うなり、小佐野は霊弾を放ってきた。

慌てて仰け反った俺の鼻先を、小佐野の放った霊弾が掠めていった。

「そら、そら！」

体勢を崩した俺に向かって、小佐野は嵩にかかったように弾幕を展開した。

俺は迫りくる霊弾を必死に躲し、あるいは自分の放つ霊弾で打ち消すが、全く追いつかず、何発もの霊弾を身体に受けてしまった。

「いたたたた……！！ 痛い痛い！ 降参！ こーさん！！」

堪りかねてそう叫ぶが、小佐野の攻撃の手は緩まなかった。

弾幕ごっこのルールに違反してるじゃないか。

あつという間に一方的な展開になり、俺は頭を庇いながら必死で逃げ回っていた。

不意に、小佐野の霊弾が途切れた。

「な、なんだ……？」

驚愕するような小佐野の声と、取り巻き達のざわめきに、俺は恐る恐る顔を上げた。

何処から、いつの間に湧き出たのか、周囲に紅い霧が立ち込めていた。

紅い霧は俺達の周囲だけでなく、妖怪の山全体を覆い尽くしているようだった。

いや、下手をしたら、幻想郷中を覆い尽くしているのかもしれない。

呆ける俺達を余所に、紅い霧はどんどん濃密になっていき、太陽まで覆い隠してしまった。

「もしかして、これが……」

それが、俺がこの幻想郷で最初に遭遇した異変——紅霧異変の始まりだった。

妖怪の山編27

突然降って湧いた異常事態に、最初こそ、隊内に動揺が広がりがけたが、そこは皆プロの哨戒天狗だ。

すぐさま状況を理解すると、異変発生時の対処要綱に従い行動を開始した。

通常、哨戒天狗隊が出動する際は、御山の中枢に所在する総隊司令部からの指令が必要になるが、吸血鬼異変の折、首脳部の意思決定の遅れで被害の拡大を招いた反省を踏まえ、飛行隊長が必要と判断すれば、隊独自で初動対処できるようになっている。

私の隊も、飛行隊長の命令の元、総隊司令部および、他の屯所や近隣の村落にすぐさま連絡要員が派遣され、いつ防衛出動が発令されても良いように、即座に臨戦態勢が整えられた。

私も連絡要員の一人として、自分の村への派遣を命じられた。

正直、異変よりも櫛が無事なのかどうか、気が気ではなかった。

村に来る途中で異変に気づき、訓練所に引き返すか、あるいは既に村に到着していれば良いのだけれど。嫌な胸騒ぎが収まらない。

もし、村に着いた時に櫛が居なかったとしても、探しに行くわけにはいかない。

前回の時とは違い、今は有事だ。

いくら身内の様子が心配でも、当然のことながら任務が優先されるからだ。

纏わりつく妖精を弾幕や剣で駆除しつつ、可能な限りの速度で自分の村に向かう。

妖精達は、異変の影響で活性化しているのか、普段よりも力が増しているように感じられて少々鬱陶しかった。

それに加え、留まる事を知らずに、何処からか湧き上がってくる紅霧に遮られ、視界が悪い事この上ない。

それにしても、陰気な霧だ。

誰が起こした異変かは知らないが、こんな陰気臭くて下品で、ジメジメとした霧を発生させて粹がっているなんて、余程性格のねじくれた輩なのだろう。

例えば、あの隙間妖怪のような。

そう考えた瞬間。

全身が総毛立つような気配を背後に感じた。

修練に修練を重ねた身体が無意識のうちに反応した。腰に差した剣を居合の要領で鞘走るままに抜刀し、振り返り様に背後の空間を横一文字に薙ぎ払う。

しかし、その先に予想した感触は無く、がきんという金属同士が激しくぶつかり合う乾いた音が響き渡っただけだった。

「おお、怖い怖い」

おどけた台詞と共に、奇妙な頭巾を被り、舶来物の派手な衣装に身を包んだ金髪女が、閉じた日傘で私の渾身の剣戟を軽々と受け止めていた。柄を握る手のひらに、じんわりと汗が滲む。

「八雲 紫……さん」

そう呟く私の表情は、おそらく苦虫をまとめて噛み潰したような顰め面だったことだろう。

そんな私をからかうように、八雲 紫はにんまりと口の端を吊り上げた。

「物騒ねえ。最近の哨戒天狗は、警告も無しに、いきなりやつとうでくるのかしら？」

日傘を降ろした八雲 紫は、取りだした扇子で口元を覆いながら、笑みの形に目を細めた。

「八雲 紫さん」

努めて平静を装い、私は静かに口を開いた。

剣を降ろしはしたが、抜き身のまま鞘には納めない。

どうも、この気紛れな女が好きになれない。

前々から胡散臭い奴だとは思っていたが、それ以上に、以前、櫛に妙なちょっかいを掛けて来たからだ。

相手が誰であろうが、櫛に対して邪な考えを持っている者は全て敵だ。

「いくら、天魔様と誼^{よじ}みを結んでいる貴女とはいえ、こう度々無許可で妖怪の山に立ち入られては困ります。ましてや、この非常事態に、あらぬ誤解を受けることにもなりかねません」

低い声で警告を述べると、見せつけるように、手にした剣をガチャリと鳴らして見せた。

警戒心を隠そうともしない私に、八雲 紫の顔から表情が消えた。その瞬間、心臓を鷲掴みにされたかのような圧迫感を覚え、本能的な恐怖に全身の毛穴が一斉に開き、背筋を冷たい汗が流れ落ちる。喉の奥から漏れそうになる唸り声を必死で抑え、傲然と胸を張り、真っ向から八雲 紫の視線を受け止めた。

「もう……そんなに怖い顔をしないでくださいな。可愛い顔が台無しですわよ?」

ふっと息を漏らすように微笑み、八雲 紫はまるで小娘のように、コロコロと微笑んだ。張り詰めていた空気が霧散していく。

内心の恐怖を押し隠しつつ、肩の力を抜いた。

「そんな怖い顔してたら、従弟くんが泣いちゃいますわよ？」

「なっ……！！ か、関係ないでしょう！？」

反射的に叫ぶ私に、八雲 紫は意味深に微笑んで見せた。
いちいち癪に障る女だ。

「……そんな事よりも。いったい、何の用なんですか」

「今回の異変について、あなた達の親分に話を通しに行くところだ
つたのよ」

「天魔様に……？」

訊き返す私に、八雲 紫は笑みを湛えたまま、静かに頷いた。

「この異変は長くは続かないわ。妖怪の山に危害が及ぶ事は無いから、過剰な反応は慎むように、とね」

八雲 紫の話によると、この異変を起こしたのは、最近幻想郷に
やってきた、舶来の妖怪らしい。

九天の滝の下流、妖怪の山の麓にある霧の湖の中央に浮かぶ小島
に、自らの住処ごとやって来たのだというのだから、随分と派手な
輩のようだ。

幻想郷の管理人でもある八雲 紫が、その妖怪の元を訪れ、幻想
郷でのルールについて説明したところ、早速とばかりに起こしたの
が、今回の異変だというのだ。

「……つまり、貴女が元凶というわけですね」

「どうしてそうなるのよ」

どうしてもなにも、そいつをたきつけた事に違いは無いだろうに。

「ともかく。今回の異変は、前回の異変とは違うのよ。スペルカードルールに則った、正式な『遊び』よ。何の心配もいらなわい」
「……分かりました」

私は溜息交じりに眩き、抜き身のままだった剣を鞘に収めた。
もちろん、納得したわけではない。

「だったら、さっさと天魔様の所に行ってください。私は忙しいんです」

「もう、連れなわねえ。ゆかりん悲しい……」

実にわざとらしい、演技と丸分かりの潤んだ声でしなを作り、八雲 紫は取りだしたハンカチで、滲んでもいない涙を拭き取る仕草を見せた。

「せっかく、顔見知りを見掛けたから、挨拶しようと思ったただけなのに……」

顔見知りも何も。

会った事がある時なんて、後にも先にも数年前のあの時だけだろうに。

「音も無く背後に現れただけで、斬りかかれるなんて……」

「……十分過ぎる理由です。嫌なら、太鼓を叩いて笛でも吹きながら出現してください」

「何よそれ。反原発デモのキチガイプロサヨクじゃあるまいし」

何を言っているのか、意味が分からない。

唯一つ分かったのは、関わり合いになっても時間の無駄でしかないという事だけだ。

「そんな事よりあなた。こんな所で時間を潰していてよいのかしら？」

足止めたのは貴様だろうが、という声を寸での所で飲み込み、私は気を落ち着かせるように、静かに息を吐いた。

たしかに、こんな所で油を売っている暇は無い。

失礼しますとおざなりに言い捨て、八雲 紫に背を向けた。

「あなたの従弟くん、大丈夫かしらね？　いつかみたいに迷子になつていなければ良いのだけれど」

吐息と共に耳元で囁かれた声に、怖気を感じて振り返るが、そこには既に八雲 紫の姿は無く、ただ陰気な紅い霧が広がっているだけだった。

「な、なんだ！　なんだよ、これ！」

「いったい、何が起きたんだよ！」

「落ち着け！　うろたえるな！」

狼狽して悲鳴のような金切り声を上げる取り巻き達を、小佐野は

上擦った声で叱咤している。その小佐野自身も動揺しているらしく、僅かに声が震えていた。

「もしかして、これが異変……?」

「異変だって?」

ぽつりと漏らした俺の呟きを聞き留めたのか、小佐野が訊き返した。

「そうだよ。どう考えても普通じゃないだろ、こんなの」

そんなやりとりをしている間にも、紅い霧はどんどん濃度を増していき、ほんの数メートル先すらも見えなくなってしまった。

とにかく、こんな異常事態の最中に、呆けていても仕方がない。

「訓練所まで戻ろう。いつまでもここに居たら危険だ」

「あ、ああ……」

お前が仕切るんじゃないとか噛みついて来るかと思ったが、小佐野は案外素直に頷いた。

想定外の事態に、どうしていいのか分からないのかもしれない。取り巻き達の間からも反論は上がらなかった。

それにしても、せっかく半年ぶりの、しかも部隊配属前の最後の休暇だというのに、一体全体この仕打ちはなんなんだ。小佐野にリッチを喰らうわ、異変に巻き込まれるわで散々だ。

久しぶりに樫さんに会えると思って、楽しみにしていたのに。異変が終了したら、今回潰れたぶんの休暇はきちんと貰えるんだろうか。

そんな事を考えながら、訓練所の方角に向けて飛び立とうとした時だった。

った。

「くっ！ 援護しろ、お前ら！！」

せっぱ詰まった声で救援を求めるが、それに応える奴はいなかった。

取り巻き達は、ボスである小佐野を放置して、我先にと逃げ出していたからだ。

「あ、あいつら……」

小佐野の表情に失望と怒り、それ以上の絶望が広がっていくのが分かった。

俺もこの隙にトンズラしようかと思ったが、後々になって、こいつが草生す屍状態で発見されたりでもしたら、さすがに寝覚めが悪い。

それに、天狗は仲間を決して見捨てない。

小佐野を援護するべく、妖精達に向かって霊弾を放つ。

幸い、妖精のほとんどは小佐野に向かっていたので、落ち着いて射撃すれば命中させることは、それほど難しくは無い。

コソコソと木陰に身を隠しながら、小佐野に纏わりつく妖精達の中でも、死角になっていたりして対処が困難な位置にいるヤツを優先的に撃墜していく。

小佐野は、俺から援護が貰えるとは思っていなかったらしく、一瞬動きを止め、驚いたようにこちらを振りかえった。

「小佐野！ 後ろ！」

俺が叫ぶと、小佐野は咄嗟に反応し、背後から突っ込んできた妖精の頭を霊弾で撃ち抜いた。頭を失った妖精は、羽や手足をバタバ

タと動かしながら、空中に溶けるように消えていった。今更だけど、けっこうグロイ。

俺の援護を受けて、小佐野は態勢を立て直した。

さすがはエリート君らしく、頭の切り替えは早い。対処が困難な妖精は完全に俺に任せると、身近な妖精から始末にかかった。

妖精は、突然何の前触れも無く出現し、時には群体で襲いかかって来る事もあるため、慣れていないとパニックを起こしてしまう事があるが、基本的に頭が悪いので、対処の仕方さえ誤らなければ後は簡単だ。

現に、木陰から俺の弾幕を受けているにもかかわらず、こちらには一切注意を払わず、馬鹿の一つ覚えのように小佐野に突進している。

お陰で、木陰から芋狙撃しているだけのこちらは、非常に楽だった。

俺達に襲いかかって来た妖精達は、既に半数近くまで数を減らしていた。

もうそろそろ、状況終了かな、などと、楽天的に考えていたのが良くなかったのかもしれない。

突然背後から、生温かい風と吐き気を催すような生臭いにおいが漂ってきた。

おもむろに振り返った俺の目に映ったのは、あの熊の化け物――鬼熊だった。

ばっちり目が合った途端、久しぶりに会った俺に挨拶でもするつもりなのか、そいつは剛毛に覆われた丸太のような腕を、のろのろと振り上げた。口元からダラダラと涎を垂らしているのも、きつと、俺に会えて嬉しいからに違いない。

「やあ、久しぶり」

咄くと同時に、俺は背中から地面に向けて、仰向けにダイブした。

半瞬前まで俺の頭があった場所を、猛烈な勢いで、鬼熊の剛腕が通り過ぎて行った。

「ぎゃああああああああっ!!」

地面を転げ回るようにして鬼熊から距離を置き、跳ね上がるようにして起き上がると、脱兎のごとく走り出す。

竦み上がるような雄叫びを上げながら、鬼熊は猛スピードで追いかけて来た。

遠くで小佐野が何かを叫んでいたが、はっきりと聞こえていなかった。

さっさと飛んで逃げれば良いものを、気が動転してて全く気付かず、暫くの間、鬼熊に地べたを追いかけて回されていた。

空中に逃げて、ようやく鬼熊をやり過ぎた頃には、すっかり迷子になっていた。

「……またかよ」

大息とともに、がっくりと肩を落とした。

いったい、どんだけ迷子になれば気が済むんだ。もしかして、これが俺の能力だったりするのか。『道に迷う程度の能力』とか。

周囲の状況を確認してみると、辺りは木々がまばらで開けている。どうも妖怪の山では無いようだ。妖怪の山には、村や屯所以外で、こんな平野のように開けた場所は無いからだ。

おそらく、逃げ回っているうちに山から出てしまったんだろう。霧のせいで視界が優れないが、近くに水場があるようで、僅かにさざなみのような音が聞こえる。

そちらに向かってみると、予想通り湖があった。

もしかしたら、妖怪の山の麓にある、霧の湖だろうか。

だとしたら、この湖に水が流れ込んでいる河があるはずだ。

その河は、元々は妖怪の山の九天の滝から流れて来ているものだから、それを遡って行けば妖怪の山に戻れるはずだ。

とりあえず、湖に流れ込んでいる河を探すため、俺は湖岸の上空を飛んだ。

それで分かったのだが、湖の真ん中に浮島があるようだった。

霧のせいでおぼろげにしか見えないが、そこには、やたらと目に悪そうな、真っ赤な屋敷が建っていた。

辺りの景観を損ねまくっているその屋敷は、これ以上は無いくらいに、禍々しい異様な雰囲気を放ちまくっていた。

十中八九、この屋敷が異変の元凶なんだろう。

もちろん、屋敷に向かおうなんて気は毛頭ない。

迷子になっている俺に現時点で出来る事は、一刻も早く訓練所に戻る事だ。

その後で、教官にこの事を報告すれば良いだろう。

屋敷の事を頭の片隅に追いやり、再び河を探し始めた時、耳元を何かが掠めて行った。

反射的に振り返った俺の目に映ったのは、視界を埋め尽くさんばかりのお札の形をした弾幕だった。

「うお!？」

咄嗟に弾幕を展開し、殺到するお札を撃ち落としながら、訓練通りの回避機動に入る。

しかし、殆どのお札は、回避機動を予測するかのようには、俺の元に殺到してきた。

「あぐっ……!!」

その結果、お札の直撃をもらって受けてしまった。霊弾を喰らった時とは明らかに違う感覚だった。

体力だけでは無く、気力までもごっそりと削られるような妙な感覚に、飛んでいる事が出来ない。

その結果、俺はあっさりと墜落し、地面に叩きつけられた。もう少し高度があったら、ただでは済まなかったかもしれない。

「今、なんか撃ち落としたか？」

「知らないわよ。どうせ、妖精か何かでしょう」

「……どこかで聞いたような声だったんだがなあ」

薄れゆく意識の中、そんな会話を聞いた気がした。

妖怪の山編 28

「旦那様……旦那様……そろそろ起きて下さいな」

「ん……」

柔らかな囁きとともに、心地良い吐息が耳朶を撫る。

うつすらと目を開けると、そこには最愛の妻——椀のたおやかな笑顔があった。

「おはようございます、旦那様」

欠伸を噛み殺しつつ、おはようと返すと、椀は顔を綻ばせた。

「さ、起きてください。朝御飯にしましょう？」

微笑みながら、俺の掛け布団にそっと手をかける。

「んー、まだ眠い……」

その手を避けるようにして、俺は布団を引っ被った。

「もうっ、旦那様ったら！ いい加減にしないと怒りますよ!？」

俺が僅かに布団から顔を覗かせると、頬を膨らませた椀が俺を見下ろしていた。

こういう怒った表情も可愛い。

なんか、こう、もっと困らせてやりたくなるんだよな。

「んー、キスしてくれたら、すぐに起きれるかもー」

気色の悪い声で甘えると、柗は一瞬呆気に取られた後、溜息混じりに仕方がないわね、と漏らした。

柗が身を屈め、僅かに目を細めながら、覆いかぶされるようにして顔を近づけて来た。

あとほんの少しで唇が……というところで、突然胸倉を掴まれて、無理矢理引き起こされた。

「いい加減に……」

驚く俺の目前には、右手で握り拳を作り、眩しいばかりに微笑む、柗の笑顔があった。

「起きろおっ!!」

「いってええ!?!」

頭に加えられた衝撃と激痛に俺は飛び起きた。

あわてて周囲を見回すと、そこは霧の湖の畔だった。辺りには相変わらず、薄気味の悪い紅い霧が澱のように立ちこめている。

「なんだ。夢か……」

痛む頭を擦りながら上半身を起こし、そこでようやく、俺を見下ろしている少女の姿に気が付いた。

人間でいえば、歳の頃は12、3歳ぐらいだろうか。

裾の部分がダンダラ模様の、青色を基調としたワンピースのような服を身につけている。一見すると、女子中学生のように見えなくもない。

水色の髪を湖からの風に飛ばせ、そいつは腰に手をあて、頭髪と同じ色の瞳で、挑戦的に俺を見下ろしていた。

よくよく見てみると、彼女の背には、6枚の氷柱のような羽が付いている。妖精だ。

人間の子供程度の大きさで、今まで遭遇した妖精に比べ、姿形や言動がはっきりとしている。

それだけに、かなり力の強い妖精ということが分かった。

どうやら、俺を叩き起こしたのは、こいつらしい。

くそう。後少しだったっていうのに、余計な事をしやがって。

「やい、お前！ このチルノ様の縄張りで何してるんだ！」

チルノと名乗る妖精は、慎ましい胸を傲然と反らし、力強く言い放った。

ああ、そういえば、幻想郷縁起に書いてあったな。

霧の湖には、力の強い妖精が棲んでおり、足を踏み入れると、ちよっかいを出してくる事があると。

これは面倒くさいのに遭遇したかもしれない。

だけど、今までに遭遇した他の妖精とは違い、多少の意思の疎通は図れそうだ。

ここは下手に出て、何とか穏便に退散したほうが良いだろう。

「ごめんごめん。すぐに帰るから」

俺はヘラヘラと誤魔化し笑いを浮かべつつ、そそくさと立ち上がった。

妖精に背を向け飛び立とうとした瞬間、突然襟首を掴まれた。

その拍子に、ぐげっという奇妙な呻き声を漏らし、引っ張られるままに尻餅をついてしまった。

「お前！」

そいつは、上から覗き込むようにして、俺の顔を睨みつけてきた。

「もしかして、紅白や白黒の仲間か!？」

「はあ？」

紅白？ 白黒？ 何の事だ……？

「そいつら、突然、あたいの縄張りに入り込んで、仲間を痛めつけて回ったんだ！ お前、そいつらの仲間じゃないだろうな！」

「いやいやいや。そんな物騒な連中は知らないよ」

俺は慌てて首を振った。

なおも疑いの目を向ける妖精に、霧のせいで迷子になってしまい、偶然ここに来てしまった事を話した。

そして、山に帰る道を探していた所で、とつぜん背後から弾幕を貰い、さっきまで気を失っていた事を説明する。

「もしかして、お前もあいつらにやられたのか？」

「さ、さあ……？」

目を一杯に見開き、間近で俺の顔を覗きこむチルノに若干引きつつ、俺は曖昧に答えた。

気を失う寸前、誰かの声を聞いた気はするけど、それがチルノの言っている連中と同一人物かどうかは分からない。

「よし！ じゃあ、あたいと一緒にあいつらをやっつけるぞ！」

「はあっ？」

いや、待て。

何でそうなるんだ。訳が分からん。

「なんだ、お前。一方的に痛めつけられて、悔しくないのか？」

そう言われても、そいつらがやったとは限らないし。

それ以上に、そんな物騒な連中とは関わり合いになんかなりたくない。

「チルノちゃん！」

どうにかして逃げる算段をしていると、そこへ一人の妖精がやってきた。

氷柱のような羽のチルノに対し、その妖精の背には蝶のような綺麗な模様の羽が付いていた。

服装や見た目の年格好はチルノと大差ないが、緑の髪を片一方だけ髪留めで留めた少し変わった髪型をしている。

子供っぽく、負けん気の強そうなチルノに比べ、その妖精は、少し大人びていて、しっかりとした印象を受けた。

「あっ！ 大ちゃん！ おーい！」

チルノが満面の笑みを浮かべ、その妖精に向かって大きく手を振った。

「もう、チルノちゃんったら！ こんな所で何してるの！？」

間近に降り立った大ちゃんとかいう妖精は、まるで保護者のような口ぶりで、咎めるように言った。

腰に手をあて、チルノの顔を覗きこむ様ななんかは、悪戯小僧を叱る近所のお姉さんといった感じで、少し微笑ましい。

「聞いて、大ちゃん！ あたいに新しい子分が出来たよ！」

大ちゃんとやらの咎めるような視線には全く頓着せず、チルノは俺のほうを指さした。

いつの間に子分になったんだろう、俺は。

「チ、チルノちゃん、この子……！！！」

チルノが大ちゃんと呼んでいる妖精が、そこで初めて俺に気付いたように顔を向け、ひっと声を詰まらせた。

「こ、この子、天狗じゃない！」

なんか、物凄く怯えた表情で、俺の顔を怖々と見つめている。

天狗って、そんなにあちこちで恐れられている種族なのかな。

人里に魔理沙を送った時も、里の人達の怯え方が尋常じゃなかったっけ。

たしかに、幻想郷縁起には、幻想郷最強の種族のひとつとは書かれてはいるけどさ。

「え、そうなの？」

「そうだよ！」

大ちゃんとやらの怯え方が、ちょっと普通じゃない。

なんか傷つく。別に噛みつきやしないのに。

「やい！ お前、天狗なのか！？」

「そ、そうだよ。妖怪の山の白狼天狗」

困惑気味に頬を掻きつつ答えると、チルノはパッと顔を輝かせ、

大ちゃんに向き直った。

「すごい！ あたい、天狗を子分にしたんだ！ やっぱり、あたいは最強だね！」

おろおろする大ちゃんに向かって、チルノは鼻息も荒く、誇らしげに胸を張って見せた。

……その後、一通りの挨拶と自己紹介を終えて分かったのは、この湖周辺はチルノを始めとした妖精達の縄張りで、その中でもチルノは、最も力の強い妖精だということだった。

いつの頃からか、何も無かった湖の中央の浮島に紅い屋敷が現れ、今日になって、屋敷と同じ色の紅い霧が立ち込め始めた。

チルノ達には、何が何だかわからなかったが、何故かいつも以上に身体中に力が溢れてくるのを感じた。

以前も、周りが騒がしくなると、急に力が増す事が良くあったので、特に気にも留めず、良い気になった彼女は、仲間の妖精達と一緒に、人里の人間をからかったり、農作物を荒らしたりして遊び回っていたところを、通りがかった紅白と白黒とやらの撃墜されたのだという。

まるつきり、自業自得だ。

「よし！ それじゃ、紅白と白黒をやっつけに行くぞー！」

チルノが俺と大ちゃんを前にして、拳を振り上げ、勇ましく宣言した。

いつの間にか彼女の子分にされてしまった俺は、これから霧の湖中央の浮島に立つ屋敷に向かう事になってしまったのだ。

チルノの話では、仲間達を痛めつけた紅白と白黒は、屋敷に向かって行ったらしい。

「よし！ 出撃！」

力強く飛び立つチルノの後に、俺と大ちゃんは仕方なしに続いた。無視してバックレる事も考えたが、チルノは俺よりも強そうだし、攻撃されたら敵いそうもない。

「あの、柵さん」

大ちゃんが、申し訳なさそうな表情で、おずおずと話しかけて来た。

ちなみに、大ちゃんと言う彼女の呼称は、大妖精の略らしい。彼女には特に決まった名前はなく、周りの妖精よりも力が強いため大妖精と呼ばれていたのだが、いつの頃からか、チルノが大ちゃんと呼び始め、次第に周りの妖精もそれに倣うようになり、いつの間にか大ちゃんという呼び名が定着してしまったのだそうだ。そんなわけで、俺も大ちゃんと呼ばせてもらう事になっていた。

「ごめんなさい。面倒な事に巻き込んでしまった」

そう言って大ちゃんは、ぺこりと頭を下げた。

妖精なんて、何を考えているのか分からない薄気味の悪いものだとばかり思っていたけど、彼女は別格らしい。

律義で礼儀正しく、何よりも他人を気づかう思い遣りが感じられる。

戦後の愚民化教育の影響で、すっかり中高年DQNと化している団塊共に、爪の垢でも飲ませてやりたいぐらいだ。

「見ての通り、チルノちゃんは、馬鹿なのでどうせすぐに飽きます。それまで、少しだけ付き合ってあげて下さい」

……と思っていたら、澄ました顔で、さり気なく毒を吐いてくれた。

内心で若干たじろぎつつ、わかったよと頷くと、大ちゃんは良かったと、安心したように微笑んだ。

そうこうしている内に、チルノを先頭にした俺達3人は、中央の浮島付近に到着した。

浮島の上に建つその屋敷は、まるで城壁のような壁で周囲をぐるりと取り囲んでいた。

もちろん、城壁を構成するレンガも鮮やかな紅い色に染まっていた。

空を飛べるのだから、わざわざ門から入る必要も無い。

俺達は壁を飛び越え、屋敷の敷地内に侵入した。

近づいて改めて観察してみると、随分と大きい屋敷だ。

西洋の城塞のように、堅牢で歴史を感じさせる佇まいなのだが、周囲に立ち込める霧と同様のドギツイ紅色が、全てを台無しにしている。

「……なんだか、ところどころ煤けたり、崩れたりしてますね」

僅かに首を竦め、おっかなびっくり辺りを見回しながら、大ちゃんが囁くように呟いた。

言われてみれば、レンガの一部が崩れていたり、窓ガラスが景気よく吹き飛んだりしている箇所まであった。

チルノの言う紅白と白黒がやったのだろうか。

「おっ。ここから入れそうぞぞ」

チルノが、レンガが崩れている箇所を発見した。

あまり大きくない穴だが、四つん這いになれば、問題なく潜り抜けられるだろう。

身体を屈めて穴の中を覗きこんでみるが、薄暗くて中の様子は良く分からない。

空気の流れがあるのか、陰気で生ぬるい風が漂ってきている。

「……で。誰が最初に行くんだ？」

顔を上げ、もっともな疑問を口にする、チルノは実に良い笑顔で、さも当然とばかりに俺を指さした。

「先鋒は任せたぞ、くぬぎ！」

「いや。いやいやいや。ちょっと待ってよ」

俺も負けずに微笑みながら、顔の前で手を振った。

「こういうのは、隊長が先陣を切るもんだろう？ 皆の士気を高めるためにも！」

「何を言うかー！ 先鋒は『ぶじんのほまれ』なんだぞー」

「そういう名誉は、隊長にこそふさわしいだろ！ 子分Aでしかない俺ごときが、そんな名誉を奪うわけにはいかないよ！」

「う、うるさーい！ 隊長命令だぞー！」

本来なら、指揮官が率先して先陣を切るなんて有り得ないが、こんなお遊びじみた事で隊長もなにもあったもんじゃない。第一、俺だって命が惜しい。

少し考え、アプローチを変えることにする。

「ははーん。さては……」

俺はわざとらしく、口の端をつり上げ、馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「怖いのか？ サイキョーサイキョー言ってるけど、しょせん口だけなのか？」

「なっ……！！ あ、あたいは最強だぞ！ 怖いものなんてあるもんか！ みてろよ！」

勇ましく宣言すると、チルノはすぐさま四つん這いになり、もぞもぞと穴に潜り込んだ。

お、おい。少しは自分のスカートのことを気にしろ。捲れているぞ。

しかも、なんでドロワーズなんだ。

「……櫛さん。もしかして、ロリコンさんなんですか？」

「な、な、なにを言ってるんだ、大ちゃん！」

俺は慌ててチルノから目を逸らした。

頬に感じる大ちゃんの視線が少し痛い。

「それはそうと、さっそく、チルノちゃんの使い方を覚えてみたいですね」

「えっ？」

思わず、まじまじと大ちゃんを見つめる。目があった大ちゃんは、にっこりと微笑んだ。

「チルノちゃんは、お馬鹿さんの割にプライドが高いので、そこをつついてやれば、簡単にコントロールできます。可愛いでしょう？」

「

大ちゃんは、小動物でも見るような愛おしげな目で、捲れ上がっ

たチルノのスカートを、慣れた手つきで直した。

俺は、そろそろ君の事が怖くなってきました。

やがて、ジタバタともがいていたチルノの下半身が、穴の向こうに消え、暫くすると、穴の向こうからチルノが顔を覗かせた。

「くぬぎ！ 次はお前だぞー」

チルノは埃だらけの顔で、にぱっと笑って見せた。あー、もう。髪に蜘蛛の巣まで付けてからに。

「はいはい。今行くよ」

大ちゃんが心配そうに見つめる中、俺はチルノに続いて穴に潜り込んで行った。

多少つかえながら穴から這い出し、埃を払いながら立ち上がってみると、どうやらそこは、屋敷の廊下らしかった。

やたらと高い天井には、高価そうなシャンデリアが等間隔でぶら下がっており、薄ぼんやりとした明りがともされていた。

窓は分厚いカーテンで隙間なく閉ざされており、外の明りが全く入らない状態になっている。

光源は、シャンデリアの燭台に灯された僅かな蠟燭の灯りと、破損した部分から差し込む外の明りだけだった。

どうりで、薄暗い筈だ。

「んしょ、んしょ……」

そうこうしている内に、大ちゃんも穴を潜り抜けてきた。

チルノに寄り添うようにして、不安そうにあたりを見回している。

「それで、俺達はどっちに行くんだ？」

「えーと、あっちだ！」

俺が尋ねると、チルノは全く迷うことなく、ある方向を指さした。その方向に顔を向けると、そこには下に向かう階段があった。どうやら、地下に続いているらしい。

「あそこが見るからに怪しい！」

「それじゃ、お先にどうぞ、隊長」

「お、おう！ 任せろー！」

チルノは、どんと自分の胸を叩くと、先頭に立って歩き始めた。勇ましく頼もしいチルノの背に隠れるようにして、俺と大ちゃん
は彼女の後に続いた。

地下へ向かう階段は、カビ臭いうえに、何処となく埃っぽかった。やけに長いその階段を下りきると、鉄製のやたらと頑丈そうな扉が姿を現した。

見るからに、何かがありそうな怪しい気配が漂っている。

ほかの二人もそれを感じ取ったのか、うそ寒そうに首を竦め、鉄製の扉を見上げていた。

「なんだこりゃ」

「鍵がかかってますね……」

扉には頑丈そうな門が掛っており、更には、南京錠で嚴重に鍵が閉められている。

何にせよ、この先に、紅白や白黒がいるとは思えない。

「戻ろう。こっちは……」

俺が二人に言いかけた時だった。

「……誰かいるの？ お姉様？ 咲夜……？」

扉の向こうから、誰何する声が聞こえた。

女の子の声だった。

俺達3人は思わず顔を見合わせた。

「ねえ、誰かいるの？ ねえ」

困惑する俺達に、扉の向こうの人物は、更に声を投げかけて来た。それと同時に、僅かな振動と音が伝わってきた。声の主が、内側から扉を叩いているんだろうか。

「あ、あたいはチルノだ！ お前こそ誰だ！」

たまりかねたように、チルノが応えた。

常識的に考えて、不法侵入した先の家人に向かって、お前は誰だもあつたもんじゃない。

「チルノ……？ もしかして、新しいおもちゃ？」

か細かった声が、途端に喜色溢れる明るい声色に変化した。

「ねえねえ！ 早く入って来て！ 遊ぼうよ！」

扉から伝わる音と振動が大きくなった。

異様な光景に、俺と大ちゃんは思わず、後ずさった。

なんか、色々と良くない予感がする。

女の子（多分）が、こんな分厚い鉄扉の向こうに閉じ込められているのも異様だし、チルノが名乗った後の、新しいおもちゃという

発言に、特に得体の知れない怖気を感じる。

「チルノ、何かやばい。戻ろう!」

「なんだ、くぬぎー? 怖いのかー?」

怖い。滅茶苦茶怖いぞ。ほら、尻尾なんて膨れっぱなしだし。

「大丈夫! しんばい入らない! あたいが守ってやる!」

チルノは脳天気セラセラと笑い、不安そうな俺と大ちゃんの肩をポンポンと叩いた。

それよりも、紅白と白黒はもう良いのか。

「……おい! どうやって扉を開けるんだ!?!」

チルノは、扉の向こうの少女に呼び掛けた。

「鍵持っていないの……?」

「おう! 持っていないぞ!」

扉の向こうからの声は、幾分呆れているようにも聞こえた。

チルノは気にするふうでもなく、腰に手をあてて自信満々に胸を張っている。

「でも、大丈夫だよ。パチエの魔法のせいで、こっちからは絶対に開けられないけど、そっちには何もないから、鍵を壊しちゃえば簡単に開くよ」

「よーし! わかった!」

チルノは間髪いれず、掌に霊弾を作りあげた。そして、俺と大ち

やんが止める間もなく、その霊弾を南京錠に叩き付けた。
甲高い金属音を立て、南京錠は粉々に弾け飛ぶ。

「開けるぞー」

チルノは意気揚々と、門を外し、鍵の壊れた扉を開け始めた。
錆びた金属が擦りあわされるような、耳障りな音を立てながら、
鉄の扉は重々しく開いていった。

チルノは、全く物怖じせず、開いた扉から室内に入っていく。
慌てて追いかけようとした時、俺の袖を大ちゃんが引っ張った。

「柵さん。危なくなったら、私達を置いて逃げてくださいね」
「え？」

予想外の一言に、俺は思わず、まじまじと大ちゃんを見つめてしまった。

「私やチルノちゃんは一回休みで済むけど、柵さんはそうはいかないでしょう？」

……ああ、そうか。そういうことか。

「だ、大丈夫だよ。そ、そんな切羽詰まった事にはならないよ。たぶん……」

「だと良いんですけど……」

室内は、思いのほか広く、天井も高かった。

目立った調度品は何もなく、壁や天井には奇妙な魔法陣がびっしりと書き込まれていて、物々しいというか、異様な雰囲気漂わせていた。

「あはっ。3つも来た！」

その声の主は、部屋の奥にある天蓋付きの豪華なベッドから聞こえて来た。

10歳ぐらいの女の子が、ベッドに腰を降ろし、足をブラブラさせながら無邪気な笑顔を見せていた。

まるで、陶磁器のような白い肌をした、一見すると生気が感じられない少女だった。

頭巾と言うか帽子と言うか、奇妙なデザインの被りものを頭に被っている。

そこから零れる金髪は、肌の色とは対照的に、薄闇の中でもはっきりと分かるほどに鮮やかだ。

紫さんや慧音さんもそうだったけど、幻想郷では、特徴的な頭装備が流行っているんだろうか。

そして、それよりもさらに特徴的なのは、彼女の背中にあるモノだった。

肩甲骨の辺りから羽のように伸びているそれは、蝙蝠の羽から飛膜を無くして骨格だけの状態にし、鍵爪の辺りに七色の宝石をぶら下げたような、不思議な形状をしていた。

「ねえねえ、どれがチルノ？」

少女は紅い瞳をキラキラと輝かせながら、興奮した面持ちで俺達を順繰りに見渡した。

口の端から覗く、八重歯というには目立ち過ぎる犬歯に、俺の背筋に冷や汗が流れる。

「あたいがチルノだ！」

チルノは一步前に出ると、もはや定番となった、腰に手をあてて、得意げに胸を反らすポーズをとって見せた。

少女は嬉しそうに微笑むと、ベッドから降りて、チルノの傍まで駆け寄ってきた。

「あなたがチルノね。じゃあ、遊んでくれる？」

「良いぞ！ 何して遊ぶんだ？」

その言葉に、少女の口の端が吊り上がった。

「鬼ごっこ。私がボンするから。ボンされたら終わりね」

「……ぼん？ なんだ、それ？」

「いっくよー？」

首を傾げるチルノに向かって、少女は人差し指を向けた。

「ぼんっ」

少女の紅い唇から、大きなお友達から大絶賛されそうな、愛らしい声が漏れた。

そして、次の瞬間、首を傾げていたチルノが、弾け飛んだ。

そうとしか表現できなかった。

一瞬にしてチルノの痕跡が消え去り、彼女が居た辺りの床が、小さなクレーターでも出来たかのように凹んでいた。

俺も大ちゃんも、何が起きたのか全く理解できずにいた。

間抜けに口を半開きにしたまま、呆けたようにチルノがいた辺りを見つめていることしかできない。

アブドウルは、こなみじんになって死んだ。

何故か、そんなフリーズが頭をよぎった。

「ぶー！ つまんない！ もう壊れたー！」

少女は可愛らしくぷっと頬を膨らませ、駄々っ子のように地団太を踏んだ。

その光景だけを見れば、親に欲しいおもちゃを買ってもらえず、駄々をこねている子供にしか見えない。

「まあ、いつか。まだ2つあるし。次はどっち？」

少女が愛らしく微笑みながら、俺と大ちゃんを見渡した。
やばい。これはやばい。

直感的に、ここで死ぬと感じた。

逃げようにも逃げられない。

逃げようとした途端、彼女に「ぼん」されてしまうだろう。

「じゃあ、次は……」

彼女は無邪気に微笑みながら、俺の顔を見て微笑んだ。

「そっちのわんちゃん。いくよー？ 今度は頑張ってね」

俺は恐怖で竦み上がったまま、自分が死ぬのを待つ事しかできなかった。

「柵さん！ 逃げてー！！」

その声とともに、少女に弾幕が叩きつけられた。大ちゃんだった。

「だ、大ちゃん！？」

金縛りから解けた俺は、弾かれたように大ちゃんのほうを振り向いた。

大ちゃんは、俺を見ようともせず、懸命に少女に向かって弾幕を叩きこんでいた。

「早く逃げて！ 私は、大丈夫だから、はや……！！！」

大ちゃんが無かを言い終える間もなく、彼女の姿はチルノと同じように弾け飛んだ。

クレーターが2つになった。

「いたたた……もう、服が汚れちゃったじゃない！」

背後から聞こえた拗ねたような声に、俺はゆっくりと振り返った。振り向きたくはなかったが、そうせざるを得なかった。

「ぶー！ 割り込みなんて反則じゃない！ しかも、すぐ壊れるしー！」

そこには、この部屋の主が変わらず立っていた。

ほんの僅かに、服の裾が傷んでいる以外は、特に変わった様子は無い。

まるで、彼女の不満を表すかのように、背中の七色の羽が大きく広がっていた。

「ま、いいや。まだ3つ目があるし」

気を取り直したように言うと、彼女は俺にすっと手を向けてきた。

「……今度は、壊れないでね？」

紅い唇を二日月の形に歪め、少女は笑った。

妖怪の山編29

突然の閃光と轟音。押し寄せる爆風に吹き飛ばされ、俺の身体は宙に浮いた。

数瞬の浮遊感の後、背中から地面にたたき付けられ、肺の中の空気が一瞬で空になった。

悪態をつきながら、半身を起こした俺の目に映ったのは、阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

先程まで俺達の進軍を支えていた戦車や装甲車は、そのすべてが原型を留めてはいなかった。

あるものは砲塔を吹き飛ばされて黒煙を噴き上げ、あるものは横転し、程良くミディアムされた乗員を車外にぶちまけていた。

「くそっ……何が……グレッグ！　ダニイ！　生きてるか!？」

俺は、自分の身体に異常が無い事を確認すると、僚友の名を叫びながら、稜線の陰に身を隠した。

そんな俺の頭上を、威圧的なローター音を響かせた凶悪なシルエットが通り過ぎて行った。

AH-64Dロングボウ・アパッチー——機甲部隊の天敵、世界最強の戦闘ヘリだ。

まさか、あんなものまで出してくるとは。

俺は地べたに這いつくばりながら、歯噛みした。

航空戦力のないこちらに、あれをどうにかする事は出来ない。

なにしろ、携帯型の対空火器さえ保有していないのだ。

「米帝めえええええ!」

俺と同じようにして、遮蔽物に身を隠していた現地民兵の一人が、

小銃を撃ちながら狂ったように遮蔽物から飛び出していった。

そんなもので、あの化け物をどうにか出来るわけがない。怒りのあまりに気が動転しているのは、明らかだった。

止める暇も無く、そいつはアパッチの機首に装備されているM2 30 mmチェーングンに上半身を血煙りと共に吹き飛ばされ、下半身だけになったそいつが、無残に地面に転がった。

「くそ……」

このままでは、いずれ俺もあぁなってしまう。

アパッチは、生き残りの現地兵たちを掃討中らしく、こちらには気付いていない。

覚悟を決めて稜線の陰から飛び出すと、全速で近くの森の中に逃げ込んだ。

「陸前！」

反射的に声のしたほうに銃を向けると、そこにはダニイとグレッツクがいた。二人とも埃まみれの酷い有様だったが、奇跡的に目立った外傷は見当たらなかった。

安堵と共に銃口を降ろす。

「無事だったか……」

「あゝ、あゝ、なんどがな」

喉に痰でも絡んでいるようなダミ声で、ダニイは笑った。

しかし、互いの無事を喜んでいる暇は無いようだ。

先程のアパッチが、森の上空を遊弋しているローター音が、聞こえているからだ。

「こつちだァ！ 陸前ン！ ダニイィ！」

喉が潰れたような声で、グレックが森の奥へと促した。
暫く進むと、俺達の前方に、何か遺跡のような建造物が聳え立っているのが見えてきた。

「とにかく、入ってみようぜェ」

俺達三人は、何かに誘われるようにして、遺跡の奥へ奥へと進んで行く。

遺跡の最奥部に辿り着いた俺達の目の前には、一つの扉があった。
俺は、吸い寄せられるようにして扉の前に近づき、ノブに手を掛けた。

そして次の瞬間、満面の笑みを浮かべながら、金切り声でこう叫んでいた。

「せっかくだから、俺はこの赤の扉を選ぶぜ！」

赤くなかったけど、何故かそう叫んでいた。

軋んだ音を立てて扉が開ききり、その向こうから眩い光が溢れ、俺の意識はそこで途絶えた。

「……というわけで、気がついたら俺は、焼きビーフンが大好きな
傭兵コンバット陸前から、白狼天狗になっていたんだよ！」

「わあ、そうなんだー！　すごい、すごいー！」

少女は興奮した面持ちで、盛んに囁いたてた。

「それで、それで、グレックとダニイはどうなっちゃったの？」

「それは、わからない……」

俺は床に視線を落とし、呻くように呟いた。

「だけど！　奴らはきつと生きている！　そう信じている！　そして、いつかきつと再び会えると！」

俺は明後日の方向に視線を飛ばしながら、拳を握りしめ力強く宣言した。

「そっかあ。会えると良いね」

「うん。ありがとう。というわけで！　俺は二人を探しに行くので、これで失礼するよ！」

「ねえねえ！　わんちゃん！」

そそくさと踵を返そうとする俺の腕に、少女はしがみ付いて来た。二の腕に僅かな膨らみを感じるが、さすがにこんな状況で心がと

きめいたりはない。

それ以前に、俺はロリコンじゃない。

「こっちに来て！ もっと面白いお話をしてよ！」

「ちょ、ちよっと……」

子供とは思えない腕力に引き摺られるようにして、天蓋付きのベツドまで連れて来られた。腕をひかれるままに、彼女の隣に、半ば強引に腰かけさせられる。

座り込んだ拍子に、身体が半ばまで沈み込み、その反動で僅かに身体が浮き上がった。

当然と言えば当然だが、訓練所の寝台とは、桁違いに座り心地が良い。

「それじゃ、ボンするから、上手に避けてねー」

「ちょ、ちょ、ちよっと待って！！」

チルノと大ちゃんが「ボン」されてしまった直後の事だ。

輝くばかりの笑顔で手を向けてくる少女に、俺は半泣き状態で必死に訴えた。

「……なあに？」

少女は不機嫌そうに小首を傾げ、不満げな表情を隠そうともせず、俺を見つめてきた。

仕草だけ見れば、小さな女の子が、自分の我儘を聞いてもらえず、拗ねているようで可愛い。

しかし、その実態は、得体の知れない力で相手を粉碎する、凶悪極まりないものだ。

どうにかして、彼女の気を遊びから逸らさないと、俺自身が3つ

目のクレーターと化してしまう。

そうなれば当然、妖精ではない俺は、永遠に一回休みだ。

そういや、あの二人は大丈夫だろうか。

いくら、しばらくすれば復活できるからといって、仲良くなった相手が目の前であんな事になるのは、寝覚めが悪いし心配だ。

「あ、あ、遊びも良いけどさ！ その前に、少しお話をしないか？」
「お話……？」

上擦った声で提案すると、彼女はきよとした表情で聞き返してきた。怪訝そうに小首を傾けてはいるが、不満そうには見えない。俺は、ここぞとばかりに畳み掛けた。

「そ、そう！ 遊ぶにしても、お互いの事をよく知る必要があるだろう？ その方が楽しいし！ だから、まずは俺の自己紹介をするよ！」

そんな感じででっち上げたのが、某有名クソゲーのオープニングを丸ごとパクった、冒頭の与太話というわけだ。

ボンされたくない一心で、殆ど口から出任せ的に話したんだけど、意外な事に、彼女には好評だったようだ。

ひとまずは、安心しても良いんだろうか。

「ねえ、わんちゃん」

「……わんちゃんじゃないよ。俺には上有住 櫛っていう、立派な名前があるんだ」

少しムツとしながら答えた。あと、犬じゃなくて狼だから。

「わあ、耳耳耳！ ふさふさしてるぅ」

俺の苦情をスルーし、何の遠慮も無しに、とつぜん俺の耳をわさわさと弄び始めた。

反射的に耳を伏せるが、そんな事はお構いなしに、ただひたすら弄り回す。

はつきり言って、不快以外のなにものでもないが、下手に抵抗して機嫌を損ねたら、「ボン」だ。死にたくない一心で必死に堪えていた。

暫くすると彼女の手が耳から離れた。

ようやく飽きてくれたかと、ほっと一息つく。

「あ、尻尾！ 尻尾！ 尻尾！」

「おふうっ!？」

今度は、とつぜん尻尾を掴まれ、身体を硬直させた。

背筋を駆け登るゾクゾクとした感触に、身体を震わせながら、酸欠の金魚のように喘いだ。

「あはっ、おもしろい。握ると、ぶわってなるんだー」

彼女は無邪気に笑いながら、俺の尻尾を力いっぱい握りしめたり、握る力を弱めたりして、思うままに慰みものにした。

俺に出来るのは、悲鳴を噛み殺しながら、全身を駆け巡る不快とは程遠いが、受け入れると何かが壊れてしまう感覚に、ひたすら耐える事だけだった。

そうしている間にも、彼女の行為はどんどんエスカレートしていき、手櫛を入れたり、抱きしめて頬ずりをしたりと、完膚なきまでに、尻尾を嬲り尽くされてしまった。

「あー、面白かったあ」

やがて、満足したのか、彼女はようやく俺の尻尾を開放した。

「クヌギは面白いね。もふもふだし」

「そ、そう。あ、ありが、とう……」

息も絶え絶えになりながら、俺は何とか身体を起こした。

未だに、身体に尻尾責めの感触が残っており、少し呂律が回らない。

内心で冷や汗を掻きつつ、なんとか笑みを浮かべた。顔面の神経を総動員して、恐怖に引き攣りそうになる表情筋を必死に制御する。

「次はどんなお話してくれるの？」

「そ、そうだなあ、ええと……」

期待に満ちた眼差しを向けてくる、彼女の輝くばかりの笑顔に、俺は口籠った。

なにせ、この子の機嫌を少しでも損ねてしまえば、その瞬間に俺の運命は決定してしまう。

とにかく、時間を稼いで、何とか逃げ出す隙を見つけないければならない。

「つ、次は、君の事が知りたいなあ」

「私の事？」

「うん。ほら、自己紹介なんだし。まずは、お互いの事を話そうよ」

「……わかった」

あまり乗り気では無さそうだったが、彼女はぼつりぼつりと自分の事を話し始めた。

「私は、フランドール・スカーレット。この紅魔館の主、レミリア・スカーレットの妹よ」

この館の主の妹……ということは、つまり、異変の首謀者の妹だ
って事になるのか？

それにしても、館の主の妹なのに、こんな薄暗い地下室みたいな
所にいるのは何故なんだろう。

「聞いてよ、クヌギー」

フランドールは、子供が親に甘えるかのように、俺の右腕をく
いと引っ張った。

彼女が、見た目相応の普通の女の子なら可愛らしいところだけど、
何せ、チルノと大ちゃんをあんな事にした張本人だ。恐怖と緊張で
身体が強張ってしまう。

「姉様ったら、酷いのよ？ 私をこの狭い部屋に495年も閉じ込
めてるんだから！」

「え、そうなの！？」

495年という突拍子も無い年月に、俺は思わず目を見張った。

彼女が何の妖怪かは知らないが、俺がこんな所にそんな長期間閉
じ込められたりしたら、それこそ発狂してしまうだろう。

俺が浮かべた驚愕の表情に、彼女は大きく頷いて見せた。

「私の力が危険だからって、きちんと制御できるようになるまで、こ
こから外に出ちゃ駄目だって！」

そう零すと、まるで頬袋に食べ物溜めこんだハムスターのよう

に、ぷっと頬を膨らませた。

フランドールの力と言うのは、おそらく例のボンする能力の事だろう。

確かに、そんな力を制御できない状態で、無暗に表を出歩かれたりしたら、堪ったもんじゃない。

ちよつとは、気の毒な気がしないでもないが、姉様とやらの対応も仕方がないんじゃないだろうか。

「しかもねー、私が部屋をボンして外に出たりしないようにって、パチェが部屋の中に魔法陣をびっしり書きこんだの」

「パチェさんって？」

「姉様の友達。魔法使いなの」

「へ、へえ」

どうやら、室内の壁と言わず天井と言わず、至る所に隙間なく書き込まれている異様な魔法陣は、そのパチェさんとやらが、フランドールのボンする力を封じるために施したものらしい。

さてよ。

「フ、フランドールちゃんは……」

「フランでいいよ、クヌギ」

「そ、そっか。フランちゃんは、普段は何をして過ごしてるんだい？」

「私？ おもちゃで遊んでるよ」

何でそんな事を聞くのとも言いたげに、フランドールは小首を傾げた。

「おもちゃはね、咲夜が持ってきてくれるんだけど、すぐに壊れちゃうから、つまらないんだー」

事もなげに言っただけの彼女に、俺は背筋を駆け登る怖気を抑え込むのに苦勞した。

おもちゃが何かは、敢えて訊ねなかった。

迂闊に訊ねでもしたら、絶対に後悔する羽目になるからだ。

「今日はね、いつもの時間になってもおもちゃが来なかったの。上のほうがなんだか煩いし」

「へ、へえ」

「なんかね、侵入者が来たんだって。それで、咲夜もどこかに行っちゃったの」

直感的に、それがチルノの言っていた、紅白と白黒なのだと感じた。

屋敷のあちこちを損壊させた犯人も、おそらくそいつらなんだろう。

まあ、侵入者という点で言えば、俺も変わらないか。

「姉様たちだけ、侵入者で遊んでずるいなあ、私もボンして遊びたいなあ、って思ってたなら、クヌギたちが来たの」

フランドールは、無邪気そのものといった感じで微笑むが、言っていることはかなり不穩当だ。

「おかげで、退屈しないで済みそう」

彼女の発言に他意は無いのだろうが、退屈させたら即座にボンするぞ、という恫喝のように聞こえて仕方がない。

千夜一夜物語のシェヘラザードも、こんな心境だったんだろうか。

「だからさ、もっと色々お話して。ね？」

「そ、そうだなあ……」

フランドールにせがまれるまま、俺は話し始めた。

と言っても、そのほとんどが、単なる身の上話。これまでの自分の生活や、哨戒天狗の訓練所に入所してからの事だ。

大して面白い話でも無く、いつ彼女の気紛れでボンされてしまうのかと、内心ヒヤヒヤものだったが、こんな所に、長い期間閉じ込められていたせいもあってか、彼女はちょっとした事でも、大袈裟なぐらいに驚いたり、喜んだりしてくれた。

「ふーん。そのコサノってやつ、酷いねー。私がボンしようか？」

「い、いやいやいや！ フランちゃんにそこまでしてもらう程じゃないよ」

「そう？ 気に入らない奴がいたら、いつでも言ってね。私がボンしてあげるから！」

「そ、そっか。う、嬉しいなあ」

そんな感じで、会話の内容はともかく、表面上は和やかに時間が過ぎて行った。

侵入者と思われる紅白と白黒が暴れているのか、たまに上の方から振動が伝わって来るが、それほど気になるものでもなかった。

そうして、どのぐらいの時間が経過したかは分からない。

フランドールの反応が薄い事に気付き、様子を窺うと、彼女は眠たそうに目を細め、時折、こくりこくりと舟を漕ぎ始めていた。

……しめた。

これは、逃げ出すチャンスかもしれない。

「フランちゃん、眠いの？」

「う……ん……大丈夫、夫、だよ……」

自分でも気持ちの悪いくらいの猫撫で声で訊ねると、フランドールは、睡魔に抵抗するように眦を吊り上げ、俺の顔を見つめ返してきた。

「無理しないで、眠ったほうが良いよ？」

「やー……」

尚も囁き掛けると、口をへの字に引き結んで、イヤイヤするように頭を振った。

こういう仕草は、見た目の年相応に可愛らしい。

「続きは、また今度来た時にしてあげるから、今は眠ったほうが良いよ」

もちろん、大ウソだ。眠ったらその隙に、さっさと逃亡する。当然、ここに戻って来る気は全くない。

ちよつと気の毒な気がしないでもないが、俺だって命が惜しい。こんな子に付き合っていたら、いつ気紛れで殺される羽目になるか知れたもんじゃない。

「やー。クヌギは私の玩具なんだから、壊れるまでずっとここに居ないと駄目なんだよ」

フランドールは、そう言って、俺の腕にしがみ付いて来た。

しかし、いかにも辛そうで、半ば以上俺に寄りかかるようにして、必死に眠気と格闘しているのが分かる。

ここで、一般的なオリ主だったら、玩具じゃなくて、友達だろう？ みたいな事でも言って、フランドールの心を開くんだろうけど、俺にはそんな余裕もつもりも無い。自分の事だけで手一杯だ。

ところで、オリ主ってなんだろう。

「……起きるまで一緒に居てくれる？」

「も、もちろんさあ」

訴えかけるようなフランドールの目に、多少の罪悪感を覚えつつ、俺は笑顔を返した。

「寝てる間に、どこかに行ったら駄目だよ……？」

「うんうん。分かってるよ」

「……じゃあ、寝るから、子守歌うたって」

「へ……？ 歌……？」

予想外の一言に、馬鹿みたいに訊き返してしまった。

「咲夜なら、いつも歌ってくれるよ……？」

俺が躊躇していると、フランドールの声に少し陰のようなものが混じり始めた。心なしか、腕にしがみつく力が増したような気がする。

ま、まずい。機嫌を捏ねたら、ボンされてしまう。壊されてしまう。

しかし、困った。歌なんて、殆ど知らないぞ。

ええい、くそ。一か八かだ。

俺は軽く咳払いをすると、口を開いた。

「う、うゝみゝゆゝかゝばゝ みゝづゝかゝばゝねゝ やゝまゝ
ゆゝかゝばゝ くゝさゝむすかばゝねゝ」

うんうん。よしよし。

この歌なら、何とか子守歌っぽい旋律だろう。

「おーおーきーみーのー　　へーにーこそしなーめー　　かーえーりー
みはーせーじー」

横目でフランドールの様子をチラ見すると、俺にもたれかかったまま、安らかな寝息を立てていた。

もう1回歌いながら、俺はそつとフランドールの拘束から逃れた。起こさないように注意しながら、静かに静かに、彼女の身体を寝台に横たえた。

その後、しばらくの間、様子を見守ってみる。

「フランちゃん？」

返事がない。肩に手を掛け、軽く揺すってみるが起きる気配は見られない。どうやら、完全に寝入ってくれたみたいだ。

「よし……」

今がチャンスだ。

音を立てないように、そろそろと立ち上がった。うっかり足音を立てないように、細心の注意を払い、抜き差し足で扉に向かう。

今更だけど、この部屋ってかなり広い。寝台のある位置から扉まで、10メートルはありそうなのだ。

背後の寝台から、微かに聞こえる吐息や、寝がえりをうったりする気配にビクビクしつつ、俺は慎重に扉を目指した。

あと少して、部屋から出られるといったその時、まさにお約束な出来事が起きた。

上方から物凄い振動と轟音が響いて来たのだ。

瞬間的に直下型の地震でも発生したような強烈な縦揺れに、俺は

耐えきれずひっくり返った。

「んゝ……あれ、クヌギ……？」

背後から聞こえたその声に、身体が硬直した。

さっきの強烈な振動と俺のこける音で、フランドールが目覚ましてしまったのだ。

恐る恐る振り返ると、眠そうな目を擦りながら、寝台から半身を起して、半目でこちらを見つめているフランドールと目が合った。

「なんで、そんなところにいるの……？」

不審と不安の入り混じった目で、まっすぐに俺を見つめてくる。

「まさか、クヌギ……」

「い、いやっ、その……」

何か言わなければと必死に無い知恵を絞り、言い訳の言葉を捻りだそうとするが、頭が完全にテンパってしまい、何も思い浮かんで来ない。

やばい。このままじゃ、ボンされる。

「起きるまで、一緒に居てくれるって言ったじゃない……」

そうこうしている内に、彼女は寝台から降り、ゆっくりとこちらに近づいて来る。ひたひたという彼女の足音が、死刑宣告への秒読みのように聞こえる。

（お、落ち着け。落ち着け、俺）

冷静になって、よく考えろ。お前は何だ？

そうだ、俺は天狗だ！ 妖怪の山の白狼天狗だ！

天狗とは何か？

天狗とは、幻想郷最強にして、最速の妖怪！

つまり……

つまり！！

「我に追いつく人妖無し！」
グラマン

「あっ！ クヌギ！？」

叫ぶと同時に身を翻し、扉の外に向かって飛び出した。

フランドールが何か叫んでいたが、当然無視する。

部屋の外に飛び出した俺は、わき目も振らず全速力で来た経路を戻り始めた。

幸い、廊下は天井が有り得ないくらいに高く、速度を出して空中を飛ぶ事については、全く支障は無い。

まったく、最初からこうしていれば良かったんだ。

幻想郷縁起にも、天狗に追いつける妖怪は居ないって書いてたじゃないか。

あんなまどろっこしいことをしないで、こうやってさっさと逃げ出していれば……

「あはっ！ クヌギって早いんだね」

間近から聞こえた声に、俺は凍りついた。

本当は振り向きたくないが、無意識のうちにそちらに顔を向けていた。

すぐ隣に、満面の笑みを浮かべているフランドールの顔がある。

俺の横にぴったりと張り付いて飛んでいるのだ。

「お話の次は、鬼ごっこだね！」

はしゃぐように言いながら、フランドールは俺の方に手のひらを向けた。

「いっくよー？」

反射的に首を竦めた俺の頭上から、紙風船が爆ぜるような、乾いた音が響いた。

慌てて頭上に手を伸ばすと、俺の頭襟^{とぎん}が、跡形もなく綺麗に消失していたのだ。

顎紐だけになった頭襟の残骸が、はらりと頬を滑り落ちてきた。その瞬間、俺の中で何かが切れた。

「ぎ、ぎゃあああああああああああ！！」

けたたましい悲鳴を上げながら、恐慌状態に陥った俺は、フランドールにありったけの弾幕を叩きつけた。

反動で吹っ飛ばされるフランドールには目もくれず、一目散に遁走を開始した。

「あはははは！」

すぐに、楽しげな笑い声が、背後から追いかけてきた。

俺の弾幕なんて、欠片も効いていないのは、わざわざ振り返って確認するまでもなかった。

闇雲に逃げ回る俺の近くで、次々といろんなものが壊れていった。天井からぶら下がるシャンデリアが、何の前触れもなく霧散したり、俺が通り過ぎた直後、傍の壁が瓦礫に変貌したりした。

「あはっ。まてまてー！」

「も、樫さあああああん！ たすつ、助けてえええええええつ
！！」

もう、なんとか、いろいろと限界だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5601/>

タイトル未定

2011年11月14日08時02分発行